
自由学園～少女少女の青春録～

黒狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由学園〱少年少女の青春録〱

【Nコード】

N4987X

【作者名】

黒狼

【あらすじ】

世界に裏切られてしまった優しい少女達が、新たな世界で大切な者達と共に過ごしていく物語……。

なんかシリアスな雰囲気満点ですが、これは基本ほのぼの&ギャグがメインです！！

この作品ではキャラ設定が原作と大きく変更されていたり、最強チート化されていたりしていますので、お気に召さない方は御退室ください。

これは作者の初投稿の連載小説ですので、投稿不定期で駄文かつ

展開がムチャクチャになったりするかもしれませんが、温かい目で読んでもらえると幸いです!!

注意書きが長くなってしまいました。では、スタートです!!!

プロローグ（前書き）

どうも初めまして。黒狼です。

多重クロスオーバーの学園物語は色々な方が執筆していらっしゃる
ので、初心者で連載小説の投稿は初めてな私が書くのはどうかと思
いましたが、執筆を決意しました！これから先、不満も出てくる
と思いますがご容赦願います！

では、どうぞー！！

ブローグ

辺りを炎が包んでいた……。

まるで地獄であるかのような激しい炎が……辺りを包んでいた……。

「……………うう……………」

そこに1人の少女が倒れていた。白を基調としていたはずの服はすでに真っ赤に染まってしまっている……………。

そして彼女の前には彼女にとって大切な2人の親友が倒れていた……。

だが2人共ぐったりとして動かない……………。

少女は激しい痛みと深い絶望感に襲われながらも口を開いた……………。

「……どう……して？……なんで……こんな……。」

尋ねる相手は目の前にいる人間達……いや……人間と呼ぶにはあまりにも不気味な格好をしていた。

黒と白を縦で半分に色分けされた仮面、真っ黒なロングコート……そして、袖口から出た鉤爪のような刃物……。まさに”恐怖の象徴”と言つに相応しい姿だった……。

するとその”恐怖の象徴”である1人が少女に答える。

「お前たちは、この世界にはもう必要ない……それだけのことだ……」

「……そ……そんな……。」

そして少女の意識が薄れ始める……。

(……………こんなので終わっちゃうの……………そんなの……………やだ……………やだよ……………。)

少女はついに意識を失い、彼女たちは燃え盛る炎に包まれた……………

……………はずだった……………

……………これが新たな始まりとも知らずに……………

E
N
D

プロローグ（後書き）

読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました！

いきなり初めからシリアスになってしまいました。私シリアスは嫌いなのですがまだしばらくシリアスな雰囲気が続くと思います。

次から主人公である彼らが出ます！ ではまた次回！

119番は時と場合に応じて通報しろ!! (前書き)

今回から主人公登場!!

いきなり若干キャラが変わってる気もしますが……。

あと今回からOPとEDを加えたいと思います!

まだシリアスな雰囲気は続きそうなので、しばらくは御覧の曲で送りたいと思います!

OP 「PSI・missing」

～川田まみ～

(とある魔術の禁書目録

OP1)

ED 「silent bible」

～水樹奈々～

(魔法少女リリカルなのはAs・portable OP)

曲のわからない方はYouTubeなどで検索してみてください。

では、本編をどうぞ!!

119番は時と場合に応じて通報しろ！！

東京都特別行政区

学園都市

ここは政府に公認された特別教育研究機関である。東京、山梨、埼玉の3県にまたがり、東京都の3分の1の面積もある広大な土地の中には、都心と肩を並べられるほどの高層ビルが立ち並んでおり、そのほとんどのビルは日本を牽引する最先端の研究機関が所有している。そしてここで開発された技術を駆使した最新のシステムなどを用いて都市全体を統括する。……………そう、ここは最早“教育と研究に特化した未来都市”なのである。

そして先に述べたようにけこ学園都市は教育を主軸の一つとしているため学校が多数存在し、その人口の約8割が当然学生となっている。

そして現在午後9時……

人通りの少ない通りを3人の男子学生が歩いていた。

???「はあ……………不幸だ……………」

この見るからに不幸オーラを放っている黒髪ツンツン頭の学生の名は上条当麻。

見ての通り、不幸が売りの学生^{バカ}である。

当麻「おい！！ 学生と書いてバカと読むなよ！！ 私上条当麻は好きでバカになった訳じゃないんですよ！！」

……地の文に突っ込まないでください、上条さん……。

当麻「バカ呼ばわりされて突っ込まない訳あるか！」

???「当麻、さつきから誰に文句言ってるの……………」

当麻の様子を見ながら苦笑気味に言うこの学生は奴良^{めい}リクオ。茶色の髪を少し逆立てメガネを掛けている温厚そうな少年である。

当麻「何！？ この俺とリクオに対する扱いの差は！？ なんかし
た！？ 俺なんかしたの！？」

諦めてください！ それがあなたの宿命でありポジションです！！

当麻「何でだ ……！！？ つつか、開き直るな ……！！」

リクオ「ダメだ…………… よくわかんないけど当麻が壊れちゃったよ……」

???「ほっとけ、リクオ。当麻がああなのはいつものことだろ。」

リクオにそう言うこの学生は黒崎一護。オレンジの当麻より短いツンツン髪で、やや目付きの悪い少年である……………ぶっちゃけ見た目は不良。

一護「うるせえ！！ この髪の色は生まれつきだ！！ それに目付きも悪くねーよ！！」

リクオ「一護まで壊れた！？」

はいはい、すみませんね。 莓さん。

莓「俺は莓じゃねえ！！ 一護だ！！！！ わざとだろてめえ！！ 絶対わざとだろ！！ セリフのところの俺の表記まで“莓”って書いてる時点で明らかに確信犯だろ！！ 上等だ！！ 今すぐ俺が叩き切ってやる！！」

リクオ「ちよつと！？ 当麻も一護も誰に怒ってるんだよ！？ ああ、もう！！ 誰か止めて……………！！！！」

リクオ君……………頑張れ（他人事だけどねwww）！！

数分後

リクオ「はあ……………2人共いい加減落ち着いた？」

当麻・一護「ああ、悪い…………。」

リクオがため息を吐きながら先頭を歩き、その後ろを当麻と一護が申し訳なさそうな様子で歩いているという状況になっていた。

そして当麻と一護は数分前のリクオを思い浮かべ、2人揃ってこう思った。

当麻・一護（やっぱり怒った時のリクオは恐え…………。）

リクオ「なんか言っただ？」

当麻・一護「いや、何でもない（何でもねえ）…………。」

普通の笑顔で聞いてくるリクオに当麻と一護はある種の脅威を感じ、
そう答えた。

ちなみに2人が今リクオを恐れているのには、リクオのある秘密に
関係するのだが、それには今は触れないでおく。

リクオ「それにしても当麻の不幸体質ってある意味で凄いやね……。

」

一護「朝登校してたら風で転がってきた空き缶を踏んで後ろに転んで、その拍子に手放しちまったカバンが走ってたトラックの荷台の上に乗ったと思ったたら、そのトラックが爆弾で爆破されて容疑者の1人として疑われ、その事情聴取で当然今日の始業式にも出られず、その上やってきた春休みの課題は爆発で灰になっちゃったから提出できずに放課後から夜8時半まで補習を受けることに……
……って、お前本当どこまで不幸なんだよ……。」

当麻「か、返す言葉もありません……。」

リクオ「まあまあ、一護落ち着いてよ……。でも僕たちももう高校2年か……。」

当麻「そういえばそうだな。去年は恐ろしいほど平和だったから、あっという間に感じるのかもな……。」

一護「ああ、そうだな……俺たちは……っ!？」

当麻・リクオ「っ!？」

その時だった。突如近くの暗い路地裏から目映しすぎるほどの明るい光が漏れだしたのだ。

当麻「なんだ!？ あの光は!？」

そしてしばらくするとその光は少しずつ弱まり始めてきた。

一護「…行ってみるぞ!！」

当麻「ああ!！」

リクオ「えっ!？ 当麻、一護、ちょっと待ってよ!！」

一護達は路地裏へと入って行き、光のある方へと進んでいく。しばらくして一護達が見つけたのは……

当麻「……光の…球…?」

そう、まさに光り輝く球体だった。青白い光を放つそれはどこか幻想的に思わせる。

そして当麻が近づこうと一歩踏み出した瞬間、光が突然強くなった。

当麻「うわっ!？」

一護「くっ!!」

リクオ「眩しい!!」

あまりの眩しさに一護達は目を瞑ったが、やがてその眩しさも和らぎ始め、ついに消え失せた。そして彼らが目を再び開けて見ると……。

当麻・一護「なっ!？」

リクオ「お、女の子!？」

そう、そこには一護達と同じくらいの年の3人の少女が倒れていた。そして彼女たちへと近づいた瞬間、その状態を見て一護達の顔が一層険しくなる。

一護「おい！ こいつら怪我してるぞ！ それもかなり酷えー！
このままだと命に関わるかもしれねえぞー！」

当麻「なっ！？ じゃあ、早くこの3人を病院に「それはダメだよ、
当麻。」…っ！？何でだよ、リクオ！！ このままじゃ……。」

リクオ「考えてみてよ、当麻。さっきみたいな出来事の後に現れた、
この素性の全くわからない人達を病院に連れていくのはまずいし…
…それに……当麻だってこの学園都市の裏を知ってるでしょ……。」

当麻「それは………けど、じゃあこの三人を放っておくつもりかよ
！！」

リクオの言葉に当麻は言葉を詰まらせつつも反論した。すると、

一護「俺が治療する。」

当麻「一護！？ でもお前そっちは苦手なんじゃ…。」

一護「そうも言ってられねえだろ！ こいつらの怪我は一刻を争う
し、それにリクオの言うことも確かだ。なら、方法はそれしかねえ
………こっからなら俺達の寮も近い……。当麻はそいつを、リク

才はそっちの奴を運んでくれ！　くれぐれも慎重になー！」

当麻・リクオ「ああ（うん）！！」

今ここに、出会はずのない少年と少女が邂逅を果たした

119番は時と場合に応じて通報しろ!!（後書き）

読者の皆さん、どうも！

黒狼です！

今回主人公を出しました！

上条さんはともかく、一護とリクオを主人公にしたのを意外に思う人は多いと思いますが、主人公キャラの中ではこの2人は結構好きだったので、主人公3人にさせていただきました。まあ、ヒロインが3人ですしね……。

あ、一護と当麻は原作では2人とももう高1なので問題ないですが、リクオは原作だとまだ中1なんですよね……。ですから1人だけ原作と背の高さがかなり違ってます。まあ、その辺に関してはいずれキャラ紹介で書きたいと思います!!

ではまた次回!!

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだね、いやマジで！（前
ほのぼの&ギャグがメインなのでサブタイトルを「銀魂」風にした
のに、全然本文とマッチしてない……。

そしてなんか前話よりグダグダな感じになってきた気もしてきました……。

では、本編どうぞ！

最後にあいつが登場します！！

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだよね、いやマジで！

???「……うつ……あれ……。」

目を覚ました少女が最初に見たのは、知らない天井だった。彼女は自分が布団に寝かされていることに気付くと、栗色の長い綺麗な髪を僅かに揺らしながら、ゆっくり体を起こした。

???「……私……生きてるの?……。」

少女はそう呟くと、すぐに辺りを見回す。すると隣に彼女の大切な友人達が同様に寝かされていた。

???「っ！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

少女はその友人2人の名前を呼んだ。すると、

???「……うつ……な、なのは……?」

金色の長い髪の少女が目を覚まし、目の前にいる少女の名前を呟いた。すると、その栗色の髪の少女 なのはは、

なのは「フェイトちゃん!!」

目に涙を浮かべ、金色の髪の少女　フェイトに抱きついた。

なのは「良かった……良かったよ……」。

フェイト「……うん……なのはも無事だったんだね……良かった……」。

「

対するフェイトもなのはと同様に涙を浮かべ、親友の無事に安堵していた。すると、

???「……ん……あれ……ここは……どこや……?」

なのは・フェイト「っ!　はやて(ちゃん)!!」

もう1人の少女も目を覚まし、それに気付いたなのはとフェイトは彼女の名を呼んだ。

???「っ!　なのはちゃん!　フェイトちゃん!」

すると、その茶色いショートカットの髪の少女　はやては2人の

親友の姿を見て、2人と同様に目に涙を溜めながら抱きついた。

はやて「良かった……ホンマに……2人がいなくなったら、私は……。」

なのは「大丈夫だよ、はやてちゃん……。」

フェイト「私もなのはもちやんといるよ、はやて。」

そしてしばらくそれぞれの無事を喜び合っていると、

はやて「ところで、なのはちゃん、フェイトちゃん。ここは一体どこなんや？」

なのは「わからない。私も気が付いたら、ここに寝かされてたから……。」

フェイト「見た目は普通の家の部屋……だよな。」

なのは「でも、どうして私達こんなところにいるの？ 私たちは……」

だが、なのはは突然顔を青くさせ震えだした。それを見たフェイト

はなのはの背中をさする。

フェイト「なのは……思い出さない方がいいよ……。」

はやて「せやな……その方がええ……。」

しかしそう言うフェイトはやても若干体が震えている。と、その時突然ドアが開き、

当麻「ふあゝあ……。」

欠伸をしながらその男　上条当麻が入ってきた。そして当麻は目の前にいるなのは達を見ると、

当麻「あつ！　3人とも目が覚めたのか！　良かったゝ。一時はどうなるかと思っただぜ……。」

そう言っただけで胸を撫で下ろした。すると、

なのは「あの、あなたは？」

当麻「ん？ ああ、俺は……」

そこへさらに……

一護「おい、当麻。どうしたんだ？……って、そいつらもう目覚めたのか！」

リクオ「えっ、本当に！？良かった……見た感じ、もうほとんど怪我也大丈夫みたいだね。」

当麻の声を聞いた一護とリクオも部屋に入ってきて、なのは達の子に当麻同様胸を撫で下ろした。

一護「そっぴゃあ、まだ自己紹介してなかったな。俺は黒崎一護、よろしくな。」

リクオ「僕は奴良リクオ。よろしくね！」

当麻「で、俺は上条当麻。ここの部屋の持ち主だ。よろしくな。」

なのは「あ、私は高町なのはって言います。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウンです。」
テストロツサ

はやて「私は八神はやてや。3人共、よろしゅうな。」

当麻「ああ、よろしくな！あ、それと俺達のことは普通に下の名前で呼んでくれて構わないし、敬語もいらねえよ。こっちも普通なのは、フェイト、はやてって呼ぶからさ。」

リクオ「そうだね。敬語なんかで話し掛けられると変に緊張しちゃうし……。」

フェイト「うん、わかった。ねえ、当麻……どうして私達はここにいるの？」

当麻「……………覚えてないのか？」

当麻の問いになのは達3人は首を横に振った。それに対して当麻は3人に有りのままを話した。自分たちが学校から帰る途中、路地裏から突然強い光が現れたこと、光の発する源に向かっていくところには青白く光る球体があったこと、そしてその球体が突然光りだし、しばらくしてその光が消えると、そこになのは達が深い傷を負って倒れていたことを……………。

当麻「で、俺達で3人をこの部屋まで運んだっ訳だ。」

当麻の話聞いたなのは達はどこか思い詰めたような表情をしながら考えていた。と、ここで一護がそんなのは達の様子を見て、思わず口を開いた。

一護「どうした？ ひょっとしてまだ怪我してたところが痛むのか？」

なのは「え？ あ、ごめんね。全然大丈夫だよ。」

一護「そうか…なら良かった。治療しといたから、怪我はもうほとんど治ってると思うんだが、どうだ？」

なのは「……そういえば私達すごい怪我をしてたはずなのに……。」

はやて「何ともあらへんな。」

フェイト「じゃあ、一護が怪我の治療してくれたの？ それじゃあ、一護は治癒魔導士？」

だが、この質問に対する一護の応答はフェイト達にとって想定外の答えだった……。

一護「……魔導士って何だよ？」

なのは「え……………魔法を使っただんじゃないの？」

すると、

リクオ「……ええと……………魔法って、あの良くアニメとかでやってる魔法のこと？……………」

当麻「上条さん達はそんなの使えませんよ。」

なのは「……………どういふことなの……………」

と、ここではやてが当麻達に尋ねる。

はやて「一つだけ質問するで……………ここは何県の何市なんや？」

リクオ「え……………東京都の学園都市だけど？」

なのは「ええええっ!？」 東京ってことは、ここって地球!？」

はやて「でも……学園都市って、なんや？ 私らそんな知らんで……。」

その言葉に当麻達は驚きをあらわにした。

当麻「……学園都市を……知らない?……」

「護」……どういことだよ、一体……。」

と、その時だった。

???「知りたいか？ 黒やん。」

全員「っ!？」

突如聞こえてきた声に全員が驚き、声のした方を見た。すると、窓が開きそこから1人の男が入ってきた。そしてその姿を見て当麻とリクオが声を上げた。

当麻「土御門!？」

リクオ「土御門君、こっちに戻ってたの!？」

土御門「よう、上やん！ 黒やん！ リクやん！ 3人共、久しぶりだにゃー!。」

一護「土御門、お前なんでここに?。」

土御門「なに、ちょっとした仕事ってやつだにゃー!。」

土御門は軽い調子でそう言ったが、当麻達は“仕事”という言葉聞いて顔を険しくなった。

当麻「っ！　おい、土御門……仕事ってまさか……！？」

当麻がそう言うと、土御門は先ほどとは違いどこか真剣さを含んだ笑みを浮かべながら口を開いた。

土御門「……ああ、その通りだぜい、上やん。」

すると土御門はなのは達の方を見た。そして……

土御門「俺の仕事は……そこの3人についてだ。」

そして大きく歯車が動きだす

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだね、いやマジで！（後
どうも！ 黒狼です！

やっと当麻達主人公となのは達ヒロインが初対面！ なんか今回ま
で変に長く感じました、たかだか3話なのに……。

そして土御門を登場させました！ やはり学園都市に彼の存在は不
可欠ですからね。シリアス展開になったら、かなり重要なポジシ
ョンになると思います。

ではまた次回！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。（前書き）

今回かなりグダグダな上に駄文になってしまいました。そして今回ののはとフェイトがかなり空気です。本当すいません……。

では、本編をどうぞ！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。

土御門「俺の仕事は……その3人についてだ。」

土御門はなのは達を見ながらそう言った。すると一護は、

一護「…それじゃあお前は俺達の見たことを……」

土御門「知ってるぜい。俺はそれを調べに来たんだにやー。」

当麻「っ！　じゃあ、まさかあれは!？」

当麻が声を上げて尋ねるが土御門は首を振ってそれを否定した。

土御門「それは違うぜい、上やん。これはあくまで俺の独断だから、そっち側とは無関係だにやー。そもそもおそらくこのことにはこの世界の誰も関わってないし、この世界の誰にもあの現象については分からないと思うぜい。」

当麻「……誰も関わってない?」

リクオ「それにあの光について誰にも分からないって一体どういうこと……？」

当麻とリクオは土御門の言葉の意図が掴めず首を傾げた。

土御門「上やん、リクやんよく考えて見るにやー。俺は『“この世界”の人間には』って言ったはずだぜい。」

それを聞き当麻達はその意味を考える。なのは達は話の中心であるにも関わらず、目の前で繰り広げられる話し合いにただ呆然としていた。と、ここでリクオが何かに気付き、恐る恐る口を開いた。

リクオ「……………土御門君！“この世界の”ってことはまさか！？」

土御門「気付いたみたいだな、リクやん。その通りだぜい。」

そう言うと土御門は再びなのは達を見た。そして、

土御門「そこにいる3人は別世界の……それも平行世界の人間ってことだよ。」

土御門がそう言うと、当麻達はしばし呆然となり部屋の中が静まり返った。すると今まで黙っていたはやてが声を上げる。

はやて「ちょ、ちょお待って！ 私らが平行世界の人間ってどういうことや！？」

土御門「ええと……お前ははやてだったかにゃー？」

はやて「な、なんで私の名前を……」

土御門「そんなん自己紹介の辺りから見てたからに決まってるぜいで、一つ聞きたいんだが、お前とそっちにいる……なのはだったか？ 名前からして日本人だな？」

なのは・はやて「うん（せやで）。」

土御門「じゃあ、何県何市の生まれだ？」

なのは「え？ 神奈川県の高鳴市だけ……。」

土御門「…上やん、地図帳持ってるかにゃー？」

当麻「地図帳？ ああ、あるけど。」

当麻は地図帳を持ってきた土御門に渡すと、土御門は神奈川の詳細な地図の載っているページを見る。そして、

土御門「神奈川に海鳴市なんて地名はないぜい。」

なのは・フエイト・はやて「えっ！！！？？」

土御門「ほいつ。」

土御門から地図帳を受け取ったなのは達は隈無くそのページを見てみるが、

はやて「あ、あらへん……。」

フェイト「う、うそ……。」

なのは「そんな……。」

衝撃の事実を知ったなのは達は呆然とするしかなかった。

土御門「まあ、俺も“学園都市”の存在を知らない時点で妙だとは思ってたが、まさか本当に異世界の……それも平行世界から来た人間だとは思わなかったぜい。」

そして再び静寂が部屋の中を包み込んだ。まあ、当然である。平行世界などという最も非現実的な話が出てきてしまったのだから……と、ここでリクオがはやてに尋ねる。

リクオ「はやて……一つ聞いていい？」

はやて「……なんや?…」

リクオ「……はやて達から妙な力の気配を感じるんだけど……はやて達は一体何者なの? それにあの傷だったただの傷なんかじゃなかった。あれは間違いなく戦いで負った傷だよね……一体はやて達に何があったの?」

土御門「俺もそっちが本題で来たんだにやー。お前らからは何かとてつもない力を感じるぜい、若干冷や汗が出るくらいにな……。上やんと黒やんも薄々気付いてただんדרう？」

当麻「……ああ。」

一護「まあな……。」

はやて「っ……そ、それは……。」

はやて達は口を開くことが出来なかった。リクオ達を心から信じることが出来なかったのだ……。この世界に来る前の出来事が頭にちらつくせいで……。するとリクオが語り始めた。

リクオ「ゴメン……。僕達ははやて達のことを全く知らないし、はやて達があんなに酷い怪我をする理由なんて想像もつかない……。でもはやて達が悪い人達じゃないことってことは断言できるよ……。僕達もいろんな人を見てきたから……。だから助けたいんだ、はやて達を。僕も当麻も一護も、困ってる人を見たら助けずにはいられないお人好しだから……。だから話して。僕達ははやて達を絶対に信じるから。」

リクオの切々と話しかけてくれる態度を見たはやては、

はやて「……ホンマに信じてくれるんか？」

なのは・フェイト「はやて（ちゃん）！？」

はやて「もしここがホンマに平行世界なら、私らのいた世界のことを話しても問題あらへんよ。それにリクオ君達は私達の命の恩人やし、ここまで言うてくれるんや……本当のことを話さんとな…。」

はやての真剣な言葉になのはとフェイトは口を閉ざすしかなかった。

はやて「……今から話すんは全部私らの世界の真実や……。」

そしてはやては話し始めた。

はやて達が住んでいた世界“地球”以外にも数多の世界が存在しており、それを総称して“次元世界”と呼ばれていたこと。

そしてその次元世界の平和を守り管理する巨大組織“時空管理局”があり、その組織は魔法を使う“魔導師”と呼ばれる人々の集まりであること。そして自分たちはそれぞれ事件に巻き込まれたことでその存在を知り、魔導師となって時空管理局に入局しそして管理局員となったことを……。

当麻「地球以外の世界……か……。」

リクオ「それに魔法か……あの時一護が怪我を治したって聞いて“魔法”って言葉を口にしたのはそのせいだったんだ……。まさか本当にあるなんてね……。」

一護「じゃあ、はやて達も魔法の力を……。」

はやて「持つとるよ。それも私らは向こうではエース級の魔導師やったから。」

土御門「まああれだけ力の気配が大きければそれも納得だぜい。」

リクオ達ははやての話を聞いて、それぞれ感想を口にした。だが実は彼らの態度は一般人と比べ恐ろしいほど冷静なのだが……。と、ここで土御門がこう言った。

土御門「にしても時空を管理する正義の機関なんざ胡散臭過ぎて裏が有るとしか思えないにゃー。」

それを聞いたはやて達は皆顔を俯かせた。そして、

はやて「そうや……時空管理局には裏が有ったんや。そしてそれが

大きな事件を引き起こしてしもつた……まあ、それは何とか解決できたんやけどね。でもその原因は局のトップだった人間達の欲望が引き金やった……。だから私らは皆で上層部の裏を調べたんや。もうそんな大事件が起きて、関係のない誰かが傷付くことのあらへんように……そんな悲しみと憎しみの連鎖が起こさないために……。そして実態解明まであと一歩まで来た……。けど知らなかった……。どんな手を使つても上層部はそれを揉み消そうとすることを……。そして……。それは起こったんや……。」

はやて、なのは、フェイトはある世界に潜伏している犯罪者達を逮捕するという任務を受けて、局から派遣された部隊の魔導師達と共にその世界に到着した。そしてはやて達は部隊の魔導師達と共に犯罪者達を追い詰めた時……。突然後ろから攻撃を受けた。その攻撃は……。派遣された部隊の……。味方であるはずの魔導師達だった。そう……。彼らははやて達を抹殺するために上層部によって集められた暗殺者だったのだ……。はやて達は深手を負いながら応戦するも、相手は暗殺に特化したプロである上に人数も多く、徐々に追い詰められていった。そして、リーダーと思われる男の一言ははやて達を絶望へと突き落とした……。

「滑稽だな……。もうお前達の仲間誰も生きていないと言うのに……」

大切な者達の死を告げられたはやて達の心は粉々に碎かれ……。そして、彼女達は地へ墮とされた……。

はやて「……ほんで目が覚めたらこの部屋だったんや。……これが私らに起こったことの全てや……。」

そして再び部屋が静まり返った。なのはやフェイトはすっかり顔色が悪くなってしまう、体も小刻みに震えていた。特になのは今にも倒れてしまうのではないかと思ってしまうほど酷い。そしてそんなのは達の様子を見て、一人の男の我慢が限界に達していた……。

ドゴンッ

静寂に包まれていた部屋の中に低くて鈍い音が響き渡る。それは……上条当麻が自分の拳を思い切り壁に叩きつけた音だった……。

当麻「……何だよ、それ……何でそんなことのために人の命が奪えるんだよ……何でそんなくだらないことのために3人が傷付かなきゃなんねえんだよ！……何でこの3人の想いが踏み躪られなきゃなんねえんだよ……！」

当麻の叫びは一護やリクオの気持ちも代弁していた。そして当麻は拳を下ろすと、

当麻「土御門……頼みがある。」

土御門「……なんにゃー？上やん。」

当麻「……あの人に会わせてくれないか？」

土御門にそう尋ねた。土御門はそれを聞き、一瞬眉をひそめる。するとさらに、

一護「やっぱそうか……。」

リクオ「僕も同じこと考えてたよ、当麻。」

一護とリクオも相づちをいれた。

土御門「上やん、黒やん、リクやん、まさか……。」

当麻「ああ……なのは達がここ学園都市で過ごすことを認めてもらう。」

なのは・フェイト・はやて「えっ！！??？」

当麻の言葉になのは達は驚きを隠せなかった。それもそうである。

なのは達はこの世界には存在しない人間なのだから、当然戸籍がない。そんな人間を保護するのは警察か、もしくは彼女たちの勤めていた時空管理局くらいである。だが、当麻は学園都市に認めてもらうと言った……つまり当麻達は学園都市の上の人間と交渉できる立場にあるということだ……。

土御門「……やっぱり上やん達は面白いにゃー。いいぜい、あの人に話してみてやるよ。話が着き次第また連絡するぜい。」

リクオ「さすが土御門君だね……ありがとう。」

土御門「俺はそんなにいい人間じゃないにゃー。ただリクやん達には借りがあるし……それにリクやん達といると飽きないから……。ただそれだけのことだにゃー……。」

そして土御門は出口へと向かっていく。と、ここではやてが、

はやて「なあ、当麻君、一護君、リクオ君。」

当麻「ん？」

一護「なんだ？」

リクオ「どうしたの？ はやて。」

はやて「3人は一体何者や？ 何で出会ったばかりの私らにそこまですてくれるんや？」

リクオ達3人にそう尋ねる。すると、

リクオ「さっき僕も言ったでしょ？ はやて。」

一護「俺達はただのお人好しな高校生だよ。」

当麻「ただちよつと顔の利く……な……。」

リクオ達はそう答えた。と、ここで部屋から出ていこうとした土御門が立ち止まると……

土御門「じゃあな！ 上やん！ 黒やん！ リクやん！ せつかくの美少女3人との夜、せいぜい楽しむんだぜい！！！」

爆弾発言を残し出ていった……そして、

当麻・一護・リクオ・なのは・フェイト・はやて
「……………は（え）？……………」

今日一番の静寂が部屋を包み込んだ……………。

END

良いことを言った後にはトラブルが付き物。（後書き）

どうも！ 黒狼です！

今回は執筆にかなり苦労しました。特になのは達が平行世界から来たということに上条さん達が気付く前の件くだりが書きにくかったですね。気付いた方も多いと思いますが、“魔術”という単語を出す訳にはいかなかったので色々濁した結果、かなりグダグダになってしまいました……。

あとなのはとフェイトがかなり空気でしたね。まあ、それにも訳があると言えはあるのですが……。

そして最後は微妙にギャグ落ちで終わらせました。かなり無理があるとは思ったのですが、次回に繋がってくるので書きました。

今回は恋愛重視で行く予定です。ではまた！！

魔王？死神？王？ いいえ、普通の女の子です！！（前書き）

やっと投稿できた……………。

今回フラグがバッキバキです！！ そしてかなり長めです！！

あ、ちなみに今更ですが、なのは達の格好は管理局の陸士の制服（茶色のスーツ）です。バリアジャケット姿ではないですよ。

では、どうぞ！！

魔王？死神？王？ いいえ、普通の女の子です！！

リクオ「……………はあ……………」

リクオは思わず溜め息をついた。すると、

はやて「ホ、ホンマにごめんな、リクオ君……………」

はやては申し訳なさそうな顔でそう言った。

リクオ「は、はやてが謝ることじゃないよ！！ ただ、ちょっと緊張しちゃうっていうか……………さあ……………」

はやて「せ、せやね……………」

2人の間にギクシャクとした空気が流れる。ここはリクオの部屋……………その部屋のちゃぶ台にはリクオとはやてが向かい合って座っている……………。そもそも何故こんなことになっているのか……………それはほんの少し前に遡る……………。

数分前、上条当麻の部屋

一護「……なあ、当麻、リクオ……。」

当麻・リクオ「……なんだ（なに）？」

一護「……ちょっと殺^やつてくるわ。」

そう言つて部屋から出ていこうとするが……

リクオ「ちょっと待って一護！？ やるって何！？ やるの“や”の字からしてダメでしょ！！ 土御門君をあの世に送る気！？」

一護「当たり前だろ。」

リクオ「あっさり認めないでよ！！ 本当に洒落にならないよ！？ と、当麻！！ 当麻も一護を止めるの手伝って！！ このままじや土御門君が天に召されちゃうよ！！」

当麻「はあ、しょうがねえな。止める、一護！」

一護「何で止めるんだよ当麻!!」

当麻「あのなあ、土御門にはなのは達のためにあの人との交渉を頼んであるだろうが…。それなのに交渉役をあの世に送ってどうすんだよ。」

一護「うつ……」

リクオ「そ、そうだよ一護。土御門君だってなのは達のために動いてくれてるんだから、そんな酷いことをしちゃ……」

当麻「殺^やるなら交渉が終わってからにしろ。そんな時は俺も参加するから。」

リクオ「当麻!? 殺すことには賛成なの!? ていうか当麻もやる気!？」

当麻「今回は“鉄の処女”を使ってみようと思うんだけどさ……。」

一護「おお、いいなそれ。」

リクオ「当麻！？ 何で当麻が“鉄の処女”なんて物持ってるの！？ あれ拷問道具だよ！？ そんなもの一体どこから……………あ、いいや。何となくわかったから……………」

ちなみに鉄の処女とは中世ヨーロッパ時代に使われていた拷問道具です。見た目は大体2メートルくらいの高さの聖母マリアをかたどった鉄の人形なのだが、前面が左右に開くようになってその左右の扉の内側には無数の針が付いている。詳しく知りたい方は Wikipedia で調べてみてください！

リクオ「……………って、そんな詳しい説明はどうでもいいから2人共落ち着いてよ！！！」

当麻「なあ、ここをこうしたらどうだ？」

一護「お、それもいいな！じゃあ、その後に……………」

と、その時……………

ブチッ

……何かが切れる音がした。そして……

リクオ「……………当麻、一護・……………しょうか？」

しばらくお待ちください

リクオ「ごめんね、なのは、フェイト、はやて。迷惑掛けちゃって……………ほら、当麻と一護も謝って!!」

当麻・リクオ「……………す、すいませんでした……………」

はやて「え、ええよ別に。気にしてへんから……………」

はやては苦笑いを浮かべながら答えた。まあその理由は怒っている時のリクオが某白い魔王に見えたからなのだが……………。

一護「つーか今何時だよ？」

当麻「……午前2時だ。」

リクオ「明日休みで良かったね。」

一護「確かに。けどマジではやて達の寝る場所どうするか？」

当麻「俺達3人の内の誰かが部屋を空けて残りの2人のどっちかの部屋に泊まって、空いた部屋にはやて達3人が寝ればいいんじゃないか？」

フェイト「そ、そんなの悪いよ！！ 私達にそんなに気を遣わなかったって……」

リクオ「でも僕達の部屋って2人が限界だから、3人で寝るのは無理だよ。」

一護「……じゃあそうなるって……一つしかねえな……。」

現在

という訳で結局、当麻はなのはを、一護はフェイトを、そしてリクオははやてをそれぞれ自分の部屋に泊めることになったのだが……

リクオ（お、女の子を部屋に泊めるのなんて初めてなんだけど／／／……………。）

はやて（お、男の子の部屋に泊まるのなんて初めてや／／／／……………。）

お互いに初めての経験であるため緊張してしまっていた。まあ、リクオはおとなしい性格なため恋愛経験など無いに等しいし、対するはやても管理局では人気が高く男性局員からのお誘いを受けることもしばしばあったがそういったものは全て断ってきたし、そもそも知り合ったばかりの男の部屋に泊まるという経験などあるはずもないので、こういう雰囲気になってしまうのは仕方のないことなのだが……………。と、ここで、

はやて「そ、そういえばリクオ君の部屋って和室なんやな？」

はやてがギクシャクとした空気を何とかしようと口を開いた。

リクオ「え、ああ、うん。僕の実家は古い武家屋敷みたいな家だから、和室じゃないと落ち着かなくなってる……この部屋も元々当麻や一護の部屋と同じ洋室だったんだけど、無理を言って改装したんだ。」

はやて「そ、そうなんか……。」

……

……

だが一向に会話が膨らまない。

はやて（ダ、ダメや！？ 全然会話が続きへん！ 何でや！？ いつもなら何時間でも喋ってられるのに……と、とにかく何か話さへんと……）

はやては何とかこの空気を何とかしようと頭を巡らせるが一向に打

開策が浮かばずあたふたしていた。すると、

リクオ「……………あのさ、はやて。」

はやて「な、何や!？」

突然リクオに話しかけられ、はやてはやや上ずった声で答えた。そして少しの間が空き、

リクオ「……………ごめんね…………。」

はやて「え?……………何でや? 何でリクオ君が謝るんや?」

はやてから見ればリクオは自分を助けてくれた上に、こうして受け入れてくれた人間である。だからリクオが自分に謝る理由がはやてにはわからなかったのだ。

リクオ「……………さっきの話……………あんなに辛いことをはやての口から話させて……………本当は思い出さなくなかったよね?……………」

それを聞いたはやては今できる精一杯の笑みを浮かべ、

はやて「ありがとうな、リクオ君。でもあれは私が話さなあかんことやったんや……こんなことになったんは、私のせいなんやから……」。

リクオ「え？……」

はやて「私なんや……最初に管理局の裏を調べようと提案したのは……。勿論あの時に言った私の想いは本物やし、なのはちゃんやフエイトちゃんもその想いに賛成してくれた……。けど、今でも思うんですよ……私のやったことはホンマに正しかったのかって……。なのはちゃんやフエイトちゃんを巻き込んで……。私の……私の大事な家族を犠牲にしてまでするべきことだったのかって……」。

リクオ「っ！？」

はやての言葉にリクオは口を開くことができなかった。目の前にいる少女は自分の家族を失ったにも関わらず、その悲しみを堪え話してくれたことに衝撃を受けたのだ。

はやて「……あ、あかんや、私。こんなことリクオ君に話しても何にもならへんの……。ほ、ほなちよつと外で風にでも当たってくるわ！」

そう言っではやては立ち上がるとリクオに背を向けて部屋から出て

行こうとした……………だが、

???「……………おい……………」

はやて「え……………」

はやては後ろから聞こえた声に思わず振り返り、そしてその声の主を見て……………固まった……………。何故なら……………

はやて「だ……………誰や……………」

先ほどまでリクオがいた場所に1人の男が立っていた。藍色の外套が特徴の和の服装、どこことなく荒々しさを感じる雰囲気、鋭い目付き、そして白黒の長く棚引く髪……………全てにおいてリクオと真逆な男である。はやてはそんな目の前の男を警戒しながら尋ねた。

はやて「あんたは誰や？ リクオ君はどこに行ったんや？」

すると、

???「……………リクオだよ。」

はやて「……………は？……………」

リクオ「だから俺がリクオだって言ってるだろ……。」

しばしの沈黙、そして……

はやて「ええええええええええっ！！！！？？？」

部屋にはやての絶叫がこだました。

リクオ？「……ああ、そっぴやこの姿になつてた時お前は氣を失つてたのか。これは強いて言うなら、俺“奴良リクオ”のもう1つの姿だよ。」

はやて「……もう1つの……姿？……」

はやてはイマイチ理解できず首を傾げる。

リクオ？「ああ。普段の俺はお前の知ってる姿なんだが、俺の身に危険が及んだり感情が高ぶったりするとこの姿になるんだよ。まあ、昔は夜にだけこの姿になってたから他の連中はこの姿の俺を“夜のリクオ”って呼んでるけどな。」

はやて「よ、夜のリクオ君……。」

夜のリックオがはやてに自分の能力について説明するが、はやては目の前にいる男がリックオであると未だ信じることができない。

夜リックオ「まあ、信じる信じないはお前の自由だな。どうせ元の姿に戻ったところでちゃんと説明するだろし、それに俺はお前に言いたいことがあったただだからな……。」

はやて「言いたい……こと?……」

すると夜リックオは今まで浮かべていた笑みをしまった。そして、

夜リックオ「……お前のしたことは…間違いなんかじゃねえよ……。」

はやて「え……。」

夜リックオ「お前のいた世界が実際どんな場所だかは知らねえ……だがよ……他の奴らのことを想って闇に立ち向かうのは絶対に間違いなんかじゃねえ……。」

はやて「……せ、せやけど……」

夜リックオ「辛いんなら泣けばいい。」

はやて「え、でも……。」

夜リクオ「泣かねえことが強さじゃねえよ。俺のおふくろも言ってたぜ、“女は涙の数だけ強くなる生き物だ”ってな……むこうじゃエースだか何だか知らねえが、今のお前はただの1人の女なんだからよ……泣きたいんなら泣け……。」

リクオの言葉を聞いたはやての心は限界だった。そして……

はやて「う、うわああああああん………。」

リクオの胸に飛び込み、そのまま大声で泣き始めた。まるで今まで溜め込んでいた感情を全て吐き出すかのように……。そんなはやてをリクオは少々困惑しながらも優しく抱き締めていた……。

しばらくして、

はやて「……すう……すう……すう……。」

夜リクオ「おいおい……そのまま寝るかよ、普通………。」

現在の時刻（午前3時）と今までの疲れもあったせいか、はやてはそのまま夜リクオの胸の中で眠りについてしまったのだ……。

夜リクオ「はあ……仕方ねえ……。」

リクオははやてを起こさないように抱き上げると隣の部屋に行き、予め敷いておいた布団にはやてを寝かした。そして部屋から出ていこうとしたのだが……。

夜リクオ「……こいつはわざとか？……。」

はやての右手がリクオの外套の胸袖を掴んでいたのだ。

夜リクオ「……ちっ……めんどくせーな……。」

リクオはそう言って胸袖を掴んでいたはやての右手を掴み無理やり引き剥がそうとした。と、その時、

はやて「……もう……嫌……や……もう……1人になるのは……いや……や……。」

一筋の涙を流しながら呟いたその寝言は最早はやての願いそのものに他ならなかった。

それを聞いたリクオははやての手を引き剥がすのをやめ、

夜リクオ「……ったく、しょうがねえな……。」

はやての布団に自分も入り、包み込むような形で腕を彼女の背中へと回し体を引き寄せ、そのまま眠りに着いた。

く黒崎一護の部屋く

少し時間は戻ってはやてとリクオがギクシャクした雰囲気にいる頃、一護もフェイトを部屋に入れていた。

フェイト「一護の部屋って綺麗に整頓されてるね。」

一護「ん？ ああ、まあな……意外か？」

フェイト「えっ！？ あーち、違うよ！ 別にそついうつもりじゃ……。」

一護「構わねえよ、他の奴らにもよく言われるしな。さてと、寝る準備しねーと……」

フェイト「あ、手伝うよ。」

一護「平気だよ、隣の部屋に布団一つ敷くだけだし。適当に部屋の中を見て待っててくれ、すぐに終わっからよ。」

フェイト「う、うん。ゴメンね、泊めてもらっ身なのに……。」

一護「言っただろ、俺はお人好しなんだよ。んじゃちょっと待っててくれ。」

そう言っで一護が隣の部屋へ行くとフェイトは

フェイト（男の子の部屋か／＼／……クロノの部屋には当たり前のように何度も入ったけど、さっき知り合った男の子の部屋に泊まることになるなんて思いもしなかったよ／＼／／……。）

今までに無い状況に少し緊張していた。そしてフェイトはそれを紛らわせようと部屋の中を見回す。すると、あるものに目が止まった。

フェイト「これって……………」。

それは棚に置いてあった大きめの写真立てだった。そこには何枚かの写真が飾られているが、フェイトの目を引いたのは一護とその妹と思われる2人の少女の写真だった。

一護「終わったぜ……ん？写真を見てたのか？」

フェイト「え！？ あ、うん。」

突如後ろから聞こえてきた一護の声にフェイトは少し驚いた。

フェイト「この2人の女の子は一護の妹さん？」

一護「ああ。こっちの茶髪でワンピースを着てるのが双子の姉の“柚子”で、そっちの黒髪でボーイッシュな奴が妹の“夏梨^{かりん}”っていうんだ。」

フェイト「へえ、何かそっちの柚子ちゃんよりこっちの夏梨ちゃんの方がお姉さんに見えるなあ。」

一護「実際そうだぞ。柚子は天然でおつちよこちよいけど、夏梨はかなりしっかり者だしな。一緒に暮らしてて何度も“姉妹逆だろ

” っ て 思 っ た し …… 。”

フェイト「ふふっ、そっか……。」

と、その時、フェイトの頭に2人の子供の笑顔が浮かんだ。1人は10歳くらいの赤髪の少年、もう1人は少年と同年くらいでピンク色の短い髪の少女である。

一護「どうした？ フェイト。」

フェイト「え？ あ、ゴメンね。ちょっと考え事をしちゃって……。」

一護が突然黙り込んでしまったフェイトに声を掛けると、フェイトは一護の方を向いて答えた。すると、

一護「っ！？ お、おいフェイト！ お前何で泣いてんだ！？」

フェイト「え……………」

一護がフェイトの顔を見て驚きの声を上げた。それを聞いたフェイトは思わず右手で自分の頬に触れてみる。すると、確かに涙が流れ

ていた……。

フェイト「あ……ち、違うよ、一護。これは別に泣いてるとかじゃ……えっと……大丈夫だから……その……。」

フェイトは溢れてくる涙を拭いながら一護に心配かけまいとその場を取り繕おうとするが余計に混乱してしまう。すると、それを見た一護はフェイトの両肩を掴み、こう言った。

一護「大丈夫じゃねえだろうが……。」

フェイト「え……。」

一護「涙を流して大丈夫な訳ねえだろうが……んな辛そうな顔して誰が大丈夫って信じるんだよ……なんか理由があんだろ……なら話してみるよ。話さなきゃ何も伝わらねえぞ……。」

フェイト「っ!」

一護の言葉にフェイトは息を呑んだ。それはかつて自分の親友が敵だった自分に対して言った言葉だったのだから……。そしてフェイトはポツポツと語り始める。

フエイト「私、2人の子供の保護責任者になって親代わりをしていたの……エリオとキャロっていうんだけどね……まだ2人共10歳くらいだったんだけど、どうしても管理局に入りたいって言って、管理局に入って私達と一緒に働いてたの……。けど……もう……2人は……」

一護は何があつたのかを悟ると口を開くことができなかった。すると、

フエイト「私ね……お母さんが好きだった。お父さんは生まれた時にはもういなかったから、私の親は母さんただ一人だったの。ただお母さんも私が9歳の時に亡くなって、私は天涯孤独になった。でもそんな私をある優しい人が養子にしてくれて、母さんになってくれて、家族の皆も優しくしてくれた……。その時に決めたんだ。私と同じような子供達を救うって……。その子達を守って……」
でも……。私は守れなかった……。家族同然だったエリオとキャロを……。私は……。」

そう口にするフエイトの体は小刻みに震えていた……。すると、

一護「もういい、フエイト……。」

フエイト「一護……?。」

一護はフェイトをそっと抱き締めた。そして…

一護「俺もおふくろを失ってるんだ。」

フェイト「え……………」

一護「俺が5歳の時、おふくろは俺を庇って殺された…………その時俺は自分の弱さを呪った。そして決めたんだ。今度は俺が家族を…………袖子と夏梨を守るってな…………だから大切な誰かを失った悲しみも守れなかった悔しさもわかってるつもりだ…………だから無理して強がらなくていい…………お前は…………一人の女の子なんだからよ…………。」

それを聞いたフェイトは一護の胸板に顔を埋めた。そして…………

フェイト「うつ…………ぐすつ…………うつ……………」

静かに泣き始めた…………。そんなフェイトを一護は黙ったまま左手で彼女の華奢な体を抱き締め、右手で彼女の頭を優しく撫でていた…………。

〈上条当麻の部屋〉

雲一つない満天の夜空……そこには名もない数多の星達が輝き、お互いを照らし合っている……。そんな空を1人の少女　高町なのははベランダからただじっと見ていた。だが、そんな彼女の表情は空とは逆に陰が差していて、その目に光はなかった……。

なのは「……私は……」

意味もなく言葉を発しては止める……少し前からこの繰り返しだ……。一体何時になれば、この無意味な行動は止まるのだろうか……。なのははそんなことを頭の中で考えていた。だが思っていた以上に早くその時は訪れる……。

「眠れないのか？　なのは」

背後から聞こえてきた声になのはは肩をビクッと動かして反応するも、大して驚いた様子もなく後ろを振り返って姿を確認し、名を呼んだ。

なのは「当麻君……」

当麻「……空を見てたのか？」

なのは「……うん……。」

そう言うとなのは再び空を見上げた。当麻もそれに倣い、雲一つない夜空を見上げる。すると、

なのは「こつちの世界でも空は変わらないんだね……やっぱ綺麗だなあ……。」

なのははそう呟いた。そして彼女の話は続く……。

なのは「私ね、魔法で空を飛ぶことが大好きだったの……。一度飛べなくなったこともあったけど、飛びたいっていう自分の思いだけで私は頑張ることができた。」

そう話すなのはの表情は笑顔だが、それは今にも消え入りそうなくらいの哀しみを秘めた儚いものだった。そして当麻はそんな表情で話すなのはの横顔をじっと見ながら黙って聞いている……。

なのは「そんな時、私に凄く大切な子ができたの。その子は普通とは違う子だったけど私のことを“ママ”って呼んでくれて、一緒に過ごしていくうちにいつの間にかその子は私にとってかけがえのな

いものになつてた……。私達2人を引き裂くような辛くて苦しい事もあつたけど、それも2人で正面から向き合つて乗り越えた……。その時決めたの……。この子を“母親”としてずっと傍で守つていこうって……。この子と一緒に見上げるこの空を守つていこうって……。なのに……」

なのは顔が俯くのと空を大きな雲が覆つたのは同時だった。そして当麻は暗くなつた世界で見た……。なのは頬に伝う涙を……。

なのは「それなのに……守れなかった……どっちも守ることが出来なかった……もうあの子には……“ヴィヴィオ”には会えない……どんなに手を伸ばしても、もうヴィヴィオには届かない……もう私には……何も守れ……」

なのは最後まで言葉を紡げなかった。何故なら……

なのは「当麻……君……？」

当麻がなのはの頭を自分の胸に押し当ててきたのだから……。そして当麻はそのままなのはに語り掛ける。

当麻「……信じる……」

なのは「え……………」

当麻「信じろ…………お前とヴィヴィオはまた会えるって…………。」

なのは「…………でもそれは…………もう……………」

当麻「確かにそれはどうしようもないくらい儚くて、すぐに消えちまいそんな幻想だろう。けどその幻想は誰にも否定することはできないし、消すこともできないだろ。これはお前だけの幻想であり…………何よりお前の願いだろ？　ならお前が信じてる限り、その幻想はずっとお前の中で存在し続けるし、信じ続けてればきつとそれは現実になるさ。もしそれを踏み躪ろうとするくだらない幻想があったらそんな時は…………俺がその幻想をぶち壊してやるよ。」

その言葉を聞き、なのははふと顔を上げると、ちょうど雲の影が消え始めてきた。そして完全に消えると、そこには柔らかい優しいな笑みを浮かべる当麻の姿があった。そして、

当麻「お前の幻想は、俺が絶対守るよ…………。」

その言葉を聞いた瞬間、なのはの視界は涙で滲んでしまい見えなくなってしまうた。そして…………

なのは「当麻君！！！」

当麻「うおっ！？」

なのはは目の前にいるはずの当麻に思い切り抱きついた。当麻は突然のなのはの行動に驚き一瞬ぐらつくが何とか受けとめる。

なのは「うっ、ぐすっ、うええええええん……………」

大切な者達を守れなかった哀しみと虚しさに苛まれ心を枯らしていた少女は、それを潤すかのように当麻の胸で泣き続けた。まるで幼い子供が泣きじゃくってるかのように……………。

そしてその後、なのはは泣き止むと顔を赤くしながらお礼と謝罪をし、自分の布団へと入った。それを見届けた当麻も自分のベッドへと向かい眠りに着いた。こうして夜は更けていった……………はずだったのだが……………

なのは「……………すう……………すう……………すう……………」

当麻「……………何故私のベッドになのはさんがいらっしやるのでせうか？……………」

当麻が違和感を感じてふと起きてみると、隣になのはが寝ていたのだ。しかも微妙に服がはだけたりしていて正直……当麻の理性が一瞬崩壊しかけた……。だが彼女のあどけない寝顔を見て当麻は自然と笑みを零した。そして、

当麻（……こいつ自身も守らないとな……）

そう心から思ったのだった……。

こうして夜は少女達の悲しみを洗い流しながら更けていく

魔王？死神？王？

いいえ、普通の女の子です！！（後書き）

はい、今回は前半ギャグで後半シリアスな恋愛にしました。なんか恋愛描写の3場面とも後半の展開が似たような感じと思った方もいると思います。すいません、これが私の限界です…………。

あとギャグも自分で書いていて微妙な気がしました。まあ、リクオが魔王化してる時点で最早いろいろと壊れてますね……。もっと面白く、そして上手く書けるようになるべく精進していきたいです！！

次回は当麻達の言っていた“あの人”を、そして何人がキャラを出す予定です！ ではまた！！

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（前書き）

さらに長文になった上にグダグダ度合いが増してます……。前半
とかはかなり酷いw w w……。後半

今回はまさかの人達が登場します！！

では、本編をどうぞ！

忙しい人の都合の良い日はめったにない！

A 9:00

く奴良リクオの部屋く

リクオ「……ん……もう9時……か？……」

リクオは起きてすぐ、目の前の状況を見て固まった。

はやて「……すう……すう……すう……すう……」

一、はやてが目の前で寝ている。

二、はやてを抱くような形で自分が寝ている。

三、はやての服がかなりはだけている。

リクオ（……………え……えええええええええっ！！！！？？？）

ここで声を出さず、心の中で叫んだのは称賛に値するだろう。

リクオ（落ち着くんだ、僕！ 昨日のことを思い出そう。確かはやてが泣き疲れて寝ちゃったから、はやての布団まで運んで寝かせたけど服の裾を握ったまま離してくれなくて、寝言で“1人は嫌だ”って言うってたから仕方なく一緒に寝たのか、なるほど……って何やってんの僕
！！??）

リクオはとりあえず布団から出ようとするが、はやてが依然として服の裾を握ったまま離さない。すると、

はやて「……ん……あれ？……リクオ……君？……」

リクオ「あ……お、おはよう、はやて……」

はやて「え、あ、うん。おはようや、リクオ君……え？……」

ここでははやては自分の状態を見て硬直し、リクオに尋ねる。

はやて「な、何でリクオ君がここにいるんや!？」

リクオ「……覚えてないの？」

はやてが素早く手を離して引つ込めると、リクオはゆっくりと布団から出て起き上がった。そしてはやての顔をじっと見る。

はやて「ど、どないしたんや、急に／＼／＼／＼……。」

はやては突然リクオにじっと見られ、顔を再び赤くした。するとリクオは、

リクオ「……良かった。もう大丈夫そうだね。」

はやて「……え?……。」

リクオの言葉にはやては首を傾げた。

リクオ「昨日はやて凄く無理してるみたいだったから……。少しは気持ちも落ち着いた?」

はやて「……せやね。だいぶ変わってきたわ……。せやけど、昨日はごめんなあ。迷惑掛けて……。」

リクオ「迷惑だなんて思ってないよ、はやて。僕ははやてにあんな

顔でいて欲しくなかっただけだし、それに……………はやてはそういう笑顔でいる方が僕は好きだよ。」

はやて「ふえ／＼／＼／＼！？」

リクオの不意打ちとも取れる発言にはやては頬を真っ赤に染めた。

リクオ「は、はやて、大丈夫！？ 顔が赤いけど……………」

はやて「だ、大丈夫や／＼／＼／＼！！ ほ、ほな、早く一護君達を起こしに行くで／＼／＼！！」

リクオ「えっ！？ ちょっと待ってよ！ まだ僕着替えてないし！」

だがはやてはリクオの話を聞いておらずそのまま部屋を出て扉にもたれかかった。

はやて（い、今は反則やろ／＼／＼／＼……………）

と、ここではやては今の自分の感情に気付いた。それは……………

はやて（もしかして私……………リクオ君のこと……………）

“恋心”である…………。

A 9 : 3 0

〔黒崎一護の部屋〕

小さいテーブルを2つ繋げたものの上には、ご飯、味噌汁、焼き魚など日本の朝食の代名詞と呼べる料理が並んでいる。

一護「うしっ！ 完了！」

フェイト「うん。でもまさか朝ごはんを交代制で作ってるとは思わなかったよ。それに一護料理上手だし。」

一護「あ？ まあ俺と当麻とリクオの当番制は随分昔から当たり前のようにやってたし、それに妹が小さい頃は俺が作るしかなかったからな。親父は家事とか全くしねえし……。つか、そういうお前も

上手じゃねーか。」

フェイト「あ、ありがとう／＼。私昔は料理とか全然ダメだったんだけど、今の母さんが……あ、養子に引き取ってくれた人でリンディさんっていうんだけど、その義母さんがすごく料理上手でよく教わってたんだ。」

一護「へえ、そうなのか……いい義母さんなんだな。」

フェイト「うん……そうだね……。」

しばらく続く沈黙……。すると、

フェイト「一護……昨日はありがとう……。」

一護「別に構わねえよ。あんな辛そうにしてる女を放っておくほど俺は薄情じゃねえよ。ただ……あれは勘弁して欲しかったがな……」

フェイト「あう／＼／＼／……い、ごめんなさい／＼／……。」

フェイトは頬を赤くし、縮こまってしまった。一体なんのことが……それは昨日の真夜中にさかのぼる……。

昨夜

フェイトが泣き止んだ後、一護は自分のベッドに入り眠りに就こうとした。と、そこへ、

フェイト「一護、まだ起きてる?」

一護「ん? ああ。まだ起きてるぞ。」

フェイト「ちょっと……いいかな?」

一護「……入れよ。」

するとフェイトが部屋に入ってきた。

一護「どうしたんだ? フェイト。」

フェイト「う、うん／／／……あのね／／／……その／／／……」

フェイトは頬を赤く染め、どこかソワソワしていた。そして、

フェイト「一緒に寝てもいいかな？／／／／……」。

一護「……は？」

一護はフェイトの言葉を聞いて思わず間の抜けた声を出すと、

一護「はあ！？ お、お前一緒に寝るって何考えてんだよ！？ ん
なことできるわけ……」

フェイト「ご、ごめんね！でも1人でいると……あのことが頭に浮かんで……眠れなくて……」

そう口にするフェイトは目に見えて怯えていた。まあ、目前まで迫っていた死の恐怖、大切な者を失った悲しみ、そして知らない世界に来てしまったことへの不安はそう簡単に消えることはない。そんなフェイトを追い返すことなど一護にできるわけがなかった。

一護「……それでお前の心が落ち着くって言うなら俺は何も言わねーよ。好きにしろ。」

フェイト「……………うん！」

フェイトは一護の承諾に対し子供のような純粋な笑顔で応えた。そして枕を持つてくると一護の隣へと潜り込み、一護の腕に抱きついた。

一護「お、おい！？ お前何して……………」

フェイト「……………ダメ？……………」

一護「うつ……………」

一護が止めさせようとするが、フェイトは上目遣い＋涙目を発動した。それも無意識で……………。それを見て一護は断れるはずもなく、

一護「……………勝手にしろ。」

折れるしかなかった。それを聞いて安心したのか、フェイトはものの数秒でウトウトし始め、

フェイト「ありがとう……一護……」

その眩きを最後に眠りに就いた。だが対する一護は寝ることなどできない。一護は妹と何度か寝たことはあるがそれはもう何年も前の話だし、そもそも同じ年の女子と一緒に寝たことなどない。さらにフェイトは十人中十人が美人と答えるであろうほどの美少女であり、彼女の胸囲は最早凶器に他ならない。結局一護が眠りに就いたのはその2時間後だった……。

現在

フェイトは昨夜の自分の行動を思い出し顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一護「……あいつらを呼んでくるか……。」

固まっているフェイトを置いて当麻達を呼びにいこうとした時、

リクオ「おはよう、一護、フェイト。」

はやて「おはようやな。フェイトちゃん、一護君。」

フェイト「あ、おはよう、はやて、リクオ。」

一護「もう朝飯出来てるぞ。」

はやて「おっ、ホンマやね……って、フェイトちゃん、何で顔が赤いんや?」

フェイト「え／＼／＼／＼!?! な、何でもないよ／＼／＼!」

はやては見抜いた。絶対嘘であると……そして少し考え……

はやて（もしかしてフェイトちゃん……一護君のこと……）

早速真相にたどり着いた。と、ここで一護がリクオとはやてに尋ねる。

一護「そっぴや、当麻となのははどうした? まだ寝てんのか?」

すると、

はやて「ああ、2人ならもうすぐ来るで。」

リクオ「そ、そうだね。あははは……」

何故かリクオが苦笑いを浮かべた。と、そこへ、

なのは「お、おはよう、フェイトちゃん、一護君……」。

当麻「お、おはよう……ござい……ます……」。

どこかオドオドしているのはと何故か頭に大きなたんこぶがで
ている当麻が現れた。

フェイト「えっと……2人は一体どうしたの？」

リクオ「……実は……」

「上条当麻の部屋」

リクオ「……ねえ……はやて……」

はやて「何や………」

リクオ「これ……どう思うっ………」

はやて「いや、どうって言われても………」

ここは上条当麻の部屋。何故ここにリクオとはやてがいるかという
と、当麻となのはを起こしに来たのだが、呼び鈴を鳴らしても全く
反応がなく鍵も開いていたので仕方なく中に入ったのだ。そして現
在リクオとはやてはある光景を目にしている。それは……

なのは「ん……ふにゅ………」

当麻に抱きつきながら幸せそうな顔で寝ているなのはと、

当麻「チーンッ

何故かボロボロで眠っている当麻の姿だった……。

はやて・リクオ（な、何があったんだろう……）

2人共目の前の状況に困惑するが、とりあえずなのはの方を先に起こすことにした。

はやて「なのはちゃん、起きてーな。もう朝やで。」

なのは「んん……あと半日……すう……すう……」

はやて「起きろ !!!!!!」

なのはの寝言にはやてはどこからともなくハリセンを出して、

スパアアアンッ

なのは「ふにゃああああ!!??」

なのはをひっぱたいた。突然の衝撃になのはは猫のような悲鳴を上

げる。

はやて「何やねん半日って！？　そこは“あと5分”やる！！　何やその斜め上に行くような寝言は！？」

なのは「は、はやてちゃん！？　それにリクオ君も何でここにいるの！？」

リクオ「いや、当麻となのはが全く起きてこないし、鍵も開いていたらから入ってきたんだよ。それよりなのは……当麻は何でそんなにボロボロなの？」

なのは「ふえ？　にやつ！？　当麻君何でボロボロなの！？」

はやて「知らないんかい！！」

リクオ「まあまあ、とりあえず起こしたほうがいいんじゃない？」

なのは「そ、そうだね…。当麻君、起きて。朝だよ。」

当麻「……んん……」

すると、当麻は寝呆けている様子でなのはの方に手を伸ばし……

ムニッ

何か柔らかいものを掴んだ。それは……

なのは「……ふえ／＼／＼／＼／＼／……」

なのはの胸だった……。そしてそれを見たはやては、どこからともなく巨大な鉄ハリセンを取り出し、

はやて「何を……してるんや　　……！！！！……」

ドカアアアアアアンツ！！！！！！

当麻の頭に振り下ろした……。

現在

リクオ「ってことがあったんだ……。」

一護「……………バカだろ、当麻……………」

当麻「……………不幸だ……………」

リクオ「ていうか、当麻はまずなのはに謝ったら？」

当麻「あ、ああ……………。ごめんな、なのは。」

なのは「ふえ／＼／＼／＼！？　べ、別にいいよ、当麻君／＼／＼。
むしろ、ゴニョゴニョ……………／＼／＼／＼。」

なのはは赤面しながら何か言葉を口にするが、途中からごもごもと話していて周りには聞き取れなかった。

はやて（まさかなのはちゃん……当麻君のことを……ってことは全員私ら誰かに惚れてしもつたんか……まあ、それぞれ違う相手やから私らで取り合いにならなくて幸いやけどな。）

はやては1人、なのはの様子を見ていろいろと考えていた。

リクオ「はやて？ どうしたの？」

はやて「えっ／＼／＼！？ ああ、いや、何でもあらへんよ／＼／＼！」

一護「ところで当麻、何でお前はボロボロだったんだ？」

当麻「わかんねえ。ただなんか一瞬ピンク色の光が見えたかと思ったら意識が途絶えちまったんだよね……何でだ？」

それを聞いたはやてとフェイトは冷や汗が止まらなかった。ピンク色の光という言葉聞いて彼女達が連想するものは1つしかない。

フェイト（なのは……）

はやて（それはあかんやろ……ていうかそもそもどうやって当麻君だけボロボロにしたんや？……）

リクオ「まあ、とりあえず朝ごはん食べない？」

一護「…それもそうだな。」

その時、

ピリリリリッ！

当麻「ん？ 俺の携帯か。」

当麻はポケットから携帯を取出す。

ピッ

当麻「もしもし。」

土御門『よー、上やん！ あの人が上やん達に会う都合が着いたにやー。』

当麻「そうか。ありがとうな、土御門。」

土御門『いいってことにやー。ああ、そうそう。そっちに遣いを送ったから、上やん以外はそいつにパッパと連れていってもらうと良いぜい。そんじゃあ、また明日会おうぜい、上やん。』

当麻「ちよつと待て！？　今なんか変な単語が聞こえた気がしたんですが！？」

ツーツ、ツーツ

通話が切れてしまったため、当麻は仕方なく携帯をポケットに戻した。

一護「今の土御門からだよね？……って、どうした？」

当麻「ああ、いや何でもない……。で、あの人の都合がついたってさ。で、なんかここに遣いを送ったらいいんだが……。」

リクオ「遣い？　遣いって一体誰が……」

と、そこに、

ヒュンッ

???「私よ。」

突然のことに全員が驚いた。当然のことである。どこからともなく部屋に1人の少女が現われたのだ。その少女は年齢は大体当麻達と同じくらいで赤い長髪を2つに分けている。そして服装は超ミニのスカートに加え、胸の部分だけを桃色の包帯のような物で隠し、その上にどこかのブレザーを羽織っているだけというかなり露出度の高い格好である。なのは、フェイト、はやてはいきなり人が現れたことへの驚きで口が塞がらないが、当麻達はそこには全く触れずその少女に話し掛ける。

当麻「結標^{むすじめ}!?!」

一護「遣いっってお前かよ!?!」

結標「あら? 何か文句でもあるのかしら?」

当麻「いや、別にねえけどよ……………」

一護「お前が土御門のパシリみたいな真似をしてるのが意外なんだよ……。」

結標「……あなた達コンクリートブロックを頭にぶつけられたい？」

リクオ「お、落ち着いて！結標さん！ 当麻もリクオも変なことを言わないでよ！」

リクオがキレかかっている結標を落ち着かせる。

結標「……はあ……まあ、いいわ。で、そこにいる3人が土御門の言ってた人達なのかしら？」

結標はなのは達3人を見てそう尋ねるが、3人は未だに固まっ
てる。すると、

一護「ああ、なのは、フェイト、はやて。こいつは俺達の友人で同じ学校の同級生の結標淡希だ。」

結標「まあ会うこともあまり無いかもしれないけど、よろしく頼むわ。」

なのは「あ、私高町なのはって言います。」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてや。」

なのは「あの……淡希ちゃん……でいいかな？」

なのはの言葉に結標は思わず豆鉄砲を食らったような顔をした。

結標「あなた……よく初対面の相手に“ちゃん”付けなんかできるわね………まあいいわ。で、何かしら？」

なのは「えっと……さっきのは一体なんなんですか？」

結標「さっきの？」

はやて「いきなり現れたことや。何やあれ？ あんた何者や？」

結標「私は座標移動ムーブポイントっていう空間移動系の能力者よ。」

なのは「ムーヴ？」

フェイト「ポイント？」

はやて「それに空間移動系の能力者ってどういうことや？」

さっぱりわからないといった表情のなのは達を見て、結標は当麻達に尋ねる。

結標「あなた達、もしかしてこの3人に学園都市について何も話してないの？」

当麻「あっ……」

一護「そっいや、何も話してないな……」。

リクオ「まあ昨日はいろいろあったせいで、学園都市の話をするほど精神的に余裕がなかったからね。」

結標「……はあ……もういいわ。どうせその辺についてもあの年から話があるだろうし。とりあえず行きましょう。」

当麻「えっ！？　まさか今からか！？　まだ朝飯食ってないんだけど……」

結標「あの人が忙しいのはあなたがよく知ってるはずだけど？」

一護「当麻、あきらめろ。」

当麻「はぁ……不幸だ……。」

結標「じゃあさっさと行くわよ。あ、ちなみに上条君は自力で来なさいよ。」

当麻「……はい？」

はやて「え？　それってどういう……」

だがはやてが言い切る前に当麻以外は全員部屋から消えた。そして

……

なのは「にやつ!?!」

フェイト「きゃっ!?!」

はやて「うひゃっ!?!」

3人は一瞬浮遊感を感じたが急にそれが無くなり床に尻餅を付く形になった。

一護「お前ら、大丈夫か?」

リクオ「まあ初めてなら当然こうなるよね。」

なのは「うつつ、一体何が起こっ……た……の?……え?……」

フェイト「……ここ、どこ?」

はやて「一体どうなってるんや?……」。

なのは達は困惑した。何故ならそこは先ほどまでいた一護の部屋ではなく、少し広めで洋風な装飾が施されたホールのような場所だっ

たのだから。

リクオ「これが結標さんの能力、“ムーブポイント座標移動”、簡単に言うと物体を指定した場所に瞬間移動させる能力だよ。」

はやて「瞬間移動なんて……そんなことが有り得るんか……。」

???「それを可能にする人間がいるのが、ここ“学園都市”なんです。」

突如聞こえてきた声に驚き振り向くと、そこには一護達と同じくらいの年でベージュのスーツを着こなしている爽やかそうな少年がいた。

リクオ「久しぶりだね、海原君。」

海原「そうですね、奴良君。黒崎君もお久しぶりです。」

一護「お前、相変わらずその顔なんだな。」

海原「ええ。この顔は結構気に入っていますから。おっと、そうい

えはまだそちらの3人に自己紹介をしていませんでしたね。初めまして、僕は海原光貴と言います。まあ黒崎君達の知り合いとも思っ
ておいて下さい。」

なのは「あ、あの、私は……」

海原「ああ、あなた方の名前は既に知ってますよ。高町なのはさん、
フェイト・T・ハラウンさん、八神はやてさん。」

フェイト「え？ どうして？……」

海原「ああ、土御門から聞いていますから。彼と僕、そしてそこに
いる結標さんとは一種のビジネス仲間のような者でしてね。」

はやて「そ、そうなんか……」

なのは達は思った。“この人とはなんか話しづらい”と…………。

結標「さて、紹介も済んだんだからさっさとあの人のところに案内
した方がいいんじゃないかしら？」

海原「そうですね。では皆さん、僕に付いてきて下さい。」

そう言つて海原が行こうとした時、なのはが気付いた。

なのは「ねえ、当麻君は？」

フェイト「あれ？ いない？」

はやて「何やて！？」

一護「ああ、別に気にしなくていいぞ。」

なのは「？ どうして？」

リクオ「いや、当麻は無理なんだよ。」

フェイト「何が？」

一護「あいつにはムーヴポイントが…というか能力自体が効かないんだよ。」

はやて「な！？　じゃあ１人だけ置いてきばりにしてきたんかいな！？」

海原「大丈夫ですよ。しばらくすれば彼も着くでしょうから。ではこちらへ。」

そう言つて海原は先導し始め、一護やリクオ、結標もそれに付いていく。なのはやフェイト、はやてはイマイチ納得のいかないまま、それに付いていった。長い廊下に出てひたすら進んでいくと、突き当たりに立派な両扉があつた。

コンコンッ

????「どうぞ。」

海原「失礼します。」

海原がドアをノックすると中から年配の女性の声が聞こえてきた。そして許しを受け、海原がドアを開け中に入り、それに一護達も続いて入っていく。

海原「上条君以外の５人を連れてきました。」

「???」「ご苦労様でした。結標さん、海原君。」

100人は入れるのではないかというほどの広い部屋にある高級そうな執務机には1人の、見た目どこにでもいそうな初老の女性が座っていた。すると、

「???」「久しぶりですね。黒崎一護君、奴良リクオ君。」

一護「あんたも相変わらずみたいだな。」

「???」「あなた達も元気そうですね。それと進級おめでとうございます。もう高校2年でしたか?」

リクオ「はい。まあ、当麻は進級できるか微妙でしたけど、何とか進級できました。」

「???」「ふふ、彼らしいですね……。さて、その上条当麻君はいませんが話を始めても大丈夫でしょう。その前にそこにいるあなた方3人に自己紹介をしなければなりませんね……。」

すると、初老の女性はなのは達の方を見た。そして……

???「初めまして、高町なのはさん、フェイト・T・ハラオウンさん、八神はやてさん。私は学園都市を統括する最高機関“統括理事会”の理事長を務めている親船最中おやふねもなかといします。」

END

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（後書き）

どうも、黒狼です。

とりあえずすみません！ 話が全然進みませんでした。前半部分に力過ぎすぎた結果です。本当はさっさと話を進めたかったんですが、そうするとシリアスのみになってしまいそうで……。一応これギャグ&ほのぼのがメインと謳ってるのでそれはまずいと思って書いたのですが、グダグダに拍車がかかりました、はい……………。

さて今回はまさかのグループのお二方を出しました。海原はどうしようかと思ったんですけど、出さないのもかわいそうだなと思って出演させました。あ、あの白い人は当然いずれ出ますよ。禁書目録であの人が出ないとか無いですからね。

そして“あの人”の正体は統括理事会きつての善人、親船最中さんでした。あと理事長が親船さんということで気付いた方も多いと思います。アレイスターさんは出ない方向で行くと思います。アレイスターさんが理事長だとキャラ崩壊でもさせない限り、なんかシリアス方面にしか行かなそうなので……。

めちゃくちゃ長くなってしまいました。すみません。

ではまた次回！

体の変化なんて意外と気付かない！！（前書き）

投稿するたびにグダグダが加速していつてる気がしてきた……。

今回でようやくシリアスモードが終わります！！ 文章は短めです！

ではスタート！！

体の变化なんて意外と気付かない！！

親船「さて、自己紹介も済みましたしそろそろ……」

結標「ちょっといいかしら？」

親船「あら、どうしましたか？ 結標さん。」

結標「実はこの3人、学園都市について全くと言っていいほど知らないのよ。もうとっくに話してあると思っていたのだけれど……」

結標はそう言いながら一護とリクオを見る。

リクオ「す、すみません……。」

一護「だから、学園都市について説明する余裕なんてなかったんだし、第一俺達とはとかく、本人達がかなり困惑してたんだしよ……。」

親船「まあ、この街について話すのは少々骨が折れますからね。なら、私が説明しましょう。」

そして親船はなのは達にこの街について話しだす。

親船「ここ学園都市は高度な教育と研究を目的として日本政府に設立された特別行政区です。そのためこの街の人口約230万人のうち7割の160万人が学生です。つまりこの街は学生によって成り立っていると言っても過言ではないのです。」

フェイト「人口の7割が学生って……」

はやて「なんちゅう街や……」

親船「ですがこの学園都市設立にはもう1つの目的があります。」

なのは「もう1つの…目的? ……」

親船「それは、特殊な能力を持った子供達の保護です。」

なのは・フエイト・はやて「っ! ?」

親船「ありえない力を持った人というのは少なくない。それはあなた達3人にも言えるでしょう?」

なのは達は押し黙るしかなかった。実際に自分たちは他人から見ればあり得ない力を持ってしまっているのだから……。

親船「そういった子供達を受け入れ社会に適應できるようにすること、ここ学園都市設立の大きな理由です。そしてその一環としてそういった特別な生徒と普通の生徒を混合で編成している特別学校があります。それが……………」

「自由学園……………ここ学園都市で最も有名な学校で、俺達の通ってい

る場所だ。」

なのは達が突如聞こえてきた声の方を見ると……

なのは、フェイト、はやて「当麻（君）……！」

入り口に当麻が立っていた。

親船「お久しぶりですね、上条当麻君。」

当麻「あんたもな、親船さん。」

海原「久しぶりですね、上条さん。」

上条「海原か。そうだな、ここに来たのも大分前だったし……」

と、ううで、

親船「さてと……では彼も来たことですし、本題を話すとしまじょうか。」

親船が改まった様子で話し始めた。そして……

親船「高町なのはさん、フェイト・テストロッサ・ハラOWNさん、八神はやてさん。あなた方3人には高校生として上条君達と共に自由学園に通ってもらいます。」

なのは・フェイト・はやて「……え？……」

突然のことになのは達は困惑する。

なのは「私達が……高校に？」

フェイト「でも私達もう高校生の年じゃ……」

リクオ「そういえば、なのは達って年いくつなの？」

はやて「え？ 19やけど。」

一護「………は？」

当麻「マジでせうか？……」

はやて「な、なんや？ そんなに意外やったんか？」

一護「いや、だつてよ……」

リクオ「はやて達見た目150cmありか無いかくらいだから僕達

より年下か、せいぜい同年くらいだと思ってたんだけど……。」

なのは、フェイト、はやて「え?……………」

リクオの言葉を聞いてなのは達はきよとした表情になった。するとはやてが何かに気付き、

はやて「っ!　なのはちゃん、フェイトちゃん、ちょっと失礼するで!」

ムニツ、ムニツ

なのは・フェイト

「ふえ//////////!」

なのはとフェイトの胸を揉み始めた。突然のはやての行動になのはとフェイトは顔を真っ赤にして狼狽えてしまい、当麻や一護、リクオも目の前の光景を見て顔を赤くし、無意識で後ろを向いた。する

とはやては揉むのを止め、

はやて「小さなってる…………。」

なのは・フェイト

「え?…………」

二人ははやての言っていることの意味がわからず首を傾げる。

はやて「良く聞いてや、二人共。私ら恐らく、体が少し退化しとる。それも多分2年前、つまり17の時の身体になつとるで。」

なのは「…………身体が縮んでるってこと?」

はやて「せや。」

フェイト「た、確かなんか体にどこか違和感を感じるような気がしたけど……………」

と、こじで、

結標「それはちょうどいいんじゃないかしら。」

なのは・フェイト・はやて「え？……………」

結標の言葉になのは達はきよとんとする。

親船「そうですね。肉体年齢が一緒なら信用度も上がりますし……」

なのは「あの、一体どういうことですか？」

親船「戸籍ですよ。あなた方3人がこの世界の人間でない以上、戸

籍を偽るしかない。あなた方が肉体的に高校2年生の体と同じならば、その戸籍の信用度も上がるという意味です。まあ、身体の成長は人それぞれですからそれほど重要ではないでしょうが……」

フェイト「で、でもそれって犯罪じゃ……」

親船「あら？　それがどうしたんです？」

フェイト「え……」

親船「あなた方がこの街で生きていくにはその方法しかないんですよ？　それをわかっていて上条君達は私に頼んできたのですから……それともあなたは彼らの勇気ある好意を無駄にするとでも？」

フェイト「そ、それは……」

と、そこに、

一護「フェイト。」

フェイト「一護……………」

一護がフェイトに語り掛ける。

一護「俺達だつてこれが犯罪であることくらい十分わかつてる。けどよ、それで誰かを救えるのなら俺は喜んで破るぜ。誰かを救えない方が俺にはよっぽど辛いから……………」

一護の切実な思いにフェイトの目が潤む。

フェイト「ありがとう……………一護……………」

親船「黒崎君の言う通りですよ。それにあなた達、高校には通っていただんですか？」

なのは「あ、いえ、私達中卒なので……」

親船「なら、尚更通うべきですね。高校生活は最も青春を送れる時ですよ。それにあなた方も女性なのですから、恋愛の1つや2つはしておくべきなのでは？」

なのは・フエイト・はやて「えっ！？／／／／／／／／／／」

親船の思わぬ一言になのは達は赤面する。そして3人を見て、

親船「おやまあ、どうやらいらぬお世話だったようですな。まあ、いいでしょう。とにかく編入は明後日月曜日。学校側にはすでに話を通してありますから心配はいりませんよ。」

はやて「え、ええと、ホンマすみません。えらい迷惑かけてしもうて……。」

親船「別に謝らなくても構いませんよ。私は元々子供を守るためにこの椅子に座っているのですし、何より上条君達には大きな借りがありますからこのくらいのことには協力しますよ。」

その後、当麻と一護、リクオ達3人は親船さんと話があると言ったため、なのは達は結標や海原と共に先に部屋を出ていった。そしてしばらくの間沈黙が続くと、当麻が口を開いた。

当麻「悪いな、親船さん。この世界にいない人間の戸籍を作るなんて、そう簡単なことじゃないだろ？」

親船「まあ、そうですね。ですがあなた方3人には返しきれない恩がありますから……私にとっても……この学園都市にとっても……」。この1年間は、あなた達にとって退屈でしたか？」

一護「退屈か……退屈なんかしないっすよ……。むしろこうあるべきだったんだ、あの時も……。」

リクオ「確かに今までの経験は僕達にとっては大事なことです。でも同時に失ったものもたくさんありました……二度と戻らないもの

も……たくさん……。」

親船「……あなた方が高町さん達にここまでするのは過去の出来事ゆえ……ですか？……」

一護「……あいつらがここに来た経緯……土御門から聞いてんだろ？」

親船「……ええ……世界の闇というのは深いものです……かつてのこの街のように……。あの子達はその世界で生きていくにはあまりにも純粹過ぎたのでしょう。だから切り捨てられてしまった……。この世界もあまり変わりはありませんよ……その中であの子達が生きていけると思えますか？」

親船が当麻達に尋ねると当麻は笑みを浮かべ、

当麻「この世界があいつらを切り捨てようとした時は、俺達が最後まであいつらに付き合うよ。約束もしちまったしな……。それにこの街には良い人も多い。あんたも含めてな……」

親船「……私は善人などではないですよ？ 彼女達にも監視と調査が行わざるを得ませんし、場合によってはあなた方と対立する可能性も否定できません。」

一護「あの時理事会の中で最後までこの街に齒向かい続けたあんたが善人じゃなかったら、世の中のお偉いさんは皆悪人だよ。」

リクオ「それに監視と調査だけで済ませてくれてる時点で十分です。仮にもし親船さんが僕達と対立したとしても、その時は余程の理由があると思えないですしね……。」

親船「……はあ……あなた方のお人好しはいつも私の想像を遥かに凌駕しますね。まあ、だからこそ救世主となり得たのでしょうか……。」

当麻「救世主なんて言葉、俺達に似合わねえよ。俺たちはただの高校生……それで十分だ。じゃあな、親船さん。」

そして当麻達は部屋を後にした……。部屋にいるのは親船最中、た

だ1人である。

親船「……謙遜する必要などないのですけどね。あなた方がこの街を……いえ、この世界を救ったのは事実なのですから……。しかし、彼らはどうやら人からの好意には疎いようですね。少し意外でした……。」

親船は1人そんなことを呟いていた。ちなみにその後すぐ、部屋を出た当麻達がくしゃみをしたのは言うまでもない……。

END

体の变化なんて意外と気付かない！！（後書き）

どうも、黒狼です！

シリアス編をようやく終わらせました！

まあ、このままグダグダのシリアスを続けるよりもキャラを増やしてサッツと学園編に入って、ギャグでグダグダしてた方がいいと思っただけなんです……。

それにしても親船さんをものすごく善人っぽくかいてしまったのですが、親船さんはあくまでも統括理事会の中での善人でしたから一般的に見るとどの程度の善人なのかわからないんですよ。原作でもかなりの策略家だったようです……。 ひょっとしたらいずれその一面が現れるかもしれません。

次回からようやくキャラが多数出せそうです！ 何のアニメのどのキャラが出るかは楽しみに！！

ではまた！！

主人公・ヒロイン紹介&設定集（ネタバレ注意！！）（前書き）

小説のキーワードに“最強チート化”って書きましたけど今のところはそこまでチート化されてませんが、はつきり言って色々大きく変わってます。特に上条さんと一護が……………。

あと設定もオリジナルですが「何だこれは？」と思うところがあったり矛盾していたりするところがあるかもしれないのでご容赦下さい。

主人公・ヒロイン紹介&設定集（ネタバレ注意！！）

主人公

上条当麻

身長 172

能力 幻想殺し

???

出演作品

とある魔術の禁書目録

V 阿部敦

（バクマンの真城最高、BLOOD Cの鞘総逸樹 etc）

本作の主人公No.1。自由学園高等部2年生。黒髪ツンツン頭が最大の特徴で、自身の能力“幻想殺し”のせいで毎度不幸な目にあ

っていたり、恋愛に関しては鈍感だったりなど原作通りの人物像である。

ただ学校でのテストの成績自体は中の下とそこまで悪くはないのだが、不幸で課題を提出できなくて補習をしよっちゅう受けさせられたり、友人達とばかり騒ぎすることが多いためお馴染み“3バカデルタフォース”のリーダー角となっている。その一方で小中高の生徒に幅広く知られていて、ある意味皆から慕われている（主に不幸の避雷針としてだが……）。

学園都市には小学生の時から住んでいる。一護やリクオとは中部で知り合いその頃から寮の部屋も隣であるため、今ではお互いのこともよくわかるほどの大親友である。

原作ではスキルアウト（無能力の不良）2、3人相手なら勝てる程度の喧嘩の強さだったが、現在では2、30人相手でも1人で勝てるほどの強さになっている。

能力はあらゆる異能を打ち消す“幻想殺し（イマジンプレイカー）”。だが右手にしかその効果はなく、自分の意志に関係なく壊してしまうため万能とはいえない。隠された力があるらしいがそれはまだ不明。

ライオット・ジャッジメント

高校に入ってすぐ特別風紀委員になり銃刀携帯特別免許を取得しているため、常に懐に“スタームルガー・スーパードラックホーク”を改造した愛銃“スタームルガー・ブラックホーク0”を携帯している。その銃の腕前は米軍の特殊部隊も真つ青になるほどらしいのだが、一体どんな風にして鍛えたのかは謎。本人曰く“この世とあの世の区別がつかなくなるほどキツかった”そうだ。

身長 181

能力 死神化

???

出演作品 Bleach

V 森田一成

(ガンダムSEEDdestinyのアウル・ニード、ONEPIECEの不死鳥のマルコ、戦国SRの前田慶次etc.)

本作の主人公No.2。自由学園高等部2年。容姿は死神代行消失編の姿をイメージ。オレンジ色の髪は生まれつきの物である。

性格は見た目とは真逆で困ってる人を放っておけない優しい性格である。だが恋愛に関しては疎い。

成績もかなり優秀で学年順位もトップ10に入るほど。加えて運動神経も抜群に良いが帰宅部であるため様々な部活から助っ人として勧誘されることが多いため学園内ではとても慕われている。また

その容姿から不良に絡まれることが多いため、喧嘩は滅法強く当麻よりも上である。

特異能力はもちろん死神化で、それによって出現する斬魄刀は“斬月”。だが原作と違い靈魂の管理や虚^{ホロウ}の駆除といったことはしない。そのため一護はA級霊体でもないし幽霊も見えたりしない。そもそも死神という存在は無く、あくまで能力を発動した姿のことを“死神”と呼んでいる（詳しい説明はまた別の機会で書きます！すみません！）

当然卍解や虚化も会得している。また原作では一護は細かい霊子操作が苦手で鬼道の才能は皆無だったが、こちらでは努力の末、80番代までの鬼道を扱えるようになった他、最近では独自の鬼道も編み出すようになっていく。また苦手ではあるが治療系の鬼道も使える。（ちなみになのは達の怪我は一護の鬼道で治してます。）

学園都市に來たのは中学の時で、その後すぐ特別風紀委員となっている。

実は学生以外にももう1つの顔があるらしく、当麻とリクオ他、数人の人間がその事実を知っている。

奴良リクオ

身長 176

能力 魑魅魍魎

(夜リク才化)

???

出演作品

ぬらりひよんの孫

V 福山潤

(コードギアスのルルーシュ・ランペルージ、武装錬金の武藤カズキ、青のエクソシストの奥村雪男、マクロスFのルカ・アンジェロ
I n e t c .)

主人公No.3。自由学園高等部2年。茶色い髪に丸メガネが特徴で、性格は非常に温厚で誰にでも優しく接する。学校での成績は学年でベスト3を争うほど高い上に、運動神経も一護並みの良さである。加えて中高両方で副生徒会長を歴任していたため学園での知名度は1、2を争うほど高くその人柄と合わせてとても慕われている。

性格上争いを全くしないが、本気でキレた時には当麻や一護も上回るほど喧嘩が強くそして怖い。

能力は魑魅魍魎、つまり原作の夜リク才化であるがここでは自分の意志で昼夜関係なく姿を変えることができる。また原作同様夜リ

クオオの記憶はきちんと残っている。夜リクオの性格は原作通り大胆かつ荒々しく、口調も変わる。ちなみに姿がどちらでも恋愛に関しては物凄く疎い。

一護同様、中学の時に学園都市に来てすぐ特別風紀委員となり銃刀携帯特別免許を取得しているため、背中に長ドスを隠し持つっており、その腕前は達人クラスである。

もう一つの顔は大妖怪“ぬらりひょん”の孫で妖怪と人間のクオオター、そして妖怪任侠一家“奴良組”の若頭である。このことを知ってるのは当麻や一護を始め極一部の人間しか知らない。

本作において原作と最も容姿が変わっているキャラである。ちなみに原作当時は中学一年で身長も148しかなかったが、現在ではかなり大人びている。

ヒロイン

高町なのは

年齢 19 17

身長 158 148

出演作品

魔法少女リリカルなのは

V 田村ゆかり

(シーキューブのフィア・インキューブ、ひぐらしのなく頃にの古手梨花、銀魂の花野アナ e t c .)

ヒロインNo.1。平行世界から飛ばされた少女の1人で、栗色髪のポニーテールが特徴。元いた世界で殺されかけていた時に謎の現象で学園都市に飛ばされ、傷だらけで倒れていたところを当麻達に助けられた。そして統括理事長の親船の計らいで自由学園高等部2年として通うこととなった。

性格は原作同様謙虚で明るく誰にでも優しいが、一度怒りに触れると白き魔王が降臨する……。また勉強は相変わらず理数系が得意で文系が微妙。そして運動神経もある程度向上しているとはいえやはり体育は苦手である。

初日の夜の一件から当麻に対して好意を抱いている。

能力はもちろんレイジングハートを用いた中遠距離魔法であり、破壊力は全能力の中でもトップクラスである。

フェイト・T・ハラオウン
デスタロツサ

年齢 19 17

身長 163 153

出演作品 魔法少女リリカルなのは

V 水樹奈々

(NARUTOの日向ヒナタ、テイルズオブシンフォニアのコレット・ブルーネル、DOGDAYSのリコッタ・エルマール etc.)

ヒロインNo.2。平行世界から飛ばされた少女の1人。金色の長

い髪と赤い瞳が特徴。なのは同様傷だらけで倒れていたところを護達に助けられ親船の計らいで自由学園高等部2年として通うことになった。

性格は穏やかで誰に対しても優しく接するが少々天然だったり世話焼きなところもある。なのははやてとは10年来の親友でとても大切に思っている。

勉強はなのは同様理数系が得意だが文系もそこそこ高く英語はできる。また運動神経もかなり良い。

初日の夜のことから一護に対して好意を抱いている。

能力はインテリジェントデバイス“バルディッシュ”を用いた近中距離魔法。スピードに関してはトップクラスの速さを持つ。

八神はやて

年齢 19 17

身長 150 145

出演作品 魔法少女リリカルなのは

V 植田佳奈

(F a t e . s t a y n i g h t の遠坂凜、咲の宮永咲、テイルズ
オブグレイセスのパスカルなど e t c .)

平行世界から飛ばされた少女の1人。茶髪のショートカットと柔らかい関西弁が特徴。なのはやフェイト同様傷だらけで倒れていたところをリクオ達に助けられ、親船の計らいで自由学園高等部2年として通うことになった。

前向きで優しい性格だが、元いた世界での境遇や立場から辛いことなどを1人で抱え込むことがある(なのはやフェイトもそこまでではないがある)。

勉強はなのはやフェイトとは違い全教科において高得点を獲る。

だが幼い頃足が不自由であったため体育はあまり得意ではない様子。

初日の夜のことからリクオに対して好意を抱いている。

能力はストレージデバイス“シュベルトクロイツ”と魔導書型デバイス“夜天の魔導書”を用いた遠距離魔法。前線で戦うより後方で支援砲撃をするのを得意としているので単独戦闘は不得手のようだが、それでも戦闘力は十分高い。

設定

学園都市

日本政府によって設立された教育研究機関。特別行政自治区に指定され、東京、埼玉、山梨の3県にまたがっている上に面積は東京の3分の1ほどもある。また科学技術に関しては世界一と言っても過言ではないなど、あらゆる点において“とある魔術の禁書目録”の学園都市と類似しているが決定的な違いとして超能力研究は行っていない。また人口の約七割が学生であるため都市内には多数の学校がある。

特別風紀委員

(ライオット・ジャッジメント)

名称に“特別”とあるが実質有事の際に動く臨時の風紀委員。ジャッジメント普通の風紀委員のように各支部に別れていたりするわけでもなく、付近で事件が起こった際に風紀委員の協力をしたり、時に単独で対処に

当たったりすることもある。だが臨時とはいえ各支部の管轄問題などを抱える風紀委員よりも応用が利くため、資格を取得するのは風紀委員と同じかそれ以上に難しいらしい。また風紀委員と同様に高能力者である人間が多い。

銃刀携帯特別免許

警察庁公認の学園都市内にのみ有効な免許。この資格を持つ人間は学園都市内での銃火器や刀剣などを常時携帯が認められる。資格保有者は風紀委員や特別風紀委員、そして警備員アンチスキルに所属している人間が大概だが、中には統括理事長の親船の承認の下この資格を保有している人間も少なくない。またこれはあくまでも“物体としての銃刀”の所持を規制するものであり、斬魄刀などの能力によって現れる武器類は対象外とされているため、この免許の存在は度々疑問視されている。

主人公・ヒロイン紹介&設定集（ネタバレ注意！！）（後書き）

どうも！ 黒狼です！

主人公とヒロイン紹介&設定集を載せました。

ですが色々と無理があると自分でも思いながら書いてました。上条さんが拳銃使ったり一護が鬼道を使えたりなんて想像付かないですよね？ 原作を愚弄してとも言わざるを得ませんが、とりあえずこれから先はキャラ崩壊だけはなるべく避けたいと思いました。特に女子の！ これから先当然女子キャラ増えますからそれだけは何としてもキャラを守っていこうと思います！

さて、なのは達を退化させたのですが「何でなのはとフェイトは10センチも縮んでいるのにはやては何故5センチしか縮んでないの？」という疑問を持った人もいるでしょう。結論から言って「はやての身長そこまで縮めたら小学生になっちまうじゃねーか！」と思ったので5センチに自重しました。まあ十分低いんですけどね。考えてみたら10センチも縮めた意味あったのか？

長文になってしまいました。すみません！

今度こそ次回から多数キャラを出演させるつもりです！ ではま

た
！

普通の人間なんて世の中早々いません!! (前書き)

はい、今回からほのぼのとした話に……なってると思います。多分……。

あと後書きでの予告通り新キャラも数名出ます!! でも出すので
精一杯だったため、やっぱりグダグダです!

そして今回から & Dを以下に変えます!!

“ Z ” } S D }

(Bleach今期 テーマ)

D “ 星空のスピカ ” } 田村ゆかり }

ikers D1) (リリカルなのはstr

では、本編をどうぞ!!

普通の人間なんて世の中早々いません!!

学園都市統括理事会理事長の親船最中との謁見から1日が過ぎ、今日は日曜日。学校は明日からであるため、今日は一体どうしようかと悩みながら当麻、一護、リクオ、なのは、フェイト、はやてはリクオの部屋で朝ごはんを食べていた。すると、

はやて「なあ、リクオ君。」

リクオ「どうしたの？ はやて。」

はやて「バイトできる場所あらへん？」

リクオ「？ バイト？ うーん……」

はやてが突如そんな話を持ち出してきた。リクオは思わぬ質問に言

葉をつまらせる。

リクオ「僕達も最近までやってただけど、学園都市って学生が多いから当然バイトをしようとする人も多くて、最近中々募集してる場所少ないんだよね。当麻や一護はどこか知らない？」

当麻「いや、思いつかないな。」

一護「俺もだな。でもどうしたんだよ？ いきなりバイトしたいだなんて……」

一護がもつともな疑問を投げ掛けた。

はやて「だって私らここに泊めさせてもらってる身やで？ それなのに何もしいなんてありえへんやろ？」

フェイト「だからどこかのアルバイトでお金を稼いでせめて衣食くらいは自分で調達しないと……」

なのは「自分のことは自分で何とかしなきゃね。」

実は当麻がなのは達の住む部屋について学園都市の諸事情に詳しい土御門に連絡してみると、近年の学園都市の学生の増加によって部屋がどこも満室だからしばらくは当麻達の部屋に泊めてやってくれと言われたのだ。さすがに世話になってばかりではいけないとなのは達は感じ、幸い戸籍はもう登録済みであるため今からバイトをして当麻達に負担をかけないようにしようと決めていたのだ。するとそんななのは達の答えを聞いた当麻は、

当麻「うつ……グスッ……」

なのは「と、当麻君！？ 何で泣いてるの！？」

当麻が大粒の涙を流しながら泣き始め、なのはがあまりのことに狼狽える。

当麻「か、上条さんは……あなた達の心構えを聞いて……グスッ……」

感動したのでありますよ……。」

なのは「え?……」

なのは思わず首を傾げる。すると一護とリクオが説明し始めた。

リクオ「ええと、実はね……中学の頃当麻の部屋に居候がいたんだけど……」

一護「そいつが家事スキル0で大食いのグータラシスターだったんだよ。」

リクオ「でも全然悪い子じゃなかったし、僕達も何度もお世話になってたから追い出すなんてこともできるはずなかったから……」

一護「で、当麻はそいつの面倒を見ていたから、その費用で毎月の仕送りが半月残して尽きたことも何度もあったからな……」

それを聞いたなのは達3人は理解した。当麻はものすごく苦勞してきたんだなぁと……。すると一護があることを思いついた。

一護「なあ、それならバイト探しのついでになのは達に街を案内してやんねえか？」

リクオ「あ、そうだね。ここで暮らしていくなら街のことを知らない。はやて達もそれでいいかな？」

はやて「も、もちろんやけど…ええんか？ リクオ君達にも予定があるんじゃない？」

一護「心配すんな。元々何も予定がなかったから、むしろ丁度いいさ。当麻も行くだろ？」

当麻「当たり前だ！　なのは達のバイト先を絶対に見つけてやるぜ！」

こうして当麻達はなのは達のバイト探しと街案内をすることになったのだった……。

A 10:30

学園都市内にある公園は今日が日曜ということもあって多くの人で賑わっていた。そんな中、人々の視線が一点に向けられる。その先にいたのは……

なのは「な、なんか私たち、皆から見られてないかな？」

フェイト「そ、そうだね。ちょっと落ち着かないかも。」

はやて「私ら、何か変なところでもあるんかいな？」

一護「……自覚なしだよ……。」

リクオ「あはは……。」

首を傾げるなのは達を見て一護は若干呆れ、リクオは苦笑いを浮かべた。周りから見て、なのは達はどうか考えても遜色ない容姿を持った美少女である。そんな女子が3人も、しかも男子達と歩いていれば目を引くのは当然なのだ。まあもつとも、一護やリクオもカッコいい部類に入る人間であり当麻も悪い方ではないのでそつちも人目を引く要因の1つなのだが……。と、ここでののはが、

なのは「そういえば当麻君。自由学園に通ってるってことは当麻君達も何か不思議な力を持つてるの？」

当麻「ん？ ああ。俺達もいわゆる特異能力者だからな。」

リクオ「はやては一度僕的能力を見てるよね？」

はやて「え？ あ、あれかいな。あの時はホンマにビックリしたわ
……。」

当麻「リクオ、なのはとフェイトにも一回あの姿を見せた方が良く
んじゃないか？ じゃないと混乱するだろ？」

なのは・フェイト
「え？」

リクオ「あ、そうだね。」

リクオはそう言うと言を閉じて集中し始めた。すると周りから煙が
立ちこめリクオの姿を隠した。その光景に周りの人間も驚く。そし
てそこから現れたのは……

なのは・フェイト
「……………誰？……………」

はやて「リクオ君や。」

夜リクオ「よう。この姿でお前らに会うのは初めてだな。」

フェイト「えっ！？ 本当にリクオなの！？」

なのは「ふええええ！？ だ、だって全然姿も喋り方も違うし！
ふええええ！？」

当麻「お、落ち着け、なのは、フェイト！ これはな……」

そして当麻はリクオの能力“魑魅魍魎”について説明した。

なのは「夜のリクオ君……」

フェイト「姿がまるつきり変わるなんて凄いね。」

夜リクオ「まあ最初は戸惑ったけどよ。もう慣れたぜ、この姿にも……って、おい、はやて。なに人の顔見ながらボーッとしてんだ？」

はやて「ふえ／＼／＼／＼！？　な、なんでもないで／＼／＼！」

はやては頬を赤くしながらリクオにそう答えた。

リクオ「つか俺なんかよりも当麻と一護の能力の方がよっぽとも変わってる気がするけどな。」

と、その時、

フェイト「ねえ、あの人だからはなんだろう？」

当麻達がフェイトの指差した方を見ると、

不良 「ねえ、君、可愛いね。」

不良 「日曜なのに制服着てるんだね？ 気に入ってるの？」

不良 「今から俺たちと遊びに行かない？ まあいつ帰れるかはわかんないけどね。ヒヤハハハッ！」

見るからに不良ですと言ってるような男数人と……

「……」

何も言わずただ黙っている短い茶髪の少女がいた。

なのは「あ、あれって女の子が不良の人達に絡まれてるよね!？」

はやて「あかん！ 早く助けへんと！」

そう言うてはやてがそこに近づこうとするが、

一護「ああ……やめといた方がいいぞ、はやて。」

はやて「な、なんで止めるんや！？ 一護君！ 女の子1人にあんな大勢で囲んでるなんてヤバイやろ！！」

一護「あれが普通の女の子だったらな……。」

一護は冷や汗をかきながらそう言った。すると、

バリバリバリバリッ！！！！

不良一同「ギャアアアアアッ！！！！！！」

突如不良達を凄まじい電撃が襲い黒焦げにした。

「……はぁ……本当にどうしてこういうバカは消えないのかしら……。」

そしてその中心にいた少女は何事もなかったかのようにその場に立っている。その少女は上は肌色の長袖のブレザー、下はグレーのプリーツスカートの制服を着ている。そしてその少女を見た当麻が口を開いた。

当麻「み、御坂……。」

「……あ、あんたなんでここに！？」

当麻「……はぁ……不幸だ……。」

なのは「えっと、この子は当麻君達の知り合いなの？」

一護「あ、ああ……。こいつは御坂美琴。自由学園高等部1年で俺達の後輩だ。」

リクオ「久しぶり、御坂さん。」

リクオさん……。いつの間に元の姿に戻ったんですか……。

美琴「ああ、あんた達も一緒なのね……。って、そっちの3人は誰よ？」

美琴はなのは達の存在に気付くとそう尋ねる。

一護「ああ、こいつらは明日から俺らの同級生になる奴だ。」

なのは「あ、私は高町なのはっていうの。よろしくね！ 美琴ちゃん！」

フェイト「私はフェイト・テストロッサ・ハラウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

美琴「あ、ど、どうも。御坂美琴です／＼／＼／＼。」

一護の“同級生”という言葉から自分の先輩になる人物であることを悟り、さらに初対面にも関わらずいきなり“ちゃん”付けで呼ばれたため、美琴はやや恥ずかしそうに挨拶した。

当麻「にしてもお前これ……やりすぎじゃねーのか？」

美琴の周りには依然として不良だったものが黒焦げで倒れていた。中には漫画の如くアフロヘアーになっている者もいる……。

美琴「こつちに非があるんだから自業自得でしょ？」

高々10万ボルトだから気絶と少しの火傷くらいよ。」

当麻「いや、一般人相手にそれは十分やりすぎだろ!？」

と、ここでフェイトが口を開く。

フェイト「あの、ひょっとして美琴も何か力を持つてるの?」

リクオ「うん、そうだよ。御坂さんは“電撃使い（エレクトロマスター）”。つまり電気を操る超能力者だよ。」

はやて「ちょ、超能力ってあの超能力かいな!？」

元いた世界では超能力なんてものは都市伝説の類いだと思っていた
はやて達は目の前にいる本物に驚く。まあ、彼女達はそれ以上にあ
り得ない魔法なんて物に出会っているのだから驚く必要はないと思
うが……。と、その時、

ヒュンッ

????「お姉さま !!!」

突如美琴の後ろから大声が聞こえたかと思うと、その声の主が美琴
の胸を掴もうとして、

ドゴンッ

????「ゴフッ!？」

美琴の肘打ちを鳩尾にもろに受け蹲った。それはやや赤に近い茶色
の髪をツインテールに結っている少女だった。そして美琴はやや呆

れ気味に声を掛ける。

美琴「あんたは何をやってんのよ？ 黒子。」

黒子「ひ、酷いですわ、お姉さま。私はただちょっとしたスキンシップを……」

美琴「胸を揉もうとすることがスキンシップな訳ないでしょ！？ 立派なセクハラよ！！ 大体知り合いがいるのにやるな！！」

黒子「知り合い？」

黒子と呼ばれた少女が周りを見ると当麻達に気付き、

黒子「ああ …… 何故こんなところに腐れ類人猿がいるんですの ……」

当麻に対してそう言い放った。その様子を見たのはが尋ねる。

なのは「こ、この子は美琴ちゃんの知り合い？」

美琴「ああ、えっと、この子は白井黒子って言って私のクラスメイトで……」

当麻・一護「御坂を追い回す変態だ。」

黒子「失礼ですわね。私はただお姉さまを愛しているだけでお姉さまに近づく野蛮な男達を排除しているだけですわ。」

なのは達は思った。それは十分変態に値しているのではないか？……と。すると黒子達がなのは達3人に気付いた。

黒子「あら？　そういえばそちらの方々は初めて見ますわね？」

なのは「あ、私は高町なのはっていうの。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな!」

リクオ「はやて達明日からうちの高等部2年に転入するんだ。」

黒子「あら、では先輩ということですね。私は高等部1年でお姉さまのクラスメイトの白井黒子と申しますの。ぜひお姉さまとは仲良くしてあげて下さいですの。」

美琴「あんたは私のお母さんか!!」

黒子の最後の言葉に美琴が突っ込む。だが黒子は頭の中でこんなことを考えていた。

黒子（この御三方が彼らとくつついてくれればお姉さまへの毒牙も減りますわ。そうすれば私とお姉さまの仲は安泰、グフフフツ……）

そんなことを考えてる黒子の笑顔は実に腹黒く、当麻達は冷や汗をかいた。と、ここではやてが、

はやて「ところでさっき黒子ちゃん突然美琴ちゃんの後ろに現れたんやけど、ひよっとして黒子ちゃんも淡希ちゃんと同じ能力なんかないな？」

リクオ「あ、それは違うよ、はやて。結標さんの能力は“ムウポイント座標移動”
”テレポート空間移動”って言う別の能力なんだ。
まあ、同じ空間移動系の能力であるのには違いないけどね。」

一護「まあ、その能力のせいで御坂は苦勞してるみたいだけど……」

フェイト「え？ どうして？」

美琴「……いつもシャワーを浴びてる時に勝手に侵入して胸を揉んでくるんです……。」

それを聞いた瞬間、なのはとフェイトは思わずはやての方を見た。

はやて「な、何や2人とも？ 何で私の方を見るんや？」

なのは「ううん……何でもないよ、はやてちゃん……。」

フェイト「そうだよ、はやて。別に“はやてにそんな能力が無くて良かった”なんて思ってないよ。」

はやて「フェイトちゃん！？ 明らかに本音を口に出してるやないか！！ うええええん！ リクオ君！ 2人を私をいじめろー！！」

リクオ「ええええっ！？ ええと、ま、まあ落ち着いてよ、はやて。」

「

実ははやてがリクオに慰められてる光景がラブコメっぽいために周りの目を引いていたことを本人達は知らない……。と、ここでリクオが、

リクオ「あ、そうだ！　ねえ、御坂さん、白井さん。2人はどこかバイトのできる場所を知らない？」

美琴「バイト？　あんたバイトするの？」

一護「違えよ。バイト探してんのはなのは達の方だ。ちょっとした訳でな、金がいるらしいんだよ。」

一護は事情をぼやかしながら話した。まあ、ぼやかす理由など言わずもがなであるが……。

美琴「うーん、バイトか……。私は心当たらないわね。」

黒子「私もですわ。……って、あああああっ！！！」

当麻「うおっ！？　ど、どうしたんだよいきなり！？」

黒子「お姉さま！！　今日は寮監のルームチェックの日ですわ！！」

美琴「げっ！！　急いで帰ないと……………」

美琴・黒子「殺されるじゃない（殺されますわ）！！！」

そう言う2人の顔は命の危機に瀕してるかの如く真っ青だった。

美琴「悪いけどこれで失礼するわ！　あと力になれなくてごめんなさい！！　黒子行くわよ！！」

黒子「はいですよ!! では皆さん、これにて失礼しますわ!!」

そして美琴はなのは達に一礼して謝ると黒子と共に姿を消した。

フェイト「な、何かすごく焦ってたけど寮監のルームチェックってそんなに怖いのか?」

一護「あ、ああ。確かあいつらの泊まってる寮の寮監って特異能力者でも捻り潰すくらいの実力の持ち主らしいからな……。」

当麻「御坂でも勝てないらしい……。」

なのは「な、なんか凄く会いたくないの……。」

はやて「せ、せやね……。」

「護や当麻の言葉になのは達の顔も自然と青ざめる。

リクオ」でもこの後どうしようか？」

当麻「うーん……とりあえず中心街に行ってみようぜ。あっちなら店も一杯あるしな。」

という訳で当麻達は学園都市の中心街へ行くことにした。

第13学区　学園都市は全部で23の学区に別れている。その中でも第13学区は多くの店が立ち並ぶ商業区で、日曜ともなれば多くの学生が集まり買い物を楽しんでいる。まあ、雰囲気は東京の原宿などに近いだろう。

なのは「それにしても本当に学生の街なんだね。周りも皆私達と同じ年くらいの人ばかりだし。」

当麻「まあ人口の7割が学生だからな。大人はほとんど教師か研究者だし。」

と、ここでフェイトは一つ疑問を抱き、当麻達に尋ねる。

フェイト「ねえ、そういえばこっつて大人のほとんどが教師と研究者って言ったけど警察の人とかは？」

一護「ん？ 学園都市に警察官はいねえよ。」

なのは「……え？」

はやて「け、警察がおらんって……それじゃあ犯罪が起こつたらどうするんや!？」

リクオ「大丈夫だよ、はやて。学園都市に警察はいないけど、下手

をすれば警察よりも上の組織はあるよ。」

はやて「……警察よりも上の組織？……」

当麻「それが学生だけで構成されてる治安部隊“アンチスキル風紀委員”ジャッジメントと有志の教師達で構成された治安部隊“警備員”だ。」

フェイト「学生と教師で構成されてる部隊……」

リクオ「あ、さっき会った白井さんも風紀委員の1人だよ。」

なのは「ふえ！？黒子ちゃんか！？」

一護「あいつ犯罪者連中にはかなり恐れられてるからな……」

当麻「いや、でもあいつらよりはマシだろ……。」

はやて「？ 誰や？ あいつらって？」

一護「ああ、そいつらは……」

と、ここでのながあることに気付いた。

なのは「ねえ、当麻君。」

当麻「ん？ どうした？ なのは。」

なのは「あそこの銀行、なんで昼間なのにシャッターが閉まってるの？」

と、その時、

ドカアアアンッ！！！！

一同「っ！！！？？」

突如シャッターが吹っ飛んだかと思うと、

男「さっさとずらかるぞ！！」

煙の中から数人の覆面を被った男たちが現れた。

なのは「あれって！？」

フェイト「銀行強盗！！」

思わぬ事態になのはとフェイトは声を上げた。そしてその間にも覆面の男達は事前に用意されていたと思われるワゴン車に乗り込み、

猛スピードで発進した。

はやて「あかん！ 逃げられるで！！」

一護「ちっ！ しょうがねえな……」

当麻「待て！ 一護！」

なのは「当麻君！？ なんで止めるの！？」

当麻「前を見てみる……噂をすればなんとやらって奴だな。」

なのは達は当麻が見ている方を見ると、そこにはワゴン車の行く手を遮るかのように1人の少女が道の真ん中に立っていた。その少女は黒髪のロングヘアに巫女服と正に“大和撫子”という表現が似合う少女だった。だがその左手に持っているのは一本の刀である。

男 「何だあのガキは!？」

男 「知るかよ! 轢いちまえ!!」

男 たちは少女に構わずスピードを上げる。だが、

パンパンパンパンパンッ、ギギギギギギッ、

男 D 「な、何だ!？」

男 「タイヤが全部パンクしやがった!!」

男 F 「んなバカな!？ 同時にパンクなんて有り得るかよ!!」

車の中で男たちが混乱してる間にもワゴン車は激しい音をたてながら巫女服の少女に向っていく。すると少女は少し横に動き、接触するかしないかのギリギリの位置に立った。そしてワゴン車が勢いを

殺し切れずに少女のすぐ横を通過しようとした瞬間、

チャキツ、ヒュンツ、

それはまさに一瞬だった。刀に手を掛けたかと思うと、神速の速さで抜刀し振り抜いた。そして、

キンツ、ズバンツ……

鞘に収めた瞬間、ワゴン車の車体が前後真つ二つに両断された。

男 「なっ！？ 嘘だろ！？」

男 「くそっ！！ 車から降りて逃げるぞ！！」

男達は車を乗り捨て逃げようとするが、

「????」はいはい！ 残念だけどここから先は行き止まりだよ。
「

彼らの目の前にゆるいパーマのかかった金色の髪をツーサイドアップに結っている少女が立っていた。

男 「何だお前!?!」

男D「どけ!! でねえとこいつで吹っ飛ばすぞ!!!!」

男達は一斉に持っていた拳銃を目の前にいる少女に向け構える。だが、

ドドドドドドオンッ!!

男達全員「なっ!?!」

男達の持っていた拳銃が全て手元から吹っ飛んだ。

男 「な、何だ今のは!？」

男F 「何が起きたんだ!？」

すると、

ジャキッ

???? 「何が起きたかわかんなかったのか？ 俺達がお前らの拳銃を撃ちおとしたんだよ。」

???? 「そんなことも判断できないのに強盗しようだなんて論外ね。」

男達の後頭部に銃が突き付けられた。突き付けているうちの一人は短い黒髪で、ワインレッド色のブレザーに黒のズボンというどこかの制服を着ている男、もう1人は小学生くらいの背にピンク髪のツインテール、そして赤紫色の瞳が特徴の少女だった。そしてその姿を見た男の1人が口を開く。

男 「ピ、ピンク髪のツインテールのガキを連れた風紀委員……じゃ、じゃあお前らまさか、学園都市最強最悪の風紀委員集団……バ、バズカービル”！！???”」

ドオンッ

男の発言を遮るようにピンク髪の少女が発砲した。そして、

???? 「誰がガキですって! ……私は……高2だ ……!!!!」

激昂しながら男の頭に向って発砲……

ドオンッ

「???」

出来なかった……。突如聞こえた発砲音……その主は……

当麻「はいはい、そこまでにしとけよ。」

当麻だった。その右手には少々大きめの拳銃が握られていて銃口は上を向いている。どうやら威嚇射撃だったようだ。と、そこに

ゴンッ

当麻「痛っ!？」

一護「当麻、お前何発砲してんだよ!？」

一護が当麻に拳骨を食らわせた。

当麻「何すんだよ、一護!！」

一護「……はあ……なのは達見てみる。」

当麻「ん?……あ……。」

当麻がなのは達の方を見てみると、本人達は目の前の出来事に驚きすぎて完全に硬直してしまっていた。そして、

はやて「ちょっと待たんかい!！」

はやての叫びが辺りに響く。

はやて「何や今のは！？ 刀で車を真つ二つにしたり拳銃をバカスカ撃つたり！！ 皆学生やろ！ 何で拳銃とか刀を持ってるんや！？ ていうか何で当麻君まで拳銃持ってるんや！？」

あまりの混乱ではやては若干キレの悪い突っ込みをした。すると、

リクオ「は、はやて落ち着いて！ この人達は僕らの友達だから！！」

はやて「……へ？」

一護「よう、風紀委員の仕事お疲れさん。キンジ、アリア、理子、白雪。」

キンジ「おう、一護、当麻、リクオ。」

理子「やっほー！」

白雪「こんにちは。上条君、黒崎君、奴良君。」

アリア「何であんた達がここにいるのよ!？」

キンジ「アリア……挨拶くらいまともに……」

アリア「うるさいバカキンジ！ 風穴開けるわよ!!」

当麻「あ、相変わらずだな、神崎は……。お前も苦労してるな、遠山。」

キンジ「わかってくれるか上条……無力化した犯人への発砲……始末書ものだな、こりや……。そういえばそっちの3人は誰だ？初

めて見る気がするんだが……」

当麻「ああ、こいつらは……」

理子「ああっ！　理子わかつちゃったよう！」

当麻「はい？」

理子「その3人は当君達の彼女だ！」

当麻・一護・リクオ

「はあああ（ええええ）っ！！！！؟؟？」

当麻達は理子の突然の爆弾発言に思わず仰天した。

一護「おい理子！！　お前何いきなりとんでもねえ発言してんだ！

こいつらは明日から俺達の同級生になる奴らだ！ 何で俺達の彼女って発想が出てくる！？」

理子「ええっ、結構名推理だと思ったのになあ。」

当麻「“名”推理じゃなくて“迷”推理だろ！」

当麻達は理子の推理を必死に全面否定するが、当のなのは達は……

なのは・フェイト・はやて（か、彼氏／／／／……。）

万更でもなかったりする……。と、ここで当麻が、

当麻「なあ、遠山。そっぴやレキはどうしたんだ？さっきのタイヤのパンク、あれレキの狙撃だろ？」

????「呼びましたか？」

当麻「はい？ うおっ！？ お、おう、レキ。いつの間に俺の後ろに？……」

当麻に突如話し掛けてきたのは、薄いエメラルドグリーンの髪を束ね首にオレンジのヘッドホンを掛けている無表情の少女だった。

キンジ「レキ、お疲れさん。でもわざわざお前が来ることもなかったのに……」

レキ「いえ、これも風紀委員の仕事ですので……」。

一護「相変わらず無表情だな、レキは。」

キンジ「それもレキの個性だよ。おっと、そういやまだそっちの3人に自己紹介してなかったな……。俺は遠山キンジ。当麻達のクラスメイトだ。」

理子「ヤッホー。私は峰理子だよ。理子って呼んでね。」

白雪「はじめまして。私はキンちゃんの幼なじみで上条君達のクラスメイトの星伽白雪ほとぎです。よろしくね。」

リクオ「星伽さん……遠山君の幼なじみっていうのは別にいいんじゃない……。」

白雪「何言ってるの奴良君!? そこが一番重要だよ!」

リクオ「あ、そ、そうなんだ……。」

レキ「レキと言います。よろしく。」

アリア「神崎・アリアよ。アリアでいいわ。」

するとなのは達が目を見開いてアリアを見た。

アリア「…な、何よ?…」

なのは「あ、ご、ごめんね。知り合いの子の声とそっくりだったから……あ、私は高町なのはっていうの。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな、アリアちゃん。」

アリア「なっ／＼／＼!? ア、アリアでいって言うてるでしょ／＼! “ちゃん”なんかいらないわよ／＼／＼!」

理子「あゝ! アリア照れてるゝ! かわいいゝ!」

アリア「っ／＼／＼!? うゝうゝおに／＼おに／＼おに／

／／／！！ 風穴開けるわよ／／／！！」

一護「お、おい！ 風紀委員が些細なことで一々拳銃拔くなよ！！」

理子の言葉にアリアが赤面して拳銃を抜こうとし、それを一護が慌てて止めるかという何とも力オスな展開になり始め、その様子にリクオや当麻は苦笑いを浮かべるしかなかった。一方なのは達は……

なのは《ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん。アリアちゃんって……。》

フェイト《うん。アリスそのものだよね。声は本人と同じだし、性格だってそっくりだし……。》

はやて《いや、にしても似すぎやろ。別世界でこんなに友達と声がそっくりな人初めて見たで。……そう言ったら白雪ちゃんの声もキヤロそっくりやなかった？》

なのは《そ、そういえば確かに……雰囲気もどことなくキャラに似てるかも……》

フェイト《……キャラ……》

リリカルなのはでお馴染みの“念話”でアリアと白雪がアリサとキヤロにそっくりであるということを確認し合っていた。ちなみに“念話”をご存知でない方は一種のテレパシーと思っておいて下さい。

当麻「にしても神崎、お前よくその体でコルト・ガバメントを二丁拳銃にしてるよな。いくら小型化されてるって言っても撃った時の反動は半端ないから普通はあり得ないだろ？」

それを聞いたキンジとアリアはやや呆れ顔で当麻の顔を見た。

キンジ「お前がそれを言うか？………」

当麻「はい？」

アリア「あんたの使ってるスター・ムルガーの方がずっとあり得ないわよ！ 何よその改造銃！？ 撃った時の反動がコルトの10倍って！？」
何でそんな拳銃を平気な顔で連射できるのよ！？」

当麻「お、おい！ それじゃまるで俺が人外みたいじゃねーか！？」

アリア・キンジ
「そうでしょ！！（いや、そうだろ。）」

当麻「ひ、ひどい……。」

当麻はキンジとアリアの自分に対する評価に思わずうなだれる。するとここではやてが、

はやて「な、なあ、リクオ君。」

リクオ「？ どうしたの？ はやて。」

はやて「ええ加減に話してくれへん？ この人達がさっき話してくれた風紀委員うちゅうことはわかったんやけど……何で皆学生なのに拳銃やら刀やらを持ってんねん？ ありえへんやろ普通……。」

キンジ「……なあ奴良。ひょっとしてお前達まだ……。」

リクオ「え？ あ、うん。それについてはまだなのは達に説明してないんだ。」

一護「で、俺達がそれについて説明しようとした矢先にさっきの銀行強盗が起きたって訳だ。」

キンジ「なるほど。まあ事情を知らない奴がさっきの光景を見れば驚くのも当然か……。」

理子「はいはい……！ じゃあそれについて理子りんが説明するよん」

ここで理子が勢いよく手を上げた。すると、

キンジ「……変なこと教えんなよ、理子……。」

キンジ「ぶー。キー君ひどい！ 理子だって説明くらいはちゃんとするよー！」

理子はキンジの言葉に少々ふてくされながらも説明し始めた。

理子「えつとね、私達は皆、“銃刀携帯特別免許”っていう資格を持ってるのだよ！ まあ私たちは略して“携帯免許”って呼んでるけどね。」

なのは「銃刀携帯特別免許って……。」

フェイト「銃や刀を持っていいってことー!？」

理子「まあ学園都市内限定だけだね！」

はやて「んなアホな！？ 学生が武器を所持していいなんて、そんな資格あるわけが……」

レキ「この資格はちゃんと警察庁が公認……つまり日本の政府によって認められています。」

フェイト「で、でもどうして？……」

アリア「それはここが学園都市だからよ。」

白雪「知ってるとは思っけど、学園都市は人口の7割が学生で、残りの3割の大人も教師や研究者がほとんどだよ。有志の教師によって構成された警備員も武器を所持できるけど、これだけ巨大な都市の治安をそんな数少ない教師達だけで維持するなんて無理だし、凶悪な犯罪者が出た時に何も武装できなかったら大変なことになる。だから学園都市はそれを防ぐために一部の生徒に武器の所持を許可

してるの。」

キンジ「まあこの免許を取るのはかなり難しいし、それに銃や刀なんて物ともしない特異能力者はたくさんいるからな。学園都市の外の人間から見ればそりゃ常識はずれなことだろうけど、学園都市にいる人間にとってはそこまで驚くようなことじゃねえよ。」

なのは「……あれ？　銃を持ってるってことはひょっとして当麻君も……」

当麻「ん？　ああ、俺も風紀委員だ。ついでに言えば一護とリクオもそうだぞ。」

一護「つっても俺達は“ライオット・ジャッジメント特別風紀委員”っていう臨時の風紀委員だけだな。」

フェイト「じゃあひょっとして一護とリクオも武器を持ってるの？」

一護「いや、俺は携帯免許自体持つてねえ。風紀委員でも免許持つてる奴は結構少なえんだよ……まあうちの学校ではかなりの奴が持つてるけどな……。」

リクオ「僕の武器はこれだよ。」

そう言うときリクオは背中から何かを取り出した。

はやて「そ、それって……ド、ドス!？」

そう……リクオが取り出したのはヤクザなどがよく持っている長ドスだった。

リクオ「うん。これ実家の家宝みたいな物だったんだ。」

なのは「リクオ君がドスを使う姿なんて想像つかないけど……」

キンジ「言っておくが奴良は白雪よりも強さが上だぞ。」

はやて「なっ！？　ホ、ホンマかいな！？」

リクオ「と、遠山君！　それはさすがに……」

キンジ「お前なあ……能力を使わずにその姿のままで勝ってるのに弱いはずねえだろ……。」

白雪「かすり傷一つ負わせられなかったしね……。」

キンジと白雪の話を聞いてはやて達は絶句した。まあ見るからに温厚な今のリクオが、ついさっきワゴン車を真つ二つに両断した少女より強いなんてまるで想像がつかないのだ。と、ここで、

当麻「って、考えてみりゃ本題を忘れてた！　なあ遠山、どこかバイトを募集してるとこ知らないか？」

キンジ「バイト？ 何でだよ？」

一護「俺達今学園都市を案内しながらなのは達のバイトを探してる
ところなんだよ。」

キンジ「バイトか……俺が知ってるとこはもうバイト募集してねえ
んだよな……なあ理子、お前知らねえか？ そういうの結構詳しい
だろ。」

理子「残念ながら無いんだよ、キー君。今学園都市の学生がすん
ごく増えちゃってるからね。その分バイトで働く学生も増えて空
きがないんだよ。」

アリア「そういえば風紀委員でも学生が増えたことで治安が悪化す
るんじゃないかって議論もあつたわね。」

レキ「……アルバイトを募集している場所でしたら一つ心当たりが
あります。」

キンジ「レ、レキ!？」

当麻「マジで! どこだ!？」

レキ「風紀委員の射撃訓練場です。」

すると一瞬空気が固まった。

キンジ「……そ、そういえば確かに人手を欲してたな、あそこ……。」

当麻「まあ、でも……なあ……。」

なのは「う、うん……。」

フェイト「ちょっと…ね……」

はやて「あ、ありがとうな、レキちゃん……でもちょっと遠慮しとくわ……」

レキ「？　そうですか。」

レキは少々首を傾げつつも無表情で答えた。

白雪「ねえ、キンちゃん。そろそろこの人達を連行した方がいいんじゃないかな？」

キンジ「……そういえばこいつら置きっ放しだったな。つか何で気絶してんだ？……」

キンジは地面で依然としてのびている強盗犯達を見ながらそう呟いた。ちなみに何故のびているかというと実は当麻達が会話をしている最中に犯人達がワーギャー騒いでいたため、レキが無表情でありながら体から怒りのオーラを放ちつつライフルの銃口を頭に当て、

犯人達はそんなレキに対する恐怖で失神してしまったのだ。まあそのことをレキ以外は知らないのだが……。

キンジ「じゃあ俺達はいくら連行してくわ。悪いな、力になれなくて。」

なのは「あ、ううん。ありがとう、キンジ君。」

理子「じゃあねーなのちゃん、フェイちゃん、はやちゃん！」

フェイト「な、なんかいつの間にか変な呼び名が……」

リクオ「あはは……」

はやて「ほんなら明日学校でな！　アリアちゃん。」

アリア「だ、だから普通に呼びなさいよ／＼／＼!!」

白雪「じゃあ明日クラスでまた。」

一護「おう。」

レキ「失礼します。」

そしてキンジ達と別れた当麻達は再びバイト探し兼町案内を再開し始めた。この時フェイトは、

フェイト（何だろう……普通の人にまだ会ってない気がする……本当にここ地球なのかな?……）

学園都市が地球にあるのかどうか疑問に思いながら苦笑いを浮かべていた……。

E
N
D

普通の人間なんて世の中早々いません！！（後書き）

どうも！ 黒狼です！

という訳で新キャラは“とある科学の超電磁砲”と“緋弾のアリア”のキャラを出しました！ ですが緋弾のアリアのキャラは思った以上に書きにくかったですね。特に理子と白雪が……。

理子みたいな猫被ってる女子の喋り方って意外と難しいんですね。それに白雪もアニメだとキンジやアリア以外の同年代の友達との会話描写が全然ないので、当麻達との喋る時は敬語にするかしないか迷いましたけど、最終的に敬語は無しにしました。

そして今回書いてて思ったのですが、ほとんどギャグ要素がなかったですね……。一応ギャグがメインのはずなのに……。

次回バイト探し後編です！ 新キャラは多分今回よりもさらに多く出ると思いますので……！！

ではまた……！！

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！（前書き）

街案内&バイト探し後編です！！

前回より多数のキャラが登場します！ 話はやはりグダグダですが……。

では本編をどうぞ！

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！

当麻「にしても、バイトを募集してるとこ少なえな。」

一護「さっき理子も言ってただろうが。学生の人数が増えてる分バイトの求人倍率も上がったよ。」

リクオ「まあ高校生にとってバイトは結構大事だしね。」

キンジ達と別れた後、当麻達はいろいろな店を回ってみたがやはりバイトを募集しているところはなかった。

なのは「ご、ごめんね。私達のために……」

当麻「何言ってたんだ、なのは。お前らは俺達のためにバイトしようとしてくれてんだから手伝うのは当然だろ。それに……前の居候は

バイトして恩返ししようなんて発想は微塵も持ってなかったしな……
ハハハ……。」「

当麻の放つ不幸オーラになのはは顔を引きつらせる。と、そこに、

コロコロッ

当麻「ん？　なんだこれ？」

フェイト「ボール？」

当麻達の目の前にボールが転がってきた。当麻はそのボールを拾うとそれは赤いゴムボールだった。

はやて「けど何でゴムボールが転がってきたんや？」

すると、

???「アンツ！」

当麻「はい？」

鳴き声と共に突如横から真っ白な犬が現れたかと思うと、猛スピードで当麻の持つているボールに突っ込んで……

ガブツ

当麻「ギャアアアアッ！！??」

…行かずに当麻の頭に噛り付いた。そしてなのは達はその光景に言葉を失った。問題は犬の大きさである……どう考えても2、3メートルはあるのだ。誰もが一瞬“これは犬なのか！？”と疑ってしまっただろう……。

???「ガウウウッ……」

当麻「ああ……今行きます…ご先祖様……」

一護「おい！ そっち行くな当麻！ お前明らかにこの世とあの世の境界を踏み越えようとしてるだろ！？三途の川を渡る気だろ！？」

フェイト「は、早く当麻を助けないと……」

そう言うフェイトはいつの間にか黒い服に白のマントを羽織っていて右手には漆黒の鎌が……

はやて「って、フェイトちゃん！？ 何でいつの間にかバリアジャケットになってる上にバルディッシュを起動させてるんや！？ それあかんやろ！ 首と胴体を分けるつもりかいな！？」

と、その時、

「定春　!!!」

「アンツ！」

誰かの呼び声に当麻に噛み付いていた真つ白な巨大犬は反応すると、
当麻を放して声のする方へと走っていった。

「だ、大丈夫！？　当麻君！」

「ふ、不幸……だ……ガクッ……」

「当麻が堕ちてる間、」

「アンツ！」

「???」よしよし、いい子ネ！　けど何で口の周りが赤いアルか？」

先ほどの声の主は巨大犬と触れ合っていた。その人物は赤いチャイナ服を着て紫色の傘を持ち、赤橙色の髪をぼんぼりで纏めている少女だった。どうやらその犬の飼い主のようだ。すると、

「???」あつ！　いつちにリクオアル！　おい！！」

その少女は一護とリクオに気付くと手を振ってきた。一護とリクオは顔を引きつらせながらもそれに応え手を上げた。

フェイト「あ、あの子も一護達の知り合いなの?……」

一護「あ、ああ……。」

リクオ「ぼ、僕達のクラスメイトだよ、あの子も……。」

すると少女は巨大犬に乗って一護達の元にやってきた。

「???」一昨日ぶりアルな！　いつちー、リクオ！
あれ？　何で当麻血だらけアルか？」

当麻「定春に頭から噛まれたんだよ！！　その噛み癖なんとかしろ！
！　一瞬三途の川が見えたじゃねえか！！」

「???」大丈夫アル。ちゃんと生きてるんだし。」

当麻「別に生死が問題じゃないから！　頭から血が出てる時点で結構問題だから！！」

少女の他人事なセリフに当麻は突っ込んだ。

リクオ「えっと、紹介した方がいいよね。この子は神楽ちゃん。僕達のクラスメイトで中国からの留学生なんだ。」

神楽「あれ？ そっちの3人は誰アルカ？ 初めて見るネ。」

なのは「私はなのは。高町なのはっていうの。よろしくね！」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「八神はやてや。よろしゅうな、神楽ちゃん！」

一護「こいつら明日からうちの学校の高等部2年に転入してくるんだよ。」

神楽「マジアルか！ じゃあ同級生あるネ！！ ヨロシクアル！
あ、この子は定春！ 私のペットネ！！」

定春「アンツ！！」

神樂が紹介すると定春は元気良く鳴いた。と、ここで当麻が神樂に尋ねる。

当麻「神樂、ちなみに聞くがお前どつからボール投げた？」

神樂「え？ 第6学区の自然公園ネ。」

リクオ「ええええ！？ あそこからここまで直線距離でも2キロはあるよ！ どんだけ力入れて投げたの神樂ちゃん！？」

一護「流石夜兎族だな……………」

なのは「夜兎族？」

はやて「なんやそれ？」

聞き慣れない名称になのは達は首を傾げる。

当麻「夜兎族っていうのは世界最強の戦闘一族のことだよ。神楽はその一族の1人で、ありえねえ怪力の持ち主なんだよ。」

フェイト「えっ!？ 神楽が!？ で、でもとてもそんな風には見えないんだけど……」

まあ目の前にいる華奢で小柄な少女が怪力の持ち主と言われても普通は信じないであろう……。すると一護が、

一護「2キロ離れたところから投げてるボールがここまで届いてる時点で十分おかしいだろ。それにこいつならトラックを片手で持ち上げられるくらい余裕だぞ多分……。」

その言葉を聞いたなのは達は絶句するしかなかった……。と、ここで、

神楽「ああっ！ いけないアル！ もうすぐ“渡る世間は〇ばかり”の再放送が始まるネ！！ 私はこれで失礼するアル！ また学校で会うヨロシ！」

リクオ「う、うん。」

はやて「ほんならなく、神楽ちゃん！」

神楽「行くヨ！ 定春！」

定春「アンツ！」

そして神楽は定春にまたがって帰っていった。そのスピードはスクーター並みであるが……。

なのは《ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん。》

フェイト《う、うん……。》

はやて《神楽ちゃんの声もアリサちゃんそっくりやったな。内心めっちゃビックリしたで……。》

まさか1日で2人も同じ友達にそっくりな声の人物に出会うとは思っていなかったなのは達は呆気に取られていた……。

当麻「あ……神楽にバイトのこと聞くの忘れてた……。」

一護「そ、そっぴやそっぴや……。」

リクオ「まあ……でも神楽ちゃんだし……。」

当麻・一護・リクオ

（むしろ聞かなくて正解な気がする……）

神楽に聞き忘れたことを後悔する気持ちは神楽のことをよく知る当麻達にはなかった……。

リクオ「でもなんかバイトとかに詳しい人がいた方がいいね。」

一護「確かにな……つつてもそんな都合良くいる訳………」

と、その時、

「……あれ？　当麻さんに一護さんにリクオさん？」

一護達は突如自分達を呼ぶ声に気付き振り返ると、そこには水色の短い髪で執事服を着ている少年がいた。

一護「おお、ハヤテじゃねえか。」

ハヤテ「やっぱりそうでしたか。お久しぶりです。」

当麻「ていつか相変わらず俺達のこと“さん”付けなんだな……。」

リクオ「別に呼び捨てでいいのに……。」

ハヤテ「とんでもないですよ！ 皆さんは先輩なんですから！」

リクオ達の言葉をハヤテは慌てて否定する。すると一護がキョロキョロしながら辺りを見渡し始めた。

一護「そついえばあいつは……ってここにいる訳ねえよな……。」

????「それは誰のことだ？」

声が聞こえてきた方を見ると、今度は明るい金髪をツインテールにしている背の低い少女が立っていた。

当麻「ナ、ナギ!？」

ナギ「何をそんなに驚いているのだ？ 当麻。」

一護「いや、だってよ……」

リクオ「まさかナギちゃんが外に出てるなんて思わなかったから……」

ナギ「おい！ お前たちは私を何だと思っているのだ!！」

当麻・一護「引きこもり。」

ナギ「お前たちは叩き潰されたいのか!!」

ハヤテ「お、お嬢様落ち着いて下さい!」

ナギ「止めるなハヤテ!」

そんな感じで当麻やハヤテ達がやり取りをしている間なのは達は、

なのは《またアリサちゃんと同じ声の子が……》

はやて《どんだけいんねんアリサちゃんの声!? いくら何でも異常やる!》

フェイト《それにあのナギって子、性格も似てるし“お嬢様”って呼ばれてるし、本当にアリサを見てるような感じだね……。》

すると、

ナギ「そういえばお前たちの後ろにいるその者達は誰なのだ？」

ハヤテ「そういえばそちらの方々は初めて見ますね。」

当麻「ああ、この3人は明日からうちの高等部2年に転入するんだ。」

ハヤテ「あ、そうなんですか。はじめまして、僕はナギお嬢様の執事で一護さん達の後輩の綾崎ハヤテと言います。」

ナギ「私は三千院ナギなのだ！ よろしく頼むぞ！」

なのは「ハヤテ君にナギちゃんだね？ はじめまして。高町なのは
つていいいます。」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。いやー、まさか同じ名前の男の子がいるとは思わへんかったわ！　よろしゅうな、ナギちゃんにハヤテ君！」

3人が挨拶を終えると、ハヤテとナギは驚いた様子ではやての顔をじっと見た。

はやて「ど、どないしたんや二人とも？」

ナギ「！　す、すまないのだ！」

ハヤテ「実はお嬢様の友達に八神さんとそっくりな声の人がいます、しかもその人も関西弁なので一瞬戸惑ってしまいました。すみません、まじまじと顔を見たりなんかしてしまって……。」

はやて「え、ええよ別に！　気にしておらへんから。」

当麻「ああ……はやての声がどうも誰かとたぶると思ったら、あいつの声にそっくりだったのか……。」

一護「考えてみれば全く一緒だな……。」

はやて「なんや？ リクオ君達もその子を知ってるんか？」

リクオ「うん。ずいぶん前からよく知ってる子なんだ。」

すると、

「……？」
「おりやつ……！」

ガシッ

一護「うおっ!?!」

後ろから誰かが一護に抱きついてきた。一護は何とか耐え切るとその人物の首の後ろの襟を掴んで持ち上げてみると、それは灰色髪でおかつぱ頭の少女だった。

一護「はぁ……やっぱりお前か、咲。」

???「久しぶりやのにその反応はないで、一兄。」

当麻「よう!」

リクオ「久しぶりだね、咲夜ちゃん!」

???「当兄とリク兄も久しぶりや!」

少女は当麻とリクオにも関西弁で元氣良く挨拶をした。すると、

はやて「えっと……ちょっとええか？」

「……へ？」

はやてが少女に話し掛けた。それに対して少女は呆気に取られた表情になり、そして……

「……はやて」

「ウチ（私）と同じ声や……」

2人とも同時にそう呟いた。

なのは「エ、エコーがかかっているみたいなの……」

フェイト「それだけ2人の声が似てることだね……」。

ハヤテ「まさか咲夜さんと同じ声の人がいるとは……………」。

ナギ「う、うむ……………私も予想だになかったのだ……………」。

まさかの事態に全員が啞然としてしまふ。すると、

咲夜「ああ、もうどうなつとるんやこれ！？　一兄達に挨拶しに来たはずが何で同じ声の人間に会うなんて状況になつてんねや！？」

ハヤテ「お、落ち着いて下さい咲夜さん！」

咲夜「ん？　なんや、ナギとハヤテもおったんか。」

ナギ「おい！　ついでみたいに言っな、咲！」

当麻「ああ、まったく落ち着けお前ら！　いつまで経っても話が進まなくなるだろうが！」

当麻の一喝でとりあえず落ち着く。

一護「ええとだな、咲。こいつらは明日からうちの高等部の2年に転入する奴らで俺達の知り合いだ。」

なのは「高町なのはです。よろしくね。」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私ははやて。八神はやてや。さっきは驚かしてもうてゴメンなあ。」

一護「こいつは愛沢咲夜。ナギの幼なじみで俺達が中学の頃からの仲だ。」

咲夜「よ、よろしゅうお願いします。あとさっきはすみません／＼／……。」

先ほどの自分の行動を思い出したのか咲夜は少々恥ずかしそうにしながら縮こまっていた。まあ初対面の、まして年上の人物の目の前でワーギヤー騒いでたことを冷静に考えると恥ずかしく思えてきてしまうのも無理はない。

ナギ「ところで咲。お前なんでこんなところにいるのだ？」

咲夜「ん？ 何でってそんなん決まって……ああー！ー！ー！」

リクオ「うわっ！？ ど、どうしたの急に！？」

突然咲夜が大声を上げたため、リクオが驚いて尋ねた。

咲夜「当兄、一兄、リク兄、伊澄さん知らへん!？」

当麻「伊澄? いや、見てねえぞ……っておい、まさかまた……。」

当麻は予想がついたのか冷や汗を出していた。

咲夜「例のごとく迷子や……」

ナギ「またか、伊澄の奴……。」

ハヤテ「まあ、いつものことですし……」

ナギやハヤテも“やっぱりか……”といった表情で呟く。

フェイト「一護、その伊澄って子もナギ達の友達?」

一護「あ、ああ、そうだ。一つとんでもない欠点を抱えてるけどな……」

なのは「欠点？　どんな？」

一護「……ものスゲー方向音痴だ……」

はやて「方向音痴ってあの方向音痴かいな？　せやけどそんなに大層な欠点って訳じゃ……」

咲夜「それは甘いで、はやて姉。」

はやて「わっ！？　さ、咲夜ちゃん、“はやて姉”ってどういうことじゃ？」

咲夜「だってはやてやとそっちのハヤテと被ってしまうやろ？　それに何や姉さんみたいやし……せやから今日から“はやて姉”や！」

はやて「た、確かにそうやね……。ほんで何が“甘い”んや？」

「
咲夜「伊澄さんの方向音痴は普通のそれとはレベルが違うんよ……。」

なのは「どういうこと？」

当麻「いや、例えば学園都市にあるナギの家に行こうとして北海道で保護されたり……。」

フェイト「え？……。」

リクオ「この前は学校に行こうとしてパリで見つかったって言うってたね……。」

はやて「……それ、方向音痴とはまた別のものとちゃうか？……。」

当麻達の話聞いたなのは達は最早言葉が出なかった……。するとハヤテがあることに気付いた。

ハヤテ「お、お嬢様……」

ナギ「？ どうしたのだ？ ハヤテ。」

ハヤテ「あれ、伊澄さんではないでしょうか？……」

ハヤテはそう言うと、ある場所に向かって指を差した。それは……学園都市の中でも五本の指に入るほどの高さのある高層ビルの屋上に人影がある……ようなのだが……

ナギ「……遠すぎて見えないぞ……」

あまりにも遠すぎてナギには人影など判別できなかった。

フェイト「ハヤテって凄い目が良いんだね……一体視力いくつなの？……」

ハヤテ「えつと……確か両目とも6・0だったかと。」

はやて「なんやその視力！？　マサイ族か！？」

咲夜「ああ、間違いあらへん！　あの和服に黒髪ロングヘアーは伊澄さんや！」

なのは「ふえっ！？　咲夜ちゃんにも見えるの！？」

咲夜「当たり前や！　　うちはギャグ補正っちゅう能力があるさかい！」

当麻「咲、それ別にお前の能力じゃないからな！？　作者の悪ふざけに過ぎないからな！？」

リクオ「咲夜ちゃんも当麻も何言ってるんだろっ……」

いろいろと不味い発言がありますが、それは置いておくとしまじょう……。と、ここではやてが、

はやて「ていうか何であんなところにその子はおんねん！？ やっぱ迷子とか方向音痴とか以前の問題やろ！！」

一護「まあ、伊澄だからな……としか俺達には言えねえ……。」

すると、

ハヤテ「ああー！！！！ 伊澄さんが風に煽られて落ちてます！」

一同「何ー！？」

一護「って、驚いてる場合じゃねえ!!」

なのは「こ、こうなったら魔法を……」

ちなみにもう一度言いますが、ありえない視力を持つてるハヤテとギヤグ補正されてる咲夜以外は落ちている伊澄が見えません。あくまでもハヤテの発言が本当であるという仮定の元です。お忘れなく!

ナギ「ハヤテ!!」

ハヤテ「わかっております! お嬢様!!」

だがなのは達が動き出す前にナギがハヤテを呼びハヤテもそれに応え、あるものに向かって走りだす。その先にあったのは……

フェイト「自転車?」

はやて「ま、まさか自転車であの子が落ちる前にあんな遠くのビル
に向かうつもりかいな！？ そんな無理に決まって……」

はやてがそう呟く間にもハヤテは自転車にまたがりペダルに足を掛
け……

ビュンッ

その場から消えた……。

なのは・フェイト・はやて「……………え？」

あまりのことになのは達はしばし呆然としてしまっ……。一方当麻
達は、

リクオ「相変わらず綾崎君は……………」

当麻・一護・咲夜

「人外だな（やな）。」

何事もなかったかのようにそう呟くだけだった。

そしてここからはハヤテ視点に切り替えます。

S i d e : ハヤテ

ハヤテ「うおおおっ！！！」

一護達がハヤテを人外扱いしている頃、当の本人は落下している少女を目視で捉え、あと500メートルくらいまで迫っていた。ちなみにスタート地点からそのビルまでの距離は直線距離でも約1キロはある…………たかだか数秒の間に1キロ先のビルに迫る時点で明らか人外である……。だが……

ハヤテ（伊澄さんが落ちる方が早い！？　こうなったら……）

そう思ったハヤテは意を決して尋常ではないスピードで走行する自転車
のサドルを踏み台にし……

ハヤテ「てやあああああっ！……！」

勢い良く蹴って飛んだ。そして……

ハヤテ「届け……！！！！！！！！」

両手を目一杯前に伸ばし、

ガシッ

地面スレスレでキャッチに成功した。

ハヤテ「はあ……はあ……ギ、ギリギリセーフ……。」

???「ハ、ハヤテ様……」

と、ここでハヤテに受けとめられている少女が口を開いた。

ハヤテ「こ、ご無事ですか？ 伊澄さん。」

伊澄「あ、はい。有り難うございます。あの、その……そろそろ降りてもらえるとありがたいのですが／＼／＼……。」

伊澄という少女はハヤテに礼を言いつつも頬を赤らめながらそう言った。そう……ここはビルの立ち並ぶ都会のど真ん中。その道の真ん中で男の子に抱きかかえられていて恥ずかしくないはずもなかった……。

ハヤテ「あ、こ、これは失礼しました／＼／＼！！！」

ハヤテもその状況に気付き慌てて伊澄を降ろした。こうして一件落着……と、言いたいところだが、ここで1つ聞こう。ハヤテの乗っていた自転車……あり得ないスピードで走っていた上に運転する人物を失ったそれはどうなったか？……。正解は……

ドカアアアアン！！！！

近くのビルに突っ込んでいきました……。

ハヤテ「……あれ？……」

S i d e E n d

それから少しして当麻達が到着した。

伊澄「ではなのはさん達は明日から私達の学校に転入されるのですね。あ、私は鷺ノ宮伊澄と言います。よろしく願いますね。」

なのは「うん、よろしくなの！ 伊澄ちゃん。」

伊澄「それにしても申し訳ありません、当麻兄様、一護兄様、リクオ兄様。ご心配を掛けてしまって……」

リクオ「でも無事で良かったよ。」

フェイト「そうだね。でもその代わりに……」

フェイトはある一点を見る。その先には……ハヤテの自転車が突っ込んだことによって見事に滅茶苦茶になった店があった……。

当麻「まあ休憩時間で客もいなくて店員にも怪我がなかったのが不幸中の幸いだな。」

はやて「せ、せやけどこれ……どないすんねん……?」

はやては店の惨状に顔を引きつらせる。はつきり言って“一体いくら弁償することになるんだ?……”というような状態なのだ。

一護「ああ、それなら心配ねえよ。」

なのは「え? どうして?」

すると、

ハヤテ「お待たせしました……。」

ハヤテが苦笑いでナギと共にその店から出てきた。

フェイト「あ、ハヤテ。お店の方の弁償はどうなったの？」

フェイトが心配そうな表情でハヤテに尋ねると、

ナギ「ああ、心配ないぞ。私がさっき修理費用を全額払ったからな。」

なのは・フェイト・はやて「……え？……」

ナギの一言になのは達は呆気に取られたような表情になった。

はやて「ええと……ちなみにいくらや？……」

ナギ「ん？ たかだか300万だったぞ。」

なのは・フェイト

「さ、300万!!??」

なのはとフェイトはナギの口から出たとんでもない金額に驚きを隠せなかった。

はやて「な、なあリクオ君……ひょっとしてナギちゃんって……。」

リクオ「う、うん……ナギちゃんは財閥のお嬢様だよ。」

はやて「やっぱりそやったか……。まあ、執事を雇ってる時点ではとなくわかつとったけど……。」

当麻「ああ、はやて?……言っとくけどナギの“お嬢様度”は格が違うぞ。」

はやて「へ?」

「護」そうだな、日本最大の財閥のお嬢様だな……。」

リクオ「あ、ちなみに言うと咲夜ちゃんと伊澄ちゃんも生粋のお嬢様だからね。ナギちゃんの家の分家の人だから、そこら辺のお嬢様よりはよっぽど財力があるし……。」

この時なのは達は思った。

なのは（そこら辺のお嬢様って、一体どのくらいのお嬢様のことなんだろう……。）

フェイト（まさか……アリサやすずかもその中に入っちゃうほどじゃないよね？……）

実はその中に彼女達の親友であつたお嬢様2人も入ってしまったというのを達は達を知るの……まだ先のことである。

はやて「そういえば咲夜ちゃんも伊澄ちゃんもリクオ君達のこと“お兄ちゃん”呼ばわりしとるけど何でや？ まさか3人もナギちゃんと親戚なんか！？」

リクオ「うつん、違うよ。」

当麻「ていうかもしナギの親戚だったらお金に苦労なんてしないだろ……」

一護「こいつらが勝手に呼んでんだよ。」

なのは「え？ でもどうして？」

一護「ああ、いや、こいつらこの通りお嬢様だろ？ だから財産目当てで狙ってくる奴もいてな。俺達が中1だった頃、ハヤテが執事になる前にその手の奴らに3人揃って誘拐されたことがあったんだよ。」

リクオ「で、その瞬間を偶々僕達が目撃しててね。その人達を叩き潰して助けだしたら何かそう呼ばれるようになってたんだよね……。」

フェイト「叩き潰してって……えっと、一護達は大丈夫だったの？
相手はナギ達みたいなお嬢様を攫う人達だったんだよね？」

当麻「いや、助けさせたのは奇跡だったな……。相手はどつかの特殊部隊並みの装備を持った連中十数人だったし……。」

なのは・フェイト（いやいや、中学１年でそんな人達を叩き潰せないでしょ！？）

はやて「ん？ でもナギちゃんは普通に呼んでおらんかったか？」

咲夜「いやいやはやて姉、ホンマは昔ナギが一番当兄達に懐いとっ
たんやで。」

ナギ「うわああ、咲／／／！！ 余計なことを言うな／／／／！！」

伊澄「ナギは昔はよく当麻兄様達に甘えて困らせていたわね。」

ナギ「い、伊澄まで何を言っておるのだ／／／！！」

当麻「あゝ、あの頃は大変だったな。意味わかんない提案に付き合わされて地下迷宮に迷い込んだり、暗いのが苦手だから一緒に寝てくれとか頼まれたり、それから……」

ナギ「そ、それ以上言うなバカ者 ／／／／！！」

ドゴオオオオオンッ

当麻「ぐほっ！！！？？」

ナギは赤面しながら当麻の顎に見事なアップercutをお見舞いし、それを食らった当麻はあり得ない効果音と共に空高く舞い上がった。

なのは「にゃ、にゃあああ！！？？」と、当麻君！？」

咲夜「いやゝ、相変わらず当兄はええリアクションしてくれるさかいなゝ！」

ハヤテ「え、ええ……かなりデカイダメージと代償にですけど……」

伊澄「ナギは当麻兄様達を“兄”と呼ぶのが恥ずかしいだけなのよね？」

ナギ「ち、違う／＼／＼！！別にそんなんじや／＼／＼……」

咲夜「何やもつと素直になればええのに……。別に恥ずかしがる必

要なんて無いやろ？」

一護「お前は少し恥じらいを持ちやがれ！　いきなり後ろから抱きつく奴がいるかよ！」

ゴンッ！

咲夜「痛っ！！　な、何すんねや一兄！」

一護「往来であんなことされたら俺まで恥ずかしいだろうが……！」

リクオ「あはは……。ま、まあ一護もその辺にして……」

てな具合で繰り広げられる当麻やナギ達の会話を見てなのは達は、

なのは《こうして見ると当麻君達、本当にナギちゃん達のお兄ちゃ

んみたいだね。》

フェイト《うん。》

はやて《ふふ、ホンマやね。》

微笑ましく見ているのであった……。と、ここでリクオが、

リクオ「あ、そうだ！ 綾崎君、どこかバイトを雇ってくれる店を知らない？」

ハヤテ「え？ バイトですか？」

リクオ「うん。実ははやて達のバイト先を探してるんだけど中々見つからなくて……」

ハヤテ「うーん……バイト先……あっ！」

するとハヤテは何かを思いついたような声を上げた。

ハヤテ「一つお聞きしますが、皆さんはお料理などできますか？」

なのは「え？」

フェイト「う、うん。」

はやて「できるで……。」「

第9学区 ここにある噴水広場は休日でも比較的賑わいが少な

く落ち着いた雰囲気を漂わせている場所である。そしてそんな広場には、一件の喫茶店がひっそりと存在する。

???「ふう……日曜なのにも関わらず、やっぱりお客様は少ないわね……。」

女性的口調でそう呟くこの黒髪長身の男は加賀北斗。この喫茶店“喫茶どんぐり”の店主である。

???「まあ仕方ないですよ、マスター。ここは人気が他と比べてないですし……。」

???「でもこのまま赤字経営なのも結構まずいんじゃないかな?」

すると北斗の呟きに二人の人物が反応し、そう言った。1人はピンク色の長い髪の少女、もう1人は短い黒髪を頭の上の方で両側とも結っている少女であった。

北斗「確かに……いくら趣味で経営しているとはいえこのまま赤字なのもまずいわよね。でもお客さんを増やしても3人だけじゃ厨房と接客両方は手が回らないし……もう少し人手が欲しいわね……。」

???「今って学園都市の学生って増えてるんですよね?」

???「ええ。でもこの店の存在を知ってる人って少ないし、料理ができる人がいてくれないと……。」

北斗「けど今って中々料理できる子って少ないわよね……はあ……こういう時にうちでバイトしてくれるって子が現れたりしないものかしら……。」

と、その時、

カランカランッ

???「あ、いらっしやいませー!」

来客を知らせるベルが鳴り、ピンク色の髪の少女が応対する。その来客は……

当麻「この店来るのも久しぶりだな。」

一護「そっぴやそっぴか。」

リクオ「ご無沙汰してます。北斗さん!」

ハヤテ「あれ? ヒナギクさんに西沢さん?」

ナギ「なんだ、お前たちもいたのか。」

ヒナギク「か、上条先輩、黒崎先輩、奴良先輩!?」

歩「そ、それにハヤテ君にナギちゃん!？」

当麻達とナギ、そしてハヤテだった。よく知る人物達の来客に2人の少女　ヒナギクと歩も驚く。

北斗「あら、あなた達3人は本当に久しぶりね。」

リクオ「はい。」

一護「ヒナギクと歩も久しぶりだな。」

ヒナギク「そうですね。まあ、上条先輩の方は一昨日ぶりですけど……。」

当麻「あははは……。」

リクオ「どういうこと？ 当麻。」

当麻「いや、登校する時に巻き込まれたトラックの爆発事件で容疑者扱いされただろ？ あの事件の担当したのヒナギクだったんだよ。」

ハヤテ「ええ！？ ヒ、ヒナギクさん！？ 僕何も聞いてないんですけど！？」

ヒナギク「え？ だってハヤテ君、電話しても繋がらなかったから。」

ナギ「ハヤテ、お前確か一昨日携帯を壊してしまっただろ？」

ハヤテ「あ、ああ、そういえば……なら連絡なくて当然ですね、ハハハハ……。」

ヒナギク「はあ、その件はもういいわ……それにしても、どうして先輩はいつも偶然事件に関わるんですか！？おまけに今回は容疑者扱いされてるなんて……ハヤテ君並みの不幸さですよ。」

当麻・ハヤテ「うつ！？」

ヒナギクの一言は当麻だけでなくハヤテにも精神的ダメージを与えた。

一護「相変わらずヒナギクは無意識の発言で他の奴にも攻撃するよな……。」

リクオ「あ、あははは………」

ヒナギク恐るべし……。とこで、

北斗「それにしても皆揃って今日はどうしたのかしら？まさかただ店に来たって訳じゃないでしょ？。」

当麻「あ、ああ。実は紹介したい奴らがいてな。おーい！ 入ってきていいぞ」！

当麻がそう言つと、

カランカランッ

入り口のドアが再び開きベルが鳴った。そして入ってきたのは……

なのは「えっと、こ、こんにちはー……。」「

なのは達だった。

なのは「はじめまして。高町なのはって言います。」「

フェイト「フェイト・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてです。よろしゅうお願いします。」

そして自己紹介をする。

一護「こいつらは明日からうちの高等部の2年に転入転入することになってんだ。」

ヒナギク「あ、そうなんですか。私は桂ヒナギク。自由学園高等部1年でナギとハヤテ君のクラスメイトです。どうぞよろしく!」

歩「私は西沢歩。ハヤテ君やナギちゃん、それにヒナさんとはクラスメイトです! よろしくお願いします!」

ヒナギクと歩もなのは達に自己紹介をする。それを聞いたなのは達は、

なのは《こ、今度はキャラに続いてシャーリーまで……》

フェイト《でもシャーリーと違って凄く凛々しい感じだね……》

ヒナギクの声を聞いて某デバイスマイスターのメガネっ子を思い出していた。すると北斗が、

北斗「あらあら、まさかついに当麻君達にも彼女ができるなんてねく。」

なのは・フェイト・はやて「えっ／＼／＼／＼！！！？？」

一護「お、おい、あんたもかよ北斗さん！？？」

リクオ「何で彼女とかっていうことになるんですか！？？」

北斗「ふふ、まあ冗談はその辺にしておいて……私は加賀北斗。ここ“喫茶どんぐり”のマスターよ。よろしくね。」

なのは・フェイト・はやて「は、はい……………」。

なのは達は北斗の喋り方に思わずギクシャクしてしまう。まあ、なのは達の元いた世界にはこういう類の人間はいなかったので、正直どう接していいのかわからないのだ……。

ハヤテ「えっとそれでですね、北斗さん。確か以前、料理のできる人が何人か欲しいって言ってましたよね？」

リクオ「それで実は頼みがあるんですけど……………」

なのは・フェイト・はやて「私達をバイトとして雇ってほしいんです！　お願いします！」

すると、

北斗「一つ聞くけど、あなた達料理は？」

フェイト「あ、はい、できます。」

はやて「私も料理は得意や！」

なのは「私も……というか私実は喫茶店の娘なんで……」

北斗「決めたわ！ 即採用よ！」

当麻・一護・リクオ
「早っ！！？？」

なのは・フェイト・はやて「ありがとうございます……！」

ハヤテ「良かったですね皆さん！」

ヒナギク「そうなんと私達バイト仲間ですね！」

歩「え、えっと、よろしくお願いします！」

なのは「うん！」

はやて「よろしゅうな！ ヒナちゃんに歩ちゃん！」

という感じで店内は非常に喜びと活気に満ちていた。しかしそんな中、

ナギ「……何の審査もなく質問一つで即採用ってどうなの？……」。

ナギは1人疑問に思っていた……。と、そこへ、

カランカランッ

北斗「あ、いらっしやいませー。」

来客を知らせるベルが鳴り入ってきたのは……

「???」北斗、来た。」

「???」毎日すみません、北斗さん。」

腰まで届きそうな長い黒髪で凛々しい顔立ちの小柄な少女と短いダークブラウンの髪で見た目大人しそうな少年だった。

一護「シャナ! 悠二!」

悠二「あれ？ 当麻に一護にリクオ!!」

シャナ「ナギとハヤテも一緒にいたいね。」

ナギ「まあな。」

ハヤテ「こんにちは、シャナさん、悠二さん。」

悠二「ハヤテ、別に“さん”付けじゃなくていいよ。」

ヒナギク「お二人とも、いらっしやい。」

歩「いつも来てくれてありがとうございます!」

シヤナ「別に構わない。私が好きで来てるから……？ そっこの3人は誰だ？」

悠二「え？ あ、そういえば見たことない人達だね。」

リクオ「ああ、紹介するよ。この3人は明日うちの高等部の2年に転入してくる……」

なのは「高町なのはって言います。なのはでいいよ。」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトって呼んでね。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

悠二「それじゃあ明日から同級生か。僕は坂井悠二、高等部2年で当麻達のクラスメイトだよ。よろしく。」

シャナ「当麻達のクラスメイトの平井シャナ。シャナでいい。」

なのは《アリサちゃんの声…これで4人目……。》

はやて《もう突っ込まへん……》

なのはとはやてはシャナの声を聞いて最早心の中で突っ込む気すらなくしていた。

274

北斗「いらっしやい、2人共。注文は……いつも通りでいいかしら？」

悠二「はい。」

シャナ「お願い。」

当麻「どうせだし俺達もなんか頼むか。」

一護「それもそうだな。」

リクオ「うん。」

なのは「あ、それなら手伝います。これからここで働くんですし。」

フェイト・はやて

「そうだね（せやね）。」

北斗「あら、いい心がけ。それじゃあ、お手並み拝見も兼ねて手伝って。ヒナちゃんと歩ちゃんはあれをお願いね。」

ヒナ・歩「はい！」

数分後

なのは「お待たせしました！ 当麻君と一護君、リクオ君、悠二君はコーヒー。シャナちゃんはホットココア。ナギちゃんとハヤテ君は紅茶だったよね？」

ナギ・ハヤテ「ああ（はい）。」

当麻「サンキュー、なのは。」

リクオ・一護「ありがとう（よ）。」

悠二・シャナ
「ありがとう。」

そして皆それぞれ飲み物を口を付けた。

当麻「ん？ このコーヒー旨いな。」

フェイト「あ、それ私が煎れたの。」

一護「フェイトが？」

フェイト「うん。私の母さんやお兄ちゃん、コーヒーに結構煩かったから。」

ハヤテ「この紅茶もおいしいです。」

ナギ「う、うむ。ハヤテがいれる紅茶とはまた違った旨さなのだ…。」

なのは「それは私の実家の喫茶店のオリジナルなの。」

ハヤテ「そうなんですか。いや、勉強になりました！」

シャナ「……これ、おいしい……。」

はやて「あ、ホンマに？ それ私の家族によく出してた私特製のコアなんや。良かったわ、口に合って。」

という感じでなのは達の作った飲み物は大変好評だった。それを見た北斗は……

北斗「最早即戦力ね。バイトで雇ってるのが勿体ないくらい……。」

そう呟いていた……。と、ここでなのはが、

なのは「そういえばさっき北斗さんが言ってた“いつもの”って何？ なんかヒナちゃんと歩ちゃんが作ってるみたいだけど……。」

一護「ああ、そいつは多分……」

するとそこに、

ヒナギク「はい、お待ちどうさま。」

ヒナギクと歩が何かを運んできた。それは……

歩「どんぐり特製のメロンパン3個です!」

フェイト「メロンパン?」

はやて「メロンパンなんてメニューにあったやろか?」

北斗「無いわよ。だってシャナちゃんのためだけに作ってるこの店の超裏メニューなんだから。」

なのは「ええ！？ シャナちゃんのためだけに！？ でもどうしてなんですか？」

当麻「それは平井が三度の飯よりメロンパンが好きだからだよ……。」

悠二「あはは、昔からシャナはメロンパンが好きだからね。」

はやて「ん？ 昔からってことは……ひよっとして2人は幼なじみかいな？ それともひよっとして恋人！？」

リクオ「その両方だよ、はやて。」

はやて「……………え？……………」

なのは「リ、リクオ君？」

フェイト「それって一体どういうこと？」

リクオ「この2人は幼なじみで、しかも学園都市に来た時から恋人同士なんだよ。」

なのは・フェイト・はやて「……………ええええええっ！！??」

リクオから聞かされた思わぬ事実になのは達は驚きの声を上げ、悠二とシャナを見た。すると、

悠二「あ、あははは……………」

シャナ「……………／／／／／。」

悠二は苦笑いを浮かべ、シャナは顔を真っ赤にしながらメロンパン

を頼張っていた……。

はやて「ホ、ホンマみたいやな……」

フェイト「ふ、2人が付き合ってたなんて……」

なのは「びっくりなの……」

当麻「まあこいつらが付き合ってるって話は学園じゃ結構有名だしな。」

シャナ「う、うるさいうるさい／＼／＼／＼……!」

シャナ・悠二以外

「あははははは……!」

こうして賑やかなティータイムは過ぎていった……。

1時間後

いろいろな話をした後、“どんぐり”を出て皆それぞれ帰路に着いていった。

一護「なんか今日はかなり知り合いに多く会った上に1日の内容がかなり濃かった気がするな。」

リクオ「そうだね。今日だけで10人以上は会ってるよ多分……。」

当麻「その分不幸な目にも会ったけどな……。」

なのは「にゃはは……。」

フェイト「でも皆、いい人達ばかりだ。」

はやて「せやね。皆温かく私らのこと受け入れてくれたな。」

当麻「まあな。この街には良い奴らがたくさんいるぜ。」

なのは「……でも私達の魔法を見たら皆……」

そう、実はなのは達は一度魔法を当麻達に見せているのだ。当麻達は最初こそかなり驚いていたがすぐに信用してくれた……だがそれで他の人達に理解されるかどうかはまた別である。やはり不安というのは付き纏うものなのだ……。すると一護は、

一護「心配ねえよ。ここは科学の街でもあるけどよ、同時に非科学現象のオンパレードな街でもあるんだ。説明のつかないような力を持った連中はたくさんいる。今日だっていただろ？　そういう奴らが。」

一護にそう言われてなのは達は思い返す。電気を自在に発生させる御坂美琴……。レポートのできる白井黒子……。あり得ない怪力を持つ神楽……。そして異常な速さで自転車を走らせるほどの身体能力を持った綾崎ハヤテ……。今思えば皆、なのは達の元いた世界には絶対いなかった人物である。

当麻「俺達もここに来た時は不安だったけどな……。それも一瞬で馬鹿馬鹿しく思えてきちまつたくらいだ。この街はお前らの魔法で狂うほど脆くもないし、器も小さくねえよ。だから……。笑っていいんだ、お前らは……。」

そう言い放つ当麻は夕焼けに照らされていて一層輝いて見えた……。そしてそれを見たなのは達も……

なのは・フェイト・はやて「……………うん!!」

自然と笑顔になるのであった……………。

E
N
D

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！（後書き）

どうも黒狼です！！

という訳で銀魂、ハヤテのごとく、そして灼眼のシャナのキャラを出しました！

今回銀魂は神楽のみでしたけどこれから先いっぱい出す予定です。
この作品の主軸アニメの一つですので！

またハヤテのごとくは今回主要キャラをほぼ全員出しました！ 西沢さんなんかは他のクロスオーバーだと出演皆無なんですけど、自分は嫌いではないので出演させました。まあ、声優ネタに使えるんじゃない？という考えもあったんですけどね……。あ、唯一主要キャラで出なかったあの不器用少年も当然出しますよ。彼の声の声優さんもりりなのに出てますからね。……キャラ的にはりりなののがキャラの方が好きなのですが……。

灼眼のシャナに関しては今アニメ最終章やってるので出してみました。ですが内容はほぼ知らないと言ってもいいくらいなので原作とだいぶキャラが違っててもいいかもしれません、ごめんなさい！ ですがいずれこの作品で灼眼のシャナを中心としたシリアスでも書いてみようかなと思ったりもしてます。

すみません！ 後書きまでグダになってしまいました！ 次回は新しく現れたキャラの紹介を書こうと思います！ ひょっとしたら一部に分けるかも……。

ではまた！

キャラ紹介（とある魔術の禁書目録&緋弾のアリア） ネタバレあり！！（前書

キャラ紹介って意外と大変であるということに気付いた今日この頃です……。

今まで出てきたキャラの紹介です！ 今回は禁書目録&緋弾のアリアです！

またキャラの使用している銃や刀も書いてあるので、詳しく知りたい方はWikipediaとかで調べてみてください！

ではごっごー！！

キャラ紹介（とある魔術の禁書目録&緋弾のアリア） ネタバレあり！！

とある魔術の禁書目録

土御門元春

年齢 17

身長 179

能力 陰陽術

V 勝杏里

（“BLACKCAT”のバルドリ阿斯・S・ファンギーニ、“魔法少女リリカルなのはStrikersサウンドステージ”のヴォルツ・スターン、“NARUTO”の赤銅ヨロイetc）

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。逆立った金髪とグラサンが最大の特徴。また私服は基本アロハシャツである。

普段は語尾に「〜だぜい。」「や〜にやー。」を付けて喋るが真面目な場面では普通の口調に戻る。

学園内では“3バカデルタフォース”の一角として認知されており成績は当麻より悪く下の中だが、本気を出せば上位ランカーと同等の実力を持っていて、頭の回転の良さに関しては学園内では1、2を争うほど速い。

統括理事長の親船から銃刀携帯特別免許の取得を許可されており常に拳銃を所持していて、使用拳銃は“モーゼル 96”。また体術に関しては一護と互角で渡り合えるほどの腕前。

親船とはかなり前からの知り合いのようで彼女の依頼を受けて単独で調査をすることも少なくない。そのため学校にこない日もありそれがバカの理由とも言える。

実は世界最高の陰陽師と言われており、折り紙を用いて炎属の術式や探知術式などを扱い、中でも水属性の術式が得意である。原作とは違い肉体強化が無い^{オートリバース}ため普通に陰陽術を使えるが、余程のことが無いかぎり使用しない。家柄の関係上、鷺ノ宮伊澄とは彼女が幼い頃から親しく彼女にとっては師匠的立場でもある。

ちなみに高校生にも関わらず当麻達の住んでいるアパートの大家でもある。また重度のシスコンで、同じ部屋で同居している妹を溺愛しており、正直手を出していないかどうかどうかも怪しい関係らしい。

御坂美琴

年齢 16

身長 161

能力 発電能力者
(エレクトロマスター)

V 佐藤利奈(“魔法先生ネギま!”のネギ・スプリングフィ

ールド、“青のエクソシスト”の霧隠シュラ、“みなみけ”の南春香（e t c .）

自由学園高等部の1年生で短い茶髪に整った顔立ちが特徴。かなりのお嬢様育ちのようだが、コンビで漫画を立ち読みしたり制服のスカートの下に短パンを履いたりしているなど上品とは言い難い。

学校での成績は非常に優秀で常に学年トップ5の成績を修める上に運動神経も抜群である。また性格はかなり負けず嫌いかつ男勝りなところがあるため、学園内では男女共に慕われ人気も高い。

能力は発電能力者。エレクトロマスター超能力の一種で体から最大10億ボルトの電気を発生させ自在に操ることができる。またコインを用いたオリジナル技“超電磁砲”レールガンは彼女の異名にもなっていて、その威力は戦車も一撃で破壊できる。また砂鉄を集めて剣を作ったり電子操作によるクラッキングしたりできるなど応用性の高い能力でもある。ちなみに原作では“超電磁砲”が能力名となっているがこの作品ではあくまで技名である。

原作のように当麻に対して好意を抱いているかは不明。

白井黒子

年齢 16

身長 157

能力 空間移動
(レポート)

V 新井里美
(“オオカミと七人の仲間たち”のナレーション、“生徒会役員共”の畑ランコ、“フェアリーテイル”のビスカ・ムーラン e t c .
)

自由学園高等部1年生で美琴のクラスメイト。赤みがかった茶髪のツインテールと語尾に「〜」ですの。「や〜」ですわ。」のようなお嬢様口調が特徴。

美琴を「お姉様」と呼んで慕っているが、能力を使つての過激なスキンシップで美琴に鉄拳制裁を食らうのが日常茶飯事となっている。学校での成績は美琴ほどではないがやはり上位優秀者で身体能力も高く、女子からはかなり慕われている。男子からは微妙（美琴への態度から百合属性があると思われるため）。

第177支部所属の風紀委員で不良などからは“腹黒テレポーター”などの異名でかなり恐れられている。

能力は空間移動^{テレポート}。超能力の一種で自分あるいは自分が触れている物を空間移動させることができる。基本的には相手の頭上に空間移動してドロップキックしたり、相手を逆さまに空間移動させて転ばせたり、太もみに忍ばせている鉄の棒を瞬間移動させて相手の服を射ぬき壁や床に張りつけたりして相手を攻撃し無力化する。

親船最中

年齢 58

V 清水香里《仮》

（“リリカルなのはstrickers”のミゼット・クローベルの声をイメージ。）

学園都市統括理事会理事長で名実共に学園都市のトップを務める初老の女性。

統括理事会の中で一番の人格者であり、同時にかなりの善人でもあるため（本人はそれを否定している）、当麻達からはかなり信用されている。

自由学園高等部の数学教師である“親船素甘”は彼女の1人娘であり、娘の編んだセーターを着るなど娘想いの母親という側面も持つ。

だがその一方で非常に策略家で交渉術においてはかなり長けている。その実力は昔外務省から外交官として何度もオファーされたこともあるほどらしい。

海原光貴（本名エツアリ）

年齢 17

身長 174

能力 トラウイスカルパンテクウトリの槍

V 岸尾だいすけ

（“D・スダ・カーポ”の杉並、“フェアリーテイル”のロキ、
“クロスゲーム”の千田圭一郎 etc.）

親船の側近で常に白いスーツを着ている少年。見た目は黒髪の日本人だが本名の通り南米系の外国人で素顔は褐色肌らしい。基本的に

は穏やか且つ物腰の柔らかい性格で誰に対しても敬語で話すが、一方で腹黒い一面もある。

能力はトラウイスカルパンテクウトリの槍。金星の光を黒曜石のナイフで反射しその光を浴びたものを構成するパーツに分解することができる。ただし対象は1度につき1つであるため複数相手には不向き。また相手の皮膚を用いて変装することもできる。

原作同様、美琴に惚れており彼女を守るために動くこともある。

結標淡希

年齢 17

身長 163

能力 座標移動

(ムーヴポイント)

V 櫻井浩美

(“Angel Beats”の仲村ゆり、“フェアリーテイル”の
リサーナ、“恋姫無双”の孫権 etc.)

海原と同じく親船の側近を務める少女。長い赤髪を2つに分け、上半身は胸を隠す程度の桃色の布の上からブレザーを羽織り、下はミニスカートだけというかなり露出度の高い格好をしている。

冷めた性格をしているがショタコンであるという噂がある……。

能力は座標移動。ムーヴポイント超能力の一種で、テレポート空間移動とは違い、触れていなくても物体を移動させることができる。昔能力を誤って使用して大怪我を負ったためトラウマになっていたが、現在はそれを克服しているため自分を移動させることも可能になっている。

また装備として警棒兼用の軍用懐中電灯を所持している。

緋弾のアリア

遠山キンジ

年齢
17

身長
176

能力
SS
ヒステリア・サバン・シンドローム

V 間島淳司

（ “ とらドラ！” の高須竜次、 “ これはゾンビですか？” の相川歩、

“花咲くいろは”の宮岸徹 e t c .

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。遠山金四郎の子孫で、兄が1人いたが亡くなっているらしい。

学校の成績は普段は当麻と同じで中の下、運動神経も普通より少し上程度である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”のリーダー。

能力は ヒステリア・サバン・シンドローム SS、通称“ヒステリアモード”。性的興奮状態になった際身体能力が通常の30倍に向上する遠山家の特異体質で、頭脳も学年成績トップ3を争えるほど良くなるが、女を守ることを最優先事項としてしまつて周りが見えなくなったり、気障な言動をしてしまふなどの反作用もあり、本人はこの能力を少なからず嫌っている。

ヒステリアモードを避けるために女性との接触などを避けてきたので恋愛には鈍感。

武器は原作の1学期と2学期の武器を両方所持していて、ベレッタ 92F、デザートイーグル・50 の2つの自動式拳銃とバタフライナイフ、長剣「スクラマ・サクス」、そして格闘用グローブの「オロチ」の5つである。

神崎・（ホームズ）・アリア

年齢 17

身長 142

能力 緋色の攻力
（スカーレット・フォース）

V 釘宮理恵

（“リリカルなのは”のアリサ・バニングス、“フェアリーテイル”のハッピー、“テイルズオブシンフォニア”ラタトスクの騎士“”のマルタ・ルアルディ e t c .）

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。ピンク髪のツインテールと赤紫色の瞳が特徴。好きなものは“喫茶どんぐり”のももまん、嫌いなものは雷と水泳。カメラア
ようはカナツチ

直情的かつツンデレな性格で、何も考えずに物事に突っ込むことが多い。口癖は「風穴開けるわよ!」。学校での成績は常に上位で、特に外来語に関しては昔海外を転々としていたため17カ国語を話せるらしい。また運動神経も抜群である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”の副リーダー。カド“二刀二銃のエリア”や“緋弾のエリア”の異名を持っている。

イギリスの名探偵“シャーロック・ホームズ”の曾孫であるが、推理力に関しては皆無である。

能力は緋色の攻力。スカレット・フォース体内に埋め込まれた“緋緋色金”という物質によつて全てを消し去る“緋弾”を放つなど超常的な力を発揮することができ、あまりこの力を使うことはないらしい。

使用武器は二刀二銃カトラの名の通り、2本の小太刀とコルトガバメント2丁で、“バーリトウッド”つまり総合格闘技も会得している。

星伽白雪 ほとぎ

年齢 17

身長 162

能力 シャーマン
鬼道

V 高橋美佳子
（“リリカルなのは”のクロノ・ハラウン、“テニスの王子様”の竜崎桜乃、“スーパーロボット大戦 G”のクスハ・ミズハ）
tc・c）

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。黒髪ロングヘア

の“大和撫子”と呼ぶに相応しい雰囲気の特徴で、穏やかでほんわかとした性格。文武両道の超優等生で自由学園高等部の2年生徒会の会長を務めており学園での人気は女子の中で1、2を争うほど高い。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、“バスカールビル”のメンバー。

能力は鬼道^{シャーマン}。一護の死神とはまた違った鬼道で、中でも炎属の術が得意である。また“星伽候天流”という剣技の使い手でもあり、その実力は車を石川五門の“斬剣”よろしく真つ二つに両断してしまうほど。

使用武器は日本刀“色金殺女”^{いろかねのあやめ}と鎖鎌、そして60。キンジとは幼なじみであり同時に好意を抱いている。そのレベルは毎日弁当を作るなど身の回りの世話をしたり妄想に浸ったりするほど。だが当の本人には気付いてもらっていない。

また実・義理を含めて妹が6人いるらしい。

峰理子

年齢

17

身長 156

能力 念動力

(テレキネシス)

V 伊瀬茉莉也

(“フェアリーテイル”のレヴィ・マクガーデン、“エア・ギア”の野山野林檎、“初恋限定”の有原あゆみ e t c .)

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。ゆるい天然パーマの長い金髪をツーサイドアップに結っていて幼い顔立ちなのが特徴。また意外と巨乳である。性格は基本的にバカっぽいが、真面目な場面では鋭い口調になり雰囲気も大きく異なる。

学校での成績は意外に優秀で常に上位近くに食い込み運動神経も

良く、クラスではムードメーカー的存在。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、バスカービルのメンバー。情報収集と変装などの諜報分野におけるエキスパートで、SS時のキンジとアリア2人を相手に互角以上で張り合えるほどの実力も持っている。

本名は理子・峰・リユパン4世。アルセーヌ・ルパンの曾孫である。

能力は念動力^{テレキネシス}。自分の髪をまるで手足のように自由自在に操ることができる。

使用武器は2丁のワルサー 99とウィンチェスター 1887、デリンジャーで、また時速150キロ出せる軍用スクーターバイク“ベスパ”も所有している。

大胆な行動をしてキンジをからかったりすることが多いが、実際はキンジに対して好意を寄せている。

レキ（蕾姫）

年齢 17

身長 157

V 石原夏織

（“輪廻のラグランジェ”の京乃まどか e t c .）

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。エメラルドグリーン色の短い髪を結っているのが特徴。学校での成績は常に上位で運動神経もそれなりに良い。無口・無表情のため学園内では“ロボット・レキ”のあだ名で呼ばれていて、クラスの中では目立たない存在である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、バスカービルのメンバー。狙撃のスペシャリストで、その腕前はおそらく世界トップクラス。ただ銃剣以外の近接戦闘は苦手。

視力は原作よりも上の8・0で遠くの物もスコープなしで見える。常にヘッドホンで風の音を聞いている。また食事は常にカロリーメイトで、寝る時は銃を抱えたまま体育座り。猛獣を短時間で手懐けるといいう特技を持っており、自室に“ハイマキ”という白い狼を飼っているらしい。

“ウルス族”というモンゴルの遊牧民族の出身で、チンギス・ハンこと源義経の子孫。使用武器はドラグノフ狙撃銃（SV D）と

銃剣、そしてバレット 82。

どうも！ 黒狼です！

今更書いてて気付いたことがあります……。

なのは達の背丈を縮めなきゃよかった ！！

いや、なのは達って縮まなくても結構小柄だったんですね。美琴の身長がなのはより上だなんてこれっぽっちも思わなかったです……。ちなみに美琴とアリア以外は身長がわからなかったため適当です。

能力に関しても結構変更点を増やしました。特に土御門に関してはアニメで毎回魔術使っては血を吐いている姿を見て、すごく不憫に思えてきたので肉体再生を消しました。オート・リパースあと伊澄とは親しいという設定はだいぶ前から決めていましたよ。

気付いた方も多いと思いますが、アリアの能力名はかなり適当です。自分でも“ネーミングセンス無いな……”と思いました。御勘弁下さい！

今回もあとがきがグダグダしてしまった……。次はハヤテのごとく
&灼眼のシャナの紹介です！

ではまた！！

キャラ紹介（ハヤテのごとく&灼眼のシャナ）

ネタバレ注意！（前書き

キャラ紹介第二弾！

今回は「ハヤテのごとく」と「灼眼のシャナ」です！！

そんなにキャラの改変はされていないはず……。

ではどうぞ！

キャラ紹介（ハヤテのごとく&灼眼のシャナ）

ネタバレ注意！

ハヤテのごとく

綾崎ハヤテ

年齢
16

身長
168

V
白石涼子

（“リリカルなのは”の高町美由希、“ネギま！”の長瀬楓、“S K E T D A N C E”のヒメコ e t c .）

自由学園高等部1年生で日本最大の財閥“三千院家”の執事。ややくすんだ水色の髪に女の子のような顔立ちが最大の特徴で、性格は極めて温厚かつナイーブである。

成績は周りの優秀な人物達に教えられているおかげで上の下。運動神経は学年の男子の中ではトップクラスの良さである。また学校では女子からの人気がかなり高い。

特異能力は無いもののとんでもない身体能力の持ち主で、自転車を最大200キロのスピードで走れたり、素手で300キロもある虎を投げ飛ばしたりでき、また車にひかれたり高いところから落ちてもかすり傷程度で済むという、まさに人外な体をしている。

また料理、洗濯、掃除、裁縫などの家事はプロ級な上に様々な分野に精通した知識を持っており基本的になんでも器用にできる。

銃刀携帯特別免許を所持している第150支部所属の風紀委員で、その力は1人で暴力団を壊滅させられるほど。またサーベルで岩を切り刻んだり自衛隊や警察の特殊部隊の装備である銃器を扱えるなどの武器スキルも半端ではない。

親が1億5000万の借金を押しつけた挙げ句に逃げてしまい、その借金返済のために執事として働いている。

当麻並みの不幸性質の持ち主で、下手をすれば当麻を上回るほどの不幸に見舞われることもある。

恋愛に関してはとんでもなく純情でありからかわれる事もしょっ

ちゅう。また他人への好意を察して気を遣ったりすることができ
が、自分への好意には超鈍感である。
ちなみに兄が1人いるらしい。

三千院ナギ

年齢 13

身長 138

V 釘宮理恵

自由学園高等部1年生で日本最大の財閥“三千院家”の令嬢。緑色の瞳と明るい金色の長髪をツインテールに結っているのが特徴で性格は基本ツンデレだが時に素直だったり子供っぽいところもある。

高等部へ飛び級した上に学年トップクラスの成績を修められる程頭が良く、海外にいたことが多いため8ヶ国語を話せる。また経済にも精通していて、その知識は多分経済アナリストよりも詳しい。だが運動神経はからつきしで体力もまるで無い上にカナヅチ。だが体は柔らかい。

女の子らしい言葉遣いで喋ることはなく「〜だぞ。」や「〜なのだ。」と語尾に付けて話すなど、子供っぽい一面を表に出そうとはしないが、雷や幽霊、暗闇が苦手なためか今でも1人で寝れず、また食事に関しても好き嫌が多いなど精神的には子供そのものである。

家事スキルはおそらく世界一酷い。料理は某湖の騎士並みの兵器と化し、掃除をすれば家の中がメチャクチャになる。紅茶を入れようとただけでもキツチンが震災後のようになってしまうほど。

令嬢であるためか金銭感覚は完全に崩壊しており簡単に億単位の金額を動かすほど。また一般常識にも疎く、つい最近まで電車はゲームの中の存在だと思っていて実在していることを知らなかった上に、地下鉄に至ってはその単語すら聞いたことがなかった……。

ゲームやアニメ、さらには同人誌が大好きで、家には尋常ではない数の漫画があったり、各ゲーム専用の部屋が存在したりもする。その知識量はそこのオタクでは太刀打ちできないほど膨大である

らしい。また漫画を自分で執筆しているが内容を理解できるのは伊澄だけで他の人には全くもって意味不明な内容らしい。

幼少時によく誘拐にあつていたため引きこもりがちで、難癖付けをよく学校を休もうとする。今はそこまではないが昔は“外出するのは殆ど家出の時だけ”と言われるほどだったらしい。

一緒に飛び級した伊澄や咲夜達とは特に仲が良い。また幼い頃咲夜や伊澄と共に誘拐された時に当麻達に助けられたことがあり、昔は当麻達のことをそれぞれ“当兄”、“一兄”、“リク兄”と呼んで甘えたり我が儘を言つて困らせたりしていたらしい。今は普通に接しているが、本心ではかなり信頼しているようだ。初めて会ったときからハヤテに一目惚れしており、しかも勘違いから相思相愛の関係と思つていようだが当のハヤテは全然気付いていない。

実は財界では知らない者はいないほどの有名人で彼女の行動によつて株式市場が大きく変動することもザラであり、そのせいか政界にまで顔が利いたりもする。

鷺ノ宮伊澄

年齢

13

身長 144

能力 術式“八葉”

V 松来未祐

（“リリカルなのは”の月村忍、“D・ゝダ・カーポ”の鷺澤美咲、“ひだまりスケッチ”の吉野屋先生 e t c .）

自由学園高等部1年生で、鷺ノ宮家の令嬢。黒髪ロングヘアと和服が最大の特徴で、性格は天然でおっとり…というよりは鈍感で才口オロしていることが多いが、その反面かなり頑固。ナギと同様飛び級できるほど頭が良く4ヶ国語を話せるが、ドジなところがあるためか運動は苦手。学校では数少ない癒し系なためかなりの人気がある。

おそらく世界一の方向音痴で、自宅に居たはずなのにいつの間にかナギの家にいたり、学校に行こうとして海外へ渡っていたりなど超次元的迷子になりやすい。だが家族のほとんどが自分以上におっとりとした性格であるため自分のことをしっかり者だと思っている。

またナギ同様金銭感覚は常人離れしており、なおかつ常識知らず。折り畳み式携帯が開かないのは携帯が壊れているからだと思ったり、咲夜のありえない冗談を真に受けて本当に実行しようとしたりする。意外なことに料理が得意らしく、書道や生花などの日本の伝統的文化を趣味としているなどまさに日本のお嬢様と呼べる一面もある。幼い頃ナギや咲夜と共に誘拐された際に当麻達に助けられたことがあり、それ以来当麻達のことを“兄様”と呼んで慕っている。また土御門とは家柄の関係で幼い頃から世話になっているようで能力面においては師と仰いでいる。

能力は術式“八葉”。陰陽術の流派の一つであり、特殊な御札を用いるのが特徴。その能力は鷲ノ宮家歴代最強と言われているがまだ幼く未熟なため上手く制御できないらしい。ナギの暗闇に対するトラウマを作ったのは伊澄の術が原因であるようで、ナギには能力のことを秘密にしている。初めて会ったときからハヤテに対して好意があるようなのだが、ナギの気持ちに気付いているため一歩身を引いている。また自分に対する好意には鈍感。

年齢 13

身長 142

V 植田佳奈

自由学園高等部1年生。三千院家の分家にあたる“愛沢家”の令嬢でナギの従姉でもある。灰色のおかつぱ頭が特徴で、性格は典型的な関西人。もちろん話す時は関西弁である。

ナギや伊澄同様飛び級であるため学校での成績は常に上位で、運動神経は普通。はつきりとした性格であるためか女子からの人気が高い。

関西人であるためかお笑いが大好きで、はやて同様どこからとも

なくハリセンを出して突っ込みを入れたりする。また「神出鬼没がデフォルトで備わってる」らしく、突拍子もなく突然現れることが多い。

十分お嬢様であるがナギや伊澄とは違い常識的で金銭感覚なども庶民のそれに近い。だが人探しのために数千人規模でローラー作戦を敢行したり、くだらない思い付きで並みの豪華客船よりもずっと大きな船を作ったりと発想はやはり常識はずれである。

5人姉弟の長女でありナギや伊澄にとっても姉のような存在であるためか本人は妹として甘えたいという願望を持っている。それゆえ幼い頃助けてくれた当麻達のことを“当兄”“一兄”“リク兄”と呼び、本当の兄のように慕っている。実は元々最初に当麻達のことを兄呼ばわりしたのは咲夜である。

巻田と国枝という一流の執事がいるのだが本人は基本的に単独でいることが多い。

また伊澄同様料理が得意。特に和食料理は絶品で心が和むらしい。

桂ヒナギク

年齢

16

身長 161

V 伊藤 静

(“D・Grayman”のリナリー・リー、“咲 saki”の竹井久、“リリカルなのはstrickers”のシャリオ・フィニーノ etc.)

自由学園高等部1年生で1年生徒会の会長。明るいピンク色のロングヘアーが最大の特徴で、凛々しさと格好良さを兼ね備えている。怒りっぽく負けず嫌いだが、真面目で困った人を放っておけない優しい性格の持ち主。

成績は常に学年トップで運動神経も体育祭で学年別1位を総ナメするほど抜群であり、加えて剣道部の副部長を務めながら生徒会の仕事もきっちりこなすという完璧超人であるため、学園の男女両方から絶大な人気を誇っている。

銃刀携帯特別免許を所持している第150支部所属の風紀委員で、その強さは能力が無いにも関わらず並みの特異能力者じゃ束になっ

ても勝てないほど。「木刀・正宗」と「王剣・白桜」という2つの武器を持っている。

クラス担任で高等部の世界史担当の教師である“桂雪路”は実の姉であり、毎日姉のことで頭を悩ませている。

ハヤテに対して好意を抱いている。また西沢歩とは恋愛について相談できる親友であり恋のライバルでもある。

自分の胸の小さいことや女らしくないことにコンプレックスを抱いている。また重度の高所恐怖症であり高いところは全くダメ。

西沢歩

年齢 16

身長 162

自由学園高等部1年生で、ハヤテ達のクラスメイト。やや紫がかった黒髪を短めのツインテールで結っているのが特徴で、性格や雰囲気はまさに普通の女子高生である。

学校の成績は親友のヒナギクのおかげで中の中。運動神経は並みだが体力は人並み以上ある。普通を絵に書いたような感じであるため見た目は地味だが、ルックスは結構良いため意外と男子からの人気がある。

語尾に「かな」や「かな？」と付ける独特の喋り方で話す。また弟が1人いるせいからか、時にお姉さんらしい一面を見せることもある。

ハヤテに対して好意を抱いており、時に激しい妄想をする。

ちなみにかんりの食いしん坊で帰り道に何か食べ物を買って帰ることが多い。また当麻やハヤテほどではないが結構不幸体質でもある。

加賀北斗

年齢 46

V 平川大輔

（“おまもりひまり”の天河優人、“アイシールド21”の赤羽隼人
etc.）

第9学区にある喫茶店“どんぐり”のマスターで、黒髪短髪の中性的な顔立ちに女性のような言葉遣いが特徴。

店は元々趣味で経営してるらしいのだが客足は少ないため赤字。ヒナギクや歩をバイトとして雇っており、さらにバイトを探していたのは達を即断即決で雇った。

ヒナギクや歩、さらにハヤテやナギとは結構長い付き合いらしく、

ヒナギクや歩からは“マスター”と呼ばれることが多い。

また常連のための裏メニューを結構作っており味もかなり良い。ただビーフストロガノフやローストビーフ、鯛の活造りなど喫茶店にないようなメニューも置いてあるので“料理修行でもしていたのではないか？”とヒナギク達には思われている。

灼眼のシャナ

平井シャナ

年齢
17

身長 141

能力 炎の使徒

(フレイムヘイズ)

V 釘宮理恵

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。黒髪のロングヘアが最大の特徴で、生真面目で実直な性格であり感情をあまり表に出さない。

学校での成績はトップクラスで運動神経も抜群。ただ敬語をまるで使わず面識のない教師に対して“お前”呼ばわりするなどかなりの箱入り娘でもある。

一方で家事に関してはナギ並みの酷さであり料理に至っては何を作っても「真つ黒焦げの物体」しかできないが、パンネンクックだけはちゃんと作れる。

数少ない特別風紀委員の1人で、その強さは“学園都市の女子の中では一番強いのではないか？”と言われるほど。能力発動時の姿から“炎髪灼眼”の異名で呼ばれている。

能力は炎の使徒。^{フレイムヘイズ}「贗殿遮那」という日本刀と「黒笠」という黒いコートを顕現させ、体から橙色の炎を発生させることができる。その際には瞳や髪の色も真っ赤に染まる。

大の甘党であり好きなものは喫茶どんぐりのメロンパン。当麻曰く“三度の飯よりメロンパンが好き”とのこと。クラスメイトで幼なじみの坂井悠二とは恋人関係にあり学園内ではかなり有名である。基本的に尻に敷に敷いているが、その一方で彼を信頼しており一番大切な人間であると思っている。

坂井悠二

年齢 17

身長 165

能力 炎の使徒

(フレイムヘイズ)

???

V 日野聡

(“ゼロの使い魔”の平賀才人、“NARUTO疾風伝”のサイ、
“一騎当千”の周瑜公瑾 e t c .)

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。茶色の短髪が特徴で、性格は温厚だが優柔不断。

成績は中の上くらいで運動神経は普通とかなり地味な雰囲気であるが、クラスではいざこざを治めて落ち着かせるストッパー役になっている。

数少ない特別風紀委員の1人。普段の強さは並みの風紀委員くらいなのだが、本気で戦うことが無いため本当の実力はわかっていない。

い。

能力はシャナと同じ“炎の使徒”^{フレイムヘイス}。発動時には体の周りから白に近い銀色の炎を発生させ、大剣「吸血鬼」^{ブルート・サオガー}を顕現させる。実はまだ能力を隠し持つてるようなのだが詳細は不明である。

クラスメイトで幼なじみのシャナとは恋人関係にあり、彼女を支え守っていききたいと思っている。

どうも！ 黒狼です！

今回はオリジナル要素少なめだったと思います。強いてあげるならハヤテや西沢さんの成績が原作より格上げされていたり、ヒナギクが剣道部“部長”ではなく“副部長”で「正宗」と「白桜」を両方とも持っていたことくらいですね。

声優の欄を書いていて思ったのですが、「ハヤテのごとく」と「リリカルなのは」の声優がかなり被ってますね。ハヤテと美由希さんはともかくとして、伊澄と忍さんが同じ声だとは全く思ってたませんでした……。あ、リリカルなのはを知らない方々にはわからない話でした。すみません。

次回からようやく自由学園に登校します！

ただこれから先更新がかなりスローになるかもしれません……。…。

ではまた！！

僻みも程々にね。じゃないと凄いいことになるよ（悪い意味で）……………。（前書き）

ようやくなのは達が登校です！

今回はギャグ多めですね。新しいキャラも多少出ます！

ではではー！

僻みも程々にね。じゃないと凄いいことになるよ（悪い意味で）……………。

ドタバタな街案内から1日が経過し、現在の時刻は朝の7時20分。今日はなのは達の登校初日である……………のだが……………

なのは「……………これってどういうことなのかな？……………」

フェイト「こんなことってあるの……………」

少女達は困惑していた。その原因は彼女達の目の前にある3つの段ボール箱である。この段ボール箱は今朝玄関のドアの前に置かれていた物で、中には学校の制服が入っていた。どうやら親船が学園側に頼んで発注してくれたようなのだ。それはいい……………。問題はその制服のデザインだった……………。

はやて「これって私たちの中学の制服と一緒になんか!!??」

そう、その制服は元の世界のなのは達の母校“聖祥大付属中学校”の制服そのものだったのだ。

なのは「まさか別の世界に来て中学校の制服を着るなんて思わなかったの……。」

フェイト「う、うん……あと何でサイズがピッタリなのかも気になるかな……。」

はやて「それは別にええやろ、フェイトちゃん。」

フェイト「いや、私達だって自分の背格好を知らないのにサイズピッタリの制服を送ってくるっていうのはちょっと……。」

なのは「何だか色々と不安なの……。」

なのは達は制服を送ってきた親船に対して若干言い様のない不安を覚えた。と、そこに、

コンコンッ

一護「おい、早く着替えろよ。登校初日から遅刻じゃシャレにならねえだろ？」

フェイト「あ、うん。もうちょっと待ってて。」

数分後

心地よい春風が吹く中で、なのは達は学園都市の中心部“第10学区”を歩いていた。

なのは「何かこうして学校に通うなんて思わなかったな。」

はやて「ホンマやね。」

リクオ「そういえばはやて達は本当は19なんだよね。とてもそうには見えないけど……」

フェイト「あはは……」

改めて言いますがなのは達は背が縮んでいます。

はやて「なあ……ところで三人共何で制服がバラバラなんや？」

ここでははやてが今まで疑問に思っていたことを尋ねた。当麻達はそれぞれ全く違う制服を着ているのだ。（それぞれ原作と同じデザインです！）

当麻「ああ、それはな……うちの学校って制服の種類が馬鹿みたいに多いんだよ。」

なのは「多いってどのくらい？」

「護」……100は下らないと思うぞ……。」

フェイト「そ、そんなに!?!」

リクオ「中には何かのアニメの制服みたいなものもあるしね……。」

なのは（大丈夫かな、私達の学校って……）

なのは達の不安がさらに増大した……。

はやて「せやけど、意外と朝は落ち着いた雰囲気やね。」

フェイト「ふふ、そうだね。」

はやてとフェイトがそんな感じで穏やかな会話をしている中、

当麻「何故でせうか？ 俺の不幸センサーがビンビンに反応してる
気がするのですが……」

当麻は1人嫌な予感を察知しまくっていた……。

なのは「？ どうしたの？」

当麻「ああ、いや何でも……」

その時、

ドゴオオオオンッ！！！！

「ギャアアアアアア！！！！」

突如轟音と共に横から数人の男が吹っ飛んできた。そして……

当麻「不幸だあああ！！！！」

全員当麻のところに押し寄せ巻き込んだのだった。……ちなみなのは達は一護とリクオが掴んで避けられましたよ。

はやて「な、なんや一体!？」

一護「ああ、心配すんな。多分あいつだからな、間違いなく……」

フェイト「あいつ?……」

すると、

???「なんだよ……俺に喧嘩吹っかけてきて、この程度か? あア?」

数人の人間が吹っ飛んできた脇道から1人の少年が現れた。白い短髪に赤く獰猛な瞳をギラつかせ、そしてそれとは対照的な華奢な体

でどこかのブランド物の服を着ていた。

「ひ、ひいいいつ!」

そんな少年の姿を見て吹き飛ばされた数人の男達は一目散に逃げていった。それを確認した少年は一護達の存在に気付き、目を向ける。

「???」なんてめえらがここにいんだ? 一護、リクオ。」

一護「なんでじゃねーだろ。つーかお前こそ朝っぱらから何やってんだよ? 一方通行。^{アクセラレータ}」

リクオ「おはよう、一方通行君。」

一護とリクオは少年に普通に話し掛ける。

一方通行「あア？ 何でって別に……」

「???」「私を助けてくれたんだよってミサカはミサカは説明してる!!!」

突如幼さのある声が聞こえたかと思うと、一方通行の後ろに茶色の短い髪で頭頂部にピンと逆毛が立っている10歳くらいの少女がいた。

一護「よう、打ち止め（ラストオーダー）。」

リクオ「おはよう、打ち止めちゃん。」

打ち止め「おはようってミサカはミサカは元気に挨拶してみる!!」

一方通行「朝からうるせェ……」

と、ここで、

当麻「おい!! 人を巻き込んでおいて謝罪もなしですか!?! 一方通行!」

巻き添えを食らった当麻がようやく復活し一方通行に文句を言った。
すると、

打ち止め「おはよう！　そして相変わらず不幸だねってミサ力はミサ力は余計な一言を言ってみたり……」

当麻「あ、ああ、おはよう、打ち止め……って何だよさっきの発言は！？　ていうか余計な一言だと思ってんなら言つな……」

一方通行「……こいつらには“黙る”って選択肢はねえのかア……」

当麻と打ち止めの会話を聞きながら一方通行はそう呟いた。すると、

打ち止め「ところでそこにいる女の人達は誰なのってミサ力はミサ力は尋ねてみたり……」

一護「ん？　そっぴゃ紹介してなかったな。こいつらは今日うちの高等部に転入してくる……」

なのは「高町なのはっていうの。よろしくね。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな。」

フェイト「私はフェイト・ハラOWN。フェイトでいいよ。」

なのは達は一方通行達に自己紹介した。すると、

一方通行「……………」

一方通行はじつとフェイトを見始めた。それに対してフェイトは先ほどの光景を思い出したのか、思わず一護の後ろに隠れてしまう。

フェイト「あ、ごめんなさい……えっと、私に何か?……」

打ち止め「? どうしたの?」

一方通行「……いや、何でもねエ……悪かったなア……。俺は一方通行……そいつらと同じクラスだ……。」

打ち止め「私は打ち止め、初等部の四年生だよってミサカはミサカは元気良く自己紹介してみたり!!」

一方通行はやや面倒くさそうに、打ち止めは対照的に元気良く自己紹介をした。

はやて「ちょっとええか? 打ち止めちゃん。」

打ち止め「なあに？」

はやて「打ち止めちゃんって誰かの妹さんとちゃうか？」

そう、短い茶髪に幼いながらも整った顔立ちにはある人物の面影が確かにあったのだ。

打ち止め「んゝ……ああ！ひよつとして美琴お姉様のこと？ってミサカはミサカは推測してみる！！」

なのは「ああ！言われてみれば美琴ちゃんにそっくり！！　　といふことは打ち止めちゃんは美琴ちゃんの妹さんなんだね？」

打ち止め「え、あ、うん、そうだってミサカはミサカは肯定してみたり！」

フェイト「でも美琴はどうしたの？　一緒じゃないの？」

当麻「ああ、打ち止めは今是一方通行と一緒に住んでんだよ。」

はやて「え？……」

打ち止め「そうだってミサカはミサカはあっさりと事実を認めてみたり！！」

一方通行「おいィ……何さらっど暴露してんだア？……っーかてめエも認めてんじゃねエ……。」

なのは「でも、それっていいの？」

一護「まあ本人が望んでのことだし、美琴も認めてるしな。」

一方通行「つーかいいのかア？……そいつら今日から転入なんだろう？ さつさに行った方がいいんじゃないのかア？」

リクオ「あ、そうだね…って一方通行君、また遅刻するつもり？……」

一方通行「少なくともあの担任の朝の R に出る必要性は感じねえからなア……」

当麻「はは、まあな……んじゃ、まあまた学校でな！」

当麻達はそう言ってやや早足で学校へと向かっていった。

打ち止め「ねえ、一方通行。どうしてあの金色の髪の人のことを見てたの？」

一方通行「あア？……別に何でもねエよ……」

打ち止め「む！まさか浮気！？ってミサカはミサカは……」

ゴンッ

打ち止め「痛っ！？ 何で拳骨なのってミサカはミサカは涙目になりながら抗議してみる！！」

一方通行「てめエがくだらねえことを口走るからだア。さっさと行くぞ。」

打ち止め「うー、何か納得いかないってミサカはミサカは唸ってみたい。」

一方通行（あの女まさか……いや、まさかな……）

一方通行は1人あることを考えながら打ち止めと共にゆっくり学校へと向かい始めた。

自由学園高等部校舎前

なのは「ねえ、当麻君。」

当麻「？ どうした？ なのは。」

なのは「これって…学校なんだよね？」

当麻「ああ、そつだ。」

なのはは当麻に普通ならばおかしい質問をした。なぜなら……

はやて「いや、おかしいやろ！！ 無駄に敷地が広い上に建物の外装が立派すぎやろ！！」

そう、まず敷地が半端じゃないくらい広い。初等部と中等部と高等部の校舎がそれぞれ1キロ以上離れているのだ。そのため敷地内にはレトロな電車が走っている。そして校舎の外装も“バッキ〇ガム宮殿とさして変わんねえんじゃね？”と言ってしまっほどの豪華さである。実に超不思議な光景だ……。

一護「まあ、ナギ達の家が資金援助しまくってるらしいしな……。」

フェイト「え？ ナギ達の家がこの学校を建てるのに協力したの？」

リクオ「うん。ナギちゃんや咲夜ちゃん、それに伊澄ちゃんの家って学園都市自体の設立にもかなり貢献してたみたいで、まとめて“学園都市三大財閥”って呼ばれてるんだよ。」

なのは「やっぱりナギちゃん達って……」

はやて「規格外のお嬢様なんやな……」

そんな話をしながら当麻達は校舎内に入ろうとすると、

???「はい、ストップだ。上条、黒崎、奴良。」

けだるそうな声で当麻達は呼び止められた。その声の主を見てもみると、スーツの上に白衣を羽織り銀髪の天然パーマに死んだ魚のような目をしている男が立っていた。

当麻・一護「あ、おはようっす。銀さん。」

リクオ「おはようございます。坂田先生。」

突如現れたこの男に当麻達は普通に挨拶をする。

なのは「当麻君、この人は？」

当麻「ん？ 俺達の担任の坂田銀時先生だ。」

フェイト「……先生？……」

はやて「この死んだ魚のような目をした天パのおっちゃんが？」

銀時「おいイイイ！？ 何その発言！？ 何で“はてな”が付くんだよ！？ 大体俺おっちゃんって年じゃないから！！ まだ30より2つ下だから！！」

なのは「にやはは、面白い人だね。」

銀時「何その凄くのほほんとした発言！？ 悪意が感じられない分、微妙にム力つくんだけど！！」

リクオ「せ、先生抑えてください！ それよりどうして先生がこんなところに？ まだ職員会議終わってないですよね？」

銀時「あ？ いや、何か上条達と一緒に今日転入してくる奴らが登

校してくるだろうから、そいつらを職員室まで連れてこいっていう
教務主任の命令で来たんだが……そいつらが転入生か？」

なのは「あ、はい！ えっと、高町なのはです。」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてや。よろしゅうな、銀ちゃん！」

銀時「うん、何かいきなり“ちゃん”付けしてきた狸が一匹いたよ
うな気がするが放っておくとして……」

はやて「ちよう待って！！その狸って私のことかいな！？ 何で狸
なんや！？」

銀時「いや、何か一瞬シマシマの尻尾が見えたから……」

はやて「いや、尻尾なんて生えてへんから！　それ絶対幻覚やから
！！」

まあ、この時なのはとフェイトは“やっぱり別の世界に来ても狸なんだ……”と思っていたけど……。

銀時「とりあえずその3人は俺と一緒に職員室まで来てくれや。
上条達はさっさと教室に行ってるよ。」

当麻・一護・リクオ
「うーす（はい）。」

なのは「じゃあ当麻君、一護君、リクオ君、また後でね。」

当麻・一護・リクオ

「ああ（うん）。」

フェイト「まあ同じクラスかどうかは分からないけどね。」

はやて「せやね。けど同じクラスだったらええなあ。」

こうしてなのは達は銀時に連れられて職員室に、当麻達は先に自分の教室に向かうことになった。

S i d e : なのは達

銀時達に連れられて職員室にやってきた。

銀時「うーす。ただいま戻りましたー。」

なのは・フェイト・はやて「失礼します！」

なのは達は少々畏まった感じで挨拶をした。まあ、元いた世界では彼女達は軍人のような心構えをたたき込まれていたため、無意識の内に挨拶も礼儀正しくなってしまうのだ。

「???」ああ、その子達が例の転入生なのですねー。」

聞こえてきた声になのは達は辺りを見回してみるがどこにも声の主がない。そしてまさかと思って下を見てみると、そこにはピンク色の短い髪で白とピンクのワンピースのような服を着ているナギと同じくらいの背の女の子（？）がいた。

なのは「……女の子？……」

なのはが思わぬ人物の登場にそう呟く。すると、

銀時「あんたまだここにいたのかよ、小萌先生。」

小萌「ちょっと生徒の皆に配るプリントを忘れてしまったのですよ。」

フェイト「……え？……」

はやて「先生？……」

小萌「ああ、自己紹介をしてなかったですねー。私は月詠小萌。2年F組の担任で2年生の化学を受け持ってます。これからよろしくなのです。」

なのは・フェイト・はやて「ええええっ！？」

小萌「はわっ！？ ど、どうしたんですかー！？」

なのは「せ、先生って……」

フェイト「どう見ても小学生にしか見えないよ……」

はやて「ランドセルが似合いそうやな……。」

小萌の容姿に思わずなのは達からそんな言葉が出る。すると、

銀時「言つとくが小萌先生は酒も煙草もヘビー級だぞ。この前も小萌先生の家に行ったら……」

小萌「はわわわっ！？ 坂田先生、何を暴露しようとしてるんですか！？ やめてくださいよー！」

銀時が何かを言おうとすると小萌が手をブンブン振り回しながら抗議をする。まあ、その姿はどう見てもやっぱり小学生にしか見えな
いのだが……。

小萌「まったくもう……そんなことより早く松平先生のところに行ったらどうですか？」

銀時「おお、そうだった。」

小萌「それじゃあ私は教室に向かうですよ。それじゃあ、高町ちゃんにハラウンちゃん、八神ちゃん。今度の私の授業でまた会いましょうなのです。」

そう言うと小萌は職員室から出ていった。そしてなのは達は銀時に連れられて教務主任の先生の元に向かった。するとそこには、

「????」
「ふんふふーん」
「」

鼻歌を歌い机に両足を掛けながらハンドガンの手入れをしているグラサンを掛けたイカツイ男がいた。

銀時「おい、主任さんよ。転入生連れてき……」

ドオオンッ！！

銀時「どわあああっ！！！？？」

銀時が話し掛けると突如男は持っていた拳銃で銀時に向けて撃った。銀時は声を上げながら間一髪で躲し、なのは達は突然のことに言葉を失った。

「……………ん？　なんだお前さんか。」

銀時「おいイイイ!!?? なに人が話し掛けた瞬間に発砲してんだ!?! 俺じゃなかったら確実にあの世行きだぞ!!」

???「心配すんな。お前と他数人以外には撃たねえから。」

銀時「そういう問題じゃねえ!! つーかさっき撃つたの明らかわざとってことじゃねえか!! 大体転入生の目の前で発砲する奴があるか!!」

???「おお、そついやそうだったな。忘れてた。」

銀時「…本当にあんた教務主任かよ……。」

淡々と問題発言をする男の態度に銀時は呆れた。

「……お前らが転入生のええと……高町なによ……なのはとフェイト・ハラウンと八神はやてだな？」

「なのは（人の名前噛まないで欲しいんですけど……）」

「……俺がこの学園の高等部教務主任の松平片栗虎だ。まあ、よろしく頼むってことで早速だがお前らのクラスを伝えるぞ。さっさとキャバクラの姉ちゃんのところに行きたいし。」

「はやて「ちょ、今さらって聞き捨てならない言葉があった気するんやけど……」

松平「細けえことは気にするな。」

なのは・フェイト

（細かいんですよ……）

松平「ええと、お前らのクラスはここだ。」

S i d e E n d

S i d e : 当麻達

一方、当麻達は自分達の教室“ 2 - A ”に着いた。そして一護がドアに手を掛け開いた瞬間、

???「いつちー！ー！！！」

誰かが一護に向かって突っ込んできて……

ドゴッ

一護「おーす、圭吾ー。」

一護の淡々と挨拶しながらのラリアットをもろに受けて撃沈した。

圭吾「い、一護……親友の挨拶に対して……ラリアットで応えることではないのでは?……」

一護「お前が普通に挨拶してくるなら普通に返してやるよ。」

一護に突っ込んできた茶髪で顔がそこそこ良い男子は浅野圭吾。見てわかる通りバカだ。

圭吾「大体今回はビッグニュースがあるんだぞ！」

リクオ「ビッグニュース？」

当麻「何だそれ？」

「???」
「なんや知らへんのか？ 上やん、リクやん。」

突如当麻達に関西弁で話し掛けてきたのは青い短髪で耳にピアスを付け、一護よりも背の高い大柄な男子学生だった。名前は青髪ピアス。え？ 名前じゃないдарって？ そんなこと言ったって誰も名前知らないし……。

青髪「聞いて驚かへんでや？ なんと今日高等部2年に転入生が来るらしいで！！ それも3人も！！」

当麻「知ってるぞ。」

青髪「なんやと！？ 知ってるなら知ってるって言うてや、上やん、リクやん。」

リクオ「だって僕達さっき一緒に学校来たしね。」

青髪・圭吾「な、何だと（何やて）
！！？？」

リクオの発言に青髪と圭吾は驚きをあらわにした。

圭吾「一護！！ お前また転校生とすでに仲良くなってるパターンか！？」

青髪「ほんで！ 転入生は女の子かいな！？」

一護「あ、ええと……」

キンコーンカーンコーンッ……

リクオ「あ、チャイムも鳴っちゃったし、後で話すよ。」

青髪「なんちゅうタイミングや……。」

圭吾「後でたつぷりと聞かせてもらっぞ、一護！」

一護「はいはい……ったく……。」

チャイムが鳴り響くとクラスの全員が席に着いた。そして、

ガラガラッ

担任である銀時がダルそうにしながら入ってきた。すると、

???「起立！」

1人の女子生徒が号令を掛けた。彼女の名は吹寄制理。このクラスのクラス委員であり、ややクセのある黒髪のロングヘアと某烈火の将並みの胸部が最大の特徴だ。

吹寄「気を付け！ 礼！」

全員「おはようございます！」

吹寄「着席！」

銀時「そんじゃあホームルーム始めるぞー。と、その前に、うちの学年に転入生が3人来ることは何人かの奴は知ってると思うが、全員うちのクラスになった。」

圭吾「先生！ 転入生の中に女の子はいますか！？」

銀時「はい、全員女子です。」

オオオオオッ！！！！

男子A「マジか！？」

男子B「ついに俺達にも春が!!」

銀時の言葉にクラスの半分以上の男子が歓声を上げた。

銀時「はい、静かにしろー。じゃあ、転入生を紹介すんぞ。高町、ハラオウン、八神。入ってこい。」

なのは・フェイト・はやて「はい!!」

銀時の指示を受けてなのは達は教室に入り黒板の前に立った。

なのは「えっと、高町なのはです。今日からよろしくお願いします。」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。」

はやて「八神はやて言います。皆よろしゅうな。」

ウオオオオオオッ!!!!!!!!!!

先ほどもよりもさらに大きな……というかうるさいくらいの歓声なのは達はビックリする。

男子「キターーーーー!!」

男子D「何だあのクオリティは!？ 3人共間違はなく上位クラスだぞ!!!」

男 「しかも1人は外人とは！ 女子の人気ランキングが大きく変動することは間違いないな！！」

最早教室内はある意味で混沌と化していた。と、そこへ、

ガラガラッ

土御門「にゃー、もう始まってたかー。」

土御門が悠々と教室に入ってきた。どうやらさっきの物言いからし

て、こういう状況になることをあらかじめ読んでいたようだ。

青髪「なんや土御門はん、こんな素晴らしいホームルームに遅刻してくるなんて上やん以上に不幸やで！」

一護「素晴らしいホームルームって何だよ……………」

青髪ピアスの言葉に一護は呆れ混じりにそう呟く。すると土御門は、

土御門「じゃあ盛り上がってる男子諸君にある情報を教えるぜい。」

主吾「情報？ 何だよ情報って？ まさか！ そこにいる転入生達に関する……」

土御門「そこにいる3人の転入生と上やん、黒やん、リクやんは同居してるんだにゃー。」

当麻「なっ!!??」

一護「お、おい!!??」

リクオ「っ、土御門君!!??」

ガタンッ！ 半数以上の男子が席から立つ音

ジャキンッ！ 半数以上の男子が何かを装備する音

青髪ピアス「上やん、黒やん、リクやん、説明してもらおうやないか……一体上やん達は何でそこにいる美少女転入生と同居してるんや？」

当麻「え、ええと皆さん……何故そんなに猛獣並みの形相でこちらを見てくるのでせうか？……」

一護「つーかお前らどっからそんな物出した！？ 銃や剣はともかくとしてバズーカとかミサイル砲なんざどっから出てくんだよ！？」

圭吾「甘いな一護！ 俺達には常にギャグ補正という特殊スキルが備わってるのさー！」

リクオ「格好良く言ってるけど内容は全然格好良くない気がするよ、浅野君……。」

とういか今更だけど、銃や剣もあるのもかなり不味いですよ、本当……。

青髪「ほんならとりあえず……」

男共「死ねリア充共が　　！！！！」

そう言つて半数以上の男共が当麻達に突っ込もうとしたその時、

なのは「……ねえ、皆……」

その声が聞こえた瞬間、飛び掛かろうとした男共はもちろんのこと、

それ以外の生徒達も冷や汗が大量に流れる。そして声の聞こえた方を見てみると……

フェイト「一護達に手を出したら……」

はやて「承知せえへんで（跡形も無く消すで）……」

そこには白を基調とした服を着た魔王と、黒を基調とした服を着た死神と、騎士甲冑を身に纏った王がいた。まあ王の言ってることが何か実際に言ってることと違っていているような気がするが幻聴だろう……そう思おう……。と、ここで銀時が、

銀時「あ、あ……言い忘れてたが高町達は全員高レベルの特異能力者だからな。」

今更とも言える捕捉説明を行った。そして、

なのは・フェイト・はやて」
・
・
・S
しょうか（や
？」

この日、2・全員はある一つのことを学んだ。それは……

“なのはやフェイトやはやてを本気で怒らせると魔王と死神と王が
降臨する”

END

僻みも程々にね。じゃないと凄いいことになるよ（悪い意味で）……………。（後書き

どうも黒狼です！

今回は銀さんと一方通行の登場がメインな感じでした。ただ一方通行の口調って結構大変だな書くの……………。

それと青髪ピアスはともかくとして、浅野さんの登場を意外に思ってた方も多いと思います。アニメでは前までかなり放置されてたキャラですからね……………。でも俺はギャグキャラとしては結構気に入ってるんで出しました！ まあ、声優がメジャーな人であることも一理ありますけど……………。

今回はもつと新キャラが出ると思います！ 出しすぎには気を付けろと言われたばかりなのですけどね……………。

ではまた！！

これ単なる自己紹介しかしてなくね？

はい、否定はしません……。

（前書き

今回キャラいっぱいです！

ですがその分半端ないほどグダグダです！

更新が遅れたことも含めて本当にすみません！

では本編をどうぞ！！

これ単なる自己紹介しかしてなくね？　はい、否定はしません……。

何かやで放課後……え？いきなり時間飛ばしすぎだった？　だってモブの先生方の授業の描写なんていらないでしょ？　あ、ちなみに半数以上の男子生徒は今もずっと生気の無い状態ですよ。さすがに初めての　・　・　・　S　は一般生徒達にはかなり堪えたようです……。

まあそんな話は置いといて今日は3時間の短縮授業で、現在当麻やなのは達は教室で朝作った弁当を食べていた。すると、

当麻「にしても、なのは達って頭良いんだな。」

当麻がふとそう口にした。

なのは「え？　そうかな？」

「護「いや、そうだと。普通の奴はあの数学の問題をそんなにさらさらと解けないからな、絶対。」

フェイト「まあ私やなのはは理数系が得意だし、はやては中学の時は文理両方共いけてたしね。」

はやて「私小さい頃は本の虫やったからなあ。参考書とかも少しかじって読んでたんよ。」

はやては幼い頃を思い出しながら感慨深そうに呟く。

当麻「へー、そうなのかい。はあ……俺ももうちょい成績上げた方が良くないかねえ……。」

リクオ「別に大丈夫だと思うよ、当麻。」

一護「中学の頃と違って学年で中の下の成績なら十分だろ。」

当麻のそんな言葉にリクオと一護はそう口にした。すると、

???「それ当麻に対する嫌味にしか聞こえないと思うよ、一護。」

突如一護に対してそう言う声がしたかと思うと、一護の後ろにはいつの間にか紺に近い黒髪短髪の男子がいた。

一護「おーす、水色。」

リクオ「やあ、小島君。」

水色「どうも。あ、そういえば高町さん達とは初めましてだね。
僕はこのクラスの小島水色。一護達とは中学の頃からの付き合いだ
よ。よろしくね。」

なのは「あ、うん。よろしくね！」

水色の自己紹介を受けてなのはもそれに応える。するとここで当麻
が、

当麻「ちなみに趣味は女漁りな。」

フェイト・はやて
「え？……………」

当麻から出た単語にフェイトとはやては面食らった。

水色「いや、そんな人聞きの悪いこと初対面の人たちの前で言わないだよ。」

一護「じゃあ聞くけどよ、その弁当作ったのは何人目の女だ？」

一護は水色が右手に持っているピンク色の布で包まれた弁当箱を指して尋ねる。すると、

水色「え？ ええと、にじゅ……」

リクオ「答えなくていいから！ っていうかまた彼女の人数が増えるよ小島君！？」

水色の口からとんでも発言が出る前にリクオが何とか止めた。まあ、それでも十分とんでも発言ではあるが……。

フェイト「えっと……み、水色って凄いなね……」

一護「ああ、まあな。つーかお前らもこいつには気を付けろよ、マジで。」

一護がフェイト達に対してそう注意を促した。

水色「あはは、大丈夫だよ一護。僕は年上の女の人にしか興味ないし。」

そんな一護の発言に対して水色は笑って軽く否定するが……

一護「だからだよ……」

水色「え？」

一護はやや呆れ混じりにそう言い、水色は首を傾げる。

なのは「にやはは……」

そしてなのははそんな様子を見て苦笑いを浮かべるのだった。

なのは達の実年齢 19歳

一護「つーか、水色。さっきの嫌味ってどういうことだよ？」

すると、

「???」あんとリクオが言ったら嫌味以外の何物でもないでしょ」

「???」やつほー！ 黒崎君！」

2人の生徒が一護達に話し掛けてきた。1人は紫に近い黒髪ロングヘアで気の強そうな女子で、もう一人はオレンジ髪のアッシュブロンドロングとかなり発達した胸部が特徴で、対照的にのほほんとした雰囲気の子だ。

当麻「よう、有沢、井上。」

当麻は2人の姿を見て軽く挨拶をする。

???「あ、その3人が例の転入生の高町さんとハラウンさんと八神さんか。じゃあ自己紹介した方がいいわよね。私は2 - Bの有沢たつき。よろしく頼むわ。」

???「私はたつきちゃんと同じ2 - Bの井上織姫だよ！ よろしくね！なのはちゃん！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

たつきと織姫が自己紹介すると、なのは達は驚いて織姫の顔をじっと見た。

織姫「え、ええと、3人共どうしたの？」

顔をじっと見られている織姫は若干顔を引きつらせながら尋ねる。

なのは「あ、ご、ごめん！ こっちこそよろしくね！ たつきちゃん！ 織姫ちゃん！」

なのはは少々慌てながらも何とか誤魔化す。一方その間にはやてはフェイトに念話を送った。

はやて《な、なあ、フェイトちゃん。織姫ちゃんの声って……》

フェイト《うん……エイミィの声そのものだったよ……》

フェイトははやての言いたいことを悟ると即座に肯定した。

はやて《まさかエイミィさんと同じ声の人もいるなんて思わへんかったなあ……》

フェイト《それに今思ったんだけど、銀時先生の声ってクロノとそっくりじゃなかった？》

はやて《ああ、言われてみたらそうやな。何か性格とか喋り方が天と地ほどの差があったから全然氣い付かへんかったわ……。》

またしても身内の声にそっくりな人間の登場に驚いていた。と、ここで、

一護「おい、たつき。何で俺とリクオが言ったことが嫌味になんだよ？別に普通のことだろうが。」

一護が先ほどのたつきの言ったことに納得いかないらしくそう尋ねる。

たつき「……あんだ達ねえ……自分の成績自覚してる？」

一護「は？……」

一護はたつきの言葉を聞いて思わず間の抜けた声を出してしまう。
すると水色が、

水色「一護もリクオも上位成績者でしょ？特にリクオはいつも学年でトップ3だし。」

フェイト「ええっ!？」

はやて「ホンマかいな!？」

フェイトとはやては水色の口から出た事実には驚く。

リクオ「ま、まあそうなんだけど……」

一護「リクオはともかく俺は別に大したねえだろうが。たかだか9位だぞ。」

それに対してリクオはやや苦笑いを浮かべ、一護は大して気に留めることなく受け流そうとするが、

「???」いや、一護君の成績も十分凄いよ本当。」

突如そう言う声がし一護達が声のした方を見ると、そこには眼鏡を掛けている以外に特に特徴の無い地味な男子がいた。そしてその姿を見た瞬間、

当麻・一護・たつき

「ああ……いたのか、眼鏡。」

一護と当麻とたつきが揃って興味無さそうにそう言い放った。

???「ちよつとオオオオ!!?? 何で初登場からこんな扱い！
？ ていうか作者も“眼鏡以外に特徴ない”とか言うなアアア！！
」

眼鏡の男子はかなりの大声で突っ込みを入れた。この男子の名は当
麻達と同じ2 - Aの志村新八。眼鏡と突っ込み以外に特徴が無い、
マル。

新八「おいイイイイ!!! 特徴に突っ込みが入っただけじゃねえ
かアアア!!!!」

新八は作者に対して突っ込むが、一護達から見れば誰に突っ込みを
入れているのかわからないため……

なのは「えつと、当麻君……あの人は大丈夫なの？」

当麻「まあ、いつものことだから気にするな……」

織姫「そ、そうだよ、なのはちゃん！ あれが新八君の日常だから大丈夫だよ！」

はやて「いや、あれが日常って大丈夫なんか？……」

いろんな意味で残念な人に見られていた……哀れ新八……。

新八「な、何でこんなにこの作品では僕の扱い雑なんだろ……」

あ、なんか暗くなるスイッチが入っちまったか。それなら仕方ないので……

神楽「何やってるアルか！？ このバカ眼鏡――！！！」

バキッ！！！！

新八「ごふああっ！！？」

ドゴオオオオンッ！！！！

夜兎族の鉄拳制裁でスイッチをオフにしてもらいました。

新八「か、神楽ちゃん……何でいきなり……殴る……の？……」

神楽「なんか“新八を殴れ”っていう信号をキャッチして体が勝手に動いてしまったアル。」

新八「いや、んな信号あるわけないでしょ!!」

いえ、ありますよ。さっき神楽に送りましたし…………。

なのは「神楽ちゃん!」

神楽「おお!　なのはにフェイト、はやてじゃないアルか!?　もう転入したアルか!?　クラスはどこネ!?」

なのはに呼び掛けられ、神楽はなのは達の下に駆け寄り、そう尋ねると、

フェイト「ここだよ、神楽

神楽「マジアルか!!　じゃあ私達クラスメイトアルな!!　よろしくネ!!」

はやて「こっちこそよろしゅうな、神楽ちゃん!」

同じクラスであることを知ると神楽は嬉しそうに挨拶をし、はやてもそれに答えた。と、ここでリクオが、

リクオ「ところで神楽ちゃん、今日はどうしたの?　午前中いなかったよね?」

神楽「ん?　ちょっと近所のガキ共と遊んでたアル!!」

一護「おい！ 遊んでたじゃねえだろ！？ 今日3時間だからもう学校ねえぞ！！」

神楽の堂々とした物言いに一護が突っ込んだ。

神楽「マジアルか！？ 全然知らなかったアル！」

たつき「いや、その前に午前中に学校ないとも思ってたの？ あんた……。」

たつきは神楽のよくわからない思考に思わず呆れる。と、ここでフエイトが、

フェイト「ねえ、そういえばさつき新八が“一護の成績は十分凄い”って言うってたけど、あれどういう意味なの？」

先ほどの新八の言っていたことを思い出して言った。つか、よくそんな前の言葉覚えてたな……。

たつき「ああ、それはね、この学年の13位以内の成績の奴とそれより下の成績の奴との差があり得ないほど開いてんのよ。」

なのは「差が開いてるってどのくらい？」

水色「えっと、13位より下の成績の人、つまり14位の人でも6割くらいしか取れないテストを、13位以内の成績の人達は9割を平気で超える点数を取れるんだよ。」

はやて「…そんなに差が出るテストあるんかいな……。」

はやてはあまりの極端さに思わずそう呟いた。すると、

新八「それが実際にあるんだよ、この学校には。」

なのは「ふえっ!？」

いつの間にか新八が復活し話の間に入ってきた。

当麻「よく神楽の鉄拳制裁食らって生きてるなお前……。」

新八「いや、正直今も体中が凄く痛いよ……。」

フェイト「大丈夫？ 保健室に行った方がよくない？」

フェイトが新八の体を按じてそう言うが、

神楽「大丈夫アル、フェイト。新八はちゃんと無事アルよ。だって、ほら……」

神楽はフェイトにあるものを指してそう言った。それは……

神楽「どこもヒビ入ってないアル！ レンズも無事ネ！」

新八の眼鏡だつた……。

新八「ちよつとオオオオ!!?? それ眼鏡だから！ 僕じゃないから！」

神楽「何言ってるアル？ これがお前の存在を証明する唯一の物じゃないアルか？」

新八「違ーよ!! 僕が存在が眼鏡だけしかないみたいに言つなアアー!!」

神楽のさも当然な発言に新八はややキレ気味に突っ込む。と、そこへ、

ガラガラッ

理子「理子りん登校〜!!」

アリア「理子、あんた一々声が大きい!」

キンジ「ふー、やっと学校に来れたな。」

白雪「今回ののはちょっと大変だったね、キンちゃん。」

レキ「………そうでしょうか?」

シャナ「まったく、何で私達まで駆り出されるのよ!」

悠二「ま、まあまあシャナ落ち着いて。」

チーム“バスカービル”全員とシャナ、悠二が教室に入ってきた。

リクオ「あっ！ 皆やっと来たんだ！」

なのは「キンジ君！ アリアちゃん！」

フェイト「理子！ 白雪！ レキ！」

はやて「それにシャナちゃんと悠二君も！」

リクオがキンジ達が気付き声を上げると、なのは達はそれぞれ名前を呼んだ。

白雪「高町さんにハラウンさん、それに八神さん。」

アリア「あ、あんた達何でここに!？」

なのは達がいることに気付きアリアは驚きの声を上げた。

神楽「3人共私達のクラスメイトアル!」

キンジ「そうなのか？」

理子「じゃあなのちゃん達もA組ってことだね！」

はやて「そうなんよ。皆改めてよろしゅうな！」

キンジ・アリア・理子・白雪・レキ・シャナ・悠二
「ああ（ええ）（うん）（はい）。」

はやてが改めて挨拶すると、キンジ達はそれに答えた。と、ここで、

一護「お前ら今日どうしたんだ？」

一護がもつともな質問をする。

キンジ「ああ、さっきまで風紀委員の仕事があつてな。」

当麻「風紀委員の？ 何かあつたのか？」

当麻がわずかばかり真剣な口調で尋ねる。

アリア「今日午前中に第3学区で不良グループの一斉検挙をやつてきたのよ。」

リクオ「第3学区で？ そこつて遠山君達の184支部の管轄外だよね？ 不良グループの一斉検挙くらいなら管轄外の遠山君達が参加することはないんじゃない？」

キンジ達は風紀委員の中でもトップクラスの実力を誇っている。そんな彼らをわざわざ不良グループの検挙のために召集する必要はないのである。すると、

白雪「それがただの不良グループじゃなかったの。」

フェイト「それってどういうこと？」

レキ「彼らは学園都市外部から来た犯罪者と結託して学園都市を無差別に襲撃しようとしていたんです。」

織姫「ええっ！？ それってかなりの大事件になるところだったんじゃない……」

レキの言葉に織姫は驚きをあらわにした。

理子「だから理子りん達が召集されて、警備員と風紀委員の合同で一斉検挙したって訳なのだ〜！」

水色「じゃあ、平井さんと坂井君もそれに召集されたの？」

水色はシャナ達にそう尋ねると、

シャナ「違う！ 私達は無理矢理参加させられたのよ〜！」

シャナはかなり機嫌悪そうに言った。

はやて「えっと……何があったんや？ 悠二君。」

悠二「いや、偶々その不良グループのアジトの近くを通りかかってたら知り合いの警備員の先生に捕まって半ば強制的に参加させられたんだ……」

はやての問いに悠二はやや苦笑いを浮かべながら答える。

一護「ああ、なんだ……あの人に捕まっただな……」

悠二「うん……察しの通りだよ、一護。」

なのは「一護君、その人のこと知ってるの？」

一護と悠二の会話を聞いてなのはがそう聞いた。

「一護」ああ、まあな……いずれ会つだろうし、そんな時に話すさ……。」

一護は少々げんなりした様子でそう言った。

たつき「へえ、あたし達が学校やってる間にそんなことが起こってたのね。で、全員捕まえたの？」

シャナ「そんなの当然でしょ。」

アリア「私達が高々不良グループの検挙でミスを犯したりなんてしないわよ。」

たつきがそう尋ねると、シャナとアリアは当然と言った様子で答えた。だが、

キンジ「一生もののトラウマを相手に植え付けたけどな……はあ……。
」

悠二「あはは……まあ、2人共特に機嫌が悪かったからね。」

キンジ「にしたって、アジトを全壊にする必要はないだろ……おかげで昨日に続いてまた始末書書かされることになったしな……。」

キンジはうなだれながら愚痴をこぼし、悠二は終始苦笑いを浮かべていた。と、ここで、

白雪「あ、そうだ！ 奴良君、井上さん、このあと生徒会室に来てね！」

織姫「あ、そういえば今日一年生との合同会議だったね！」

リクオ「ちょっと待ってて。今荷物まとめるから。」

白雪がリクオと織姫にそう言つと、織姫とリクオは荷物をまとめ始めた。

なのは「あれ？ リクオ君達はこの後何かあるの？」

一護「ああ、こいつらこの後生徒会の会議があんだよ。」

はやて「へえ、3人は生徒会役員なんやね。」

はやては意外そうに言った。すると、

当麻「ああ、いや、織姫は役員だけど星伽とリクオは役員じゃねえぞ。」

フェイト「え？　じゃあ2人は何をやってるの？」

当麻ははやての言ったことを否定し、フェイトは当麻の言葉の意味がわからずそう尋ねた。すると、

キンジ「白雪は会長、リクオは副会長だよ。」

なのは「ふえっ！？ 会長と副会長！？」

フェイト「2人共まだ2年生になったばかりなのに会長と副会長なの！？」

なのはとフェイトは驚きをあらわにした。すると、

リクオ「ああ、違うよ、2人共。星伽さんと僕は“2年生生徒会の会長と副会長なんだよ。”」

リクオが即座に言い直した。

はやて「え？ “2年生生徒会” っちゅうことは、ひょっとして2年生だけの生徒会？ ちゅうことなんか？」

白雪「うん。私達の学校は他の学校とは違って各学年ごとに生徒会があるの。」

レキ「その学年にはその学年にあった生徒会活動を」というのが、この仕組みの目的なんだそうです。」

はやての疑問に白雪が答え、レキが捕捉を加える。
と、ここで、

織姫「ねえねえ白雪ちゃん、リク才君！なのはちゃん達を見学させてあげようよ！」

織姫が突如そう提案してきた。

なのは「え！？でもそれって……」

フェイト「会議の邪魔になったりしないの？」

はやて「確かに。それにさっきの話やと一年生も一緒にいたいやしな……。」

その提案になのは達がそう尋ねる。

リクオ「全然大丈夫だよ、皆いい人達ばかりだし。それに一年生徒会の会長は3人共もう会ってる人だから大丈夫だよ。星伽さんもそれでいい？」

白雪「もちろん。転入してきたばかりの3人に生徒会のことをよく知ってもらいたい機会だしね。」

白雪も織姫の提案を快く受け入れた。

リクオ「どうせなら当麻と一護も来たら？ 2人共この後暇だよね？」

当麻「まあ、確かに。」

一護「たまにはあの1年連中に会うのもアリか。」

さらにリクオの提案で当麻と一護も一緒に行くことになった。

水色「あ、もうこんな時間か。一護、僕はこの後バイトあるからもう帰るね。有沢さんも今日は確かバイトなんだっけ？」

たつき「そうよ、私も丁度今帰ろうと思ってたところ。じゃあ皆、また明日。」

一護「おう、じゃあな、水色、たつき。」

織姫「またね！ 小島君、たつきちゃん！」

なのは「2人共また明日なの！」

水色とたつきはこの後バイトがあるらしく先に帰っていった。

キンジ「んじゃ、俺達は担任のところに行ってくるわ。学校に来なかった理由説明しないとさすがにまずいし。白雪のことも知らせておくからな。」

白雪「うん、ありがとう。キンちゃん。」

アリア「まあどうせ、こっちが風紀委員で来なかったことくらいあの担任ならわかってるとは思っけど……」

シャナ「面倒くさいわね。」

悠「仕方ないよ、シャナ。」

当麻「そうか。じゃあな、キンジ、アリア、理子、レキ、シャナ、悠二。」

理子「バイバイ!!」

レキ「失礼します……。」

キンジ達は担任の銀時のところへ学校へ来なかった理由の説明に行った。と、ここで、

はやて「あれ？ 神楽ちゃんと新八君はどこ行ったんや？」

フェイト「…そういえば2人共いないね。」

リクオ「ああ、さっき神楽ちゃんの新八君を連れて3・Bの教室に行ったよ。」

はやてとフェイトがいつの間にか神楽と新八がいないことに気付くと、リクオがそう答えた。

一護「3・Bに？ 何しに行ったんだ、あいつら？」

リクオ「……妙先輩がお昼ご飯を作ったから新八君に食べて欲しいんだって……。」

リクオが小声でそう言つと一護は引きつった笑顔を浮かべた。すると、

フェイト「一護？　どうしたの？」

一護「え！？　あ、いや、何でもねえよ。」

フェイト「？　そっか。」

フェイトが一護の様子を不思議に思い尋ねてきたので、一護は何とかそれをはぐらかした。

白雪「じゃあ、そろそろ行こうか。」

織姫「そうだね！　皆待ってると思うし！」

そしてリクオ達も生徒会室へと向かっていった。

突然だが、ここ自由学園にはシンボルとも言える建物が存在する。
それが……

なのは「へえ」、生徒会室つて時計塔の中にあるんだね。」

リクオ「うん。創立当時からずっとそうなんだって。」

白雪「まあ、そのせいでこのエレベーターもだいぶ古いから、またに止まっちゃうこともあるけどね。」

なのはが感心しているところにリクオと白雪が捕捉を加えた。現在なのは達は校舎から少し離れたところにあるこの学校のシンボル、

“時計塔”のエレベーターに乗っていた。

キンッ、ガラガラッ

そして目的の階に到着しエレベーターから降りると、そこには結構長い廊下があった。

はやて「にしてもホンマ内装が豪華やな。一体いくら使つとるんやろ、この学校……」

織姫「あはは、それは気にしたら負けだと思つよ。」

当麻「同感だな……。」

はやての疑問に織姫と当麻が苦笑いで誤魔化す間に大きな扉の前に着くと、

白雪「みんな揃ってる？」

白雪が扉を開けながらそう言った。するとそこには3人の生徒がいた。

「???」ああ、星伽さんに奴良君。」

この男子生徒は石田雨竜。^{いしだりゅう}細身で紺色に近い黒髪短髪に眼鏡を掛けているのが特徴だ。

「???」……む……」

そうポツリと言いながら手を挙げ挨拶するのは茶渡泰虎^{ちやど たいこ}、通称“チャド”。短い焦げ茶色の髪で筋骨隆々かつ身長が190以上はある大男だ。

???「白雪ちゃん！ リクオ君！」

この元気な声で白雪とリクオを呼ぶ女子生徒は家長力ナ。肩くらいまである茶髪の髪が特徴で“可愛い”という表現が似合う美少女である。

白雪「あ、もう皆揃ってるね。」

「護」よう、石田、チャド。」

当麻「うーす。」

チャド「む、一護…それに上条か…。」

雨竜「黒崎、上条！？ 何故君達がここにいるんだ！？ ここは生徒会室だぞ！」

当麻「あ、いや、それはそうなんだけどさ……。」

一護「リクオに誘われてきたんだよ。そんなにカッコしなくてもいいだろうが……。」

雨竜の刺のある言い方に当麻は苦笑いを浮かべ一護は面倒くさそうな態度をとる。

カナ「今日来るの遅かったね、リクオ君。何かあったの？」

リクオ「え？ あ、うん、ちょっとね！」

そして一護達とは対照的にリクオはカナと和やかに話していた。と、
ここで、

チャド「ところで、そこにいる3人は誰だ？……」

チャドがなのは達を指してそう尋ねる。

当麻「ん？ ああ、こいつらは今日俺達のクラスに転入してきたなのはとフェイト、それにはやてだ。」

なのは「高町なのはです。よろしくね！」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

なのは達はチャド達に自己紹介をした。

雨竜「ああ、君たちが例の転入生か。それならこちらでも自己紹介をした方がいいな。僕は2年生生徒会の書記をしてる石田雨竜だ。よろしく。」

チャド「…………茶渡…泰虎…………2年生生徒会役員で、2年クラス委員会副委員長だ…………。」

カナ「私は家長カナ！ 2年生クラス委員会の委員長で2年生生徒会役員だよ！よろしくね！なのはちゃん！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

なのは「うん！ よろしくなの！」

雨竜達の挨拶になのはは元気に答える。すると白雪が、

白雪「ところで石田君、1年生生徒会の皆はまだ来てない？」

雨竜「ああ。けど、もうそろそろ来る頃だと…………。」

と、そこへ、

コンコンッ

???「失礼します。」

ガチャッ

入り口のドアをノックする音が響くと、誰かが一声掛けて入ってきた。入ってきたのは6人の女子生徒。そしてその先頭にいるのは、

???「1年生生徒会、全員集合しました。星伽会長。」

ピンク髪のロングヘアで“可愛い”というより“格好良い”女子生徒だった。そしてその女子生徒を見てなのは達は驚く。

フェイト「えっ!？」

はやて「ヒ、ヒナギクちゃん!？」

その女子生徒はヒナギクだった。

なのは「当麻君！ ひょっとして私達が会ったことのある1年生生徒会の会長って、ヒナギクちゃんのことだったの!？」

当麻「ん？ ああ。」

一護「まあそういうことだ。」

なのはがそう尋ねると、当麻はそれに頷き一護も相槌を打った。すると、

ヒナギク「なのはさん！ フェイトさん！ はやてさん！ それに上条先輩と黒崎先輩もどうしてここに？」

ヒナギクもなのは達がいたことに驚き声を上げた。ちなみになのは達のことをヒナギクは最初“高町先輩”“ハラウン先輩”“八神先輩”と呼んでいたが、なのは達から名前で呼んで欲しいと言われ、結果として名前に“さん”付けて呼ぶようになった。と、ここで、

「???」ヒナ、ひよつとしてそこにいる3人が今日話してた転入生の先輩達か？」

ヒナギク「ええ、そうよ。」

「???」ふえゝ、そうなんだゝ。」

「???」なるほど、この3人が。」

ブルーがかった灰色のロングヘアーにカチューシャを身に付けている女子生徒がヒナギクにそう尋ね、濃い紫色の短い髪を軽くツィサイドアップにしている女子生徒と黒髪でショートヘアーの女子生徒がなのは達を見ながらそう言った。

ヒナギク「ああ、なのはさん達には紹介してませんでしたね。この

3人は……」

???「ヒナ、自己紹介くらいは自分でする。」

ヒナギクがなのは達に3人を紹介しようとするが、先程の灰色髪の子がそれを遮る。すると、

???「私は“いいんちゃんレッド”こと1年クラス委員会委員長の瀬川泉!!」

???「クールな参謀“副委員長ブルー”こと、1年クラス委員会副委員長の花菱美希!!」

???「敵か味方か! “書記ブラック”こと、1年クラス委員会書記の朝風理沙!!」

泉・美希・理沙「3人揃って！ “THE・1年生徒会役員”！！」

突如戦隊アニメっぽくポーズを決めながら自己紹介をした。そして
……

一護「要するに3バカトリオだ。」

一護がなのは達にそう言ったことで全てを叩き壊した。

泉「ひ、ひどいよー太先輩ー！！」

美希「今のは心に深く突き刺さったぞー太先輩ー！！」

理沙「そつだぞー太先輩!!」

一護「だから毎度毎度人の名前を呼び間違えてんじゃねえ!! 俺は“一護”だ! “一太”じゃねえ! つーかもう何度目だよこの突っ込み!!」

泉達の微妙な間違え方に一太は若干キレた……あ、やべっ、ミスった……。

一護「地の文でも間違えてんじゃねえ!!」

フェイト「い、一護どうしたの!? それ誰に言ってるの!?!」

一護は突如誰かにキレ始めフェイトが落ち着かせようとする。……
す、すいません……。

なのは「にやはは……ヒナギクちゃんの友達にしては結構個性的だね……。」

はやて「せ、せやな……。」

ヒナギク「ごめんなさい。悪い子達じゃないんだけどちょっとはしやぎがちで……。」

織姫「そうかな？ でも私あの自己紹介の仕方かなり良いと思うんだけど……。カナちゃん、茶渡君。私達も今度あんな感じで自己紹介してみない!？」

カナ「ええっ！？ いやちよっと……」

チャド「……相変わらずすごいな…井上……。」

なのはとはやてがそう言うのとヒナギクが申し訳なさそうに言い、一方織姫は泉達の自己紹介を見て自分達もやろうとカナとチャドに言うが、カナには遠慮されチャドにはある意味で感心されていた……。

美希「まったく……久しぶりに会ったのにそんな扱いは無いだろう、
—太先輩。」

一護「お前らがいつもいつも人の名前を間違えるからだよ。いい加減直さねえと勉強教えねえぞ？」

泉「えええっ！？ それはないよ—太先輩—！」

理沙「そつだぞー太先輩！私達が落第寸前の生徒であることはあなたがよく知っているだろう！？」

一護「自覚してんなら勉強しろよ！！」

その間にも一護と一年生徒会役員3人組との会話がヒートアップしつつあった。すると、

「????」皆さんその辺にして下さい。そろそろ合同会議を始めましょう。」

グレーの長い髪を後ろで束ね眼鏡を掛けている女子生徒がそう注意を促した。

「???」あ、そういえばまだそちらの先輩方には紹介していませんでしたね。私は1年生生徒会書記の春風千桜ちはると言います。よろしくどうぞ。」

すると、

「???」あらあら、相変わらず真面目ねえ、千桜さんは。」

千桜「ふ、副会長！ 茶化さないで下さい!!」

薄い紫色のロングヘアでおしとやかそうな女子生徒が千桜にそう言うと、千桜は少々慌てながら言った。

???「初めまして高町さん、ハラウンさん、それに八神さん。
私は1年生生徒会副会長の霞愛歌です。よろしくお願いしますね。」

リクオ「でも霞さん、体の方は大丈夫なの？」

愛歌「ええ、今日は大分体調もよろしいので大丈夫ですよ、奴良副会長。」

リクオが心配そうに尋ねると、愛歌は落ち着いた様子でそう返した。

はやて「愛歌ちゃん、よく体調崩すんか？」

当麻「ああ、生まれつき体が弱いらしくてな。元々霞は2年生なんだが、去年は休学してたからまだ1年生なんだよ……。」

それを聞いたはやては同情した。はやても昔は体が不自由で弱かったためその辛さはよく知ってるのだ。

はやて「辛い時は言うてな、愛歌ちゃん。私で良ければ何でも手伝うで。」

愛歌「八神さん……ふふっ、ありがとうございます。」

はやての気遣いに愛歌は微笑み礼を言った。

愛歌「ではお礼に八神さんには会長と千桜さんの弱点をお教えしますわ。」

はやて「おっ！ ホンマか！ それは面白そうやな。」

ヒナギク・千桜「あ、愛歌さん！？」

愛歌が鞆から様々な人の弱点が記載されているノート“ジャプニカ弱点帳”を取り出してはやてに勧め始めたのを見て、ヒナギクと千桜が驚きをあらわにした。……さっきまでの感動的な雰囲気はどこへやら……。と、ここで、

雨竜「ほ、星伽さん……そろそろ会議を始めようか……。」

白雪「そ、そうだね……なんか收拾つかないそうだし……じゃあ、奴良君、茶渡君、カナちゃん、織姫ちゃん、それに1年生生徒会の皆も座って！ これから会議を始め……。」

だいぶカオスな状況になりそうだったため、雨竜と白雪がとりあえず皆に声を掛けて会議を始めようとしたのだが……

ピンポンパンポーン……

松平「あー、あー、校内にいる風紀委員、特別風紀委員に告ぐ。学園都市始まって以来の重大事件が発生したんじゃゴラアアア！！！！大至急視聴覚室に集合せいやああああ！！！！来なかった奴切腹だから、オジサン嘘つかないから。」

ブツッ、ピンポンパンポーンッ………

教務主任の松平片栗虎の呼び出しによってその呼び掛けは遮られた。

こうして1、2年生徒会の合同会議は延期せざるを得なくなってしまうのだった……。

E
N
D

これ単なる自己紹介しかしてなくね？　はい、否定はしません……。

（後書き

どうも黒狼です!!

今回は“ブリーチ”の学校キャラと“ハヤテのごとく”の生徒会役員メンバーの紹介が主軸な感じでしたかね。まあ、ちよくちよく“銀魂”や“ぬら孫”の主要キャラもいましたが……。

そしてこの回のタイトルでもあるのですが、完全にキャラ紹介だけの回でしたね本当……。なるべくギャグを入れましたが、最早グダグダなんてレベルで言い表わせないくらい今回は酷かった気がします、本当にしません……。

あと思った方も多いと思いますが、この作品きつと新八の扱いがかなり雑になる気がします。主人公達以下結構突っ込み役たくさんいますから……。新八ファンの方はすいません!!

今回は銀魂ネタです！　このネタは他のクロス作品でも使われてるので予想のついている方もいると思いますが……。

ではまた!!

行き過ぎた嫉妬は単なるバカ（前書き）

今回は今まででおそらく一番長いです！

そして今回はあの男達が登場します！

ではどつどつぞー！

行き過ぎた嫉妬は単なるバカ

視聴覚室

先程の松平教務主任の放送を受け、室内には高等部の風紀委員と特別風紀委員が集結していた。白雪やヒナギクも勿論来ているが、白雪は184支部のキンジ達のところへ、ヒナギクも150支部のハヤテのところに行ってしまった。そして現在ここには、

当麻「にしても本当に風紀委員や特別風紀委員が皆集まってやがるな。」

一護「まあ、松平先生のあの放送を聞けば誰だって来るだろ？」

リクオ「学園都市始まって以来の重大事件”って言うってたけど、一体何が起こったんだろう？……」

特別風紀委員として召集に応じた当麻、一護、リクオと……

なのは「転入初日から凄いことになっちゃったの……」

フェイト「うん……。」

はやて「こつちの世界でもそんな大事件を扱うことになるなんて思わへんかったわ……。」

転入してきたばかりなのは、フェイト、はやてがいた。

当麻「って、なのは!？ フェイト!？ はやて!？」

一護「お、お前ら!？」

リクオ「何で3人がここにいるの!？」

なのは達がこの場にいることに当麻達は驚く。

なのは「え？ だって何か事件が起こってるんだよね？」

フェイト「だったら私達にも何か協力できるかなと思って。」

一護「っ！？ お前ら今回の件に首突っ込む気か！？」

リクオ「そ、そんな！ さっきの松平先生が放送で言ってたように
“学園都市始まって以来の大事件”なんだよ！？ そんなことに無
関係な皆が参加しなかったって…」

なのはとフェイトの言葉に一護とリクオが声を上げた。

はやて「でもリクオ君達は関わるんやろ？」

リクオ「そ、それは勿論特別風紀委員だし……」

一護「もし俺達が風紀委員じゃなくても、そんな大事件を放ってお

くわけにはいかないだろ！」

はやてがそう尋ねると一護とリクオはそう答える。

なのは「だったら私達だって一緒だよ。それにまだ私達、当麻君達に助けてもらったお礼もしてないんだよ？」

フェイト「そうだよ。だから当麻、リクオ、一護、私達にも協力させて。」

一護「お前ら……」

その言葉に一護は何も言えなくなってしまつ。すると、

当麻「もういいんじゃないか？　一護、リクオ。」

一護・リクオ「当麻…。」

当麻「もうこいつらは俺達の言うことを聞かねえよ、きっと……それに十分力も持ってるしな。」

当麻が一護とリクオにそう言い、2人も納得した。

はやて「大体、好きな人がそんな危ないことに関わるっちゅうのに放っておけるわけないやろ／＼／＼／（ボソッ）……。」「

リクオ「？　どうしたの？　はやて。」

はやて「えっ／＼／＼！？」 あ、いや、何でもあらへんよ／＼／
「！」

まあ、こんな妙な会話もあったりしてたが……。と、ここで、

なのは「ねえ当麻君。あの黒い服を着てる人がたくさんいるけど、
あの人達って何者なの？」

なのはがある人物達を指差しながら当麻に尋ねた。その先には黒を
基調としたどう見ても制服には見えない服装をした学生達が大勢い
た。

当麻「ああ、あれは“真撰組”の連中だな。」

フェイト「真撰組？」

はやて「何や日本史の授業で絶対習いそうなものから拝借した感が満載やな。」

真撰組という言葉にフェイトとはやては幕末を想像した。すると、

一護「そりゃそうだろ。あいつらは幕末の“新撰組”から名付けられた風紀委員集団なんだからよ。あいつらの腰をしてみるよ。全員日本刀持ってたんだろ？」

なのは「え？ あ、本当だ！」

はやて「けどなんや他の風紀委員と違って、ちようイカツイ人達に見えるんやけど……」

はやてが真撰組の生徒達を見て思わずそう呟く。

リクオ「まあ、真撰組の皆は元々不良だった人達がほとんどだったからね。」

フェイト「え！？ あの人達皆、元不良だったの！？」

リクオ「あ、もちろん普通の生徒だった人達もいるよ！」

フェイトが“不良”という言葉に驚いていると、リクオが若干訂正を加える。

当麻「元々あいつらは学園都市に来る前はかなりの不良連中だった奴が殆どだったんだよ。けどそいつらを松平先生が拾って風紀委員に加えて重宝してんだ。今じゃ風紀委員の中心的存在だな。」

なのは「ふえー、そうだったんだ。」

はやて「つちゆうことは、今真撰組の人達が風紀委員の中心にいるんは松平先生のおかげなんやね。」

一護「まあ、あとはあの3人のおかげだろうな。」

フェイト「？ あの3人？」

一護の“あの3人”という単語にフェイトは反応した。するとそこへ、

「上条、黒崎、それに奴良じゃねえか？」

「お、本当でさあ。」

2人の男子生徒が当麻達に声を掛けてきた。1人は短い黒髪を適当に切ったような髪型にしていた一護以上に目付きや言葉遣いが悪く、もう1人は対照的に短い亜麻色の髪のストレートで江戸言葉を話す童顔の男子生徒だった。

リクオ「土方君！ 沖田君！」

当麻「噂をすればだな。なのは、フェイト、はやて、紹介しとくぜ。こいつらは第100支部の風紀委員で真撰組副長の^{ひじかたとうしろう}土方十四郎と一番隊隊長の沖田総悟だ。クラスは確か2年D組だったな。」

当麻はなのは達の土方と総悟を紹介した。すると、

土方「あ？　おい、リクオ。そいつらは誰だ？」

総悟「初めて見る顔ですねい。」

土方と総悟もなのは達に気付किリクオに尋ねてきた。

リクオ「ああ、この3人は今日僕たちのクラスに転入してきた…」

なのは「高町なのはです。よろしくね！」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。よろしくね。」

はやて「八神はやてや！　よろしゅうな！」

なのは達は自己紹介をする。と、ここで土方が、

土方「お前ら風紀委員じゃねえな？　何でここにいやがる？」

フェイト「え、ええと、私達も何か手伝えないかと思って……」

土方の突き刺すような質問にフェイトは少々おっかなびっくりしながら答えた。

土方「その必要はねえ。それにさっきのつつあんの放送でも言った通り、今回の件は“学園都市始まって以来の大事件”だ。単なる善意で協力されても迷惑なんだよ。」

一護「っ！　おい、十四郎！！　てめえ少しは言い方ってもんが…
…」

土方の言い方に一護が掴み掛かろうとする。

総悟「相変わらず土方さんは言い方がストレートでさあ。そのままあの世行きも直球ストレートでお願いできやせんかねえ？」

土方「総悟オオオ！！　てめえ叩つ斬るぞ、おい！！」

総悟の言葉に土方はキレて刀の柄に手を掛けるが……

「???」やめんか！ トシ！！」

土方「っ!?!」

突如掛けられた諷める言葉を聞き、刀に手を掛けるのを止めた。その言葉の主は茶髪の髪を逆立て、顔はかなり濃く正直猿顔……というよりゴリラ顔である男子生徒がいた。すると、

一護「近藤さん！」

近藤「おう、一護君ではないか!? それに当麻君やリクオ君も！ 久しいな！」

一護がその男の名を呼び、近藤と呼ばれた男の方も一護や当麻、リクオの存在に気付いた。

土方「近藤さん……」

近藤「トシ、あれほどカッなってもすぐ刀を抜こうとするなど言っただろう？　そもそも一体何があったんだ？」

総悟「それはですねい……」

そして総悟は近藤に大方の事情を説明した。

近藤「そうか…君達は一護君達のクラスの転入生なのか。しかも自ら進んで協力しようとしてくれるとは……。よし！　なのは君達の協力は俺が許可しよう！」

なのは「本当ですか!？」

はやて「ありがとうございます!」

近藤の承諾になのは達はお礼を言った。

土方「こ、近藤さん！　あんた何言ってるんだ!？　こいつらは……」

近藤「良いではないか、トシ。それにこの3人、なかなかの修羅場を潜り抜けてきてると思うぞ。」

そう言う近藤の目は確信を帯びており、なのは達の何かを見抜いていた。すると、

土方「はあ、あんたがそう言うんなら俺は何も言わねえよ。」

総悟「相変わらず近藤さんの言うことにはおとなしく従うんですねい。」

当麻「確かにな。」

土方「うるせえ。お前らは黙ってる。」

総悟と当麻からの冷やかしに土方はバツの悪そうな顔になる。

土方「……そろそろとっつあんも来る頃だろうな……じゃあ、近藤さん。俺はそろそろ隊の連中を纏めてくる。行くぞ総悟。」

総悟「へいへい……。」

そう言って土方と総悟はその場を去っていった。

リクオ「ありがとうございました、近藤さん。」

近藤「なに、こちらもすまなかったな。うちのトシが迷惑を掛けた
ようです。」

フエイト「あ、いえ、そんな！ 謝らないでください！ 無理を言ったのは私達なんですし……」

近藤が謝罪すると、フエイトは慌ててそう言った。

近藤「だが少しはトシの気持ちもわかってやってくれ。アイツも君達の身を案じて、あえて冷たく言っただろうからな。」

なのは「あ……」

はやて「そうやったんか……」

近藤の言葉になのはとはやては土方の遠回しな優しさに気付いた。

一護「ったく、あいつも不器用だな……」

近藤「ははは！ まあ俺もそれは否定できんし、一護君達も否定できんだろっ？」

当麻「まあ、そうっすね……。」

近藤がそう尋ねると当麻は苦笑いを浮かべた。

近藤「おっと、俺もそろそろ行かなくては……では一護君達もなのは君達もまた後でな！」

はやて「ホンマありがとっございました！」

はやてがそう礼を言っていると近藤は去っていった。

なのは「いい人達だね…。」

リクオ「だから真撰組は風紀委員の中心なんだよ。実際の立場もそうだしね。」

フェイト「え？ 実際の立場も？」

リクオの言葉にフェイトは首を傾げた。

一護「ああ、言ってなかったな。近藤さんは風紀委員長で十四郎はジャッジメントちょう

副風紀委員長。ふくジャツジメントウちよう つまりあの2人は風紀委員のナンバー1とナンバー2なんだよ。」

はやて「なっ！？ あの2人そんな偉いんか！？」

なのは「だからこの場で私達の協力を許可してくれたんだ……」

一護の話を聞いてなのは達は改めて近藤達の凄さを知った。

リクオ「ちなみに松平先生は警備員長で学園都市の治安のトップだよ。アンチスキルちよう」

なのは・フェイト・はやて「え………」

リクオの言葉になのは達は思わず顔を引きつらせた。すると、

当麻「……なのは、ひょっとして松平先生に会ったのか?……」

なのは「う、うん……」。

一護「じゃあ、ひょっとしてあれを実際に見たのか?」

フェイト「……それっていきなり先生に発砲したこと……だよな?……」

フェイトが確認するようにそう尋ねる。

当麻「ああ、もうあの洗礼を受けたのか……」

一護「ビビっただろ？」

はやて「いや、ビビったどころの騒ぎやないで！？ あの人ホンマに教師なん！？ ホンマにこの街の治安維持組織のトップなん！？」

一護の問いかけにははやては渾身の突っ込みをした。

リクオ「ま、まあ悪い人じゃないし、この街の治安を守ってる功労者……だと思っ……。」

はやて「いや、そんな自信なさげに言っても説得力ないで……」

フェイト「……大丈夫なのかな、この街……」

フェイトは思わず二度目の学園都市に対する不安を呟いた。と、その時、

バアンッ！

松平「おう、てめえら、全員揃ってるなあ……さっさと席につきやがれ。」

松平のどこか威圧的な雰囲気に見聴覚室内は一気に静まり返り、全員が席に着いた。そして松平は黒板の代わりであるホワイトボードの前に立つと、

近藤「それでとっつぁん……校内の風紀委員や特別風紀委員を全員集めるほどの大事件ってのは一体何なんだ？」

風紀委員長である近藤が代表して松平にもっともな質問をした。すると、

松平「……わからねえか？近藤……ついに“奴”が動き出したんだよ……。」

近藤「ほ、本当か！？とっつぁん！」

松平の“奴”という単語に近藤は驚きをあらわにした。

近藤「それでとっつぁん!“奴”は一体何をするつもりだ!?”」

近藤がそう尋ねると、松平は懷からタバコを取り出して、

松平「……ふう……」

一服した……そして、

松平「……奴はここ学園都市で……要人相手にテロをおっぱじめるつもりだ。」

そう言い放った。すると、

キンジ「せ、先生！ 学園都市でテロって本当かよ！？ そいつは確定情報なのか！？」

最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”のリーダーであるキンジがそう尋ねる。

松平「こいつは俺独自の情報ルートで掴んだものだ……信用性は俺が保証する……。」

アリア「警備員長のアんたがそこまで言う情報……どうやら信用性は本当に高そうね……。」

松平の自信に満ち溢れた言葉を受けて、“バスカービル”副リーダーのアリアがそう言った。

ヒナギク「それで松平先生、そのテロの決行場所はもう割れてるんですよね？」

今度はヒナギクが冷静にそう質問する。さすが1年生徒会会長だ。

松平「相変わらずお前は鋭いな、桂……確かに決行場所ももう既に掴んでる……。」

ハヤテ「それで……その場所は一体どこなんですか!？」

ヒナギクと同じ第150支部の風紀委員であるハヤテが勢い良く立ち上がって尋ねた。

松平「……第15学区にある“三千院プレシヤスパークランド”だ。」

ハヤテ「なっ！？ “三千院プレシヤスパークランド”！！！？」

近藤「まさか……とつつあん！ “奴”はあそこでテロを起こす気なのか！？」

松平の口から出た場所に室内全体が大きく騒つき始める。と、ここで、

なのは「ねえ、当麻君。その“三千院プレシヤスパークランド”ってどんな場所なの？」

今まで黙って聞いていたなのはが当麻に小声で尋ねた。

当麻「三千院プレシャスパークランド」はナギのじいさんが開設した遊園地だ。」

フエイト「え！？ ナギのお爺さんが！？」

はやて「そういうたら名前に“三千院”って付いてるもんや。けど何や皆の騒ぎようが少し尋常や無さすぎる気がするんやけど、何か理由があるんか？」

はやてはふと疑問に思い、そう尋ねた。確かに全員“標的が三千院プレシャスパークランド”ということに驚きを見せているのだ。

リクオ「“三千院プレシャスパークランド”自体は普通の遊園地なんだけど、“安心安全”を第一にしてるんだ。最近をよく遊園地のアトラクションが故障や誤作動で事故を起こすことが多かったから

ね。だから今そのおかげですごく人気が出てて人が大勢いるんだよ。」

一護「それにさすが日本最大の財閥である三千院家の造った遊園地だけあってVIP待遇や利用者の個人情報保持にかなり力を入れてやがる。だから芸能人やセレブ、時には政府のお偉いさんが家族ぐるみでお忍びで利用すんのさ。」

はやて「なるほど。要人を標的にテロを起こすには絶好の場所つちゆう訳やな……。」

リクオと一護の説明を聞いたはやてがそう呟いた。

フェイト「そっか、それで皆驚いてたんだね。」

当麻「まあ、それだけじゃねえけどな……。」

なのは「え……？」

そんな感じで当麻達がなのは達に説明をしていると、ここで

土方「ちょっと待ってくれ、とつつぁん。」

松平「どうした？ トシ。」

土方が松平に尋ねる。

土方「確かあそこには警備強化なんて目的で銃火器を搭載した警備

ロボやら学園都市製の最新兵器やら、おまけに戦車や戦闘機まで置いてある要塞級の遊園地だぞ。」

それを聞いたなのは達は思った。“三千院家は遊園地に何を求めているんだろっ……”と。

土方「そんなところでテロなんかするバカがいるのか？」

確かに至極もつともな質問である。だが、

「シャナ」つまり……それほどの相手って訳ね、そのテロリストは…。

その質問にシャナがそう答えを返した。そしてシャナの言葉に松平は口を開かない。と、ここで、

黒子「ところで先生。犯行時間の予告はありませんのですの？」

第177支部風紀委員の黒子がそう尋ねた。

松平「……午後2時だ……。」

それを聞いた瞬間、全員が視聴覚室にある時計を見た。

総悟「今午後1時ですねい。」

そして……

近藤「全員大至急三千院プレシャスパークランドに向かえ
！……！」

松平「てめえええらああ！！ 遅れるんじゃないぞおおお！！！！
！」

ほぼ全員「はっ！！！」

ドドドドドッ

近藤の号令とともにほとんどの風紀委員達が松平に続いて一斉に視
聴覚室を出ていき、その場に残ったのは……

なのは「当麻君、一護君、リクオ君、早く行こうよ!」

フェイト「そうだよ! テロが起こるかもしれないんだよ!」

はやて「せや! こんなところで油売つとる場合とちやうやる!」

当麻「ああ、いや……」

一護「一つ気になってることがあつてな。」

リクオ「それでちょっと近藤先輩に聞こうと思ってね。」

なのは達と当麻達、

キンジ「お、お前らも残ってたか？」

フェイト「あ、キンジ！」

一護「…お前らも俺達と同じ理由か？」

アリア・理子・白雪・レキ「ええ（そうだよ）（うん）（はい）。」

バスカービルのメンバー、

ハヤテ「あれ？ 皆さんも行かなかったんですね？」

当麻「おう、綾崎にヒナギクもか。理由はやっぱり……」

ヒナギク「ええ、皆さんと同じですよ。」

ヒナギクとハヤテ、そして……

シャナ「あら、あんた達もいたのね。」

悠二「まあ、皆疑問に思ってただろうからね。」

リクオ「あ、平井さん、坂井くん、それに白井さんも。」

一護「ちなみに理由は…」

黒子「無論、あなた方と同じですわ。」

そして今だに視聴覚室の席に陣取っている近藤の下に歩み寄った。

近藤「ん？ 皆どうした？ そんな真剣な顔をして。まあ、こんなことが起こったのなら当然か……。」

そう言う近藤にはやはり風紀委員長としての風格が漂っている。

「護」なあ、近藤さん。一つ聞きたいことがあるんだけど……。」

近藤「ん？ 一体なんだ？言ってみてくれ。」

そういうと当麻や一護やリクオ、そしてバスカービルメンバーとヒナギク、ハヤテ、シャナ、悠二、黒子がそれぞれの顔を見て頷き合った。そして……

「奴^{なんだ}って誰（なの）（なんですか）（よ）（ですか）（ですの）？」

すると、

近藤「なあ、トシ。」

土方「…どうした？ 近藤さん。」

近藤は土方を呼び、土方は尋ねる。そして近藤は土方の顔を見ながらこう尋ねた。

近藤「……“奴”って誰だ？」

土方「いや知らねえのかよ！！！！？？？？」

土方の突っ込みが視聴覚室内に響き渡った……………。

現在午後1時50分 第15学区にある三千院プレシヤスパークランドは、平日にもかかわらずかなりの人が来場していた。中にはちらほらと自由学園の生徒の姿も見える。そしてここは4つある入場口の一つである北ゲートから少し離れた場所にある茂みである。

松平「班、D班、異常はないか？」

『こちら 班、異常ありません。』

D『こちらD班、不審人物は見当たりません。』

松平は通信でそう確認する。松平は来てすぐに風紀委員達を残りの南ゲート、東ゲート、西ゲートに分けて入り口を見張らせているのだ。そしてこの場にいるのは近藤、土方、総悟の真撰組トップ三役とバスカービルのメンバー、ヒナギク、ハヤテ、シャナ、悠二、黒子、そして当麻達となのは達である。

なのは「それにしても凄く大きな遊園地なの……。」

はやて「そやね。ディ ニーランドよりも大きいんとちゃうか？」

目の前にある巨大なゲートを見てなのはとはやては思わずそう呟いた。

当麻「まあ、ナギの爺さん半端なことが大嫌いな人だから……」

一護「このくらいやんなきゃ気が済まなかったんじゃないかねえのか、きつと……。」

それに対して当麻と一護が苦笑いを浮かべつつそう言う。すると、

フェイト「そういえば、そのテロリストは要人を狙ってるんですね？ 松平先生。」

リクオ「ああ、そういえばそうだったね。その要人はどこにいますか？」

するとフェイトとリクオの質問を聞いた松平は、

松平「ん？ どこって目の前にいるだろう。」

そう言つてゲート前のある一点を指す。そこには赤を基調としたスカート丈の短い和服を着た栗色のショートカットの少女がいた。

近藤「あ、あれは栗子ちゃんじゃないか!？」

その少女の姿を見た近藤が驚き声を上げる。

はやて「? あの子のこと知っとるんか？」

総悟「知ってるも何も、とつつあんの娘でさあ。」

なのは「ふえ!？ 松平先生の!？ あの子が!？」

総悟の言葉になのはは驚きをあらわにした。まあ、こんなイカツイ男の娘だなんて普通あまり信じないだろうし……。

ハヤテ「ってことは、今回狙われている要人って栗子さんのことですか!？」

松平「そうだ。いいか? もうすぐ2時になる。“奴”がそろそろ栗子に接触するはずだ。絶対“奴”を見逃すんじゃねえぞ!」

一護「いや、だから“奴”って結局誰なんだよ。それがわかんないや見逃すもくそも……」

と、その時、

松平「っ! 来やがった!」

全員「っ!」

松平のその言葉に全員が松平の視線の先を見た。するとそこには……

???「おーい、栗子ー！ー！」

栗子「あつ！ 七兵衛様！ー！」

金髪をよくわかんない髪型にし、ガングロでグラサンを掛け鼻にピアスをしている……ぶっちゃけテロリストというよりはヤクザにパシリにされている男がいた。

全員「……は（え）？……」

松平以外の全員が七兵衛という男の姿を見て固まった。すると、

松平「野郎……栗子とデートするなんざお父さん絶対認めんぞ……」。

「

そう言いながら松平は何かを準備をし始めた。そして準備が終わるとそれを取り出して構えた。それは……

ジャキンッ

特殊部隊用のスナイパーライフルだった（無論実弾仕様）。

松平「てめえみてえなクソ野郎に栗子はやらねえ……さっさと冥土に行けや……」。

そう言って松平は引き金に手を掛け、そして……

はやて・一護・土方「何してんだ（しとるんや）あんたは
……！」

ドゴオオンッ！！

土方と一護の蹴り、そしてはやてのハリセンをもろに食らった……。

松平「あいててで。何すんだてめえらぁ……後少しであの野郎を冥
土に……」

はやて「やかましいわ！！ 何やあの“三下”って言葉がよく似合
いそうな男は！？ あれのどこがテロリストや……！」

松平が文句を言おうとするが、はやてはそれを怒涛の突っ込みでピシヤリと遮る。ていうか人の彼氏相手に“三下”は無いんじゃないでしょうか……。

松平「何言ってやがる…あれは立派なテロリストだろうが……。俺の栗子を巧く騙してデートに持ち込むなんざ超大規模テロに他ならねえ。」

土方「ふざけんな！！ あんたの言ってたテロリストって何！？ あんたの娘の彼氏！？ あんたの言ってたテロって何！？ あんたの娘とデートすることか！？」

松平の発言に今度は土方が完全にキレながら突っ込む。

松平「クソツタレが…栗子とのデートを成功させてたまるか。絶対に阻止するぞ、てめえら。」

一護「アホかてめえ!!! じゃあ何か!? あんたが俺達を呼んだのはあんたの娘のデートの妨害とでも言う気か!? このバカ親警備員長!!!」

松平「当たり前だろうが……こんな学園都市始まって以来の大事件にてめえらと呼ばなくてどうすんだ? ああっ!?!」

一護「それあんたの娘の彼氏に対する単なるジェラシーだろうが!!! 学園都市まるで関係ねえだろうが!!!」

一護は松平のくだらない嫉妬にキレる。

キンジ「つーかあんた独自に情報を入手したんじゃないのかよ！？ 情報の信用性はどこに保証されてたんだよ！？」

松平「保証されてるに決まってるだろう！ 俺が栗子の電話での会話をこっそり耳にしたんだからな！」

アリア「それ単なる盗み聞きじゃないの！？ それのどこが独自の情報よ！！ あの時あんたの情報の信用性を評価した私の気持ち返しなさいよ！！」

よっぱどあの時に言ったことが恥ずかしいのか、怒りで顔を真っ赤にして今にもホルスターから愛銃“コルトガバメント”を抜きそうな状態である。そしてそんな状況を見て、

当麻「あゝ、不幸だゝ。」

なのは「にゃ、にゃははは……」

フェイト「あ、あははは………」

リクオ「そういえば松平先生は娘の栗子さんを溺愛してたんだった……。」

当麻は久しぶりの口癖を言い、なのははとフェイトはただ苦笑いを浮かべ、リクオは今更ながら松平の親バカを思い出していた。と、ここで、

土方「はあ………つたく、近藤さん、あんたもつつあんなにか言っ
てやってくれ。」

土方は近藤に松平を説得するように頼むが、

近藤「誰が近藤だ……トシ……」

近藤も何か準備し始めた。そして、

ジャキンッ

近藤「俺の名は殺し屋“ゴリラ13（サーティーン）だ!!」

そう名乗りを上げた。

黒子「いや、何してるんですの風紀委員長。それに後ろの名前はカ

ッコいいですけど前の名前は最悪ですわよ……。」

近藤「昔から妹のように可愛がっていた栗子ちゃんをあんな“ピーッ”にはやれん!!」

白雪「その発言はやめてください近藤先輩！ 絶対に放送禁止用語ですよ！」

近藤の“ピーッ”に白雪が動揺しつつも注意する。

近藤「そんなことは知らん!! 行くぞ皆 ！」

当麻「お、おい！ 近藤さん!……行っちゃった……」

近藤は当麻の制止を完全無視して松平を追い掛けていった……。

なのは「だ、大丈夫なのかな？　これ……」

理子「うん……ダメだね絶対！」

なのはの苦笑いを浮かべながらの言葉に理子がノー天気に見える。

土方「ちっ、仕方ねえ。行くぞ総悟！　2人を止めに行く！」

だが……

総悟「そいつは誰のことですかい、土方さん……」

ジャキンッ

総悟「俺は殺し屋“総悟サーティーン”ですぜい。」

総悟もスナイパーライフルを構えていた。そして……

スタタタッ

さっさと近藤達を追って園内に向かっていった。

土方「うおおい総悟!？」

総悟「面白そうなんでちょっくら行ってきまーす!」

ハヤテ「何ちゃっかり本音を暴露してるんですか!??って沖田さん!」

ハヤテは総悟の言葉に思わず突っ込みを入れるが、総悟はさっさと人ごみの中に消えてしまった。

土方「まったく、あの3バカは! てめえらは他のゲートにいる風紀委員達を帰してくれ! 俺はあいつらがマジでバカやらないかを見張ってくる!」

そう言つと土方も総悟達を追つて園内に入つていった。

レキ「……あの3人は何故“21”を用いてるのでしょうか？
あれは最前線で使われる銃なのですが……」

キンジ「こ、この状況で銃のセレクトの評価とは流石だな、レキ……」

レキ「？　ありがとうございます……」

フェイト「それ誉め言葉じゃないと思うよ、レキ……」

キンジの言葉を聞いたレキがそう礼を言つと、フェイトが若干苦笑いでそう言った。

リクオ「と、とりあえず土方さんの言つてた通り、他の風紀委員の

人達を帰らせようよ。」

黒子「それなら問題ありませんですわよ。今桂さんがそれを伝えて
いますの。」

リクオに黒子がそう言っていると、

ピーッ

A『はい、こちらA班!』

ヒナギク「あ、すみません。こちら風紀委員の桂ヒナギクです。」

ヒナギクがトランシーバーで風紀委員のある一班と連絡を取ってい

た。

A 『え！？ か、桂さんですか！？ ど、どうしたんですか！？
松平警備員長は！？』

通信相手の風紀委員はヒナギクの声を聞き驚いた。どうやら口振りを聞くかぎりヒナギクと同学年か中等部の風紀委員のようである。まあ、1年生徒会会長を務めているヒナギクの名を知らない者は早々いないのだ。

ヒナギク「ええと、皆さん帰っていいそうです。」

A 『……え？……』

まさかの言葉にAは間抜けな声を出した。

ヒナギク「ですから、もう皆さん必要ないそうですのでお帰りください。では。」

A『え！？ あ、ちょ、ま……』

ブチッ

Aは何か言おうとしたようだが、その前にヒナギクが通信を切った。

ヒナギク「ふう……あ、今全部の班に伝えましたよ……って、あの、皆さんどうしたんですか？ そんな変な目で私を見て……」

ヒナギクは当麻やなのは達からの視線に思わず首を傾げる。すると、

なのは「ヒ、ヒナギクちゃん、ひょっとして他の人達にも皆そんな
感じで伝えたの？」

ヒナギク「え？ あ、はい、そうですけど……何かいけなかったで
すか？……」

ヒナギクはなのはの質問にそう答えた。それを聞いた当麻達は……

「護」……あいつら結構瀕死のダメージを負ってるんじゃないかねえか？」

ハヤテ「わざとじゃない分余計深刻なダメージでしょうね、きっと
……」

キンジ「アリアよりキツいな、今の言葉は……」

アリア「ちょっとバカキンジ、今のどいう意味かしら……」

そう言いながらアリアはホルスターに手を掛けようとしている。

当麻「自分の直球発言を自覚してねえのかよ、相変わらず……」。

という感じで全員他の風紀委員達に哀れみの言葉を述べていた……。
と、ここで、

はやて「なあ、今気付いたんやけど……シャナちゃんと悠二君はど

「こ行ったん？」

はやてがそんなことを尋ねた。

リクオ「あれ？　そういえば……」

白雪「2人ともいないね。」

ハヤテ「確かに……」

黒子「誰かご存知ではありませんの？」

すると、

レキ「……2人でしたら警備員長の目的が発覚した時点で呆れて、園内に入っていつてしまいました……」

黒子の質問にレキが相変わらず無表情で答えた。

理子「レ、レキレキ、そういうことは早く言おうよ!？」

レキ「いえ、誰も聞いてきませんでしたので……」

指示がなければ動かない。さすが“ロボットレキ”の呼び名を持つ少女である。

フェイト「でも、2人共何しに行ったの？」

一護「いや、そんなのあいづらだったら一つしかねえだろ…。」

なのは「え?……」

一護のわかりきったような言葉になのはは首を傾げる。

当麻「どうせシャナが“せつかくここに来たんだから付き合え!”
とでも言っつて、悠二を無理矢理デートにでも連れてつたんだろっつな
……。」

白雪「シャ、シャナちゃん結構大胆なところがあるもんね。ちよつ
と羨ましいかもノノノノ……。」

当麻はそう言つて苦笑いを浮かべ、白雪はシャナの大胆さをちよつと羨ましく思いながら顔を赤くしていた。すると、

アリア「れれれ、恋愛なんてくだらないっ／＼／＼／＼／＼／＼！！！
そ、そんなこと言つ奴には風穴開けてやるんだから／＼／＼／
！！！！！」

キンジ「お、おい！ アリア落ち着け！！ こんなところで銃を抜
こうとするな！！！」

恋愛に関して極端に耐性のないアリアが、顔を真っ赤にしながらコ
ルトガバメントを再び抜こうとし、それをキンジが大慌てで押さえ
つける。そんな中、

はやて「にしても悠二君も幸せもんやな。シャナちゃんほどの女

の子は早々おらん言つのに。」

なのは「にやはは、確かにシヤナちゃん頭も良いし運動神経も抜群だし可愛いし、言うことないんじゃないかな？」

はやてとなのははそんなことを呑気に話していた。まあ、そういう自分たちも十分女子として上の方にいることに気付いてないのは些かどうかと思うが……。と、その時、

青髪「全くその通りやと思うで！　なのはちゃんにはやてちゃん！」

圭吾「ああ、全くその通りだ！」

突如として青髪ピアスと浅野圭吾が現れ、なのはとはやての言葉に賛同した。

リクオ「青髪君に浅野君!？」

一護「お、お前らどっから湧いて出てきたんだ!？」

2人の出現にリクオと一護は思わず驚きの声を上げる。

青髪「何言つとるんや、リクちゃん、黒やん。」

圭吾「俺達みたいなキャラには神出鬼没がデフォルトで備わってるもんなんだぜ一護!」

当麻「いや、もうそのネタ別にどうでもいいから。前にもう使われ

てるし……」

青髪と圭吾のネタに当麻はそう呟いた。ていうかそう言っメタ発言されても困るんですが……。

フェイト「ええと…それで2人な何をしに来たの？」

ここでフェイトがもつともな質問を青髪と圭吾にぶつけた。

青髪「何ってそんなもん決まってるやろっ、フェイトちゃん……」

圭吾「リア充は無論……」

そう言いながら2人は何かを取出し、

ジャキンッ

青髪・圭吾「冥土に送るに決まってるやろう（だろう）。この青髪（圭吾）サーティーンが。」

どこからともなくスナイパーライフルを出した。

ハヤテ「あ、あなた達ですか！？ 青髪さんに浅野さん！」

黒子「だからどうして皆さん“ゴ○ゴ13”なんですか？ そんなにハードボイルドが良いんですの？」

黒子はどつやら“暗殺”“〇〇”“13”というのが気に入らないらしい。

当麻「何なのお前ら！？ 悠二がシャナと付き合ってるから暗殺つていろいろ飛躍しすぎだろ！-」

青髪「うるさいわやん！ 上やん達には俺達の辛さが理解できないのや-」

圭吾「そつだそつだ！！ リア充なんて皆爆死すればいいんだよ！-」

ヒナギク「いや、爆死させたいなら爆弾を使うんじゃないんですか？ 浅野先輩……」

圭吾の言葉とやってる行動の矛盾にヒナギクが呆れながら突っ込む。

一護「とりあえずお前ら、いい加減正気に戻れ。お前ら2人でどうする気だよ?」

青髪「ふっ、甘いで黒やん。」

圭吾「俺達には同志がたくさんいるのさ! そしてそいつらはもう園内に潜入し、坂井悠二暗殺に向け着々と準備してんだよ!」

はやて「要するにアホがまだ大勢おるんかいな……」

はやてがかなり刺のある突っ込みを加える。

青髪「うつ、し、辛辣やなはやてちゃん……とにかく俺達も行くで！ 浅野はん！」

圭吾「おう！ 青髪！」

当麻「あ、おい！……ああ、不幸だ……」

当麻が制止を呼びかけるも青髪達は脱兎の勢いで人ごみに消えていった……。

なのは「た、大変だよ当麻君！ このままじゃ悠二君が凄くくだらない理由で殺されちゃうよ……！」

リクオ「いや、なのは。さすがにあの2人だって本当に殺したりは

……」

リクオはなのはの言葉を否定しようとするが、先ほどの青髪達の決死の様子を思い出し言葉がつまる。

アリア「やるわね。」

理子「理子もそう思うな。全く持って理解できないけどね！」

そしてアリアと理子が即答した。

「護」とにかく俺達も中に入って、あのバカ連中を止めに行くぞ！」

フェイト「うん、そうだねー護！」

リクオ「僕もいくよ！」

はやて「私もや！」

当麻「俺も行くぜ！」

なのは「私も勿論行くの！」

こうして当麻やなのは達、

キンジ「これはバスカービルとして見逃せるか？　アリア。」

アリア「論外ね。あいつらすでに銃刀法違反だし……」

理子「殺人未遂も付くしね。」

レキ「風紀委員の任務ならば行きます……。」

白雪「さ、さすがに逮捕するのは止めようよ。あの2人もクラスメイトなんだから……」

最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”、

ハヤテ「どうしますか？ ヒナギクさん。」

ヒナギク「勿論私たちも行くわよ！ 一年生徒会会長として見過ごす訳にはいかないわ！！」

第150支部所属の風紀委員であるハヤテとヒナギク、

黒子「これは私も行くべきですわね。」

そして第177支部所属の風紀委員である黒子達による“坂井悠二暗殺阻止”の任務が始まった……。

E
N
D

行き過ぎた嫉妬は単なるバカ（後書き）

どうも黒狼です！

おわかりの方も多いと思いますが今回は銀魂ネタです。なんか序盤真撰組の皆が感動的雰囲気を作り上げようとしていましたが、後半で見事に壊れましたね。くだらなさは天下一品です……。

そして青髪さんと浅野さんはギャグネタ要員として採用しました！
何やかんやでキャラ崩壊をさせたくない私にとってはかなりありがたい存在です、この二人。

まさかの二部構成になってしまいましたが、さすがにこのネタは次で完結します。新キャラ出すかどうかは……まだ検討中です。

ではまた！！

人の恋路は何人たりとも邪魔してはいけない!!（前書き）

前回の続きです!!

前半はグダグダですが、後半は微妙に真面目だったりします!!

ではどうぞ!!

人の恋路は何人たりとも邪魔してはいけない！！

一護「おい、いたか！？」

フェイト「うっうん、やっぱりいないよ、一護！」

当麻「くそ！ どこに行ったんだよ！？ 平井と坂井の奴……。」

一護達は青髪と浅野他、たくさんのモテない男子生徒達による“坂井悠二暗殺計画”を阻止するため、まずターゲットにされているシャナと悠二を探しているのだが、中々2人が見つからないのだ。

アリア「困ったわね……ターゲットが見つからないんじゃないかな、どうすることもできないわ。」

ハヤテ「ええ、早く2人を見つけないと……」

と、その時、

白雪「あっ！　いたよ！　シャナちゃんと坂井君！」

キンジ「っ！　本当か！？　白雪！　どこだ！？」

白雪「あそこ！」

そう言つと白雪はある一点を指した。そこには……

悠二「シャ、シャナ……もう少し離れてくれない？」

シャナ「いや。」

困惑している悠二と、そんな悠二の左腕に思い切り抱きついて
いるシャナの姿があった。はつきり言って周りからの視線が痛い。

なのは「シャ、シャナちゃん本当に大胆なの……」

理子「うん！ 理子と同じくらいかもね！」

リクオ「さらっと凄いこと言うね、峰さん。まあ事実だけど……」

シヤナと同じくらい大胆な理子にリクオは苦笑いを浮かべる。と、
ここで、

レキ「……北西１００メートルの地点から誰かが狙撃しようとしています……。」

はやて「な、何やて!?!」

レキの突然の報告にはやては驚く。そして全員がその方向を見てみると、

ヒナギク「っ！ いた!」

一護「間違いなくうちのクラスの奴だな、あれは……」

スナイパーライフルを構えている3人の男子生徒がいた。

男子A「坂井悠二……」

男子B「男子としての裏切り……」

男子「誠にもって許しがたし……」

そして男子達は実にくだらないう呪詛を呟きながら、ライフルの引き金に手を掛けた。そして……

プスッ！
x 3

3人ともその場に倒れこんでしまった……。

レキ「狙撃……完了……」

フェイト「レ、レキ!？」

黒子「何狙撃してるんですの!？ 確かに殺人未遂にはあたりますけど殺さなくとも……」

レキの思わぬ行動にフェイトと黒子が抗議しようとするが……

レキ「大丈夫です。さっきのは麻酔弾ですから……」

レキはそう言つて弾丸を見せた。そこには緑色の液体がカプセルに入られていた。

当麻「お、おお、さすがだな、レキ……。」

レキ「……ただし1日は少なくとも眠りから覚めません……。」

ハヤテ「いやそれ効き目強すぎですよレキさん！」

なんだかんだでレキも若干くだらないことをしている男子達にキレているようだ……。

リクオ「あ、ところで平井さんと坂井君は？」

ヒナギク「あ、あそこにいますよ。」

そう言ってヒナギク指した方向の先にあるのは……

なのは「メリーゴーランドだね。」

はやて「まあ定番のアトラクションやな。」

と、そこへ、

キンジ「ん？ 松平先生の娘もあれに乗るみたいだな。」

キンジが七兵衛と栗子の姿を見つけてそう言った。そしてその後ろから……

アリア「…どうやらあのバカ3人はまだ懲りずに狙っているようね……」

松平、近藤、総悟の3バカスナイパーが付いてきてることに気付キアリアがそう吐き捨てた……。

一護「よし、とりあえず俺とフェイト、当麻となのは、ハヤテとヒナギクが中を見張る。リクオとはやて、キンジ達と白井は外を見張ってくれ。」

一護以外「うん（おう）（ええ）（ラジャー）！」

くメリーゴーランド内く

なのは「それにしてもメリーゴーランドに乗るなんて何年ぶりだろうね、フェイトちゃん。」

フェイト「うゝん、私達が遊園地に行ったのって中学の頃が最後だったかな？」

なのはとフェイトがそんな風に昔を思い出しながら話していると、

土方「ん？　おい、何でお前らここにいるんだ？」

土方がやってきた。

一護「おう、十四郎か。」

当麻「いや、実は……」

当麻が土方に事の成り行きを説明する。

土方「はあ、まさかあの3人と同じくらいのバカがまだいたとはな……。」

ヒナギク「ええ、本当に呆れて物も言えません……。」

それを聞いて土方とヒナギクはげんなりとした様子でそう呟く。すると……

近藤「くっ！ 野郎やりやがるな……。」

総悟「狙いが定まらねえですぜい、近藤さん。」

松平「つーかいつこうに距離が縮まらねえじゃねえか。いつになったら追いつけたこの馬……。」

バカスナイパー3人が馬に乗った状態で前方にいる七兵衛を狙おうとするが、中々狙いが定まらずそう呟く。

ハヤテ「いやこれメリーゴーランドですからね！ 距離絶対縮まり

ませんよ！！そういう構造してるんですから！！」

土方「つかてめえらい加減諦めるこのアホトリオ！！」

そんな呟きにハヤテが突っ込み土方がキレ気味にそう言う。すると、

松平「何だおめえら、ひょっとして殺し屋同盟に入りたいのか？
ええ？」

一護「いや入らねえよ、んなくだらない同盟。」

フェイト「それにあの2人は本気で愛し合ってると思いますよ、松平先生。」

「松平「ああ？　何でそんな事言い切れる？　おじさんに言ってみい。」

フェイトの指摘に松平がそう尋ねる。

フェイト「あ、いえ、ただの勘なんですけど……」

松平「勘？　勘なんかで愛し合ってるかどうかかったらキャバラなんていらないよこの世界に。そしたらオッサン、キャバラの姉ちゃんに毎度毎度金づるとしか思われてないよ。」

ヒナギク「あの今さらつとんでもない発言が出た気がするんですけど……。教育委員会とかに知られたら即懲戒処分ですよ、間違いないく……。」

松平の発言にヒナギクは呆れと若干の怒りを覚える。

なのは「でもやっぱりフェイトちゃんの言う通りですよ、松平先生。栗子さんも嫌々あの男の人に付いていつてるようには見えませんし……。」

ハヤテ「そもそも娘の恋愛に一々親が干渉してたら先生そのうち栗子さんに嫌われますよ。」

なのはがフェイトの意見に賛同し、ハヤテが松平の親バカぶりにそう注意をした。

くメリーゴード外く

黒子「相変わらず警備員長達はやる気満々のようですね。」

はやて「そうみたいやね。にしても理子ちゃん、いつの間に盗聴器なんて付けたんや？」

はやて達はメリーゴーランドの外で理子の仕掛けた盗聴器越しに内部の状況を把握しながら周辺警戒をしていた。

理子「入場する前ハヤ君に話し掛けた時に隙を見て付けたのだ〜！
」

キンジ「理子はこれでも諜報のプロだからな。」

理子のはやての疑問に答え、キンジが理子の素性を少し説明する。
と、その時、

リクオ「皆！ あれ！」

リクオが何かに気づき皆を呼んだ。その視線の先には……

アリア「……あれは何やってるのかしら……」

白雪「カモフラージュのつもり……だと思っけど……」

ベニヤ板に超下手くそな絵で風景を真似ているであろうものがあり、そこにある隙間から何か細い筒のような物が飛び出していた。まあ、明らかに吹き矢のようなものである。そしてあまりの完成度の低さで逆に周りから目線がかなり集中しておりカモフラージュにまるで成っていない。

キンジ「あれでバレずに暗殺できると思ってたのか、あいつら……
発想が小学生以下だな……。」

はやて「それに暗殺のために使う武器が吹き矢って何時代や一体……。
」

そんな光景を見てキンジとはやてが呆れながら呟いた。

リクオ「まあとりあえず見つけたんだから注意しようか……。」

理子「違つよ、リックくん！注意じゃなくて逮捕だよ！」

白雪「だ、だからクラスメイトなんだから逮捕は止めよう……。」

そんなこんなでとりあえずその目立っているカモフラージュに近付こうとした時だった……

打ち止め「あれ？　これなんだろう？　ってミサカはミサカは掴んでみる！　！」

偶々そこを通りかかった打ち止めが、何と吹き矢らしきものの筒の部分で掴んだのだ。

男子D「お、おい！　放せこのガキ！　おい！　ちょっとこいつを退かしてくれ！」

男子 「ああ。」

どうやらベニヤには2人のモブ男子が隠れていたようで一人がベニヤの後ろから出てくると、

打ち止め「うわっ!?!」

男子 「おい！ 何してんだ！ 邪魔だからさっさと退いて……」

だが2人は知らなかった。この少女が一体誰の連れであるかを……。

一方通行「なア、何してンだ？ てめエ……」

男子D「え……」

男子「あ、一方通行……」

一方通行の登場に2人は体をガタガタ震わせる。

一方通行「おい、ちょっと待ってる……」

打ち止め「うん！ってミサカはミサカは快く承諾してみる！！」

打ち止めをそこで待たせ、恐怖で震える二名のモブ男子を物陰へと連れていった。そして……

モブ男子「ギャアアアアアアアア……」

断末魔が響いたのだった……。しばらくして一方通行が戻ってくる
と、

打ち止め「さっきの2人はどうしたの？ってミサカはミサカは尋ね
てみたい!!」

一方通行「ああ？ 知るか。さっさと行くぞ……。」

打ち止め「はい!!ってミサカはミサカはあなたに付いていつて
みる!!」

一方通行と打ち止めは何事もなかったかのようにその場を去っていた。そして完全に蚊帳の外になってしまったリクオやはやて達は……

はやて「な、何や嵐みたいな人達やったなあ……。」「

リクオ「そ、そうだね……。」「

そう呟くに他無かった……。

結局メリーゴーランドでの暗殺も無事阻止（？）できた一護達。シヤナ達と栗子達の行き先はまたしても一致した。それは……

当麻「ジェットコースターではさすがに暗殺なんてできないよな。」「

なのは「あれだけ速く動くものだからね。それはいくらなんでも……」

ジェットコースターに乗り込みながらそう話す当麻となのはだったが……

はやて「いや、ああいう手もあるみたいやで、当麻くん、なのはちゃん。」

当麻・なのは「は（え）？……」

はやてはそう言っている方向を指した。そこでは……

総悟「う〇じしろ。」

七兵衛「はあ!？」

総悟「帰ってくるまでにう〇じしてなかったら殺す。いいな？」

七兵衛「ひいっ!？」

総悟が栗子に見えないように後ろの座席から七兵衛の首もとにナイフを突き付けてそう脅していた。

フェイト「な、何を要求してるの総悟は／／／!？」

フェイトは総悟の発言に恥ずかしさのあまり動揺している。まあフェイトはかなりおしとやかな性格であるため、そういった下品な言葉への耐性が皆無なのだ。

黒子「要するに社会的に抹殺してしまおうという魂胆ですわね……。」

キンジ「まあ効果はてきめんだろうがな。あいつ人を追い詰めることに関してはある意味天才だし……。」

なのは「？ それってどういう意味なの？」

キンジの言葉になのはがそう尋ねる。すると、

理子「それはね、なのちゃん……総くんは天性のドSだからだよ！」

一護「それも“超”が付くほどのな……。」

理子がそう答え、一護がそれに捕捉を加える。と、ここで、

リクオ「そういえば、いつの間にか桂さんが居ないみたいだけど、どこに行ったの？」

リクオがヒナギクの姿が見えないことに気付きそう言つと、

ハヤテ「あ、ヒナギクさんは外で待ってますよ。」

はやて「ん？　そうなんか？　でも何で……」

一護「いやはやて、言われなくともわかんたる……」

はやてが尋ねようとすると一護がそう呟く。

当麻「ああ、あいつそういえばこういうのダメなんだっけか……」

なのは「え！？　そうなの！？　ちょっと意外なの……」

ハヤテ「いえ、そうでもありませんよ。ヒナギクさんお化けとか苦手ですしカレーも甘口を選んだりしてますし、結構女の子っぽいところもあるんですよ。」

白雪「綾崎君、それヒナギクさんに聞かれたらタダじゃ済まないと思うよ……。」

ハヤテの微妙に地雷な発言に白雪がそう呟いた。

白雪「でもよっぽど乗りたくなかったんだろうね、桂さん。」

キンジ「ま、まあな。綾崎が誘ったら木刀で脅してきたくらいだな……。」

フェイト「あ、あははは……。」

白雪とキンジの会話を聞いたフェイトは苦笑いを浮かべる他なかった。と、ここで、

黒子「っ！ 皆さん！ 平井さん達の後ろの席の人達を見てくださいますし！」

黒子は何かに気付き、皆を呼んだ。その先を見ると、またしても組の男子二名がナイフが何かを手に持っている。

アリア「っ！ あいつらまさか沖田と同じようにして坂井を社会的に抹殺する気じゃ！？」

リクオ「ええ！？ そんなことになったら坂井君は別の意味で終わっちゃうよ！？」

相手の狙いにアリアが気付きそう言うと、リクオは焦りを覚えた。だがしかしアリアとリクオの席はかなり離れているため、どうすることもできない。そしてその間にも男子達は悠二の首もとにナイフ

を近付け脅そうとする。だが……

なのは「ねえ、その2人……何をしてるのかな？……」

男子二名「ビクッ！！」

そう、その男子二名の後ろの席にいるのは当麻と……管理局の白き魔王だった……。そして魔王は今日の朝、半数以上の男子に“魔王の恐怖”を植え付けている。なので……

男子「ガタガタガタッ！！！」

男子二名は尋常ではない震えと冷や汗を出していた……。

なのは「また少し……頭……冷やす……?」

男子二名「チーンッ

そして魔王はトドメの一言を浴びせ男子2人を完全に卒倒させた……。

なのは「ふう……これで大丈夫だね、当麻君。……って、当麻君？ 何か凄く顔色が悪いみたいだけど大丈夫？」

当麻「あ、ああ……へ、平気だ……ぞ……。」ガタガタッ！！

なのはが元に戻って当麻に話し掛けると、当麻も体を震わせ顔色が悪くしていた。というか、このジェットコースターに乗っていた全

員が一瞬言い様のない悪寒に晒されていたとかいなかったとか……。

一護「つつか何時になったらこのジェットコースター動くんだ？」

ここで一護がもつともな質問をした。そう、このジェットコースターはまだずっと止まったまま発進しないのだ。

フェイト「あ、さっきパンフレットに書いてあったんだけど、このジェットコースターって“忘れた頃に突然動き出す”のが売りみたいだよ。」

と、その時、

ゴオオオオオッ！！

言ってるそばからコースターが動きだした。それも時速約200キロで……。

はやて「うひゃああああっ!!!??」

なのは「は、早すぎなのおおおお!!!!!」

あまりの早さにはやてとなのはが絶叫する。すると、

総悟「うわああああ!!!??」

前から総悟が飛ばされてきて、

ガシッ！！

当麻「うおっ！？」

当麻のツンツン髪を掴んできた。

キンジ「おおお沖田！？ お前何やってんだよ！？」

総悟「ベルト閉めるの忘れた！ ベルト閉めるの忘れた！！」

キンジが突如目の前で飛ばされそうになっている総悟を見てそう尋ねると、総悟は必死の形相で後ろにいるキンジを見ながらそう叫ぶ。

ハヤテ「さっきまでのSはどこに行っただんですか沖田さん!？」

総悟「Sは打たれ弱いのだ!! ガラスの剣なのだ!!!!」

当麻「ガラスの剣はいいから俺の髪を放せ沖田!! めっちゃ痛いから! この上なくヤバイからこれ!!」

総悟のSはどこへやらな状況の中、ジェットコースターはようやく終了した……。

当麻「え、えらい目にあつた……」

当麻は色々起こりすぎたせいで肉体的にも精神的にも燃え尽きていた……。

なのは「だ、大丈夫当麻君……。」

あまりにげっそりしている当麻を見てなのは心配そうにしている。
すると、

一護「まあ、とりあえずここも何とかなったな……。」

フェイト「そ、そうだね。シャナと悠二も特に何事もなかったみたいだし……。」

フェイトの言うとおりシャナと悠二は特に変わった様子もなくその

場を去ろうとしている。だが、

リクオ「うん……でも向こうの仲はどうやらさらに深まってるみたいだよ……。いろんな意味で……。」

リクオがそう言って指を指した方向には……ケツの辺りを両手で押さえながらその場を離れようとしている栗子と七兵衛がいた。すると、

松平「トシ！！話が違いじゃねえかあ！！さっきよりも距離が近づいちゃってるじゃねえかあ！！？」

土方「いやあんたの娘なんなのマジで！？普通洩らすか！？あんた一体娘にどんな教育してきたんだ！？？」

松平が土方に文句を言い、土方が栗子のとんでも行動にドン引きしながら抗議していた。

ハヤテ「どつやら栗子さんの方が一枚上手だったようですね……。」

はやて「いや、一枚上手言っけどやってることは一生ものの恥なんとちゃうか?……。」

ハヤテの言葉にはやては何とも言い難いような様子で突っ込む。

レキ「……追いかけないと平井さん達を見失ってしまいますよ?……」

理子「おう、そうだね! とりあえず悠くん達を追おうよ! じゃあね、トッシー!」

土方「てめえ、誰がトツシーだ!!」

理子の“トツシー”という呼び名に土方はややキレる。

白雪「じゃ、じゃあ土方君に近藤先輩もまた……って、あの近藤先輩？ 何でそこに座ってるんですか？ というか何か座高が高く……」

ここで白雪が近藤の不自然な態勢に気付いた。すると近藤は……

近藤「なあ皆……誰にも言つなよ……」。

全員「ええええええええええええっ!!!!???」

ジェットコースター乗り場に土方達の叫び声が響いた…………。

結局当麻達は近藤のともない失態に驚愕してる間にシャナ達を見失ってしまい、現在シャナ達を搜索している。

一護「はあ…………」

フェイト「一護大丈夫？」

一護「ああ、いや、何かいろいろあり過ぎたせいかどつと疲れが出てきちゃったみてえだ…………。」

フェイトがそう聞くと、一護は疲れ切った様子で答えた。

リクオ「まあ、仕方ないんじゃないかな。近藤さんに関しては特に……」

はやて「なあ、ホンマにあの人風紀委員長なんか？」

アリア「ええ、そうよ。ちょっと今は信じられないけど……」

はやての問いにアリアもげんなりした様子で答えた。まあ、あんな失態を犯してしまう人間が風紀委員長であるなんて信じられなくて当然といえば当然である。

なのは「それにしてもシャナちゃん達見つからないね。」

黒子「まあこの遊園地も一般のものと比べたら何倍も広いですから、見つからないのも当然ですよ。」

ハヤテ「でも早く捜し出さないとまた誰かが碌でもない暗殺計画を実行しかねませんよ?」

そんな会話をしていると、

ヒナギク「っ! いたわ!」

ヒナギクがシャナ達を見つけた。ちなみにヒナギクはちゃんと合流しましたよ。ただ合流した時に自分に対してもの凄く失礼な発言をされたことを察して物凄く不機嫌でしたが……。

キンジ「相変わらず平井は坂井と無駄に密着してるな……。」

白雪「そ、そうだね。ってそれよりも周りに不審な人がいないか確認しないと！」

とりあえず誰かしら不審な人物がいないか全員で探していると……

男子F「か、勘弁してくださいって先生！！　今それどころじゃないんですよー！！」

男子G「お、俺達は坂井悠二を抹殺……」

「……」うるさいわねー！　いいからあんた達少しくらいお金持つてるんでしょ？　ちよつと貸しなさいよ。」

黒服にサングラスを着た見るからに怪しい男子二名が明らかに酔っ払っている女性にカツアゲを受けていた……。

当麻「……とりあえず怪しい奴は見つけたけどよ……俺にはあの力ツアゲをしている方が知り合いに見えるんだが、気のせいかな？……」

ハヤテ「いえ、気のせいではありませんよ。何せ僕毎日会ってる人ですから……それに……」

当麻の言葉をハヤテが肯定し、さらに何かを言おうとしたところである人物が動きだした。そして酔っ払っている女性のところに近づいていくと……

ヒナギク「こんなところで何やってるの？ お姉ちゃん……」

その人物　桂ヒナギクは目の前の酔っ払っている女性に呆れ混じりにそう尋ねた。

???「ん?　あれ?　ヒナじゃない!　こんなところで何してるのよ?」

ヒナギク「私のした質問をそっくりそのまま返さないで欲しいんだけど……」

ヒナギクは頭に手を当てながらそう呟いた。一方……

フェイト「お姉ちゃん?……」

はやて「えっとリク才君……あの人は誰や?……」

フェイトはヒナギクの“お姉ちゃん”という言葉に反応し、はやてがリクオに女性が何者かを尋ねた。

リクオ「ええと……あの人は桂雪路先生って言って、綾崎君や桂さんのクラスの担任の先生で……」

理子「正真正銘ヒナちゃんのお姉ちゃんなのだ!!」

なのは「え、ええっ!?! あ、あれがヒナギクちゃんのお姉さん!」

理子の口から出た“ヒナギクのお姉ちゃん”という言葉に驚きあらわにした。

一護「まあ、誰でも驚くような普通……」

ハヤテ「ええ……僕も初めて聞いた時には耳を疑いましたからね……」

まあ、目の前にいる生徒をカツアゲしてる酔っ払いの女が、完全無欠で才色兼備のスーパー美少女の姉だなどとは誰も思わないのが至極当たり前というものである。

ヒナギク「お姉ちゃん！ 教師が生徒にカツアゲなんてしていいと思ってるわけ！？ 職員免許剥奪されるわよ！？」

雪路「えー、何言ってるのよヒナ？ 私はまだこの男子達とちょっとした相談してただけよ？」

ヒナギク「生徒にお金の相談するのって明らかにダメだと思うんだけど……」

雪路の言い訳のようであり訳になっていない言葉にヒナギクは呆れるばかりである。すると、

雪路「ヒナ、あんまりカリカリし過ぎちゃダメよ？ でないとせっかく胸を発達させるためのカルシウムがイライラを抑えるために使われちゃうわよ？」

ブチッ……

雪路の言葉を聞いたヒナギクの何かがキレた……

ヒナギク「……お姉ちゃん……何を言ってるの？……胸の話をする

なつて散々言つたよね？……」

ヒナギクの体から明らかに怨念のようなものが発生し始め、辺りがどす黒い雰囲気包まれる。そしてそんな光景を見て……

はやて「き、気のせいやるか？ ヒナギクちゃんの背後に“阿修羅”が見えるんやけど……」

当麻「いや、多分気のせいじゃねえと思うぞ。俺にも見えるし……」

理子「あゝ、完全にヒナちゃん怒っちゃった。ヒナちゃんが一番の悩みだからね。」

ヒナギクの豹変ぶりに理子とレキ以外の人間は体を震わせる。一方

……

雪路「ん？　どうしたのヒナ？」

怒らせた張本人は酔っ払っているせいか状況を全く理解していなかった。そしてヒナギクは……

ヒナギク「少し……頭冷やそうか？……お姉ちゃん……」

いつの間にか彼女の武器の一つである特殊な木刀“正宗”を右手に持ち、本人の見ている中で魔王のセリフを言うと、正宗を振り上げた。そして……

ヒナギク「反省しなさー！ーい！ー！ー！ー！」

ドカアアアアンッ！！！

男子二名「ぎゃあああああああ！！！！」

ヒナギクの渾身の一振りを雪路は避けるが、男子二名にはもろに直撃し断末魔が響き渡る……。

雪路「ヒナさんこちら、手のなる方へ！！」

ヒナギク「待ちなさいお姉ちゃん！！ 今日という今日は許さないんだから！！！！」

そして挑発しながら逃げる雪路をヒナギクは激怒しながら追いかけていくのだった……。そして……

はやて「……………何やまた私ら置いてきぼりやったな……………」

リクオ「ま、まあいいんじゃないかな？　一応阻止できたといえは阻止できたんだし。」

キンジ「いやそれはそうだけだよ……………」

なのは・フェイト「にやははは（あははは）……………」

なのは達の間には微妙な空気が残るだけだった……………。

結局雪路を追い掛けていったヒナギクは放っておくことになり、引き続きシヤナ達を密かに護衛していた当麻達。すると……

当麻「お、あいつら観覧車に行くみたいだな。」

なのは「ということとは……」

黒子「おそらくこれで最後ですね。」

キンジ「長かった、今日一日……」

おそらくこれで最後であることに全員が安堵する。すると、

レキ「……1つお聞きしたいのですが……主犯格の2人は何故姿を見せないのでしょうか?……」

レキが発端である青髪と浅野の姿がないことに気付きそう質問した。

アリア「い、言われてみれば……」

フェイト「あの2人はどうしたんだろう? あれだけ言ってたんだから何かしらしてくるんだろうと思ってただけど……」。

レキの指摘にアリアとフェイトも同じように疑問を抱く。

「護」とりあえず俺達は乗らずに周りだけ注意して見ておこうぜ。
あいつらが観覧車に乗っちまえば手出しできねえしな。」

はやて「え？ 何でや？ 狙撃とかされたりするんとちゃうか？」

「護の言葉にはやてがそう尋ねた。確かに乗ってしまえば近づくことはできないが、遠くから狙い撃つことはできるはずだ。すると……

ハヤテ「あ、それなら心配いりませんよ。あの観覧車のゴンドラは特別製の超合金で出来てますから、戦車で砲撃してもビクともしませんから。」

ハヤテがそう解説した。その事実を初めて聞いたのはとフェイト、はやては顔を引きつらせる。最早夢も何もあつたもんじゃない遊園地だな本当……。そしてそんな中、

リクオ「……本当にあの2人が引き下がるのかな？……」

リクオだけが何とも言えない不安を抱えていた……。

一方、自分達が標的にされ当麻達のおかげ（？）で辛うじて何事もなく過ごせていることを知らないシャナと悠二は、観覧車のゴンドラに乗っていた。

悠二「シャナ、本当に抜け出してきて良かったのかな？」

シャナ「何で私達があの子の親バカに付き合わなきゃいけないのよ。

それとも……楽しくなかった？」

シャナは少し不安そうな表情で悠二に尋ねる。

悠二「そんなことないよ。凄く楽しかった。だってシャナと2人で遊園地に来たのは初めてだったから……。あの時は……。皆と一緒にだったからね……。」

シャナ「あ……………」

だが悠二はその質問を真つ向から否定しそう言つと、シャナはそのことに今更気付いたような顔になる。

悠二「シャナ……。たまに僕は思つんだ……。僕はこんなに穏やかな日々を送っててもいいのかって……。こんな風に君と一緒にいてもい

いのかってね……。」

シャナ「悠二……」

悠二はどこか自嘲するかのようにつく。そしてそんな悠二にシャナはどうしたらいいかわからずにいる。

悠二「僕は……たくさんの人を傷つけた罪人だから……」

シャナ「悠二……！」

シャナは思わず悠二の胸に飛び込んだ。その衝撃でゴンドラが大きく揺れる。

悠二「…シャナ?…」

悠二はシャナの突然の行動に驚くも、彼女の小さな体を受けとめた。

シャナ「そんなこと……言わないでよ……」

そう呟くシャナの体は震えている。

シャナ「あの時の悠二のしたことは間違ってる……だけど……嬉しかった……。悠二が私を守ろうとしてくれた気持ちが……嬉しかった……。だから……自分のこと“罪人”だなんて言わないでよ……。」

悠二「……ゴメン……」

シャナの心からの言葉を聞いた悠二は、そう一言謝った……。

シャナ「悠二……………」

悠二「シャナ……………」

そして自然と2人の顔の距離が縮まっていく。そして重なりかけた、その時、

バラバララララッ!!

突如二人の乗るゴンドラのほぼ真横に黒いヘリコプターが現れた。

悠二「ええええっ!？」

シャナ「な、何!？」

突然のことに2人は驚きをあらわにした。するとさらに、

青髪「見つけたで !?!?!」

浅野「坂井 !?!」

青髪と浅野がある物に乗って登場した。

当麻・一護・キンジ

「はあああつ!!!!??」

なのは・フェイト・はやて「えええええっ!!!!??」

松平・近藤・総悟

「な、何じゃそりゃあああ!!!!??」

それに当麻やなのは達、ヘリコプターに乗っていた松平達も驚きの叫び声を上げる。何故なら……

ハヤテ「ス、ストライクフリー○ムうううう!!!!??」

紛れもなくサン○イズの超人気アニメ“機動戦士ガンダムSEED
DESIGN”のストライクフリーダムだった……。

アリア「ちよつとおおお!!?? あんた達どこからそんなもの
入手したの!!??」

青髪「甘いでアリアちゃん!!」

浅野「俺達はリア充抹殺のためならペン○ゴンとだって張り合える
くらいの戦力を用意できるのさ!!」

リクオ「いやダメでしょ!? とうかサン○イズから怒られるよ
!??」

青髪と浅野がそう叫ぶとフリーームはビームをチャージし始めた。

総悟「どうやらあのガン〇ムは俺達とは狙いが違うみたいですねい。
というわけで……」

近藤「俺達……」

松平「侍サーティーン……」

松平・近藤・総悟「お命頂戴致しやす!!」

そう言つと松平達はシャナ達の乗っている一個下にあるゴンドラに
狙いを定めた。そこには栗子と七兵衛がいる。

土方「まったくあの3バカ何してんだ!!」

今にも発射されそうなフリーオムのビーム砲と引き金に手を掛けている松平達の姿を見て、松平達を探していた土方が声を上げる。

白雪「ど、どうしよう!?!」

黒子「どうするも何もヘリコプターの方はともかく、あんな巨大な物体を止めるのは……」

白雪と黒子は目の前の状況を打開する方法を模索するが良い案は出てこない。

なのは「こうなったら魔法を使って……」

一方なのは魔法を用いて目の前のガンダムを止めようとするが……

当麻「待て！　なのは！」

なのは「当麻君！？」

当麻がそれを手で制した。

フェイト「でもこのままじゃ……」

一護「止めとけ、フェイト。巻き込まれるぞ。」

はやて「？ 巻き込まれるってどういふことや？」

はやては一護の言葉に首を傾げる。すると、

リクオ「今、平井さんの近くにいたら多分タダじゃすまないだろうね。」

アリア「そうね。何せシャナは……」

その時、

ゴオオオオオオッ！！！！

観覧車とガンダムやヘリコプターの間に割って入るように巨大な炎の翼が顕現し……その中心には、シャナの姿があった……。

アリア「学園都市最強の女でしょうからね……。」

その言葉になのは達は驚愕する。

なのは「シャ、シャナちゃんが!?!」

はやて「ホンマかいなそれ!?!」

当麻「ああ……。まして今のあいつは半端じゃなくキレてるだろう

からな……。青髪達生きてんのか？……」

当麻は青髪達が生還できるかどうか微妙に心配していた……。一方で、

シャナ「誰を冥土に送るですって………」

シャナの怒りは当麻の予想通りマックスだった。そして目の前にいるガン〇ムに乗っている青髪と浅野……さらにヘリコプターに乗っている松平、近藤、総悟に問い掛ける。

青髪「な、何言つとるんやシャナちゃん………」

浅野「そ、そうだぜ平井。別に俺達は坂井を狙ってた訳じゃ……。あ……。」

浅野は自ら墓穴を掘った。哀れ浅野……。

近藤「いや、あの、俺達別にあなた方を狙った訳じゃないのですが……」

一方何だかんだでシャナの怒りの対象に入ってしまったている近藤が冷や汗を流しながら弁明しようとする。だが……

シャナ「それに折角良い雰囲気になってたのに、あんた達のせいで……」

シャナの耳に近藤の弁明が入るはずもなく、シャナは右手に一本の刀を出現させた。彼女の愛刀“贄殿遮那”である。その刀をシャナが振り上げると、刀の周りに尋常ではない大きさの炎が収束する。

そして……

シャナ「はああああああっ！！！！！！！！」

ドカアアアアンツ！！！！

バカ5人「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

巨大な炎によってフリーダムもヘリコプターも木っ端微塵に爆散し、
完全な灰となったのだった……。

その後、青髪や松平達は九死一生を得て何とか生還出来たものの……

白雪「とりあえず浅野君、青髪君、沖田君、近藤先輩は反省文10枚と1ヶ月間それぞれのクラスで雑用してもらいます。」

浅野「ひゃ、100枚!？」

青髪「それに1ヶ月間雑用付きなんてそんな殺生な……」

青髪が抗議しようとする……

ガチャッ!!

アリア「風穴開けられたい？」

アリアの超絶お怒りスマイルと額に突き付けられたコルト・ガバメントの銃口によって否応なしに黙らされた。

松平「あ、おじさんちよつと用事思い出したからこれにて……」

ジャキツ!!

レキ「……逃げません……」

松平が雲隠れしようとするもレキにドラグノフを突き付けられあえなく失敗……。

キンジ「大体あんたの用事ってどうせキャバクラだろうが……」

トドメと言わんばかりにキンジがそう呟き、

理子「頑張れ」

理子はニコニコしながらその光景を楽しんでいた。こうしてバカをやるうとした5人は最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”によってきつちり捕縛され、青髪達と協力した男子達もハヤテや黒子によって捕らえられ、こってり絞られたのだった……。そして……

シャナ「ごめん悠二……こんなことになっちゃって……」

悠二「あ、うん。まあちょっとゴタゴタしちゃったけど……今日は楽しかったよ、シャナ。」

シャナが申し訳なさそうにそう言うと、悠二は穏やかな笑みを浮かべて返した。すると……

シャナ「悠二……目を瞑って……」

悠二「え？ あ、うん……。」

少し首を傾げながらも悠二はシャナの言う通りに目を瞑った。そして……

チュッ

何かが頬に触れた……。

シャナ「じゃあまた明日ね、悠二。」

悠二「え！？ シャ、シャナ！？」

悠二は声を掛けようとするがシャナは走り去ってしまった。すると、

はやて「いや、中々のものを見せてくれるやないか悠二君。」

リクオ「は、はやて、茶化さないでよ……。」

はやてやリクオ、それに当麻やなのは、一護やフェイトがやってきた。

悠二「え！？ み、皆まさかさっきのを……」

なのは「にやははは……」

フェイト「ご、ごめんね、悠二。見るつもりはなかったんだけど……」

なのはは思わず苦笑いをし、フェイトは申し訳なさそうに謝った。

悠二「ああ、いや、あの、さっきのは／＼／＼……」

悠二はどう説明していいのかわからずあたふたしてしまつ。

当麻「まあ、とりあえず周りには黙っておくから安心しろ、悠二。」

一護「ああ。また今日みたいにアホな連中に狙わせる訳にも行かないしな。」

そんな様子の悠二を見て、当麻と一護がさり気なくフォローした。

悠二「ありがとう。でもごめん。何か皆今日1日走り回ってたよね」

リクオ「坂井君、知ってたの？」

悠二「まあ、シャナは全然気付いてなかったみたいだけどね。」

悠二は苦笑いを浮かべながらこう答えた。

悠二「じゃあ、僕もそろそろ帰るよ。また明日。」

一護・当麻「ああ。」

フェイト「また明日、悠二。」

なのは「じゃあね！　悠二君！」

そして悠二も帰っていった。

はやて「せやけどホンマに幸せそうやな、2人共……。」「

リクオ「まあ2人共ここに来た時からずっとそうだしね。」「

一護「それに能力も一緒だしな。」「

フェイト「え！？　一緒ってことは悠二も能力者なの！？」

一護の言葉にフェイトが気づき尋ねる。

当麻「ああ、2人共“炎の使徒”^{フレイム・ヘイズ}っていう能力の使い手だぞ。ただ悠二は能力を滅多に使わないんだけどな。」

なのは「そうなの？」

リクオ「うん、何でかは僕達にもわからないんだけど、坂井君はあまり自分の能力が好きじゃないみたいなんだ……。」

リクオは何とも言い難そうな表情を浮かべる。と、ここで、

フェイト「？　一護どうかしたの？」

フェイトは一護が何か考えている様子なのを見て尋ねた。

一護「ん？　あ、いや、何でもねえよ。」

フェイト「？　そっか…」

一護はフェイトに何でもないという様子で答えると、フェイトも一応納得した。

一護（そういえば、あいつらが学園都市に来る前の話を一度も聞いたことねえな……ここに来る前に何かあったのか？……）

だが一護は頭の中でそんなことを考えていた。こうしてなのは達の登校初日は慌ただしく終わりを告げた……数名の心に疑問を残して……。

ちなみに……

ヒナギク「待てえええええええ！！！！！」

雪路「いやだよ！」

未だに酔っ払いの姉とキレた妹の追いかっこが続いていたり……

栗子「十四郎様 ！！！！ こんな脱○野郎とは今すぐ別れるの
で、付き合つて下さいでございます ！！！！」

土方「何でだ ！！！！？」

よく分からない内に好意を向けられたりしている副風紀委員長がい
たりしているが、それは実に些細なことなので皆さん無視しましよ
う……………。

END

人の恋路は何人たりとも邪魔してはいけない！！（後書き）

どうも黒狼です！！

今回もやはりネタ中心ですが少しシャナと悠二の会話をシリアスな雰囲気になりました。何か悠二の使ってる言葉が原作とかなり違うような気がします、そこはご容赦願います。

あと今回は雪路を出しました。まあ、登場の仕方がかなり微妙な上に一瞬でいなくなってしまうましたが……。雪路の印象はとにかく酔っ払って何かをしてかしてヒナギクを怒らせるというイメージしかなかったもので……。何か本当に申し訳ないです。

とりあえずまだ日常短編ものが続くと思います！

ではまた！！

兄妹ってのはいいもんだ by 作者（前書き）

今回は前半ギャグ、後半シリアスです！

そして文章が多分一番長いです！

ではどうぞ！

兄妹ってのはいいもんだ by 作者

松平と青髪達のくだらない嫉妬による事件の翌日。至って平和に全ての授業が終わり下校時間となったところで、

一護「ナギの奴が早速ひきこもってるだろ？」

リクオ「うん。それで綾崎君がまた説得してくれないかって頼んできたんだ。」

リクオが一護や当麻、それになのは達にそう言った。

はやて「なんや？ ナギちゃん学校に来ておらんのか？ というか今“ひきこもってる”って聞こえた気がするんやけど……」

当麻「いや、確かに言ったぞ。まあ、あいつは重度の引きこもりだからな。」

はやての言葉を当麻はあっさり肯定した。

なのは「え！？ ナギちゃんってそんなに酷い引きこもりなの！？」

一護「まあな、昔なんかテストと終業式の日以外は全部何かしら理由を付けて休もうとしてたくらいだしな……。」

フェイト「あ、あはは…それは筋金入りだね……」

一護の口から出た事実にはフェイトは苦笑いを浮かべる。

リクオ「どうする？ 当麻、一護。僕は行こうと思うんだけど。」

一護「俺も行くぜ。なんかハヤテが可哀相だしな。」

当麻「ま、あいつとは俺達も結構付き合い長いし。あいつの家にもしばらく行ってないから行くとするか。」

当麻と一護も面倒くさがりながらも結局行くようだ。

リクオ「あ、なのは達もどう？」

なのは「ふえ？ いいの？」

フェイト「大勢で押し掛けちゃうと邪魔になっちゃうんじゃない……」

リクオが誘うとなのはとフェイトは申し訳なさそうに言うが……

一護「いや、邪魔になることはねえだろ。あいつの素性知ってるだろうが……」

なのは・フェイト「あ……………」

一護がそう言くと2人は今更のように思い出した。

はやて「そ、そういえばナギちゃんって超お嬢様やったな……」

当麻「そういうこと。それにナギの家に一度行って慣れておいた方がいいぞ。」

なのは「え？ 何を？」

当麻の言葉の意味が分からず、なのははそう尋ねる。すると、

一護「……日本最大財閥のお嬢様の暮らし様だよ……」

一護がどこかげんなりした様子でそう言った。こうして当麻やなのは達は引きこもりを説得するためにナギの家を訪ねることになった。

「道中 第12学区にて」

なのは「でもナギちゃんの家ってどのくらい大きいんだろ？ やっぱりすずかちゃんの家やアリサちゃんの家よりも大きいのかな？」

フェイト「うーん、でもアリサやすずかも凄なお嬢様だからね。あの家よりも大きいお屋敷って想像がつかないよ……。」

なのはとフェイトは元の世界にいる自分の親友の顔を思い出しながら話していると、

「護「なんだ？ お前らの知り合いにもそついう奴がいたのか？」

「護がそつ尋ねてきた。

はやて「知り合いやのうて私達の親友の2人が生粋のお嬢様やったんよ。」

リクオ「へえ、そうなんだ。」

はやての言葉にリクオがうなづく。すると、

当麻「いや、多分お前らの想像を遥かに超えてると思うぞナギの屋敷は……」

なのは「え！？　そ、そうなの!？」

まあ、元の世界にいるアリサやすずかも世界規模の財閥や企業の令嬢であるためそれより遥かに大きな屋敷であると言われてみてもや

はりピンと来ないのだ。

一護「まあ行ってみればその意味がわかるぞ。」

と、その時、

??? 「いたか!？」

??? 「いや、こっちはいない!」

??? 「絶対に捜し出せ! 見つけ次第即逮捕しろ!」

往来で大声を出しながら何かを捜している者達がいた。だが間違い

なく一般人ではない。その者達は全員女性で口元を黒い布で覆い、短い丈の派手な和服を着ている。そして何より特徴的なのは全員薙刀や小刀、クナイを手に持っており実に物騒である。

はやて「な、なんやあの人達は？」

はやてはその異様な光景に動揺していると、

リクオ「ああ、大丈夫だよ、はやて。あれは“百花”の人達だよ。」

リクオがそう答えた。

フェイト「それって何なの？」

「一護」「百花」は真撰組と同じ学園都市の自警集団だ。ただ真撰組と違うのは百花の連中は学生じゃなくて志願した大人の女達なんだよ。」

フェイトが初めて聞く単語に首を傾げると一護が説明した。

当麻「あと百花のトップは学生じゃなくてうちの学校の先生だつてとこだな。」

なのは「え？ 私達の学校の？」

と、そこに、

「????」ん？ なんじゃ？上条に黒崎に奴良ではないか。」

誰かが当麻達に気付き話し掛けてきた。その人物は薄い金髪を一ヶ所で纏め、高そうなキセルを右手に持っている廓詞くわくごを使う女性だった。

リクオ「あ、こんにちは。月詠先生。」

月詠「やはりそうだったか。そのオレンジ髪は実に良い目印じゃな。」

一護「おい！ 会って早々俺に喧嘩売ってんのかあんたは！？」

月詠の言葉に一護が若干キレる。

月詠「ん？　ぬしらは初めて見る顔じゃな。」

ここで月詠がなのは達の姿に気付く。

当麻「あれ？　先生知らないんすか？　こいつらは俺達のクラスに
来た転入生のなのはとフェイトとはやてです。」

月詠「ああ、銀時が言っていた新しい生徒とはぬしら達のことだったか。わっちはまだそちらのクラスで授業をしてないからな。わっ
ちの名は月詠。2年　組の担任で古典を教えている。あと黒崎達か
ら聞いてると思うが、“百花”の頭領もしている。まあよしなに
頼む。」

なのは「あ、はい！」

はやて「よ、よろしゅうお願いします！」

なのはとはやてが若干畏まりながら挨拶をした。まあ月詠はかなりクールで大人な雰囲気醸し出しているし、廓詞を使っているところがまた変にイカつそうに見えるせいだろう。と、ここで、

一護「ところでさっきから百花の連中が動き回ってるみてえだけど、誰を捜してんだ？」

一護がもつともな質問をした。

月詠「ああ、さっき指名手配犯の目撃情報が入ったんじゃ。それで百花と真撰組が搜索に駆り出されてな。」

当麻「指名手配犯？ 誰なんだそいつは？」

月詠の“指名手配犯”という言葉に当麻が反応し尋ねた。すると……

月詠「……ふう……ぬしらのよく知るバカ犯罪者じゃ……。」

リクオ「あ、ああ、なるほど……。」

月詠はキセルで一服すると、呆れ混じりにそう答えた。そしてそれを聞いたリクオは苦笑いを浮かべつつ納得する。

月詠「まあ、わっちとしてはあの男を捕まえる気にはなれんのだが、

政府の連中が躍起になって捜しているからな。」

と、そこへ、

百花D「月詠様。」

百花のメンバーの1人がやってきて月詠に耳打ちで報告した。

月詠「そうか、わかった。下がれ。」

百花D「はっ！」

そして百花のメンバーはすぐにその場を去っていった。

月詠「ではわっちはこれで失礼する。見つけた時は気が向いたら通報してくれ。ではな。」

一護「気が向けばな……。」

一護と軽く言葉を交わすと月詠はその場をゆっくりと去っていった。

当麻「はあ……指名手配犯ねえ……。」

当麻はどこか微妙な表情でそう呟いた。すると、

フエイト「ねえ一護、さっきの“気が向いたら”ってどういことなの？」

はやて「せや、何で気が向いたら通報するんや？ 相手は指名手配犯なんやろ？」

フエイトとはやてが一護の言葉に疑問を抱き、そう尋ねた。確かに気が向いたら通報なんて普通じゃ意味のわからない話である。

一護「あ、いやな、捕まえる必要がないっていうか、危険ではないっていうか……」

当麻「その人はバカだけど結構良い奴なんだよな……。」

一護がどう答えようか迷っていると当麻が単刀直入にそう言った。

なのは「ふえ？ 指名手配されてる人なのに？ よく意味がわからないんだけど……」

「……」うむ。どういふことが詳しく説明してくれないか？

リクオ「ええと、何て言ったらいいのかな……って、え？……」

皆さんに質問です。説明してくれと言ったのは誰でしょう？ 正解は……

一護・当麻「何してんだあんたは ！！？？」

「???」ぐほあっ!?!」

ドゴオオオオン!!!

なのは・フェイト・はやて「ふえ（え）!!!?!」

誰かがわかる前に一護と当麻が蹴りと拳で吹っ飛ばした。なのは達は突然のことに驚く。

「???」い、いきなり何をするのだ!?! 正雄君! 大介君!」

当麻「誰だよそれ!?! つつかあんた一体何してんだよ桂さん!?!」

お分かりの方も多いと思うので説明しよう。この男の名前は桂小太郎。長い黒髪が最大の特徴で、全国に指名手配されている革命家である。あとバカ。

桂「なに大したことじゃない。ちよつと蕎麦を食べに來ただけだ。」

一護「本当に大したことじゃねえよ!? 何でそんなことのために学園都市に來てんだよ!!! 真撰組や百花も動いてんだぞ!?!」

桂「ふはは、俺が真撰組や百花ごときに捕まるわけがないだろう。」

あれこれ言つゝ一護に対して桂は軽く答えた。と、ここで、

フェイト「えっと……ひょっとしてこの人が……」

一護「ああ……さっき話してたバカ犯罪者だ……」。

フェイトが尋ねると、一護が呆れながら肯定した。すると、

桂「ん？　そこにいる3人は初めて見るな。」

桂がなのは達の姿に気付いた。

リクオ「あ、この3人は僕たちのクラスに入ってきた転入生です。」

「はやて「えっと、よろしゅうお願いします？で、ええんやろか……。」

はやては突如現れた件くだんの指名手配犯にどう接していいかわからず戸惑う。

当麻「ああ、はやて。確かにこの人は指名手配されてっけど、一応銀さんの親友だからな。」

なのは「ふえ！？先生の！？」

目の前にいる人物が自分の担任の親友であることになのはは驚く。

桂「おお、そういえば銀時とまだ会っていなかったな！少しあいつとも会っておくでしょう！」

一護「いや、十中八九邪見に扱われるだけだろ。大体あんた追われてる身だろうが……。」

未だに自分の状況を理解していない桂に一護は呆れる。と、その時、

総悟「かーっつらーっ!!!!」

遠くから総悟の声が聞こえてきたかと思うと、

ドオンッ!

自身愛用のバズーカを発射してきた。桂めがけて……。つまり……

なのは・フェイト・はやて「ふええええ（えええええ）！？」

なのは達に向かってきてるも同然だった。そして……………

ドカアアアアンッ！！！！

激しい爆発音が起こり、辺りには黒煙と周りの人々の悲鳴やらなんやらが立ちこめたり響いたりしていた。

総悟「あばよ桂。悪く思うなよ。」

そう言つて総悟は背を向けて去ろつとし……

バキッ！！！

一護・当麻「何してんだてめえはああああ！！！！！」

当麻と一護の飛び蹴りを食らつた……。

総悟「痛ててて、何すんでさ、上条、黒崎。」

当麻「何すんだじゃねえよ！？ 何俺達がいるのにバズーカ打つてんだよ！？ 俺達まで殺す気か！？」

総悟「あゝ、そこにいたのか。いやゝ、俺は桂が見えたからとりあえずあの世に送ろうと思っただけですぜい。」

一護「いやおかしいだろ！？ 見つけてまず最初にやることがバズーカって明らか逮捕じゃなくて抹殺だろうが！！ フェイト達なんかあと一歩間違えたら木っ端微塵だったぞ！！」

リクオ「あ、危なかったゝ……」

当麻と一護は総悟にぶちギレ、リクオはほっと一息していた。ところでなのは達は今どこにいるでしょう？ 正解は……

なのは「あ、あのゝ……／／／／／」

フェイト「そ、そろそろ／／／……」

はやて「降ろしてくれへんやるか？／／／／／……」

なのはは当麻の、フェイトは一護の、はやてはリクオに抱えられています。それも俗に言う“お姫様だっこ”状態で……。

当麻「あっ！」

一護「わ、悪い！」

リクオ「い、今降ろすよ！」

当麻達は今更ながらそのことに気付きすぐに降ろした。

リクオ「あれ？ 沖田君は？」

するとここでリクオがいつの間にか総悟がいないことに気付き辺りを見てみると、

総悟「かーっつらーっ！……！」

すでに桂を捜すために去ってしまっていた……。

当麻「はあ……不幸だ……。」

一護「悪いな、フェイト、なのは、はやて。何かすげえ物騒な目にあわせちゃって。」

フェイト「ふえ／＼／＼！？ あ、うううん、平気だよ！／＼／／」

なのは・はやて「そ、そうだよ（せ、せやで）／＼／＼／＼！！」

一護が申し訳なさそうにそう言つとフェイト達は顔を赤くしながら言った。どうやら未だにさっきのことが頭に残っているらしい……。

リクオ「それにしても桂さんは相変わらず逃げるのが得意なんだなあ。気が付くともういないし……。」

一護「まあ伊達に指名手配されてないだろうしな。ただ人を巻き込むのは勘弁してくれ……。」

リクオは桂の逃げ足の速さに感嘆すると、一護はそう呟いた。と、ここで、

なのは「と、とりあえずナギちゃんの家に行ったほうがいいんじゃないかな？ 凄く寄り道みたいな感じになっちゃったし……。」

なのはがもつともなことを提案した。確かに半端じゃないくらい時間も行数もロスしてますね……。

そして、そんなこんなでようやくナギの家の前に着いた訳なのだが………

はやて「……なあ、リクオ君……。」

リクオ君「何？　はやて。」

はやて「……これがナギちゃんの家なんかいな？……」

リクオ「うん、そうだよ。」

はやてはここがナギの家であることをリクオに確認した。すると……

はやて「で、でかすぎやろこれ！！！！　何やここ！！！！？……？
どう考えても個人で所有できる敷地の量やないやろ！？」

はやては激しく突っ込みを入れた。

なのは「ね、ねえ当麻君……ナギちゃんの家ってどのくらい広いの？……」

当麻「……確か東京でいうと東練馬と同じくらいの広さとか言ってたぞ……」

フェイト「……それってつまり街1つ分の広さってことだね。すずかやアリサの家もさすがにそこまではなかったな……」

当麻の言葉を聞いたフェイトは思わず呟く。

はやて」と、とりあえず中に入らへんか？……って思ったんやけど、
これどうやって入ればええんや？ 何やこっつい門があるんやけど
……」

はやてはどうやって入ればいいのか考えつつ門に近づいていくと、

S 1 「失礼ですが……」

S 2 「どちら様で……」

S 「いらっしやいますか？」

いつの間にか三人の黒服スーツの屈強な男達に囲まれていた。

はやて「え！？ あ、いや、えっと……………」

はやては男達の威圧的な容姿にテンパってしまつ。と、二二二で、

リクオ「あの、その子は僕の友達なんですけど……………」

リクオが少し遠慮がちに話し掛けた。そして男達はリクオの姿に気付くと、

S 1「リ、リクオ殿！？」

リクオ「御苦労様です。Sの皆さん。」

S「リクオ殿のご友人でしたか！失礼しました！」

S達は慌ててはやての周りから離れ、姿勢を正す。すると、

一護「よう、ナギに会いにきたんだけど話は聞いてねえのか？」

当麻「どうも。」

一護と当麻も男たちに話し掛けた。

S 3「い、一護殿に当麻殿も！ はい！ 話しはマリア様から聞いております！」

男達は当麻達に気付き再び姿勢を正す。

一護「じゃ、とりあえず中に入っても構わねえよな？」

S 1「もちろんです！ どうぞ！」

そして当麻となのは達はナギの家の敷地の中に入っていた。

はやて「び、びっくりしたわ。」

フェイト「な、なんか凄いな、あの人達。あの人達ってひょっとしてナギの……」

一護「ああ、あいつ専属のSだ。」

なのは「え、S……」

まあ、専属のSなんて普通のお嬢様には付くはずが無い。やはりナギは規格外のお嬢様であることを改めて実感するのは。

はやて「せやけど、何やリクオ君達えらく待遇されとったな。」

当麻「ああ、昔ナギ達を助けた話をしただろ？ で、その後すぐナギが俺達のことを兄弟同然で扱えだの何だのとSにたたき込んだ

らしくてな。それであんな感じで接してくるんだよ。」

リクオ「普通でいいのにね。」

やたら畏まってくるS 達の態度に当麻とリクオは苦笑いを浮かべる。そしてそんなことを話している間にナギの家に着いたのだが……

なのは「や、やっぱり大きいの……」

フェイト「うん。アリサやすすかの家の倍はあるのかも……」

やはり規格外だった。どう考えても財閥の屋敷というより王族の住まう屋敷にしか見えないのだ。

「護「まあ、誰でも最初に来た時はそう反応するよな……。」

ピンポンッ！

とりあえず一護がインターホンを鳴らす。ちなみに音はあの明らかにいいとこの家の呼び鈴の音ですよ。こんな安っぽい音じゃありません……。すると、

ガチャッ

「……あ、お待ちしましたよ、当麻君、一護君、リク才君。3人共お久しぶりですね。」

そう挨拶をして出迎えたのは、実に大人な雰囲気を漂わせるメイド服を着た女性だった。

リクオ「こんにちはマリアさん。」

一護「あんたも久しぶりだな、マリア。」

当麻「話はハヤテから……」

マリア「ええ、聞いておりますわ。でも、ごめんなさい。またわざわざ来てもらってしまって……」

マリアは申し訳なさそうにそう言った。

一護「まあハヤテからの頼みだし、最近ここにも来てなかったからな。」

マリア「そうですか。あら？ ひょっとして後ろにいる方々はもしかして……」

ここでマリアがなのは達に気付く。

リクオ「あ、この3人は僕達のクラスに転入してきた……」

マリア「なのはさんとフェイトさん、それからはやてさんでしたね。」

はやて「え？ どうして私たちの名前を……」

マリアが自分達の名前を知っていることにはやては驚く。

マリア「まあ、本当に咲夜さんと声が瓜二つですね……。皆さんのことはナギとハヤテ君からお話を伺っていましたから。3人共ぜひナギやハヤテ君と仲良くしてあげてくださいね。」

フェイト「あ、い、いえ、むしろ私達がナギやハヤテに良くさせてもらってますから……」

マリアの言葉をフェイトが慌てて否定し、そう言った。

マリア「まあ、立ち話もなんですからどうぞ皆さんこちらへ。ナギのいる部屋に案内しますわ。」

当麻「ああ、そうだな。」

マリアに促され、当麻達は屋敷に入りナギのいる部屋に向かう。

フェイト「それにしてもやっぱり中もすごいね……。」

なのは「高そうな物ばかりなの……。」

廊下の途中にあるインテリアや絵画、彫刻の数々に2人がそう呟くと、

一護「高そうも何も皆数百万や数千万、ものによっては数億はするぞ……。」

なのは・フェイト「え……………」

一護の言葉でなのはとフェイトは完全に思考が停止した。

はやて「せやけどこの屋敷一体どれだけ部屋があるんや?」

リクオ「…………数えたことないみたいけど…………少なくとも1つのゲームをするため専用の部屋があるくらいだから…………ね…………。」

はやて「…………もうナギちゃんの家で突っ込みをしたら負けな気がしてきたわ…………。」

マリア「皆さん着きましたよ。」

そんなことを話しているうちにナギのいるという部屋に到着した。

コンコンッ

マリア「ナギ！ 当麻君達となのはさん達をお連れしましたよ。」

ナギ「おお、そうか。入っていいぞ。」

ガチャッ

中に入るとそこにはパソコンをいじりながら紅茶を飲んでいるナギと側に立っているハヤテの姿があった。

ハヤテ「あ、皆さんようこそ。ほら、お嬢様も。」

ナギ「ちょっと待て。あと少してアツ〇ル社の株式相場が提示されるから……」

当麻「また株やってんのかよお前……。」

当麻は呆れつつそう呟く。

フェイト「えっと、株ってあの株?……」

リクオ「う、うん、そうだよ。」

一護「こいつの経済知識は異常だからな。多分株だけやってれば金に困らないんじゃないかねえか?……」

何度目かはわからないが、やはりナギは規格外のお嬢様である。と、ここで、

ナギ「ふう……すまん、待たしてしまって。で、何しに来たのだ?」

ナギはようやくパソコンを閉じ、当麻達に用件を尋ねる。

当麻「お前また最近学校に……ナギ「行かんぞ。」……………即答かよ……」。

当麻が説明しようとする、ナギは“学校”の二文字で用件を理解して即否定した。

ナギ「学校はサボってもいいのだ。人間だもの……” ってあの相田み〇をも言っているだろう。」

マリア「人の名言を勝手に改変しないでください……。」

ナギのとんでもない改変にマリアが突っ込む。

フェイト「ダメだよ、ナギ。ハヤテやマリアさんも困ってるんだからちゃんと中学には行かないと……。」

フェイトがナギにそう言うと、ナギは訝しげな表情を浮かべる。

フェイト「ど、どうしたの？ 私何か変なこと言った？」

すると、

ハヤテ「そういえばまだフェイトさん達にはお伝えしていませんでしたね……。」

はやて「？ どういふことやっ。」

はやては思わず傾げた。

リクオ「ナギちゃんは飛び級してるんだよ。」

一護「つまりこいつは高校1年生で、学年上は俺達の一つ下だからな。」

なのは「……ふえええ！？」と、飛び級ってあの“飛び級”！？」

なのはは衝撃の事実に驚きをあらわにする。

当麻「ちなみに言っておくと咲夜と伊澄も飛び級して高1だぞ。」

フェイト「え！？ あの2人も！？」

はやて「まさか飛び級が現実にあるとは思わへんかったな……。」

はやては驚きのあまりそう呟く。すると、

ナギ「別にさして驚くことでもないだろう。歴代の自由学園の卒業生の中には、10歳で高等部に飛び級して13歳で全課程を修了した奴もいたくらいだしな。」

なのは「じゅ、10歳で高校生!!???」

フェイト「そんな人いるの!!???」

なのはとフェイトは信じられないといった表情でそう言つと、

当麻「いるんだよ、そんなとんでもない人間が……俺達の超身近に……」

なのは・フェイト「え?……」

マリア「あははは……」

ここにいますよ、ここに……。

ピンポンッ

マリア「あら? 来客のようですね。私が出てくるので後を頼みま

す、ハヤテ君。」

ハヤテ「あ、はい。分かりました、マリアさん。」

マリアは来客のお出迎えに行った。

フェイト「あ、そうだ。とにかく高校にしたって学校であることには変わらないんだからちゃんと行かないとダメだよ、ナギ。」

ナギ「無理だ！ あんなに人が一杯いるところなど絶対に無理だ！！」

フェイトが本題を思い出してナギを説得しようとするも、ナギは頑なに拒否する。

なのは「え？ 人が一杯いるところが無理ってどういうこと？」

ここでなのはがナギの言ったことに疑問を抱き尋ねた。すると、

伊澄「ナギは人が大勢いるところ……というより人と接するのが苦手なんです、なのは様。」

咲夜「そういうことや。ナギの学校嫌いはそうそう治らへんで。」

いつの間にか部屋のなかにいた伊澄と咲夜がそう言った。

ナギ「うお！？ さ、咲！！」

はやて「それに伊澄ちゃんも一緒かいな！？ いつの間に来たんや！？」

伊澄「私は家の中を歩いていて気付いたらここに……」

咲夜「うちは何や面白そうな匂いがしたから来ただけや！！」

驚くナギとはやてに伊澄と咲夜はそう説明した。まあどちらもまともな理由とは言い難いが……。

なのは「それで2人共、ナギちゃんが人と接するのが苦手ってどういうこと？」

咲夜「まあ、簡単に言うと人間不信なんやよ。なあ、ナギ？」

ナギ「よ、余計なことを言っな！ このバカ咲！」

咲夜「なんやと！ もう一遍言ってみ！」

ナギ「バカと言っただバカと！」

ハヤテ「お、お嬢様も咲夜さんもその辺にして下さい！」

リクオ「そ、そうだよ！」

何故かいつの間にか従姉妹の口喧嘩が始まってしまい、ハヤテとリ

クオが仲裁に入ろうとする。と、そんな中、

伊澄「すみません。何故かこんなことになってしまって……」

フェイト「あ、うっうん、大丈夫だよ。」

伊澄がなのは達に謝罪すると、フェイトがやんわりと返した。

伊澄「ナギが人と接するのが苦手になったのは仕方ないことなんです。ナギに近づこうとする大人の方々の大半は、皆ナギの財力が目的でしたから……。」

そう呟く伊澄の顔は寂しげであった。

「護「俺達も何とかしようとはしてるんだけどな。あれはかなり難しいんだよ。」

はやて「……その気持ちはようわかるで。ホンマ……」

はやては元の世界……管理局にいた頃のことを思い出した。はやてはかなり特殊な力を所持していたため、一部の人間には能力しか見られていなかった。そしていつの間にか“歩くロストロギア”などという有り難くない異名を付けられてしまっていた。そんなはやてだからこそ、ナギの気持ちはよく理解できたのだ……。

当麻「まあ、それが理由の1つだな。」

なのは「え？ まだ他に理由があるの？」

当麻の言葉になのはが首を傾げる。

当麻「あいつは重度の運動音痴で面倒くさがりなんだよ。だから体育のある日なんかは率先して休みたがるな……。」

伊澄「そうですね。むしろこちらの方が大きいのではないのでしょうか？……。」

その言葉を聞いてなのは達は……特にはやては言葉を失った。あんなシリアスな理由が1つ目なのに2つ目の理由はただの運動音痴と面倒くさがり。それも2つ目の方が大きな理由とは最早何ともかんとも……である……。

はやて「……さっきの私の気持ち、返して欲しいんやけど……。」

全くをもって思い損である。と、ここで、

ガチャッ

???「ったく、人が親切に引きこもりの様子を見に来てやったっていうのに何してんだお前ら……」

入り口のドアが開き、入ってきたのはナギと同じくらいの身長に短い黒髪、そしてナギや咲夜と同様に釣り上がっている目が特徴の少年だった。

一護「ワタルじゃねえか！」

ワタル「一兄！ それに当兄とリク兄も！ 三人も来てたのか！」

当麻「ああ、まあな。」

どうやら一護達もワタルと呼ばれた少年も互いのことをよく知っているようである。すると、

「???」当麻さん、一護さん、リクオさん、御無沙汰おります。」

ワタルの後ろに続いて入ってきた緑色のロングヘアにメイド服を着たメガネの女性が当麻達に挨拶してきた。

リクオ「あ、サキさん！ 久しぶりですね！」

サキ「はい。というか若！ナギお嬢様や咲夜お嬢様にも挨拶なさって下さい！-」

ワタル「ああ？ 咲はともかく何でこの引きこもりワガママお嬢様に挨拶しなきゃなんねえんだよ？」

サキがワタルに注意をすると、ワタルは先ほどとは打って変わって機嫌悪そうに反発した。

ナギ「おい！ 誰が引きこもりでワガママでがさつな女だ！？」

マリア「ナギ、ワタル君はがさつとは言ってませんよ……。」

ナギの微妙に1つ多い文句にマリアが突っ込みを入れた。どうやら

先ほどの来客はワタルとサキだったようだ。と、ここで、

ワタル「？　　そういえば一兄達の周りにいるのは誰だ？　見たことねえけど……………」

ワタルはなのは達に気付きそう尋ねてくる。

一護「ああ、こいつらは俺達のクラスに転入してきたのはとフェイトとはやてだ。」

ワタル「ああ、ナギとハヤテが言ってた一兄達のクラスの転入生ってあんた達のことだったのか？　俺は橘ワタル。自由学園高等部の1年だからあんた達の後輩ってことになるな。ま！　よろしく頼むよ！」

サキ「初めまして。貴嶋サキと申します。若共々どうぞよろしくお願ひします。」

一護「からなのは達のことを聞くと、ワタルとサキは自己紹介をした。するとなのは達はあることに驚きワタルの顔をじっと見る。

ワタル「ど、どうしたんだよ？ 俺なんか変なこと言ったか？」

フェイト「え！？ あ、いや、その、えっと、だ、大丈夫だよ！…」

ワタルが思わず尋ねるとフェイトが尋常じゃないほどテンパった。そしてそれを見た一護はなのはとはやてに小声で尋ねる。

一護「おい、ワタルがどうかしたのか？」

なのは「あ、えつとね、元の世界でフェイトちゃんが家族として育ててた男の子に声がそっくり……というか全く一緒なの。」

なのはのその言葉を聞いた時、一護の頭に初めて会った時にフェイトから聞いた話の内容がよぎった。

一護「その男の子ってひょっとして“エリオ”って奴か？」

はやて「な、何で一護君がエリオのこと知ってるんや!？」

一護からエリオの名前が出たことにはやては驚きを隠せない。

一護「フェイトから直接聞いたんだよ。あいつからは言わないでくれって頼まれてたから今まで黙ってたけどな。」

なのは「そっか……。」

一護「けど、そんなに似てんのか？ そいつとワタルって。」

はやて「うーん……性格は結構違うみたいやけど、声はもちろん、背もあのくらいやし、それにどことなく顔立ちや雰囲気も似てるんや。フェイトちゃんが動揺するのも無理ないと思うで……。」

そんな感じで一護となのははやてがひそひそと話していると、

当麻「どうしたんだお前ら？」

リクオ「何かあったの？」

一護「あ、悪い悪い。何でもねえよ、何でも……。」

当麻とリクオが3人の様子に気付き尋ねるが、一護はそれを苦笑いを浮かべつつ何でもないように装った。

ナギ「大体何でワタルがここにいるのだ！？ 呼んだ覚えはないぞ！」

ワタル「うるせえな！ 俺が来たのは……。」

伊澄「私がワタル君に来てくれるように頼んだの。ね？ ワタル君。」

ワタル「あ、ああ／／／。伊澄が来てくれて行って行ったから来てや
ったんだよ／／／！！ 有難く思えよな／／／！！」

伊澄にそう言われたワタルは顔を赤くしている。すると、

ナギ「ふん、どうせお前は私に会いにくのを口実に伊澄と……」

ワタル「ち、違えよ／／／！！ 一体何言っただよ、ナギ／／／
／！！」

ナギが何かを言おうとするがワタルはそれを速攻で遮る。そしてそ
んな様子を見たはやてはハヤテに尋ねる。

はやて「なあハヤテ君、ひょっとしてワタル君って伊澄ちゃんのことか……」

ハヤテ「ええ、その通りですよ。まあ、伊澄さんはそのことについては気付いていないんですが……」

はやて「ま、まあ伊澄ちゃん、そういうことに関してはあんまり鋭くなさそうやしな。」

はやては思わず苦笑いを浮かべながら言った。そしてその間にも、

ワタル「大体お前には女の子らしさってもんが欠片もないだろうが！ いい加減可愛げの1つや2つくらい増やしてみろ！」

ナギ「何だと！？ お前こそ男のくせに私と身長も変わらない超へタレではないか！？」

ワタル「な！？ 人の気にしてることを言いやがって！」

ナギ「やるのか！？」

ワタル「お前こそ！」

今度はナギとワタルの口喧嘩が始まった。それも歳相応とは程遠い感じである。そしてそんな様子に、

伊澄「ふ、2人共喧嘩はやめて……」オロオロッ

伊澄は仲裁しようとするもオロオロとしてしまう。と、その時、

ゴンッ！
x2

ナギ・ワタル「っくくく！！！！？？？」

ナギとワタルの頭に拳骨が飛び、2人は声無き悲鳴を上げる。そして二人は、

ナギ・ワタル「何すんだよ（何をするのだ）！？ 一兄（一護）！
」

拳骨をした張本人である一護に声を上げた。

一護「うるせえ。喧嘩両成敗くらい聞いたことあるだろうが。」

ナギ「そ、そんな戦国時代の掟など用いるな!!」

ここで日本史の知識を引っ張ってくる辺り、やはり飛び級は伊達ではないという感じがする。

一護「いや、今でも喧嘩両成敗はあるだろうが……。」

当麻「それにお前らが喧嘩してるせいで伊澄が困ってるぞ。」

ナギ・ワタル「あ……………」

今更ながら伊澄の困った様子に気付いた二人は少しシュンとなった。

リクオ「とりあえず2人は伊澄ちゃんに謝って。」

ナギ・ワタル「す、すまないのだ（わ、悪い）、伊澄……………」

リクオが促すとナギとワタルは素直に伊澄に謝る。

伊澄「大丈夫よ、ナギ、ワタル君。良かったわ、2人が仲直りできて……………」

ナギとワタルの喧嘩はこうして何とか解決した。そしてそんな光景を見たなのは達は、

なのは「3人共凄く手慣れた感じがするな。」

フェイト「うん。本当にお兄ちゃんみたい……。」

なのはとフェイトが思わずそう呟いた。すると、

咲夜「まあ、当兄達はうちらにとっては本当のお兄ちゃんみたいなもんやからな。」

はやて「うわっ！？ さ、咲夜ちゃん！ 今までどこにいたんや！？」

咲夜「作者の都合や！ 気にせんといて！」

驚きながら尋ねるはやてに咲夜はメタ発言で答えた。いや、だからやめてってそう言つの……

咲夜「まあ、それは置いてやな……当兄達は私にとってあの日から家族同然なんよ……。」

なのは「あの日って……ひょっとして当麻君達が誘拐された咲夜ちゃん達を助けてくれた時のこと？」

咲夜「まあ一言で片付けられればそうなんやけどな……うちにとっては大事な日やったんよ……。」

そう呟く咲夜はいつものはつらつとした様子はなく、穏やかで優しい表情を浮かべていた。そしてその日のことをなのはやフェイト、はやて達にのみ話します……。

5年前の4月初旬

時刻は夜の10時。まだ寒さの残っている季節であり、この日も上着無しでは中々外に居づらい気温であった。そして外と同じくらい寒い空き倉庫の一室に3人の少女達が閉じ込められていた。

???「ひつく……うつ……暗い……怖いよ、咲姉……」

暗闇を恐がっているこの金髪ツインテール少女の名は三千院ナギ。

当時8歳。

???「くしゅん!……はっつ……」

くしゃみをして寒さに震えているこの黒髪ロングヘアーで着物を着ている少女は鷺ノ宮伊澄。同じく当時8歳。

???「大丈夫やで、2人共。きっとそのうち助けがくるさかい。それまでの辛抱や。」

そしてそんな2人を抱き締めて温めながら元気づけようとしてるこの灰色髪のおかつぱ頭の少女は愛沢咲夜。同じく当時8歳である。

そもそも何故3人がこんなところに閉じ込められているかと言うと、学園都市内のある高級ホテルで行われていた社交パーティーに3人が出席していたところ、そこにテロリストが乱入してきて3人を

身代金要求のための人質として連れ去ったのだ。ちなみにこの時にはまだハヤテや、咲夜の執事である巻田と国枝はまだ雇われていなかったりする。まあ、会場には執事やS もいたが……やはり役に立たないのは御約束だったりもする。そんなこんなで身代金が届けられるまでの間、3人はこの寒く暗い空間の中に閉じ込められているのだ。

咲夜「うつ……にしてもこんな場所にうちらを閉じ込めるなんて……
… お金が届くまでに私達を凍え死にさせる気かいな……へくしゅん！」

ナギ・伊澄「咲姉（咲夜）！」

咲夜「へ、平気だよ……こんなちつとも寒ないから……」

くしゃみをする咲夜をナギと伊澄が心配して声を上げるが、咲夜は何でもないように取り繕う。だがそれもやせ我慢である。3人の格好は外気温にさらされるにはあまりにも薄着である上に、暖を取れ

そんなものなど周りにはまるでなかった。すると、

ギュッ

咲夜「……ナギ？……伊澄さん？……」

ナギと伊澄が咲夜の体をギュッと抱き締めてきた。

ナギ「こうすれば咲姉も温まるよ……」

伊澄「はい……」

咲夜「……………ありがとうなあ……………」

ナギと伊澄の健気な優しさに咲夜の心は暖かな気持ちになる。だが、こういう時にそんな雰囲気をぶち壊すやつというのは現れるものである。

ガチャンッ、ガラガラガラッ！！

男A「おうおう、随分と感動的な状況みてえだな、くくく……………」

男「そうみたいだな、グヘヘ……………」

入り口が開くと2人の男が入ってきた。咲夜達を連れ去ったテロリストの男達である。そして男達は咲夜達の状況を見て瞬時に何をしているかを判断し、気味の悪い笑みを浮かべる。そんな男達を見た

咲夜はしゃがんだ状態で咄嗟にナギと伊澄を庇うように手を広げ、
2人と男たちの間に割って入っているような位置関係になる。

ナギ・伊澄「咲姉（咲夜）！？」

男A「へえ、そいつらを庇おっつていうのか？ 随分と勇気のある
ガキじゃねえか。」

咲夜「やかましいわ！ あんたらなんかこの2人には手出しさせ
へん！」

咲夜は恐怖を押し殺して男たちに立ちほだかる。

男B「じゃあ、俺がこれから何しようとしてるかわかってるってこ
とだよな？ グヘヘ……」

すると男Bは咲夜に近付き、

ガシッ

咲夜「な、何するんや！？離してや！！」

咲夜の腕を無理矢理掴み、伊澄達と引き離れた。そして、

ドサッ

咲夜を無理矢理押し倒した。

男A「壊すなよ。大事な人質なんだからよ。」

男B「悪いがそいつは保証できねえな。俺はこついつ気の強そうながキの恐怖が見てみてえからなあ……」

咲夜「ひっ!？」

男Bの狂気に満ちた表情に咲夜の押し殺していた恐怖があふれ出てくる。

ナギ・伊澄「咲姉（咲夜）!!」

男A「おっと、お前らはここでじっと見てな。頼りになるお姉ちゃん
の泣き叫ぶ姿をな……。」

ナギと伊澄が咲夜の方に行こうとするが、男Aに拘束され身動きがとれない。そしてその間にも男Bの手が咲夜に伸びる。

咲夜（い、嫌や……そんなん…嫌や……）

あまりの恐怖に咲夜の方から涙が出そうになった……その時……

ドカアアアアンっ！！！！

どこからか爆発音が聞こえてきた。

男A「っ！？ 何だ今のは！？」

すると男Aの持っていたトランシーバーに無線が入る。

男 『何だてめえらは！？……ギャアアア！？……』

男D 『何だこのガキは！？……ぐわあああ！？』

そこから聞こえてきたのは男達の仲間が次々とやられていく音声だった……。

男A 「おい！ どうした！？ 誰か応答しろ！ おい！」

男Aは応答を呼び掛けるが誰もそれに答えるものはいない……。

男B「おい！ 一体何があつたんだよ！？」

男A「俺が知るかよ！ とりあえずそのガキ共を連れて……」

と、その時、

ガラガラガラッ！！！！

閉められていた入り口が勢い良く開かれた。そしてそこにいたのは
……

「……おい……その子達に何してんだよ？」

所々に傷を負った黒髪ツンツン頭が特徴の男
当時中学1年生の
上条当麻だった……。

男A「っ！ てめえ、一体どこから入ってきやがった!？」

男Aは当麻に銃口を向けつつそう叫ぶと、

「……下にいた連中なら全員叩きつぶしたぜ。」

「……あんなもんで俺と張り合えると思ってたのか？」

当麻を挟むようにして2人の男が現れた。1人はオレンジ髪 of ツンツン頭の男　当時中学1年生の黒崎一護。もう1人は黒と白の棚引いた髪に赤い瞳が特徴の男　“ 魑魅魍魎 ” を発動した当時中学1年生の奴良リクオである。ちなみに2人共かなり傷だらけ。

男B「う、嘘だろ……てめえらみてえなのが……」

男Bは信じられないと言ったような表情で当麻達を見る。だが、当麻達の受けている傷と連絡のつかない仲間を考慮すれば、納得せざるを得ない。と、ここで、

男A「デタラメ言っ
てんじゃねえええええ！！！！」

男Aが一護の言葉にぶちギレて撃とうとした。しかし、

ガンッ！

男A「ぐあっ！」

男Aの額に何かが直撃し、思わず拳銃を手放して目を瞑り額を押さえた。そして目を開けると……目の前にはリクオの姿があった。

リクオ「失せろ！」

バキッ！

男A「ぐあっ！！！」

もろにリクオの飛び蹴り、通称“フライングヤクザキック”を食らった男Aは派手に吹っ飛んで気を失った。

リクオ「よう、ケガしてねえか？」

ナギ「え？ う、うん……。」

伊澄「私達は大丈夫。でも咲夜が……」

リクオは側にいたナギと伊澄の無事を確認すると、伊澄が不安そうな表情になる。

当麻「あとはてめえだけだ！ さっさとその子を離しやがれー！」

男B「う、うるせえ!!」

当麻の言葉に男Bはキレて未だ恐怖で動けない咲夜に拳銃を突き付けた。

ナギ・伊澄「咲姉（咲夜）!!」

男B「動くんじゃねえ!!動いたらこのガキの頭を吹っ飛ばしてやる!!」

こんなことを言えば、普通の人間や警察ならば間違いなく動くことができないだろう……普通の人間ならば……。

当麻「……いい加減にしゃがれ……」

男B「は？………」

当麻は右手の拳を強く握りながらゆっくりと歩き始めた。

男B「お、おい！？ 動くなよ！ 動くなって言うてんだろー！！」

男Bは脅しの言葉を掛けながら咲夜と共に後ろに下がる。一方咲夜はこちらに歩み寄ってくる当麻をじつと見ていた。

当麻「てめえ…その子が今だけ怖い気持ちなのかわかってんのかよ……てめえに何の関係もない小さな女の子を怖がらせる権利があるとも思ってたのかよ！……そんな権利なんか誰にも有りはしねえ！……有りはしねえんだよ！！」

男B「だ、黙れ――！！！」

気が動転した男Bは銃口を当麻に向けようとした。だが、

ガシッ！

男B「なっ！？」

一護「当麻に気を取られすぎだぜ、あんた。」

一護が男Bの銃を持っている右手首を掴んだ。そして…

男B「ぐあっ!？」

手首を少し力を入れて捻ると、男Bはあまりの痛みに銃と咲夜を離れた。すると一護は落ちた銃を遠くへ蹴飛ばし、咲夜を抱えてその場から退いた。

ダッ!

それを確認した当麻は男Bに向かって駆け出していく。

男B「あ、ま、待ってくれ!？」

当麻「てめえがあの子の心を傷つけようとするなら！……あの子に涙を流させようっていうなら！……」

男Bの嘆願を聞くことなく当麻は右手の拳を振り上げる。そして……

当麻「俺がその幻想をぶち壊す！！！！」

ズドオオンッ！！

20分後

学園都市の外れにある倉庫街には、緊急車両と共に多くの警備員と風紀委員が到着していた。

???「まったく……中学入って早々に誘拐されたお嬢様を助けたなんて、随分なことをやってくれるじゃん、上条。」

当麻「ははは……返す言葉もないです、黄泉川先生。」

当麻は目の前にいる藍色の長い髪を一つに纏めている巨乳の警備員の女性　黄泉川愛穂よみかわあいほに苦笑いでそう答えた。

黄泉川「しかも学園都市に来たばかりの男子達と一緒にとは相変わらず面白いじゃん。」

当麻「いや、黒崎と奴良とは偶々一緒にいたから成り行きでというか何というか……」

当麻が少々齒切れが悪そうにしていると……

「???」よ、黄泉川せんぱい!!」

黄泉川と同じくらいの胸部を持っている眼鏡を掛けた警備員の女性
てっそうつり鉄装綴里がやってきた。

黄泉川「ん? どうしたじゃんよ? 鉄装。」

鉄装「そ、それがこの子が車両に乗りたくないの一点張りで……」

そう困った様子で言う鉄装の横には……

ナギ「あんなの絶対に嫌!!」

伊澄「ナギ、我が儘言っちゃダメよ。」

咲夜「そうやでナギ、いつまでそんなこと言うてんねや。」

駄々をこねるナギと、それを宥めようとする伊澄と咲夜がいた。

黄泉川「ああ……まあ、警備員の車両はゴツいから嫌がるのもわからなくはないじゃん……。」

鉄装「でもどうしましょうか？ 先輩……。」

その様子を見て黄泉川と鉄装はどうすべきか悩んでいる。

当麻「あ、それなら……」「なら俺達を送っていつでもいいか？」……
「っ！？」

当麻が提案する前に別の誰かが同じ提案をしてきた。それは……

当麻「黒崎！？ それに奴良も！？」

一護「お前も同じこと考えてたんだろ？ 上条。」

黄泉川「別に構わないが、お前達はいいいんじゃん？ 病院とかでお前達は手当てを……」

リクオ「大丈夫です。応急手当ではしてもらってますし、その様子だと乗ってくれなそうですしね。」

黄泉川が尋ねると、リクオはそう答えた。ちなみにもうリクオは普段通りの姿に戻っている。

一護「お前もそれならいいか？」

ナギ「え！？ あ、う、うん……。」

一護にそう尋ねられたナギはどうしたらいいか分からず少し戸惑うも、素直に頷いた。

リクオ「君達もそれでいい？」

伊澄「で、でも……」

咲夜「それ、兄ちゃん達に迷惑なんとちゃうの?……」

リクオに尋ねられた伊澄と咲夜は気を遣おうとする。すると、

当麻「気を遣ってくれんのは嬉しいけどな、こういう時くらい素直になってもいいと思うぜ。な?。」

そう言いながら当麻が伊澄と咲夜の頭を撫でると、

伊澄「は、はい／＼／＼……」

咲夜「お、おおきに／＼／＼……」

あまり頭を撫でられるという経験が少なかった2人は顔を赤くした。

黄泉川「へえ、子供を手懐けるのが巧いじゃん。じゃあ、後よろしく頼むじゃん。」

そんなこんなで当麻達はナギと伊澄、そして咲夜を送っていくことになった……のだが……

ナギ「……うにゅ……」

伊澄「すう……すう……すう……」

当麻「まさか歩いて5分で寝るとは……」

リクオ「ま、まあんなことを経験したばかりなんだから、しょうがないよ。」

わずか5分でナギと伊澄が睡魔に負け、当麻とリクオに背負われた状態で寝始めてしまったのだ。

咲夜「まったくなあ……初めて会った人に背負われてる言うのに寝るの早すぎやろ……。」

一護「お前、こいつらの姉みたいだな。」

咲夜のナギと伊澄を見る様子に、一護がそう口にした。

咲夜「せやね。うちにとつちやこの2人は大切な友達で妹みたいなもんやからなあ……。うちがしっかりせえへんと……。な……。」

そう呟く咲夜の顔はどこか寂しげであることに一護は気付いた。と、その時、

咲夜「くしゅん！ あ、あかんなあ……。風邪引いてしもったかな……。」

咲夜はくしゃみをしてしまい、そう呟く。彼女は未だにパーティードレスの格好であったため、やはり寒かった。すると、

一護「ほらよ。」

咲夜「え？」

一護「寒いんなら着てろよ。ねえよりはマシだと思っぜ。」

咲夜「あ……お、おおきに……」

咲夜は少々戸惑いつつも、一護に手渡された上着を羽織った。と、ここで一護が突然咲夜の前に立ってしゃがみ、

咲夜「えっ／＼／＼！？」

咲夜の頭を撫でた。そして、

一護「もう我慢しなくてもいいぞ。」

咲夜「え……………」

一護に突然そう言われ、咲夜はどうしたらいいかわからなかった。
すると、

当麻「お前、ナギ達を守るためにずっと怖いのを我慢してたんだろ？」

リクオ「でももう大丈夫だよ。2人共もうぐっすり寝てるから……」

当麻とリクオも咲夜の気持ちを見抜いてそう言ってきた。

一護「よく頑張ったな。だからもう泣いてもいいぜ、咲夜。」

一護が最後に柔らかな笑みを浮かべながら言うと、

咲夜「う……うわあああああん！！！！」

咲夜は今まで堪えてきた物を一気に解放し、一護の胸の中で泣き始めた。一護は左手で咲夜を抱き止め、右手であやすように頭を優しく撫でていたのだった……。そしてしばらくして、

一護「スッキリしたか？」

咲夜「グスッ……うん……。」

咲夜は涙を拭いながら頷いた。

当麻「じゃあ、そろそろ行くっぜ。腕がさすがに疲れてきたしな。」

リクオ「そうだね。結構長い間ここにいたし。」

一護「それもそうだな。んじゃ、行くとする……」

と、その時、

咲夜「なあ……兄ちゃん達に一つお願いがあるんやけど……」

一護「？　なんだそれ？」

当麻「まあ、不可能じゃなければ聞くけどよ……」

リクオ「そうだね。言ってみてよ、咲夜ちゃん。」

一護達がそう言うと、咲夜は何故か顔を赤くしてモジモジし出した。
そして……

咲夜「う、うちのお兄ちゃんになつてくれへん？／＼／＼／／」

当麻・一護・リクオ
「は（え）……………」

咲夜の口から出た思わぬ内容に、一護達はどう返せばいいかわからなくなった。

一護「……………どういう意味だよ？　そりゃ……………」

咲夜「べ、別にホンマにうちのお兄ちゃんになつてくれっていうことやないで／＼／＼／＼！　ただ……………うち、今までずっと家でもナギ達の前でもお姉ちゃんやったから……………少しくらい妹になりたいん

や／／／／……。」

咲夜はそう言つと顔をさらに赤くして俯いた。すると、

ポンッ

咲夜「え？……」

一護は咲夜の頭に右手を乗せた。そして、

一護「別にいいぜ。妹の扱いには慣れてるしな。」

リクオ「僕なんかで良ければ、それでもいいよ。」

当麻「ま、そういうことだから、これからよろしくな！ 咲夜。」

「護達は迷うことなくそう言つと、

咲夜「……おおきに！ 当兄！ リク兄！ 一兄！」

咲夜は年相応の無邪気な笑顔で返事をした。

咲夜「じゃあ早速私もおぶってや、一兄。眠なってきたわ。」

「護」さっきまでの気遣いはどこ行ったんだよ……ま、別にいいか。
ほらよ。」

いきなりの咲夜の甘え様に一護は少し呆れるが、結局腰を低くする。

咲夜「おおきにな、一兄。ほんで……おやす……み……や……」

一護「……ああ……お休み……」

咲夜はその言葉を聞くと、一護の背中の温もりを感じながら眠りに着くのだった……。

回想終了

咲夜「これが一兄達との出会いや。」

なのは「そっか……当麻君達は昔から優しかったんだね。」

咲夜の話聞いたなのはナギ達と話している当麻達を見ながら言
った。

咲夜「一兄達はそれからうちらのこといつも気に掛けてくれてな。
ナギが我が儘言っても何だかんだで聞いてくれたり、うちらが困っ
てる時によつ助けてくれたり……ホンマ優しすぎるくらいだよ……。」

はやて「ふふ、ホンマやね。」

咲夜の言葉にはやては笑みを浮かべる。すると、

咲夜「あつ！　せやけど安心してな！　うちは別にはやて姉達と違ってリク兄達のことが好きっていつのとちゃうから！」

咲夜がそんなことをはやて達に言ってきた。

なのは「ふえ／／／！？」

フェイト「さ、咲夜／／／！？　何でそんなことを！？／／／」

はやて「そ、そうや／／／！！　いきなり何を言いだすんや！

？／／／
」

なのは達は突然のことに顔を赤くしながら激しく動揺する。

咲夜「そんなんすぐ気付くに決まってるやん。まあ頑張ってな！
一兄達の鈍さは半端やないで。」

そんななのは達を見て咲夜はエールとアドバイスを送った。と、ここで、

一護「おい咲夜！　なのは！　フェイト！　はやて！さっきからお前ら何話してんだよ？」

咲夜「ん？　ちょっと女同士の話をしとっただけやで。なあ？　なのは姉、フェイト姉、はやて姉。」

なのは・フェイト・はやて「う、うん（せ、せや）！！／＼／＼」

咲夜にそう聞かれるとなのは達は咄嗟にそう頷いた。

ワタル「何だよ？ 女同士の話って？」

サキ「若、そういうことを聞くのは不粋ですよ。」

ワタルが尋ねようとするがサキがそれを咎めた。

リクオ「まあ、それは置いて、明日から学校に行つてよ？ ナギちゃん。」

ナギ「し、仕方ない。行つてやるとするか……。」

フェイト「あれ！？ いつの間にナギが学校に行くように説得したの！？」

ナギが渋々学校に行くのを認めたことにフェイトが驚く。

伊澄「いえ、ちょっと当麻お兄様にちょっとお願いをしたんです。」

なのは「お願い？」

当麻「まったく、何で俺がこいつの……」

ナギ「い、言っなバカ者 / / / / ! ! ! ! !」

ドゴンッ！！

当麻が何かを言おうとしたが、その前にナギの右ストレートが炸裂した。

当麻「ふ、不幸……だ……。」「ガクッ

ハヤテ「か、上条さん！？」

マリア「ナギ、あなたはいい加減当麻君に暴力を振るうのを止めたらどうですか？」

当麻が倒れ伏したのを見てハヤテは声を上げ、マリアはナギに少しばかり注意する。

ナギ「ふん！ こいつが悪いのだ！ こいつが！」

リクオ「あははは……」

咲夜「ホンマにしょうもない妹やな……。」

だがナギはまるで反省する様子はなく、リクオと咲夜は苦笑いを浮かべる。そして、そんな光景を見て……

なのは《ナギちゃんも伊澄ちゃんも咲夜ちゃんも幸せそうだね。》

はやて《そうやね。ナギちゃん達にとってリクオ君達は、家族そのものみたいやね……。》

なのはとはやては念話でそう話していたのだった…。

E
N
D

兄妹ってのはいいもんだ

by 作者（後書き）

どうも黒狼です！

今回は後半の一護達と咲夜達の出会いがメインでした！ 健気な咲夜やナギ、伊澄を当麻や一護、リクオが守るというのが今回の回想のコンセプトです。ただなんか咲夜が幼い頃のはやてのようになってしまったような気がします……。

あとようやく上条さんの名セリフが出せました。やはりあの言葉と“S O”があつてこその上条さんクオリティと言えるでしょう。

ただ前半のグダグダについては本当にすみません！まさかあんなに行数が増えてしまうとは……。とにかく次回も頑張ります！！

ではまた！！

いつまで経っても馬鹿な奴はいる by 坂田銀時（前書き）

今回も銀魂ネタです！

そしてまたしても前後半の二部構成となっています！

また今回は登場しているのは最近アニメで大活躍だったあの人達です！！

ではどうぞ！！

いつまで経っても馬鹿な奴はいる

b y 坂田銀時

某日深夜

ここは第22学区の倉庫街。そのうちの1つの倉庫に数人の者達が入ろうとしていた。

ガラガラッ！

「??? 約束通りの時間じゃな。」

そしてその者達が重たい扉を開けると、そこには既に十数人が待っており、その先頭にいる編み笠を被り紺色のマントを羽織っている人間が、入ってきた者達に対してそう言った。

「???」 勿論でございます。 “信用第一” が我が社のモットーです
ので。」

入ってきた男の1人が気弱そうな声でそう返す。

「???」 例の物は持ってきたか？」

「???」 え、ええ。 こちらになります。 お確かめを。」

編み笠を被った人物が尋ねると、先ほどの気弱そうな男がそう答え、
部下と思われる男にアタッシュケースを開かせて、編み笠の人物に
中身を見せた。そこに入っていたのはケース一杯に敷き詰められて
いる札束だった。

「???」して、そちらの方は？」

今度は気弱そうな男が編み笠の人物に尋ねる。すると編み笠の人物の後ろから台車に乗せられた段ボールのようなケースが2つ運ばれてきた。そして部下と思われる者達が気弱そうな男達に中身を見せると、中に入っていたのは乾電池をそのまま巨大にしたような物体だった。

「???」約束の品物2ダースじゃ。確認するぜよ。」

「???」確かに。では……」

と、その時、

カランカラン……プシューーーーーッ!!!!

???「な、なんだ!？」

???「こ、これは!？」

何かが転がるような音が響くと同時に、倉庫の中一面が煙に覆われてしまったのだ。

???「何だ!？ 何がどうなっている!？」

???「早く扉を開けろ!!」

両者の部下と思われる男達が突然のことに混乱し、声を上げる。そして扉が開き煙が消えて、周りの視界が晴れてくると……そこには倒されている部下達と中身のないアタッシュケースと段ボールだけが残されていた。

???「わ、我々の金がない!!」

???「しょ、商品も無くなっている!!」

その惨状に両者の部下が驚き、

???「くっ……やられた……。」

編み笠の人物が悔しそうにそう呟くのだった……。

一夜明けて

自由学園高等部2年A組は今日も平和に授業を終えて放課後を迎えようとしていた。すると、

銀時「んじゃ、今日の授業はここまで。それから上条、黒崎、奴良、それと高町、ハラウン、八神は後で職員室に来るように。以上だ、お疲れさん。」

吹寄「気を付け！ 礼！」

皆「有り難うございました！」

銀時は当麻やなのは達にそう告げた後、終了の挨拶をして出ていった。

一護「職員室に呼び出しか。当麻はともかくとして俺達はなんかしたっけな?……」

当麻「おい!? 何で上条さんだけ“ともかく”なんだよ!？」

フェイト「お、落ち着いて当麻!」

そして現在当麻達は呼び出しを受けて職員室に向かっていた。しばらく雑談をしている内に職員室に着き、中に入ると……

新八「あ、来たみたいだね。」

神楽「おーい！ こっちアルー！」

そこには新八と神楽の姿があつた。

なのは「新八君！ それに神楽ちゃんも！」

リクオ「2人共どうしてここに？」

新八と神楽がいることに驚き、リクオが尋ねる。

新八「銀さんが僕達にも手伝って欲しいって言うてきたんだよ。」

神樂「それで仕方なく来たアル。だけど何故か銀ちゃんがないネ。」

はやて「何や、呼び付けた本人が居らんのかいな……」

はやてが若干呆れたように言うと、

ガラガラッ

銀時「お、もう来てたか。」

新八「あ！ 銀さん、僕達を職員室に呼び付けておいてどこに行ってたんですか！？」

銀時「うるせえな。俺だってこいつから急にお前らと呼ばって言われたんだよ。」

銀時がそう言うと、その後ろから1人の人物が出てきた。

「???」おまんら久しぶりじゃのう。」

それは藍色のマントを羽織りオレンジ髪 of 長髪が特徴の土佐弁を話す女性だった。

当麻「あんたは!……」

リクオ「陸奥さん!!」

そしてその女性を見た当麻達は驚いているようだ。

新八「でも陸奥さんがどうしてここに!？」

神楽「学校の見学にでも来たアルか？」

陸奥「わしは授業参観に来た母親じゃなか。ん？ 見慣れぬ顔がい
るようじゃが誰ぜよ？」

陸奥がなのは達に気付きそう尋ねる。

銀時「ああ、そいつらはついこの前からうちのクラスに転入した連中だ。上条達と仲が良く、役に立つだろうと思って呼んでおいた。」

なのは「は、初めまして！高町なのはって言います！」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。」

はやて「八神はやていいいます。」

なのは達はすぐさま陸奥に挨拶をした。

陸奥「そうか。わしは貿易会社“快援隊”の副社長の陸奥じゃきに
まあ頼むぜよ。」

なのは「快援隊？」

陸奥の口から出た聞き慣れない単語になのはは首を傾げる。すると、

一護「快援隊つつうのは今の日本の貿易業界の最大手の会社だ。学
園都市とも結構親交があんだよ。」

一護がそう説明した。

当麻「で、あんたが俺達を呼んだってことは何か頼みがあんのか？」

陸奥「相変わらず察がいいな、おんしらは。おい銀パー、少し場所を移したいんじゃないか。」

銀時「略さないでくんない？　何かそれ嫌だから略さないでくんない？」

銀時はブツブツ言いながらも皆を応接室へと案内した。そして陸奥が早速本題に入り、昨夜起こった強奪事件の内容を説明した。

陸奥「という訳でわしらの積み荷も取引先の金も全部奪われてしまったきに。おまんら何とかするぜよ。」

フェイト「あ、あの何とかしろって言われても、それって完全に強奪事件ですよ。」

なのは「う、うん。それなら私達より風紀委員や警備員の人達皆に言った方がいいんじゃない……」

フェイトとなのはは事の内容を聞いてそう言うが、

リクオ「それはダメだよ。なのは、フェイト。」

リクオがすぐさまそれを却下した。

はやて「そうやで2人共。取引現場を襲われて積み荷も金も強奪されたなんて公になってしまつたら快援隊は信用を失つてまうやろ？」

そしてはやてがその理由を2人に説明した。さすがに部隊長だけあってそういったことを考えるのはお手の物なようだ。と、ここで、

銀時「積み荷を取り返せなんてそんな面倒なことなんで俺にも頼むんだよ。俺はやんねえぞ、あのバカな尻拭いなんてまっぴらごめ……」

陸奥「報酬ならあるぜよ。」

銀時が頭を掻きながら面倒くさそうに断ろうとすると陸奥は懐から厚みのある茶封筒を取り出した。すると、

銀時「で、その積み荷ってのはどんな奴なんだ？」

新八「切り替え早。」

即座に真面目な質問をした。それを見た新八はさり気なく突っ込む。

陸奥「これを見るぜよ。」

だが陸奥はそんなことには気にも留めず、懷から今度は一枚の写真を取り出した。

なのは「これって……」

神楽「乾電池アル！」

そこには何本かの乾電池が写っていた……１メートルくらいの。

はやて「いやいや！　これデカ過ぎやろ！？　何やこれは！？」

あまりの大きさにはやてが驚く。

陸奥「ただの乾電池じゃなか。これは“感電血”じゃ。」

フェイト「感電血？」

どっからどう見ても当て字である名前にフェイトが首を傾げる。

陸奥「こいつは最近学園都市で開発された超高性能電力供給装置じゃ。一本でおよそ原発1基分の電力を賄える優れ物じゃき。」

リクオ「い、一本で原発1基分の電力って……。また凄いのを開発したな学園都市は……」

通常の技術ならばあり得ない物の存在にリクオは苦笑いを浮かべた。

銀時「にしても盗まれた物を探すのには情報が少なすぎじゃねえのか？俺達はプロじゃねえんだぞ。」

銀時が無気力そうな感じだが的を射た指摘した。すると陸奥が再び懐から何かを取り出した。

当麻「あんただんだけ懐にいろんなもの隠してんだよ……。」

当麻がやや呆れつつも渡されたものを受け取る。それは一枚の名刺だった。

陸奥「わしらが知つとるのはここまでじゃきに。後は取引先に聞いてみるぜよ。」

すると、

一護「って、取引先はあの藤山重工かよ……。」

相手先を見た一護がそう呟いた。

フエイト「この会社を知ってるの？ 一護。」

一護「あ、ああ。最近結構業績を上げてる新興企業だ。確か発展途上国に送る新しい機械の開発を国から任されてるとか聞いたな……。」

フエイトに尋ねられ一護は藤山重工についてそう説明した。

陸奥「ふつ、さすがじゃのう。実はこの感電血もその機械に使う予定らしかったんじゃない。」

新八「そ、それじゃあれって国の政策とも関わってるってことじゃないですか!？」

陸奥の言葉を聞いた新八は声を上げる。

陸奥「まあ、そういうわけじゃ。おんしらにやつてもらふんは積み荷と金の回収、それとわしの前に頭を連れてくることじゃきに。よろしく頼むぜよ。」

銀時「ちっ…面倒くせえ…」

そう言いながら銀時は席を立とうとしたが、

陸奥「ああ、そうじゃ。頭に会ったらこれを渡すぜよ。」

陸奥が机の上にあるものを置いた。それは……

なのは「け、拳銃!？」

そう、紛れもない拳銃だった。

陸奥「ほんで会ったらずは、“ふぐり”蹴っ飛ばしてくれ。」

こうして当麻やなのは達、そして銀時と新八、神楽は快援隊の強奪事件の解決と快援隊の社長のふぐり……すなわちキ○タマ潰しを依頼されたのだった。

午後5時50分

銀時以外の学生組は一度家に帰ってから第13学区で待ち合わせをして動くことになった。

当麻「でも良かったのか？なのは、フェイト、はやて。お前らは関わらなくても別に構わねえのに……」

なのは「あー！　また私達をのけ者にしようとしてるね当麻君！」

一護「いや、別にそういうわけじゃねえけどよ。」

なのはの言葉に一護は齒切れが悪そうにそう返した。

フェイト「学園都市で起こったことなら関係なくないよ。一護。」

はやて「せや。それに私達こういう捜査は結構慣れてるんやしね。」

リクオ「あ、そういえばそうだったね。」

まあ、元の世界ではなのは達がやってたことは結構警察のしてることに近い訳で、当然こういうことにも首を突っ込みたくなるのも無理のないことなのである。

神楽「？ さっきから何話しているアルか？」

なのは「あ、うっうん！ 何でもないよ！ 神楽ちゃん！」

それを当麻達他数名以外には話すことはできないが……。

新八「ところで銀さん、これからどうするんですか？」

銀時「…とりあえず“ふぐり”蹴飛ばしに行く。」

新八が尋ねると銀時は面倒くさそうに答える。

新八「ふぐり？……ああ、坂本さんのことですね？」

ふぐりという単語を聞いて新八はすぐにそう解釈した。と、ここで、

はやて「なあ、坂本さんって誰のことや？」

はやては坂本という名前に反応しリクオ達に尋ねる。

リクオ「あ、そういえばまだ言ってなかったね。坂本さんっていうのは陸奥さんが“頭”って呼んでた人のことで、快援隊の社長さんで坂田先生の親友なんだ。」

なのは「あ、そうなんだ。」

銀時「おい奴良、あいつを勝手に俺の親友にするな。」

リクオがそう説明すると、銀時はそれを即座に否定した。

当麻「まあ、そう言っただけで銀さん。あの人だって悪気があるわけじゃないんだから……」

新八「そうですよ銀さん。それに今回は会社の信用に関わるんですから、きっと独自に調査してますよ。」

当麻と新八はそうフォローを入れる。だが、

銀時「お前らはあいつの頭の空っぽさを理解できてねえから、んなことが言えるんだよ……」

銀時はバツサリ切り捨てた。それを聞いたフェイトが、

一護「ねえ、一護。それってどういう意味？」

首を傾げながら一護に尋ねると、

一護「ああ、まあ、なんだ……」

神楽「会ってみればわかるアルよ、フェイト。」

一護の代わりに神楽がそう答えた。

第18学区　ここには多くの飲食店が立ち並ぶ場所だが、一本脇道に入ればそこには居酒屋や風俗店が多くある歌○伎町のような顔も見せる学区である……まあ人口の7割が学生の学園都市に風俗店が多く存在するのはどうかとは思うが……。

そしてここは18学区ではかなり有名なキャバクラ“スマイル”である。そこに……

???「お龍ちゃん!! 結婚してくれーーーー!!」

キーンッ!!

お龍「ノーセン! キュー!!」

ドサッ

キャバ嬢の1人に猛烈な求婚アタックを仕掛けて、ふぐりを蹴飛ばされて撃沈されているバカがいた……。そしてそれを目の当たりに

した一護達は、

「一護」ととりあえずどっぴう奴かはわかっただろ……フェイト……」

フェイト「う、うん……。」「

銀時「だから言っただろ？頭空だつて。」

当麻・新八「あ、ああ（はい）……。」「

なのは「こ、これが快援隊の社長さん……。」「

はやて「な、何や桂さんと同じ……いや、それ以上のバカさを感じる気がするで……。」

神楽「やっぱりバカアル……。」

それぞれ呆れていた……。と、そこへ、

???「あら？ 新ちゃん？」

新八に気付き、こちらに近づいてきた1人のキャバ嬢がいた。やや茶色がかった黒髪を一つに縛って短く纏めている大人っぽい綺麗な女性である。

新八「あ！ 姉上！」

「???」それに銀さんと神楽ちゃん、それに当麻君達も一緒とは珍しいわね。あら？ そっちの女の子達はどなたかしら？」

「どうやら女性は新八の知り合いらしい。そして女性はなのは達に気付く。」

銀時「こいつらは俺のクラスに転入してきた生徒だよ。」

「???」ああ！ 新ちゃんが話してた転校生の子達ね。私は志村妙。そこにいる新ちゃんの姉よ。よろしくね。」

なのは「あ、はい！ こちらこそよろしく願いします！」

妙に挨拶され、なのほも即座に挨拶を返した。

リクオ「あ、妙さんは僕達の学校の高等部三年生で先輩でもあるんだ。」

フェイト「え、そうなの！？でも普通高校生がこんなところで働くのって……」

フェイトが気まずそうに言うと、

妙「あら、真面目なのね。でも大丈夫よ。ちゃんと学校には許可も取っているから。」

妙はにこやかにそう答えた。すると、

銀時「お前ら言っておくけどな。こいつは見た目は確かに良いが、酒癖は悪いし何かあるとすぐ薙刀なんかを取り出して振り回してくるとんでもない女だから、お前らも気を……」

ズドオオオン!!!

妙「あら銀さん、私は薙刀なんて物騒なもの振り回しませんよ？
まあ拳はたまに使いますけど。」

銀時が妙の悪口をなのはに言おうとしたところ、妙は銀時の頭に凄まじい拳骨をお見舞いし、それを受けた銀時はもろに頭から床に刺さった。当然その光景を見た当麻達は恐怖で震え上がる。

妙「それで新ちゃん。あなた達がどうしてこんなところにいるの？」

新八「あ、いえ、実はそこにいる坂本さんを引き取りに……って、あれ？ 坂本さんは？」

新八が坂本のいた場所を指差すが、そこに坂本はいなかった。

リクオ「あれ？ そういえばはやて達もいない……」

そしてリクオもなのは達がないことに気づき、辺りを見回してみ
ると……

坂本「その綺麗なお姉ちゃん達ー！ わしと遊ばんね？ アハハ
ハハハー！」

なのは「にゃ、にゃははは……」

フェイト「えつと……」

はやて「ノーセンキューやで……。」

なのは達が坂本にナンパされて困っていた……。その光景を見た当麻、一護、銀時、新八は……

当麻・一護・銀時・新八

「何やってんだあんた（てめえ）はアアアアア……！！！」

懇親の飛び蹴りを食らわした。

結局当麻達は坂本を発見するという第1の目的を達成したため、
スマイルを出て一先ず歩いていた。

坂本「イタタタツッ！！そんなに強く髪を引っ張らないで！ 久しぶりの再会なんじゃからもっとフレンドリーに行こうぜよ金時！」

銀時「名前間違えてる奴にフレンドリーにとかわれたたくなくなえよ！ 大体何度言ったらわかるわけ！？ “金”じゃなくて“銀”だから！！」

銀時に髪を引っ張られながらも名前を間違えるというアホぶりを見せる坂本に銀時は髪をいきなり放してキレる。すると、

神楽「別に金でも銀でもどっちでもいいアル。」

銀時「ここ重要だから！！俺のテストにも今度出すから！！ お前
だってこいつに“あ、神楽坂君。アハハハハハハ！”とか言われた
ら嫌だろ！！」

一護「いや、んなくだらねえことテストに出すなよ……。」

神楽のどうでもいいという発言に銀時は反論し、坂本の真似をして
同意を求め、一護が銀時の言葉に思わず呆れる。と、ここで、

坂本「あれ？ さっきのお姉ちゃんじゃなか！ わしと遊ばんね？
アハハハ！！」

銀時「お前は何また人の生徒をナンパしてんだ！！」

なのは・フェイト・はやて「にやははは（あははは）……………」

またしてもなのは達にナンパしようとする坂本に銀時がまたしても
キレ、

一護・当麻「あんたのために動いてんだからいい加減やめろバカ社
長！……！」

ゴンッ……！

一護と当麻の拳骨が炸裂した……………。

とりあえず埒が開かないため、近くにあつた居酒屋に入って飯を
食べながら盗まれた“感電血”に関して聞こうとするが……

坂本「ん？ “感電血”？さあ、わしは知らんきに。アハハハハハハ！！」

本人は全く知らなかった。

銀時「お前んとこの品物なんじゃねえの！？ お前んとこの盗まれた物なんじゃねえの！？」

坂本「さあのか。細かいことは陸奥に任しちやるからようわからんきに。アハハハハハハ！！」

銀時がそう突っ込むが、坂本はノー天気になんか答えない。

なのは「う、細かいことって……」

はやて「ホンマにこの人が日本の大手貿易会社の社長なんか？……」

リクオ「う、うん。そうだよ……今はそうには見えないだろうけど……」

その様子になのはとはやてが呆れ、リクオが苦笑いを浮かべながら言う。まあ疑いたくなるのは当然のことである。

新八「じゃあ取引先の藤山重工さんのことは何か知りませんか？」

坂本「ん？ さあの。細かいことはよう分からんきに。アハハハハハハ！！」

新八が角度を変えて尋ねるが、やはり知らない様子である。

坂本「それよりもせっかくの再会じゃ！ 今日ハパーッとやるぜよ
金時！」

銀時「はあ……………ダメだな、こりゃ…………。」

銀時は坂本のバカさ加減に突っ込む気力すら無くしていた。ちなみに神楽はずっと飯を食ってます…………ブラックホール級の胃袋だな…………。そしてそんな中、

フェイト「一護、これはもう…………。」

「護」ああ、行ってみるしかねえだろうな……藤山重工に……。」

「護とフェイトはそう結論を出したのだった。」

翌日

この日は土曜日で休日だったため、当麻達は許可をとって学園都市から少し離れた場所にある藤山重工の本社に到着していた。

なのは「結構大きな建物だね。」

はやて「国に開発を依頼される会社なんも願けるなあ。」

なのはとはやてが建物の大きさにそうつぶやく。

フェイト「でも大丈夫なのかな？ 何もアポとか取らずに本社に押し掛けちゃうなんて……」

一護「まあ、大丈夫だろ。取引先の社長が直接来てるなら向こうも応対してくれる……って、あれ？ 坂本さんは？」

一護が坂本の姿が無いことに気付くと、

リクオ「一護、あそこ……」

リクオが指を差した。その先には……

坂本「お姉ちゃん達　！！わしと遊ばんね？」

女性「ノーセンキュー。」

坂本「アハハハ……」

通りすがりの女性をナンパしている坂本がいた。すると、

バキッ！！

坂本「ぐほあ!!?」

銀時「てめえはいい加減学習しろ!!」

銀時が背後から飛び蹴りしたのだった……。

藤山重工 社長室

???「これはこれは坂本様。この度はお互い災難でしたね。私
はここ藤山重工の社長で藤山恒明と申します。」

当麻達は社長室に案内され藤山重工の社長、藤山恒明と会っていた。

新八「突然押し掛けてしまつてすみません。早速なんですけど、襲つてきた相手に誰か心当たりはありませんか？」

藤山「さ、さあ……。我々は信用第一をモットーにしておりますので、恨まれるような相手は……」

銀時「だが実際には取引現場をピンポイントで教われてるんだろ。前もって情報が漏れてたとは思えねえが？」

銀時は藤山に差し迫った質問を突き付ける。

藤山「それはお互い様です。こちらも被害者であることをお忘れなく。」

そしてそれに対して藤山は正論を述べた。すると、

はやて「じゃあ一つお聞きしたいんですが、取引場所は社長さんと立ち合った部下の人以外に知っている方はどのくらいいらっしゃるでしょうか？」

藤山「え？ あ、はい。取引は出来るだけ秘密裏にやる手筈でしたから、私と立ち合った部下以外は知らないはずですが……」

フェイト「パソコンなどから情報が漏洩する可能性は？」

藤山「それはありませんよ。我が社のセキュリティは万全を尽くし

ておりますので、1%の確率もないでしょう。」

はやてとフェイトが鋭い質問をぶつけ、藤山も少し驚きながら答えた。

藤山「まあ、我々も目下会社全体を総動員して情報収集にあたっておりますので……」

藤山は当麻達にそう伝えると、

一護「そついや、あんた達は感電血を政府から依頼されている発展途上国に送る機械に使ったよな？」

藤山「え、ええ、左様でございますが……」

一護「その機械を見させてもらってもいいか？」

一護はそう尋ねた。

藤山「あ、そ、それは申し訳ありませんが政府からの依頼ですので
お見せする訳にはいかないのですが……」

それに対して藤山はそう言って丁重に断ろうとする。そして少しの
間沈黙が続いたかと思うと、

一護「……なら別にいいですよ。」

一護はそれに納得した。そしてその様子を当麻とリクオは真剣な目で見ていた。

そしてしばらく話した後当麻達は藤山重工を後にした。

新八「それにしてもフェイトちゃんもはやてちゃんも質問してた時凄く格好良かったよ！」

神楽「ホントネ！二人とも刑事みたいだったアル！！」

フェイト「そ、そうかな？……」

はやて「あはは、おおきになあ、2人共。」

新八と神楽がフェイトとはやての一面に感激し、それに対してフェイトとはやてはなるべく自然に返した。まあ、この2人は実際に捜査をしたこともある……というより捜査を指揮する側だったりするのだが……。と、そんな中、

坂本「のゝ金時〜！ もう酒でもパ―ツと飲んだ方がいいんじゃないか？」

新八「ダメですよ、坂本さん。坂本さんの会社のことなんですよ。銀さんも何か言ってやってください。」

坂本のそんな言葉を新八は咎め、銀時にもそう促すが……

銀時「うゝん……」

銀時は唸りながら何かを考え始めた。そして……

坂本・銀時「アハハハハハハッ！！！」

とある居酒屋で宴会状態になっていた……。

坂本「勘定は陸奥に付けとくさ。ガンガン飲め飲め　！！　アハハハ！！！」

新八「いいんですか？　調査をほっぽり出してお酒なんか飲んでて……」

新八が2人の飲んだくれにそう尋ねると、

銀時「しつかたねえじゃねえか！！ 依頼主が飲めってんだから
よ　！！」

銀時は完全に酔っ払った様子でそう答えた。そしてそんな光景に、

フェイト「ねえ、一護。本当にこんなことしてて良いのかな？」

フェイトが不安そうな表情で一護に尋ねた。それに対して一護は、

一護「まあ、別にいいんじゃないか？ あんまり根を詰めたって良
くないしな……」

気楽そうな様子でそう答えた。

リクオ「一度気分転換してからやるのも悪くないと思うよ。」

はやて「ま、まあそれはそうなんやけど……」

リクオも一護の考えに賛同するが、はやては釈然としない様子である。と、ここで、

当麻「おい、なのは？　それ何飲んでんだ？」

なのはが何かを飲んでいることに気づき、当麻がそう尋ねてみると、

なのは「にゃん、とまぐん!!」

当麻「な、なのは!？」

なのはが突然当麻に抱きついてきたのだ。当麻は突然のことに滅茶苦茶動揺する。いくらなのはの身体が少し小さくなったとはいえ、胸は普通の女子高生よりも大きい。当麻の理性に結構なダメージが……。

神楽「大変ネ!　なのはが完全に酔っ払っているアル!!」

一護「何でだよ!？　自分から飲んだりとかなのはがするわけ……」

と、その時、

坂本「おゝ！　なのはちゃんは酒に弱いんじゃない！」

銀時「高々お猪口いっぱいなのになゝ！！！」

犯人が自ら自供した……。

新八「何あんたらなのはちゃんに酒飲ましてんですか！？」

はやて「特に銀ちゃん！！明らかこれ教師失格やろ！？」

飲んだくれ2人の愚行に新八とはやてがキレる。すると、

フェイト「先生……坂本さん……」

居酒屋に金色の死神が降臨した……。バリアジャケットもデバイスも使っていないが、フェイトからは尋常ではない邪気が放たれており、それを見た銀時と坂本の顔も見ろ見る青くなっていた。そして……

フェイト「ちょっと……
・
・
・S
しよつか?……
……」

しばらくして、銀時に肩を貸す新八、坂本に肩を貸す神楽、なの

はを背負う当麻、そしてフェイト、はやて、一護、リクオが店から出てきた。

神楽「バカ2人は完全にダメアルな。」

新八「まあ、フェイトちゃんの怒りに触れっちゃったからね……丁度いい薬だと思うよ。」

まあ、新八の言つとおりこの2人は完全に自業自得である。一方……

なのは「…すう…すう…」

なのはは当麻の背中の中で幸せそうな顔をしながら眠っていた。

はやて「なんやなのはちゃん、結構まんざらでもないみたいやな。」

リクオ「うん、そうだね。」

その様子にはやてとリクオがそう口にした。

当麻「あのー、俺は結構危険だったのですが……主に貞操が……」

だが当麻はかなりげんなりしながらそう呟く。そう、あの後なのはの暴走ぶりが半端ではなかった。当麻の貞操が危機に陥る寸前まで追い込まれるほど……。

一護「なのはに酒は禁物だな……。」「

フェイト「うん！」

一護はその時の状況を思い出してそう呟き、フェイトは何故か力強く頷いた。と、その時、

銀時、坂本、当麻、一護、リクオ「っ！！」

銀時、坂本、当麻、一護、リクオが背後に何か気配を感じた。

新八「あゝあ、結局今日は何も収穫ありませんでしたね。」

そしてそのことに気付かない新八が呑気に呟くと、

銀時「そつでもねえみたいです。」

新八「ぎ、銀さん！ 起きてたんですか！？」

銀時が起きていることに新八は驚いた。すると、

坂本「銀時、覚えとるか？あの時のことを……」

銀時「忘れる訳ねえだろ。」

坂本「わしの合図で動くぜよ。」

銀時「ああ。上条、黒崎、奴良。」

当麻・一護・リクオ
「ああ（はい）。」

銀時と坂本が言葉を交わしていると、銀時が当麻達を呼び、当麻達もそれに頷いた。そして、

ジャリッ……

坂本「今ぜよ！」

銀時「わかってらあ！」

小さな砂音を聞いた坂本が合図を送り、銀時も当然のように返事を
して後ろを振り返るが、

ゴッスンッ！！

銀時・坂本「ああっ！？」

なぜか頭同士でぶつかり、その場に崩れ落ちてしまった。完全に酒
で酔っているのが原因である……………。

新八「って何してんだあんたら！？」

一護「やっぱバカだな……」

その様子に新八と一護が呆れる。そんな中、

???「ホッホホー!!」

赤紫色のマスクに同じ色の上半身タイツにパンツという超変質者集団が剣を持って当麻達に迫ってきた。

神楽「おお!!」

新八「うわあ!?! な、何か来たー!?!」

新八と神楽は思わず慌てる。

一護「くそっ！ リクオ行くぞ！ 当麻はそこにいろよ！ なのは
背負った状態じゃ戦えねえだろ！」

リクオ「はやて達はそこにいて！」

それを見た一護とリクオが変質者集団に突っ込んでいこうとした。
その時、

ドオオンっ！！

ショッカー「ホーーーーーッ！！！！？？？？」

一護・リクオ「っ!？」

シヨツカー達の前の地面が爆発し侵攻が止まった。そして一護とリクオは後ろを振り返ると、そこには……

坂本「よし、そこまでぜよ……。」

バカな雰囲気は一切ない凜としたたずまいでいる坂本の姿があった。その右手には拳銃のような物が握られている。どうやら先ほどの爆発の原因はこれのようだ。そして坂本はそれを構えたままシヨツカー軍団に近寄っていく。

坂本「動かん方が身のためぜよ。少しでも動けば……バン。」

シヨツカー「ホー……!!??」

坂本が銃を撃つふりを見ると、シヨツカーは目に見えてビビった。

坂本「おとなしく去っていけば、こっちも手は出さんきに。さあ、どうするぜよ?」

シヨツカー「ホ、ホー……!!!!」

坂本が威圧的な声色でそう脅すと、シヨツカー達は恐れおののいて帰っていった。

新八「凄い……」

はやて「戦わないで敵を追い払ったんか？……」

その様子を見た新八とはやてが思わず呟く。

坂本「勝つても得なんか無いきに。戦わないのが一番ぜよ。アハハハハハッ！！」

坂本は決め台詞っぽくそう言い放った。だが……

銀時「って何あいつら帰してんだー！ー！……」

ドゴッ！！

坂本「あだっ！！」

銀時が背中に飛び蹴りを食らわせた。

神楽「情報も聞かずにあいつらをみすみす帰してどうするアルか！！
このバカ！！！」

一護「誘い出すために居酒屋で芝居打ってたんじゃねえのかよ！？
これじゃただ酒飲んで酔っ払っただけじゃねえか！！！」

そして坂本が倒れたところに神楽と一護が踏み付ける。

リクオ「さ、3人共落ち着いてよ……」

フェイト「そうだよ。坂本さんのおかげで誰もケガしないですんだから。」

その様子を見たリクオとフェイトがそう言って宥めようとする。と、そこへ、

「あのー……」

突然の声に一護達は全員その方向を向いてみると、

当麻「あんたは……」

はやて「藤山社長！」

そこには藤山重工社長の藤山恒明とその部下2人がいた……………。

END

いつまで経っても馬鹿な奴はいる by 坂田銀時（後書き）

どうも黒狼です！！

今回はアニメで大活躍していた快援隊のお話です。ストーリー事態は原作とほぼ一緒と言ってもいいでしょう。登場人物の名前や名称なんかを少し変えたりはしましたが……。

あと万事屋メンバーが登場してないなあと思ったのもこの話を書いた理由だったりします。やはり銀さんは外せないですね……。

そして今回のある意味注目点は一護です。結構一護っぽくないような場面がちらほらあったと思いますが、そういった部分が実はこの後書こうと思っている長編と結びつけたりするつもりですので、その辺も注目していただけると有り難いです。

次回は今回の話の後編です！ バトル要素とシリアス要素があると思います！

ではまた！！

見た目と中身は案外違うもの!! (前書き)

感電血盗難事件の後半戦です!!

一応バトルします!!

最後の方は結構シリアスかつ次回投稿予定の長編と関係ありそうな
感じです!!

ではどうぞ!!

見た目と中身は案外違うもの！！

都内某ホテル

当麻達は予約しておいた都内のホテルの一室にいた。突然訪れてきた藤山達の用件を聞くためである。ちなみになのはは別室でぐっすり寝てますよ。

銀時「で、一体何のようだ？　今俺達めっちゃ忙しいんだけど……」

神楽「謝罪する気があんなら米10キロ持ってくるヨロシ！」

坂本「ぐふおふおふお……」

銀時は坂本の首を締めながら機嫌悪そうにそう尋ね、神楽は坂本の腹の上にふんぞり返るように座った状態でそう言った。

新八「いや、何でさり気なく米を要求……」

神楽の言ってることは甚だ疑問だが……。

藤山「突然申し訳ありません。実は我が社の方で調査をしていたところ、感電血を欲しがっているというある組織を見つけまして……」

フェイト「っ！ それは一体何という組織なんですか!？」

藤山の知らせを聞いてフェイトがそう尋ねる。

藤山「はい。その名は“悪の組織”……」

……

リクオ「あ、あのー……」

はやて「その“悪の組織” 名前はなんなんや？」

リクオとはやてがそう尋ねるが、

藤山「いえ、ですから、“悪の組織” という名の悪の組織なんです。

」

.....

「護」.....これはなんか言ったら負けなのか.....」

当麻「多分.....な.....」

当麻達は何とも言いがたい雰囲気にならざるを得なかった.....。

翌日

藤山から組織のアジトがある場所を教えてもらった当麻達は実際に来てみたのだが……

銀時「……なあ……これなんて組織だったわけ？……」

新八「“悪の組織”ですよ、銀さん……」

一同皆微妙なりアクションを取らざるを得なかった。何故なら……目の前の看板にはこう書かれていた。

“ 有限会社 悪の組織 ”

はやて「いやいや！ なんやこれ！？ “ 有限会社 ” ってなんや！
？ 会社ちゃうやろどう考えたってー！」

悪の組織が会社名と言われたら普通ドン引きである……。

リクオ「しかもこんな何もない場所に建てるなんて……」

フェイト「一体この人達は何を考えているんだろう……」

そう、ここは都内では非常に珍しい周りには建物も何もない空き地。
そこにどういふ訳かポツンとビルが一件建っているのだ……不審で
あることこの上ない……。と、ここで、

なのは「でもどうしますか？ 先生。」

なのはがそう尋ねた。ちなみに昨日のことを当麻がなのは話したところ、なのはは顔を真っ赤にしてしまったそう……。まあ、当然といえば当然である。

神楽「正面から行くのはバカアルよ。」

銀時「ああ、そうだ。とりあえず裏口でも探してこっそりの中に……」

だが、またしてもそれをぶち壊す……

坂本「あのー、すいませーん！ 快援隊ですけどー！」

バカがいた……。

一護・当麻「何してんだあんたはああああ!!!!」

バキッ！

坂本「ごはあっ!!!!」

それを見た一護と当麻がすかさず飛び蹴りを食らわせる。

神楽「三河屋みたいに気楽アル!!!!」

銀時「そんなにボケたいのか！？　そうまでしてボケたいのか！？」

坂本「な、何言うとるんじゃ金時！　わ、わしはその感電血いうもんを返してもらおうと思っただけじゃ！」

神楽と銀時が踏み付ける中、坂本はそう説明する。すると、

はやて「あゝ、なんや。もう手遅れみたいやで……。」

はやてが苦笑いを浮かべながらそう呟いた。何故なら……

ショッカー「ホッホホー！！！！」

目の前には昨日の夜襲ってきたシヨツカーっぽい軍団が大量にいたから。ざっと100以上はいるだろうか……無駄に大規模である……。そしてそんな中、シヨツカー軍団が中央に道を開けると、そこから総統っぽい服装をした眼帯の男が現れた。

総統「ふははは、よくぞここまでやってきたな……快援隊よ……。」

総統っぽい男は当麻達に悪役の言いそうな台詞を言い放った。それを聞いて当麻達は……

銀時「何？ シヨツカーの次は総統のコスプレイヤー？ お前らそんな格好してて恥ずかしくないの？ え？」

神楽「戦隊物の見過ぎじゃないアルか？」

当麻「いや、いい歳の大人が未だに戦隊物を見てたらさすがに上条さんもドン引きですよ？」

精神的攻撃を仕掛けた。本人達には全くその気はないが……。

総統「ぐはっ！？ ふっ……なかなかやるではないか……まさかそんな攻撃を仕掛けてくるとは……」

新八「いえ、ただ心に思ったことをそのまま口に出しただけです。」

総統「ちなみに私はシ○ケンジャーがお気に入りだ。」

「護」いや、聞いてねえし。つか、やっぱり観てたのかよ戦隊物……」

この総統もおそらく坂本とは別の意味で同じくらいバカである……。

銀時「まあ何でもいいから盗んだもの返しな。」

総統「返せと言われて返すバカがいるか——！！！！！！」

銀時が単純な要求をするがそんな要求にはさすがのバカ総統もY E Sとは言わない。

坂本「あれ？　今わしを呼んだか？」

フェイト「いえ、呼んでないです。」

そして“バカ”という単語にバカが反応するとフェイトがそう答える。

総統「ふんっ、貴様らはここで死んでもらう！ ものどもー！！」

シヨツカー「ホッホホー！！！！」

総統が鼓舞すると、シヨツカー達も気合い十分に声を上げる。

新八「うわっ！？ ぎ、銀さんどうするんですかー!?」

銀時「ん？別に大丈夫だろ？」

新八「どこですか！？相手はあの数ですよ！？」

新八が目の前にいるショッカー軍団の数に焦り出すが、銀時は慌てる様子もない。すると、

一護「んじゃ、久しぶりに能力を使うか。」

フェイト「え？」

一護の言葉にフェイトが首を傾げる。

なのは「で、でもここは学園都市の外なんだから能力を使っちゃダメなんじゃ……。」

そう、学園都市外での能力使用は禁止されている。破った者には厳罰が下されるほどだ。しかし、

当麻「ああ、それなら心配ねえよ。なのは。」

当麻がその心配をあっさり否定した。

リクオ「今回の件に関しては親船さんのおかげで能力使用が許可されてるんだよ。だから……。」

するとリクオの姿が煙に包まれ、そこから現れたのは……

夜リクオ「だからお前らも能力使って派手に暴れな!!」

夜のリクオだった。

銀時「こういうことだ、新八。ただ銃や刀の使用許可は降りなかったけどな。上条、奴良! 銃や刀は使うなよ!」

当麻「まあ素手でも何とかなるか。」

銀時の注意を聞いた当麻は拳を構える。

夜リクオ「なら、こいつの出番だな。来い！ 多樹丸！」

そう言うと、夜リクオはどこからともなく一本の太い木の枝を出した。すると、

総統「何をこそこそ話している！ ものどもかかれー！ー！ー！！！」

シヨツカー「ホッホホー！！！！」

業を煮やした総統が攻撃の合図を出し、シヨツカー達が一斉に襲い掛かってきた。

「護」……行くぜ……」

一護はそう呟くと、懐から何かを取出した。それは木でできたエンブレムのようなものだった。そしてそれを胸の上でかざすと、

ブンッ

奇妙な音が聞こえたかと思うと、そこに立っていたのは全身黒色の袴のような服を身に纏い、身の丈ほどもある巨大な刀を背負っている一護の姿だった。

フェイト「あれが……一護の能力……。」

いつもとは違う相手を圧倒するような威圧感と鋭い目付きにフェイトは目を奪われる。と、ここで一護の姿が消えたかと思うと、

「一護、どこ見てんだ？……」

「シヨツカー、ホ？」

いつの間にかショットカー軍団の先頭の目の前にいた。死神の能力を持つ者が使う高速移動術“瞬歩”を使ったのである。そして……

「護、おらあああ！」

ザァンツ!!!

「ショッカー・ホーーツ!!!!!!? ? ? ? ?」

その大きな刀“斬月”を横枷ぎに振るって、シヨッカー軍団を一気に十数人吹っ飛ばした。

シヨッカー「ホッホホー！！！」

シヨッカー達はリクオの方にも向かっていく。それに対してリクオは、

夜リクオ「明鏡止水……………」

そう呟いた。すると、

シヨッカー「ホ？　ホ？」

ショッカー達は突然辺りをキョロキョロし出した。何故なら……

はやて「リクオ君が……消えた?……」

そう、リクオの姿がどこにもないのだ。これにははやても驚く。すると、

夜リクオ「明鏡止水は、周りの奴らに俺の存在を認識できなくさせる技だ……。」

夜リクオはいつの間にかショッカー達の背後にいた。

夜リクオ「実際、俺が見えなかっただろ?」

ショッカー「ホ……」

ドサッ

夜リクオがそう言うと、ショッカー達は糸が切れたように倒れた。

夜リクオ「安心しな。こいつはただの木の棒。死にはしねえよ。」

そしてこちらでは……

当麻「らあっ！」

ドガッ！ バキッ！

シヨツカー「ホーッ！?!?!」

当麻は拳のみで剣を持っているシヨツカー達を圧倒していた。伊達に今までスキルアウトと不幸なトラブルで相手しているわけではないのである。と、ここで、シヨツカー達がなのは達に狙いを変えた。どうやら少女相手なら余裕で勝てるか思っているのだろう。だが

……

なのは「フェイトちゃん！はやてちゃん！」

フェイト「うん！」

はやて「私らも負けてられへんで！」

シヨッカー達は知らない。彼女達が元の世界ではエース級の魔導師であるということを……。

なのは「レイジングハート！」

フェイト「バルディッシュ！」

はやて「シュベルトクロイツ！」

なのは達はそれぞれデバイスを掲げる。

なのは・フェイト・はやて「セーット、アップ!」

掛け声と共になのは達は光に包まれた。そして光が収まると、そこにはバリアジャケットを展開し、戦闘準備万端にしているなのは達の姿がいた。

ショッカー「ホホー!?!?!?!」

なのは達の変容にショッカー達は困惑し、完全に動きが鈍る。そしてそんな状況をなのは達が見逃すはずはない。

なのは「アクセルシューター!」

まずなのはが自身の周りに幾つものピンク色の魔力弾を形成し、

なのは「シュートッ!」

一斉にショッカー達に向かわせる。それをショッカー達が防げるはずもなく……

ドガガガアアアンッ!!!!!

ショッカー「ホー!?!?!?!」

もろに直撃してダメージを与える。さらに、

フェイト「ハーケンセイバー!」

今度はフェイトがバルディッシュを鎌の如く変形させ、

フェイト「はああああっ!!!!」

巨大な黄色の斬撃を放った。そして……

ズバババババンッ!!!!

フェイト「ホー……!!!!???」

ショッカー達を切り裂いていった……。すると、

はやて「なのはちゃん！ フェイトちゃん！ 下がってや！」

なのは・フェイト

「了解！！」

はやてが2人に後退の指示を出し、なのは達はそれに従う。はやての頭上にはすでに巨大な黒い魔力の球体が浮いていた。

ショッカー「ホ、ホーーーー！！！！！」

それを見たショッカー達が逃げようとするが、

はやて「遠き地にて闇に沈め！！」

すでに手遅れであつた……。

はやて「デアボリック・エミッション!!!」

ドゴオオオオオオッ！！！！！！！！

「サッカーホーーーー！！！！！！！！！！」

魔力の球体はサッカー達のところへ落下すると、一気に拡散し爆発した。そしてそこはすでに死屍累々なサッカー達しかいなかった……。そしてそんな光景を見て、

坂本「おお！ 金時の生徒達はまっこと強いぜよ！！これはわしも

負けておれんなあ！……って、あれ？」

坂本が当麻やなのは達の強さに感心し、自分も暴れようと銃を出そうとするが……

坂本「拳銃、落としたみたいぜよ。アハハハハハッ！！」

頭を掻きながらそう言った……。

銀時「てんめえ！　こんな時に何やってんだ…よおっ！！」

バキッ！！

ショッカー「ホーッ!？」

銀時は自身の持つ木刀“洞爺湖”でショッカー達を完全に圧倒しつつ、坂本にキレる。

新八「こんな大事な時……につ!!!」

バキッ!

ショッカー「ホー!？」

新八も木刀でショッカー達に立ち向かい、

神楽「やっぱりバカだー！ー！！！」

ドカツ！ バキッ！

神楽「ホー！ー！！！！？」

神楽も持ち前の怪力でショッカー達を完全に圧倒しながら坂本のアホさに呆れる。と、ここで、

当麻「あつ！ 銀さん！ あれを坂本さんに！」

銀時「あつ！？ あれって何だよ……ってあれか！」

当麻が何かを思い出して言うと、銀時もそれに気付き自分の懐から

何かを出し、

銀時「辰馬！ 受け取れ！」

それを坂本に投げた。

坂本「ん？ 拳銃？」

それは学校で陸奥に坂本に渡すよう頼まれた拳銃だった。

銀時「お前んとこの副官が渡せたとよ！ こうなることがわかってたんじゃねえか！？」

坂本「えつとこれがこうなって……」

だが銀時がそう言っていた頃にはすでに、坂本は拳銃の分解作業をしていた。

新八「いや何してんだあんたは!？」

新八が坂本の意味不明な行動にキレる。

坂本「いや、何か無性に分解したい気分になったんじゃない。」

一護「あんたバカ通り越して大バカだろ!!!!!!」

夜リクオ「そんなバカのことはどうでもいいから目の前の奴らに集中しろ！……！」

ドゴオオン！！

ショッカー「ホー……！！！！……？？」

坂本にキレる一護にそう注意しながら、夜リクオはショッカー達を多樹丸で潰しまくる。

一護「うるせえ！　んなことわかってる！　波動ノ四！　白雷^{びげくわい}！！」

ドカアアンツ！！！！

シヨツカー「ホー……!!??」

一護も文句を言いながら、特殊技能である“鬼道”でシヨツカー達を倒していく。そんなこんなでシヨツカー達は次々と倒されていた。そしてこの状況を見た総統は……

総統「ぐぬぬぬ……このままでは……」

シヨツカー幹部「いかが致しましょうか？」

総統「仕方ない！ あれを出すぞ！」

シヨツカー幹部「はっ！」

いつの間にかいたショッカー幹部と共にビルの中へと入っていった……。そしてしばらくして、

ショッカー「ホー……」

ドサッ

全てのショッカーが倒された。

銀時「やっと終わったぜ……」

当麻「なのは達は平気か？」

なのは「うん！」

フェイト「大丈夫だよ。」

当麻はなのは達の無事を尋ね、なのはとフェイトがそう答えた。と、ここで、

夜リクオ「おい、あのオヤジはどこ行きやがった？」

はやて「あ、そういえばおらへんね。」

リクオが総統の姿が見えないことに気付いた。すると、

総統「なーはっはっはっ！……！」

突然上の方から声が聞こえ当麻達が上を向くと、ビルの屋上に総統とショッカー幹部の姿があった。

一護「あいつら何であんなここにいった？……」

神楽「バカは高いところが好きってよく言うアル。」

一護は屋上にいる必要性に疑問を感じていると、神楽がそう答えた。
すると、

坂本「お？　今わしを呼んだぜよ？」

新八「いえ、呼んでません……。」

はやて「ていうか自分でバカって認めとるようなもんやないかい……」

坂本が何故か反応したため新八とはやてが思わず呆れる。と、ここで、

総統「ところで、貴様らは盗まれた感電血の行方は気にならないか？　そう、感電血とは……

“感” 覚だけで言うと、こ れ一本で
“電” 力施設なんてもうい らなーいってほどの 一品で、
職人さんが“血”の滲むような努力で 作り上げた一品。

略して“感電血”だ!!」

フェイト「な、長い……」

なのは「いろいろと無理矢理な気がするの……」

総統が拡声器を使って感電血の名前の由来を説明し、それを聞いたなのはとフェイトは思わずそう言った。

銀時「つか持ってたんならさっさと帰しな。」

総統「返せと言われて返す悪役がいるか——!!」

銀時がさらつとそう言つと総統は若干キレながら拒否した。

新八「つーか、あの人さらつと悪役つて認めたよ。大体会話が成り立ってるってことは、その拡声器必要無いんじゃないですかー？」

神楽「やつぱりバカアルな。」

はやて「まあ、あの歳で戦隊もののコスプレしとるような連中やからな。しゃーないんとちゃうかー？」

新八のもつともな指摘に神楽とはやてがそう付け足す。ていうかはやてさん、あなた方の服装もどちらかっていうとコスプレですよ……。

総統「バーカバーカ！！　これはただの拡声器じゃねえんだよ！！　これを見て驚け！！」

ポチッ

総統は逆ギレしながら拡声器に付いていたボタンを押した。するとビルが縦真つ二つに分断されて横にスライドしていき、そこからヘンテコな巨大口ボが出現した。足はキャタピラで上の部分は橙色の円柱と肌色の楕円形の立体で構成されており……ぶっちゃけかなりダサイ。すると、

銀時「あー！！ あれはジャスタウェイ！？」

銀時がロボットの姿を見てそう叫ぶ。

総統「違ーうー！！ これは我が組織が開発した最終兵器！ その名も“ジャスタック”だー！！」

だが総統はそれを否定し、高らかにそう紹介するが……その姿はどこからどう見ても“銀魂” 人気投票ランキングで何故かいつも上位にいる“ジャスタウェイ” そのものであった……。

銀時「おいおい、それパクリなんじゃねえのか？」

新八「著作権侵害で訴えられますよー!!」

銀時と新八が目の前にいるロボがパクリであることに対して猛烈な批判をする。

総統「うるさい！ 悪の組織が法律なんか守ってられるかー!!」

リクオ「おいおい逆ギレかよ……。」

当麻「ああいう大人にはなりたくない」と上条さんはつくづく思いま
すよ。」

そしてその指摘にキレる総統に対してリクオと当麻が冷たい視線を
送った。

総統「き、貴様らー！！」

その口二度と聞けなくしてくれるわ！ ジャスタンク発進！！」

ショッカー幹部「はっ！」

ポチッ

そしてやけになった総統がショックカー幹部に発進ボタンを押させた。
しかし……

シーン………

銀時「なんだ？ 動かねえぞ。」

神楽「故障アルか？」

一向に動かないジャスタンクは動かなかった。

総統「お、おい！ 一体どうなっている！？」

シヨツカー幹部「そ、それは私にも……っ！　そ、總統！　あ、あれを！」

總統「な、何だと！？」

シヨツカー幹部が何かに気付き總統を呼んで見てもらうと、總統もその光景に啞然としてしまった。何故なら……ジャスタंकの下半分がカチンコチンに凍ってしまっていたからだ。

總統「ど、どういふことだこれは！？　こんな設定原作にはなかったぞ！？」

總統はまさかの事態に思わずそう叫ぶ。つーかそついう発言はやめてくれよマジで……。すると、

はやて「ああ、総統さん？聞こえとるかー？ 悪いんやけど、あんたらここで退場してもらうで。」

はやてが飛行魔法を用いてジャスタンクの頭部辺りで浮遊しながら、総統にそう言った。

総統「な、何だと！？ き、貴様一体何をした！？」

はやて「ん？ いや、ちょっと私の魔法で凍らただけやで。」

そう、はやては総統が銀時達とパクリ議論をしている間に彼女自慢の氷結魔法、“アーテム・デス・アイゼス”でジャスタンクの下半分を凍らしてしまったのだ。

総統「き、貴様ー！！ 大体我々がここで退場とはどういうことだ

！？ 原作では我々はもう少し暴れられていたではないか！？」

はやて「あー、それはなー、作者が“こんなグダグダ展開いつまでも続けてたつてしょうがなくなね？”って思ったらいいんや。ほんであんたらをさっさと倒してストーリーを進めることになったんよ。」

はやてさん、そんなにぶっちゃけた発言しないで下さいよ……まあ、事実ですけど……。

はやて「ま、そういうわけやから……なのはちゃん！ フェイトちゃん！」

なのは「うん！」

フェイト「いつでも行けるよー！」

はやてがなのはとフェイトを呼ぶと、2人はすでに魔力を充填しており準備万端だった。

総統「ちょ、ちょっと待て！ まだジャスタンクの秘密武装“ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲”がまだ……」

はやて「いや、それもパクリやろ？ 大体そんなアームストロング二回もあつたらしつこいねん。せやからそんなもん別に出さんでええ。ちゅうわけやから、著作権侵害しまくつてるあんたにはお仕置きや！ なのはちゃん！ フェイトちゃん！ 全力全壊で頼むで――！！」

総統が秘密武装ネオアーム……名前長いな。とりあえずそれが出ていないことを訴えるが、はやてはそれを“単なるパクリ”と切り捨てた。そして……

なのは「ディバイィィン……」

フェイト「トライデント……」

なのは・フェイト 「バスターーー（スマッシュャーー）！
！……」

ドカアアアアン！！！！

總統・シヨツカー幹部

「ぎゃああああああー！！！！」

なのはとフェイトの渾身の収束砲撃により、ジャスタングは大爆発を起こした……。その光景を見て……

新八「……銀さん……」

銀時「……どうした…新八……」

新八「……あの3人がいれば……僕達戦う必要無かったんじゃないですか?……」

銀時「……言うな……新八……」

銀時と新八は顔を引きつらせながら自分達の必要性に疑問を感じるのだった……いえいえ、あなた方は必要ですよ。お笑い要員としてですが……。

それから数分後。坂本の拳銃に発信機を仕掛けていた陸奥率いる快援隊のメンバーが到着し、悪の組織の連中を全て捕縛した。まあただの貿易会社の人間が何で犯罪者を捕縛してんだとかっていうツッコミは置いて……。

陸奥「空じゃと!?!?……」

なのは「そ、そんな!?!?……」

總統の白状で感電血とお金の置いてある場所を発見したのだが、そこには空のアタッシュケースと段ボール箱しかなかった……。

神楽「このバカ總統!! 本当のこと言うアル!!」

それを見て神楽は総統の胸ぐらを掴み、そう脅すのだが……

総統「ほ、本当に知らないんだ!! 確かにその中に入れておいたはずなんだが!……」

新八「そんな大事な物を放って全員外で戦ってたなんて……」

はやて「マヌケにも程があるやろ、あんたら……」

総統は焦りながらも全力でそう言い、新八とはやては悪の組織のマヌケさに呆れて物も言えなかった。

フェイト「でも、それならお金と感電血は一体どこに?……」

フェイトは思わぬ状況に首を傾げつつそう呟く。そんな中、銀時は何かを考えていた。そして……

銀時「あ……」

坂本「もうわかったじゃろ、銀時。ヒントは……利益ぜよ……」。

ある考えに行き着くと、坂本もどうやら同じ考えらしく、いつもと違う真剣かつ鋭い視線を銀時に向けながらそう言った。一方……

リクオ「…ねえ……これってまさか……」

当麻「？　どうした？　リクオ。」

普通の姿に戻ったリクオがそう呟いたことに当麻が気づき尋ねると、

一護「ああ、お前の考えてる通りだと思うぜ。」

一護もリクオと同じ考えらしくそう言っていると、

一護「けど多分それだけじゃねえ。こいつは思ってた以上に深くてヤバそうだ……。リクオ、当麻、場合によっては俺達ちよつと動くんかもしんねえぞ。」

さらにそう付け加えた。

リクオ「……うん、わかった……。」

当麻「いや、さっきから何の話してんだよ一体……」

一護の言葉にリクオは頷くが、当麻は話の内容がわかっていないらしい。

一護「つたく、お前は鋭い時と鈍い時の差が大きすぎなんだよ。後で話してやるから、その時は頼むぜ。」

当麻「？ 何だかよくわかんねえけど、わかった……。」

一護達は銀時達ですら気付いていない何かに気付き、密かに動こうとしているのだった……。

深夜

もう誰もいないはずの藤山重工本社に2人の人物の姿があった。

「???」急げ！ 何をしている!?!」

「???」は、はい!」

その人物達は本社の裏口から出て近くにあるトラックに向かおうと

していた。しかし……

「よお、こんな時間に夜のドライブか？ 藤山社長さんよお……。」

藤山「あ、あなたは！？……」

トラックの前に待ち構えていた人物達の1人 坂田銀時にそう尋ねられ、本社から出てきた2人の人物の内の1人 藤山重工社長の藤山恒明は驚きを顕にする。

銀時「それにしちゃあ、随分と色気のねえ連れとトラックじゃねえか？」

藤山「あ、あはは……こ、今回は大変ご活躍だったようで……」

銀時が変な質問を尋ねるが、藤山はそれには答えず、苦し紛れの世辞を述べる。

はやて「ですが、藤山重工さんの用意したお金も快援隊の感電血はどこにもありませんでした。」

藤山「そ、それは……………いやはや……………」

すると部隊長らしい威厳ある雰囲気ではやてがそう報告すると、藤山は何故かソワソワし出す。と、ここで、

銀時「随分と出来すぎた話じゃねえか……………。あんたらの正確な情報のお蔭で犯人は無事確保できた。だがいくら探しても盗まれた積み荷と金は見つからねえ……………。その場合、誰が得するんだ？……………」

銀時が鋭い視線を藤山に浴びせながらそう尋ねると、藤山は思わず目を泳がせる。

陸奥「おんしら……確か保険に入っておったよな……。」

藤山「な、何を……。」

陸奥がそう言うと、藤山は何かを言おうとするが……

フェイト「とぼけても無駄です。お金が見つからなかったとしても、あなた方には保険金が降りますから損害は全くありません。むしろプラスですね。」

銀時「取引先が潰れてくれればなお結構。口封じにもなるしな。」

藤山「な、何をバカな……………」

フェイトと銀時が企みの全貌を説明すると、藤山は大きく動揺する。

なのは「そんな悪事に快援隊の人達を利用するなんて許せないの……。」

藤山「わ、我らを侮辱する気か！！　おい！！　今すぐ警察を呼べ！！！」

なのはがそう言い放つと藤山は今までの雰囲気とは打って変わって凄じ剣幕で憤慨し、部下に警察へ通報させようとする。だが……

はやて「ええんか？ 逮捕されるのはあんたらの方やで？」

はやてがやや挑発的にそう言った。

藤山「っ！ しよ、証拠は！？ そこまで言うなら証拠があるんだろっな！？」

銀時「証拠？ 証拠ねえ……………」

すると銀時は自身の木刀“洞爺湖”を手に持った。

藤山「ああっ！？……………」

それには藤山も思わず恐怖した。そして銀時は……

銀時「てやああああ!!」

ズバンッ!!

トラックの荷台を覆っていた布を切り裂いて、中身を曝け出した。そこには残りの感電血が置かれていた。

銀時「これが証拠だ？ 文句はねえよな？ 藤山社長さんよお。」

銀時がそう言い放つと、藤山は……

藤山「フフフフ……アハハハハハハッ！！！」

何故か大きな声で笑い始めた……。

新八「な、何ですか？……」

神楽「追い詰められて気でも狂ったアルか？……」

あまりの豹変ぶりに新八と神楽は意味がわからないといった表情を浮かべる。すると、

藤山「まったく……完璧な計画だと思っていたが、まさかこんな連中にはれるとはな……。」「

銀時「あれ？ 何これ？ こんな原作に無いよね？そっだよね作者さん！」

急展開に銀時はメタ発言を言い放った……ええ、原作には無いですよ。私のオリジナルですから。

藤山「私がバレた時のことを考えないでも思ったか？ 私だってそれを考えなかった訳ではない。だから貴様らの口を永久に封じてやる！ 私が金で雇った連中でない！」

銀時達「っ！！！？？」

藤山の言葉に銀時達は驚きを隠せなかった。そして……

藤山「さあ！ 金を払った分しつかりとこいつらの口を塞げえええ
！！」

その掛け声と共に……………

誰も出てこなかった……………。

フェイト「え？……………」

神楽「何も起こらないアルよ。」

まさかの事態に銀時達も啞然とした表情になる。

藤山「ど、どういうことだ!? 何故誰も出てこない!？」

藤山は混乱の境地に陥っていた。すると、

「あんたが金で雇った連中なら全員のびてるぜ、藤山さん。」

どこからか声が聞こえたかと思うと、そこにいたのは……

フェイト「一護!！」

一護だった……。

藤山「お、お前は！　これは一体どういう……」

一護「どうもこうも、あんたがこういうことに出るかもしれないと思っ
て一応警戒してたんだよ。」

藤山が尋ねると、一護は平然とそう口にした。と、ここで、

リクオ「こういうことだったんだね、一護。」

当麻「まさかそのおっさんがここまで大胆なことをしでかすとは思
わなかったな……。」

なのは・はやて

「^{リクオ}当麻君！！」

反対側から当麻とリクオも姿を現した。すると、

銀時「お前らの姿が見えねえと思ったら、そんなことやってたのかよ。つーことはお前らはこのおっさんがここまでやる理由を知ってるんだな？」

銀時が藤山が本気で口封じをしようとしてくる理由を尋ねると、

一護「そりゃそうだ。これがバレて警察に捕まったらこのおっさんはマジで終わりだから……。」

一護は意味ありげにそう答えた。

フェイト「？ それってどういうことなの？ 一護。」

フェイトがその言葉の意味を尋ねる。すると、

一護「このおっさんの会社、藤山重工は国から発展途上国に送る支援機械の製造を請け負ってるだろ？」

はやて「え、ああ、そうやね。けどそれがどないしたんや？」

一護が確認するようにそう尋ねると、はやてはその意味がわからず尋ね返した。すると一護は藤山にこう聞いた。

一護「藤山さん、あんたの会社はひょっとしてその機械を造ってね

えんじゃねえか？」

藤山「っ！！！？？」

なのは「えええっ！？」

一護のとんでもない質問に藤山は目に見えて動揺を見せ、なのはがまさかのことに驚いた。

新八「ちょ、ちょっと待ってよ！ 機械を造ってないってどういうこと！？」

リクオ「志村君……国から依頼された事業を請け負うと何がもらえるか知ってる？」

新八「え？……………」

リクオの質問に新八は悩む。すると、

陸奥「っ！ 国からの助成金か！！」

銀時「お、おいおい…………このおっさんまさか……………」

陸奥と銀時がリクオの言わんとしていることに気付き驚きを顔にし、

フェイト「機械を造るためにもらった助成金を着服してたってこと
！？」

フェイトがその考えを口にした。

「護」ああ……このおっさん、見た目とは逆のとんでもない悪人だぜ……。まあそれも今全部わかるだろうけどな……。」

はやて「？　どういう意味やそれ？」

「護の言葉にはやてが首を傾げる。すると、

「まったく……私を呼んだ理由がこんなことのためだったとはね……」

本社の裏口から1人の少女が出てきた。

なのは「み、美琴ちゃん!？」

当麻「悪いな、御坂。こんなところまで呼び出しちまって……。」

美琴「別にいいわよ。あんたには返しきれない借りもあるわけだしね……。」

当麻が謝ると、その少女　御坂美琴は仕方なさそうにそう言った。

「護」それで美琴、どうだった?」

美琴「あんたの予想通りよ。社長室にあったパソコンを試しにハッキングしてみたら、横領やらなんやらの犯罪の証拠データがぞろぞろ出て来たわ。」

念の為に言っておくと、美琴の能力“エレクトロマスター発電能力者”は電子操作も可能なため、パソコン内部に電気を流してハッキングすることも出来るのだ……。まあ個人的な調べ物のためにしょっちゅう学園都市でハッキングしまくっていることは言っではいけないのだが……。

藤山「ば、馬鹿な！？ あのパソコンには最上級のセキュリティシステムをかけていたはず……」

美琴「あれが最上級？ あんな学園都市の外で開発されたセキュリティシステムなんて、ハッキングに1分いらないわよ。」

藤山が驚きを顔にするが、美琴は鼻で笑いながらさっさとそんなことを言った。

一護「まあ何にしても、あんたのしでかしたことは警察がちゃんと捜査するだろうからな。これで終わりだぜ……あんたも…藤山重工もな……。」

藤山「そ、そんな……馬鹿な……。」

一護のトドメの言葉に、藤山はその場に崩れ落ちる。こうして盗まれた感電血と金を巡るこの事件は、国の政策に関わる一企業の犯罪まで日の目に曝すという思わぬ結果を出して幕を引いたのだ……。

結局その後駆け付けた警察によって藤山は逮捕された。そして当麻達は現在学園都市への帰路についていた。

陸奥「今回は世話になったきに。」

銀時「お、きたきた。」

陸奥は銀時に報酬の入った封筒を渡し、銀時はそれをありがたく受け取った。まあこの封筒の中身は実は全部1000円札で、合計して3万円しかないことに銀時が気付くのは家に帰ってからなのだが……。

新八「あ、そういえば坂本さんは？」

陸奥「頭か？ あんしのことと言つまでもないぜよ……。」

はやて「あはは…またキャバクラかいな……。」

神楽「今頃またふぐり蹴飛ばされてるアル……」

神楽がそう言ったのと坂本がキン○マを蹴飛ばされたのは同時だったとか……。

なのは「でもまさか美琴ちゃんがいるなんて思わなかったの！」

当麻「ああ、まあ一護に呼ぶように頼まれたからな。」

美琴「まったく……私はどこにでも出張するハッカーじゃないのよ？
それもわざわざ学園都市の外まで来させるなんて……。」

美琴は実質パシリ扱いされたことが気に入らないようで、機嫌悪そうに言った。

フェイト「でも美琴のお蔭で藤山社長の犯罪が暴けたんだよね。ありがとっ、美琴。」

美琴「なっ／＼／＼！？　べ、別にいいわよ／＼／＼！」

フェイトに礼を言われると美琴は顔を赤くしてそう言った。やはりツンデレである。ちなみに美琴がタメ口になっているのは、なのは達に敬語をやめるようにいったからである。まあ、美琴はどちらかというと丁寧な口調で喋る人間ではないので、それには素直に従ったらしいが……。と、ここで……

フェイト「ねえ、そういえば一護はどうしたの？」

フェイトが一護の姿が見えないことに気付きそう尋ねる。

リクオ「ああ、一護なら誰かに電話するって言ってたよ。」

フェイト「あ、そっか……。」

リクオからそう聞いたフェイトはあることを考える。

フェイト（やっぱり一護は普通の高校生じゃない……能力もそうだけど……あんな大きな犯罪を見抜くなんて、元の世界で執務官をやった私でも絶対に無理だった……。一護……。一護は一体何者なの？……一護は今までどんなことをしてきたの？……）

それが近い内に分かるとも知らずに……。

一護はその頃、リクオの言っていた通り路地裏である人物と電話で話していた。

一護「悪いな。当麻とリクオの銃刀使用許可に加えて美琴のハッキングした情報の証拠能力の適用まで進言してもらっちゃって……」

「???」構わん。藤山は国の事業にまで関わる重大な罪を犯していたからな。上もさすがに目を瞑る訳にはいかなかったのだろう……比較的簡単に許可を取れた。」

一護「そうか……。」

会話の内容はどう考えても一般の高校生のものではない。しかもどうやら先程の藤山の逮捕に関する件のようである。

「……だが良かったのか？　一護……。」

「一護」？　何がだよ？」

話し相手がそう尋ねると、一護はその意味がわからないように尋ね返した。

「……たわけ！　貴様は今ただの高校生として暮らしているだろう。なのにまたこんなことに首を突っ込むなど……お前のことを知っている人間はほんの一握りであろう……。」

「一護」……ああ……そうだな……。」

話し相手がそう言つと、一護はどこか感慨深そうな顔で頷くと、

一護「まあそれはいいとしてさ……今回の件、お前はどう思つて。」

一変して真剣な声でそう尋ねた。

「……藤山が金で雇った連中のことか?……」

一護「ああ……」

「さっき聞いた話ではあの者達は皆多少腕に覚えのある者の様らしいのだが、そうなるか?」

話し相手がそう言つと、

一護「藤山はどうやってそいつらと接触して雇つたか……だろ？」

一護がそれを予想していたかのように答えた。

「???」
「ああ……藤山は確かに中々の悪党ではあったみたいだが、そんな連中を雇つようなパイプは持っていないはずだ。つまり、藤山にその者達を紹介した者がいる可能性が高い……。」

一護「ああ、そうだな……そうなるそいつは藤山を利用できるような奴か……。はあ……。やっぱこつという面倒なことになっちまったな。」

一護が話し相手の見解を聞いて思わずそう呟く。

「???」何故貴様が面倒臭がるのだ！ 貴様はもうただの高校生だと言っているだろう！ それについては私も少し動くつもりだ。だから貴様はただ今の平穏を噛み締めている！」

一護「わかったわかった！ わかったから大声出すな！」

いきなりの大声に一護が鬱陶しそうにそう言った。すると……

「???」まったく…… やつと手に入れた平穏な日常であろう……。貴様はもう普通に生活している…… 良いな? ……」

「護」……ああ……そうだな……。悪い……。」

相手のどこか寂しそうな声に「護は穏やかな笑みを浮かべつつそう言った。

「……『では、私にもまだやることがあるから切るぞ……じゃあな……』」

「護」……ああ……じゃあな……」

ルキア……。」

彼は知らない………再び自分が元いた世界に足を踏み入れて
いくことになるというのを

E
N
D

見た目と中身は案外違うもの！！（後書き）

どうも黒狼です！

という訳で今回は一護の正体はかなり気になるような感じで終わりました！ 自分で言うのもなんですが、一護の正体はかなり予想外というかあり得ないです……。原作を大事にしている方々は大変申し訳ありません！

そして最後にルキアを登場させました！ まあ彼女もヒロインですので、出さないと……。声優ネタなんかでも割りと使えますし。

次回から長編を投稿する予定です！ あとネタバレかもしれないかもしれませんが、まさかのものとクロスします！

ではまた！！

FILE 1 依頼 (前書き)

いよいよ長編突入！

やっと一護のもう一つの顔が明らかになります！

そしてかなり超絶展開な上、あのドラマとクロスします！！

メイン主人公&ヒロインは一護とフェイトです！

当麻、なのは、リクオ、はやてはひよつとしたら殆ど出ないかも知れませんが……それぞれのファンの方はすみません！！

あと & D 曲も以下に変更します！

（ “ ジレンマ ” ecosystem
“ 銀魂 ” 今期 ）

（ D “ ” いきものがかり
“ Bleach ” D20 ）

では、スタート!!

FILE 1 依頼

感電血盗難事件を解決してから、さらに1週間が経った今日の放課後……え？ 時間が飛び過ぎてる上にまた学園の描写をすつ飛ばしてるじゃねえか？ はい、返す言葉ありません……。まあ、それは置いて、フェイトと一護の2人は帰路についていた。

一護「悪いな、フェイト。こんな遅くまで瀬川達の勉強会に付き合わせちゃって……」

フェイト「ううん、平気だよ。それに私ものはほどじゃないけど誰かに何かを教えるのはそれなりに得意だから。」

実は放課後に瀬川達が一護に勉強を教えてくれるよう泣き付いてきたため、一護は仕方なくそれを受け入れた。すると1人バイトが休みで暇だったフェイトが手伝うと言い出してきたため、結局一護と

フェイトの2人で教えることになったのだ。ちなみに当麻は例のごとく補修、リクオは生徒会の会議だった。

フェイト「でもすっかり遅くなっちゃったね。」

一護「ああ、多分もう当麻達ももう帰ってるだろうな。」

現在時刻は午後7時半。普通の高校生ならば、もうとっくに家に帰っている時間である。

一護「まったく、あいつら人が親切に教えてやってるのをいいことに次から次へと聞いて来やがって……。」

フェイト「ふふ、でも3人共すごく明るくて面白かったよ。」

「一護」逆にそれしかあいつらには取り柄がねえ気がするけどな……。

「

フェイトの言葉に一護はややげんなりした様子でそう呟いた。そしてそんな中、フェイトは1人悩んでいた。

フェイト（やっぱり……聞いた方がいいのかな……）

それは感電血盗難事件の時の一護の活躍についてであった。藤山重工の隠された犯罪を見抜き解決に導いたその能力は明らかに普通ではなかった。フェイトはそのことをずっと、心のどこかで疑問に思っていたのだ。

フェイト（でももしこれが一護にとって触れて欲しくないことだったら……一護はきっと私のことを……）

だが簡単にそんなことを聞けるはずもなかった。人には誰しも語りたくないことの1つや2つあるものである。それをフェイトはよく理解していた……。

フェイト（……やっぱり止めた方がいいよね……）

そしてフェイトはそう判断を下して、一護に何か別のことを話そうとした。と、その時、

一護「……フェイト…そこにいる……」

フェイト「……一護?……」

突然一護が動かないようにという指示を聞いて、フェイトは思わず

一護の顔を見た。その表情はこの前の事件の時に見せたような真剣さを帯びていた。すると、

ズダダダダッ!!

後ろから猛スピードでこちらに向かってくる足音が聞こえ、

???「いーちーごー!!!!」

大声で一護を呼ぶ声が聞こえてきた。そして一護は身構え……

一護「ふんっ!!」

瞬時に体を反転させて真後ろに回し蹴りを放った。それは寸分狂わず一護達に向かってきた人物を捉え、

「???」「ぐほあっ!!?」

ズザザザザッ!!

思いっきりその人物を10メートル近く吹っ飛ばす。

フェイト「え!? え!?!」

あまりのことにフェイトは訳が分からず狼狽えてしまう。と、その時、

「???」「な、何をするんだ一護!? 俺の愛のタックルを回し蹴り

で返すとは、この親不孝者め!!」

一護「うるせえ!! いきなり後ろからそんなスピードでタックルされそうになったら誰だって拒絶するだろうが!! 大体危うくフエイトまで巻き添えを食らうところだったじゃねえか!!」

タックルしてきた人物 少し髭が濃く割りとガタイの良い中年の男が抗議してくると、一護はすかさずそう反論した。するとその男は一護の隣にいるフェイトに気づき、

???「なっ!?! い、一護!?! ま、まさかその女の子はお前の彼女か!?!」

そんなことを言ってきた。

フェイト「ふえっ／＼／＼!?!」

男の予想外の発言にフェイトは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「???」一護!! お前こんな立派な彼女がいるなら何故“お父さん”に報告をしないんだ!!」

一護「変な勘違いしてんじゃねえ!! こいつは俺のダチだ!! 第一なんであんなに報告しなきゃなんねえんだよ!! いい加減にしゃがれこのバカ“親父”!!」

男の暴走に一護はぶちギレる。と、ここでフェイトがある単語を聞いてキョトンとした表情になる。

フェイト「……お父さん……?」

そう目の前にいる男は自分のことを“お父さん”と言った。そして一護も目の前のことを“親父”と言った。

フェイト「じゃあ、この人って……」

と、その時、

???「まったく……相変わらずうるさい男だな、貴様は……」

???「まあ、そう言っつなよ。昔から一護がこんな感じなのはお前が良く知ってんだろ?」

一護とフェイトの前にさらに2人の人物が現れた。1人は短い黒髪

に凜々しい顔が特徴の少女、もう1人は真っ赤な髪を後ろで縛り、顔に刺青を施している不良のような青年だった。そしてその2人を見た一護は思わず目を見開いた。そして……

???「ルキア！ 恋次^{れんじ}！」

ルキア「久しぶりだな、一護。」

恋次「よう、一護。元気にしてたか？」

再会を果たしたのだった……。

とりあえず3人のことを話すために一護はフェイト、なのは、はやて、当麻、リクオを自分の部屋に招いた。そして3人の正体を説明し始めたのだが……

はやて「えっ！？ こ、この人が一護君の……」

なのは「お、お父さん!？」

目の前に座っている中年の男 黒崎一心が一護の父親であるということになのははやては驚きを隠しにできなかった。

一護「ああ、認めたくねえがこいつは正真正銘俺の親父だ。」

当麻「まあ、驚くのも当然だよな……」

一心「おい一護！？ 何故そこまで父さんを邪見に扱った！？
一体お父さんの何が嫌いだと言った！？」

一護「いや、あんたのそのウザさだよ……」

自覚がない親は基本子供に邪見に扱われるものである……。

ルキア「いい加減にしろ！まったく貴様らは……。ん、そういえば
まだ名を名乗っていなかったな。私の名は朽木ルキア。一護とはだ
いぶ前からの付き合いだ。それから……」

一護「俺の元居候だ。」

ルキアが何かを言おうとしたが、その前に一護がそう捕捉する。

ルキア「なっ！？　き、貴様！　それは言う必要はないだろ！！」

一護「うるせえ！　人んちの押し入れを勝手に自分の寢床にリフォームした奴が文句言うんじゃないぞ！！」

まあ、銀魂にも居ますよ。押し入れを寢床にしてる奴が……まあこの世界ではちゃんと自分の部屋を持ってますけどね。

恋次「俺は阿散井恋次だ。よろしく頼むぜ。」

恋次がなのは達に挨拶すると、

ルキア「まあこいつはバカで見た目不良に見えるが根は良い奴だからよろしくしてやってくれ。」

ルキアが少し毒の入った言葉を加えた。

恋次「おいルキア！ お前も何いらねえこと言ってるんだよ！？」

ルキア「たわけ！ 貴様のバカが引き起こした後始末をしている私の身にもなってみろ！ どれだけ骨が折れることだと思っているのだ！？」

恋次「うるせえ！ 今それは関係ねえだろうが！」

どついつ訳か完全な痴話喧嘩が始まりそうになっていたが、

一護「いい加減本題に入ろうぜ、ルキア、恋次……」

ここで一護が空気をガラツと変える。

ルキア「……ああ……」

恋次「……しゃあねえな……」

それを察したルキアと恋次も途端に真剣な表情になる。

一護「それじゃ……そろそろ話してくれねえか？ 親父……」

一護は目の前にいる自分の父親に真剣な眼差しを送る。

一護「あんたが何の用もなしにわざわざルキアと恋次の2人を連れて俺のところまで来ないだろ？……」

警察庁統括審議官のあんたが。」

なのは・フェイト・はやて「えっ！！！？？？？」

一護の口から出た言葉になのは達は思わず耳を疑った。

なのは「け、警察庁って……………」

フェイト「じゃあ一護のお父さんは……………」

はやて「警察の人かいな!？」

リクオ「一護のお父さんだけじゃないよ、はやて」

驚いているはやて達にリクオが割って入った。

リクオ「朽木さんと阿散井君も警察庁の人だよ。」

なのは「ふえ！？ ルキアちゃんと恋次君も！？」

なのはは自分とほとんど年も変わらなそうな2人が警察の人間であることに驚く。

当麻「ちなみに一護の親父さんは警察庁のナンバー3、朽木と阿散井の2人もそれなりに上の立場だぞ。」

はやて「……ルキアちゃんと恋次君はまだいいとしても、一護君のお父さんがそんな偉い立場やなんて……」

「一心」……皆俺のことどんな風に思ってるわけ……」

ただのバカ親父としか思ってますんよ、はい……。

フエイト「えっと……それで一心さん達はどうしてここに来たんですか？　一護に用があるんですよね？」

ルキア「それは……」

フエイトが気を取り直して尋ねるとルキアが戸惑い始めた。すると、

恋次「上からの命令だ、一護。今すぐ警察庁に戻れ」

一護「っ！！？？」

フェイト「……え……？」

恋次の口から出た言葉に一護は驚き、フェイトは思わずキョトンとした。すると、

はやて「ちょ、ちょう待ってや！？ 警察庁に戻ってどういうことや！？ 一護君はただの高校生やろ！？」

はやてが矢継ぎ早にそう声を上げた。それもそうである。いきなり目の前の高校生に対して“警察庁に戻れ”と言えば事情を知らない人間がそういうリアクションを取るのも当然のことなのである……
…そう、事情を知らない人間であれば……

リクオ「はやて、実は一護も元は警察庁の人間だったんだ」

なのは「え………？」

リクオの口から出た思わぬ事実になのはは言葉を失う。

フェイト「本当なの？ 一護」

フェイトは信じられないと言った表情で一護にそう尋ねると、

一護「……ああ」

一護はそれを肯定した。そしてその瞬間、フェイトの頭の中にあつた疑問が消えた。何故一護が藤山重工の事件の際にあんなに奥の深い事件の真相を見抜けたのか……答えは実に簡単である。一護は過去にそういったことを幾つも経験してきたからだ。

一護「悪いな。隠してるつもりはなかったんだけどよ、こっぴつこつとを言う決心があんま着かなくなてな……」

なのは「あ、ううん」

はやて「別に気にしておらんよ、一護君」

一護が申し訳なさそうに言うと、なのはとはやては一護の表情を見てそう言葉を返した。

当麻「でも何で一護を警察庁に戻すんだよ？ 上の連中は一護が警察を辞めるのを認めたんじゃないかったのか？」

ルキア「いやすまん。恋次の言い方には少し語弊があったな。一護を警察庁に戻すのはあくまで一時的な措置なのだ」

なのは「？　どういうこと？」

ルキアの言葉になのはは首を傾げる。すると、

一心「一護、上はこの前の事件でのお前の功績を理由にしてお前にある事件の捜査を頼みたいらしい」

一護「ある事件……？」

当麻「なんすか？　そのある事件って……」

一心の説明に当麻がそう尋ねる。

一心「それが俺にもわからねんだ。依頼してきた奴は本人にしか話せねえと抜かしてたが本当の理由はわからねえ……………」

恋次「しかも俺達には別の仕事を与えてこの件に関わらせないようにしてやがる。間違いなく上は一護を何かに利用するつもりなんだよ……………」

恋次は拳を握りしめながら気に食わなそうにそう言った。と、ここで、

ルキア「……………すまない、一護……………」

一護「……ルキア……？」

突然ルキアが一護に対して謝ってきた。

ルキア「この前貴様には平和を噛み締めているなどと大口を叩いておきながら、一時的とはいえ結局お前をまたこちらの世界に引き戻すようなことになってしまった……………」

そう口にするルキアの表情は悔しさと申し訳なさで一杯だった。するとそれを聞いた一護は、

一護「謝るなよ、ルキア……今回のことは俺が自分で招いたんだ。お前のせいなんかじゃねえよ……………」

一護は俯いているルキアにそう声を掛けると、一心の方を向いた。

そして、

一護「その話引き受けるぜ、親父……」

そう言い放った。

一心「……いいのか……一護……?」

一心は確かめるようにそう尋ねる。

一護「心のどこかでまたそっちの世界に戻ることになるんじゃないかねえかとは思ってたんだ……それに何かの事件の捜査には変わりねえんだろ? なら俺は利用されようが構わねえよ。その事件を解決できればな……」

フェイト「っ!?!」

その時フェイトは、まるで一護がどこか手の届かない遠くへ行ってしまうような感じを覚えた。

一心「……そうか……」

それを聞いた一心は立ち上がり、

一心「朽木、阿散井、帰るぞ」

恋次「お、おい! いいのかよ!?!」

「心「構わねえよ。どうせ何をすべきかくらい一護はわかってるだろっしな……」

そう言って部屋から出ていこうとした。と、その時、

フェイト「あー!」

フェイトが一心を呼び止めた。

「心」「…どうしたんだ？ フェイトちゃん……」

「心は少し驚いた様子でそう尋ねた。するとフェイトは、

フェイト「……私も一護と一緒にいきます……」

意を決してそう言い放った。

なのは「ええ!？」

はやて「フェ、フェイトちゃん!？」

その言葉になのはとはやては驚く。だが一番驚いたのは、

一護「フェイト!？ お前一体何考えてんだよ!？」

一護だっただ……。。

フェイト「私も行くよ、一護」

一護「何だよ！？ こいつは俺の問題だ！！ お前には関係ねえだろうが！？」

一護は少し声を荒げてそう言った。すると、

フェイト「私も一護の力になりたいんだよ！！」

一護「っ！！」

いつもの穏やかなフェイトとは違うはつきりとした決意のある声に
一護はたじろいだ。そしてそれを聞いて、

ルキア「諦めろ、一護……この者はおそらく意地でもお前の後を追
っていくつもりだ……ならばいつそ連れていった方がよからう」

一護「ル、ルキア!？」

ルキアが一護にそう言つと一護は驚く。さらに、

一心「……なら一護のことを頼むわ、フェイトちゃん……」

一護「お、親父!？」

一心までもがフェイトの方にまわっていた。それを聞いた一護はもう一度フェイトの顔を見る。その表情は不思議とどこか頑固そうに見えた。そして……

一護「……はあ……もう何も言わねえよ……」

フェイト「っ！　ありがとう！　一護！」

それを聞いたフェイトは思わず一護に抱きついた。

一護「お、おい！　お前人前で抱きつく奴があるかよ！？」

フェイト「ふえ……あ、あう／＼／＼／……」

フェイトは一護にそう指摘されると、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一護「そういう訳だから悪いな、当麻、リクオ。明日からしばらくここを離れるぜ……」

当麻「ああ、わかった」

リクオ「頑張ってね、一護」

フェイト「なのはとはやてもゴメン。私の我が儘で2人に迷惑かけちゃって……」

なのは「ううん、フェイトちゃんが決めたことなんだから私達は応援するよ!」

はやて「そうやで、フェイトちゃん。私らは親友なんやからな」

一護とフェイトが申し訳なさそうにそう言っが、当麻やなのは、リクオ、はやては笑顔でそう返した。そしてそんな光景を一心とルキア、恋次は笑みを浮かべつつその場を去ろうとするが……

一護「親父、ちょっといいか？」

一護が呼び止めた。

「心」「ん？　なんだ？」

「護」……俺に捜査を頼んできたのは……“あの人”か？」

「心」……ああ……そうだ……」

「護の再び真剣な質問に「心も真面目な様子でそう答えた。

「護」そうか……じゃあな、親父……」

「心」……ああ……迷惑掛けてすまないな、　「護」……」

そう言つて一心達は今度こそその場を去つていった……。

翌日

東京都千代田区霞が関……ここには政府の庁舎が至るところに立ち並んでおり法務省や外務省といった中央省庁も全て集結している。まさに“日本行政の中心地”と呼ぶに相応しい場所だ。そして、そんな政府のお膝元と言つても過言ではないこの場所に、2人の高校生姿があつた。

一護「ここにこうして戻つてくることになるなんてな……」

フェイト「ここが霞が関……」

フェイトは初めて霞が関に来たことにやや緊張している。フェイト達のいた地球の日本にも当然霞が関は存在しており、やはり同様に日本政府の中心地だ。新聞やニュースではよく耳にする単語ではあるが、実際には行ったことはなかった。まあ、霞が関に用のある未成年者など殆どいないだろうが……。

一護「にしても、こいつに袖を通したのも久しぶりだからどうも落ち着かねえ。昔の俺もよくこんなもん着てたな……」

今の一護は白のワイシャツに黒いネクタイに黒のスーツという格好だ。そして久しぶりに着たスーツの堅苦しさに一護はそう愚痴を溢した。

フェイト「でも淒く似合ってるよ、一護」

一護「そうか？ お前の方がずっと似合ってる気がするぜ」

フェイト「あ、ありがとう／＼／＼……」

一護の遠回しな褒め言葉にフェイトは顔を赤くして礼を言う。今のフェイトは白のワイシャツにグレーのスーツという一般的な格好なのだが、彼女の容姿端麗さと長くて綺麗な金色の髪のおかげで周りの男達からの視線が半端ではない。まあ対する一護もそのルックスとオレンジ色の髪が女性達の目を引いているのだが……。

一護「とりあえず移動するか。親父によるとお前のことも話は通してあるらしいからな」

フェイト「あ、そうなんだ。でもゴメンね、一護……私が望んだことだけど、あんなに強引に頼んだりとかして……」

フェイトは申し訳なさそうにそう言った。やはり自分の我が儘で一護に迷惑を掛けてしまってることにはかなり後ろめたさを感じているのだ。すると、

一護「……もう気にすんなよ」

フェイト「え？ あ／／／／……」

一護はフェイトの頭を優しく撫でた。そして、

フェイト「お前の“力になりたい”って気持ちはずいぶん嬉しかったからさ。だから別にお前が謝る必要なんかねえよ。そんなことよりさつさとやることを片付けて学園都市に帰ろうぜ。な？」

フェイト「一護……うん！そうだね！」

一護が穏やかな表情でそう言うと、フェイトはそれに笑顔で答えたのだった……。

警察庁 日本の行政機関の中でもかなり特殊なこの機関は警察組織全体を統括し日本の治安を守る皆とも言える場所だ。一護とフェイトは警察庁に入るとすぐ受付の職員に用件を伝えると、

職員 「かしこまりました。少々お待ちください。」

そう言って電話を取り、どこかに取り次ぎ始めた。そしてしばらく

待っているとフェイトがふと一護に尋ね始める。

フェイト「ねえ、一護。一護は何年前に警察庁に入ったの？」

一護「ん？ 正式に入ったのは中3の途中だからだいたい2年くらい前だな」

フェイト「？ 正式ってどういうこと？」

一護「ああ、なんていうか、協力自体は中1の頃からずっとやってたんだ。で、中3の時に正式に入ったんだよ。まあ数ヶ月で高校に入るために辞めたけどな……」

そう口にする一護の表情を見たフェイトは何かを感じた。と、その時、

「???」「黒崎一護君とそのお連れの方ですね?」

40歳前後の男が一護とフェイトにそう尋ねてきた。

一護「あんたは?」

「???」「長官官房の高野といいます。準備ができましたので、どうぞこちらへ」

一護「ああ。行くぞ、フェイト」

フェイト「え、あ、うん!」

一護とフェイトは高野と名乗る男に付いていき、やがて最上階の二つ下の階にある部屋の前に到着した。

コンコンッ

「???」「はい」

高野「官房長、黒崎一護君とそのお連れの方がいらっしゃいました」

「???」「分かりました。どうぞ入れてください」

中から初老の男性の声が聞こえ、入室の許可を出した。

ガチャッ

高野「どうぞ、お入りください」

高野は一護達に中に入るよう促すと、2人は中へと入る。するとそこにはズボンのポケットに両手を突っ込んで背を向けている男がいた。そしてドアが閉められると同時に男は振り返り、一護達の前までやってくる。

???「やつ、随分久しぶりだね、一護君」

一護「ああ、あんたもな、小野田さん……」

一護とその男は知り合いらしくお互いにそう挨拶を交わした。

小野田「やっぱり2年は大きいね。見た目は随分と変わったようだ」

一護「そういうあんたは2年経ってもちっとも変わってねえな」

小野田「君は僕をいくつだと思ってるのかしら？　僕もう小学生の孫がいるんだけど」

小野田と名乗ったその男は見た目に似合わぬしゃべり方でそう一護と話す。すると、

小野田「あ、それでこの子が？」

一護「ああ、親父から聞いてると思うがクラスメイトのフェイトだ」

フェイト「え、えと、初めまして。フェイト・ハラウンとい
います」

小野田「初めまして。小野田です。まあ僕のことは一護君のお父さ
んの上司とも思っておいてください」

フェイトはかなり緊張しながら自己紹介をし、それに対して小野田
は軽くそう返すと、

小野田「でも驚いたね。君がこんな綺麗な外人の彼女さんと一緒に
住んでいるなんて思わなかったよ」

フエイト「ふえ／／／／／！？」

小野田の突拍子もない言葉にフエイトは顔を真っ赤にして俯く。

一護「おい！？　んなこと誰から聞いたんだよ！？　小野田さん！」

小野田「ん？　もちろん君のお父さんからだけど、違った？」

一護「こいつは彼女じゃねえし一緒に住んでるのは色々と事情があるからだ！！」つか何いらねえことまで言ってたあのクソ親父！？」

一護がそつぶちギしていると、

小野田「あら、そう。でも君のお父さん、僕を30分くらい引き止めてずっとその話をしてたけど」

小野田がそう付け加えた。

一護「……あのクソ親父マジでぶっ飛ばす……！」

それを聞いた一護は父親に対する殺意を強める。と、ここで、

小野田「まあこのまま立ち話もなんだから一度座らない？　そろそろ僕の依頼のことも話したいし」

一護「あ、ああ、そうだな……」

小野田「君もどうぞ座って」

フェイト「あ、はい！」

小野田にそう促され一護とフェイトは横並びに座り、小野田は一護の正面の席に向かい合う形で座った。

一護「それで、あんたの捜査して欲しい事件ってなんだよ……親父にまで黙っておく必要はねえと思うけどな……」

一護は真剣な表情に戻ってそう尋ねると、

小野田「ああ、それ実は少し違ってね、君達にはある部署に協力して欲しいんだよ」

小野田はそう答えた。

一護「は……？」

フェイト「ある部署と協力……？」

一護とフェイトは小野田の言葉の意味がわからずそう呟く。すると、

小野田「一護君、一つ聞いてもいいかしら？」

小野田は一護にこう質問してきた。

小野田「警視庁特命係”って知ってる?”」

END

FILE1 依頼（後書き）

どうも黒狼です！

というわけで長編は何とあの“相棒”とのクロスです！！ 今ちよ
うどシリーズ10がやってる真つ最中で私もかなりの相棒ファンで
あるためクロスさせました！ 相棒に関しては登場人物紹介をちゃ
んとするつもりです！

そして今回の驚きは一護他ルキアや恋次、さらに一護の親父までも
が警察庁の人間という凄まじい設定ですね。もうお分かりの方も多
いと思うので暴露すると、“護廷十三隊”はこの世界では警察です。
“この設定どうなの？”というふうに疑問を持つ方も多いかもしれ
ませんが、何とぞご容赦願います……。

なんか一護が一護じゃなくなってきたりしまったり作品が学園もの
じゃなくなったりしてきてしまってますが、温かい目で見してくれ
ると幸いです！！

次回からは相棒の主要キャラが続々登場します!!

ではまた!!

FILE2 初対面と再会、そして捜査 (前書き)

相棒主要キャストが続々登場します!!

また最後には奴らも動きだします!!

ではどうぞ!!

FILE2 初対面と再会、そして捜査

警視庁 東京都の警察を管轄する警察本部であり、都内にある102もの数の警察署を統括している。また都内にある立法府や行政機関の警備など国の重要拠点とも言える場所の治安も守っていることから、他の地方警察とは別格の扱いにされている。そのため警察庁が警察を指揮する機関であれば、警視庁は警察を実行する最大の機関と言っても過言ではない。そんな首都の治安を守る機関の建物の中を一護とフェイトは歩いていた。

一護「まさか警視庁に行くことになるなんてな……」

フェイト「うん、それに小野田さんの依頼の内容もいまいちよくわからなかったしね……」

2人は戸惑いながらそう言った。そもそも何故こうなったのか？それは少し前、小野田からの依頼の内容の説明が発端である……。

1時間前

小野田「警視庁特命係”って知ってる？」

小野田は一護にそう質問してきた。

一護「……確か“警視庁の陸の孤島”とかって呼ばれてる窓際部署のことだよな？ だいぶ昔に親父から一度だけ聞いたことがある……」

小野田「そう、人材の墓場と呼ばれ、そこに飛ばされた警察官は悉く辞めていく。そういう部署だったの」

フエイト「？ “ だった ” ……？」

小野田の言葉が過去形であることにフエイトは気付きそう口にする。

小野田「特命係は捜査権限を無視して勝手に捜査をし出すようになってきたの。そして今では特命の関わった事件の犯人検挙率は100%という確かな実績までついてきた」

フエイト「ひゃ、100%!？」

「護」そんなことが可能なのかよ!？」

一護とフェイトは驚きを隠せない。それもそのはずである。検挙率100%という数字は現実にはあり得ない。そういうのは本来アニメやドラマでの世界のことなのだ。

小野田「ところがそれを1人の男が可能にしちゃってるの……そいつは実は僕の古い友人でね。かなりの変り者で組織人としては大きな欠陥があるけど、捜査能力は恐らく日本……いや、世界最高とさえ言えるほどの男なんだよ」

フェイト「そ、そんな人がいるなんて……」

小野田の確信に満ち溢れた言葉にフェイトは思わずそう呟く。すると、

一護「それで小野田さん、何であんたは俺にその特命係への協力さ

せよつとするんだよ？ 何か理由があるんじゃないのか？」

一護は鋭い眼差しでそう尋ねた。それに対して……

小野田「じゃあ単刀直入に言うよ。君に特命係に対する意見と感想が聞きたいの。だから特命に行って一緒に何か事件を解決してきてちょうだい」

小野田はそう答えた。

一護「？ 俺に？」

フェイト「そ、それって一体どういっ……」

一護とフェイトは小野田の言葉を聞いて思わず戸惑う。

小野田「そのままの意味だよ。特命係は必ず何か事件を嗅ぎつけてそれを捜査し始める。だから一緒に捜査する中で、藤山重工の犯罪を見抜いた君に特命係を見極めてもらいたいんだ」

小野田は微かに笑みを浮かべながらそう言った。すると、

一護「……それだけが理由なのか？ 小野田さん……」

一護はさらに鋭い視線でそう尋ねる。

小野田「僕結構嘘をつくのは苦手なんだよ」

それに対して小野田は一切動じることなくそう答えた。そしてしばらく沈黙が続き辺りが緊張感を漂わせ始めると……

一護「……やっぱあんたにはかなわねえな、全然あんたの本音が見えてこねえ……」

一護が苦笑いを浮かべながら口を開いた。

小野田「あら、僕さっき嘘つくのは苦手って言ったのに」

それにも小野田は飄々と返した。

一護「まあ、あんたがそこまで言う人が一体どんな奴なのか興味も

あるし、俺は利用されようが何だろうが事件を解決しに来たただけだから……フェイトもそれでいいか？」

フェイト「え？ あ、うん！ 一護がそう言うなら……」

先ほどまでの緊迫した空気に圧倒されていたフェイトは慌ててそう返事をした。

小野田「そう、なら今日から早速行ってもらうけどいい？」

一護「それは構わねえが……向こうには話通してあるのかよ？」

一護がもつともなことを尋ねる。

小野田「それは大丈夫。特命係はいつでも暇だから、話を通す必要なんてない。というより、あいつは多分そんなこと気にしないだろうしね」

フェイト「ひ、暇……ですか……」

暇な部署なんかがあっていいのだろうかとフェイトは無意識に思った。さすがに真面目な性格をしているだけのことはある。

小野田「あ、あとこれ渡しとくよ」

ここで小野田は思い出したように懷から何かを取り出して一護に渡した。

一護「っ！　そういやまだ籍は残ってたんだっとな……」

それは警察手帳だった…。

フェイト「それって……ひょっとして一護の？」

一護「ん？　ああ、まあな……」

一護は懐かしげに警察手帳を手にとって、それを自分の懐のポケットにしまった。

小野田「警視庁の方には君のことについては話しがいつてるはずだから心配しないで。それと……フェイトさんでよかったかしら？　君は民間からの特別協力者として話を通しておくから」

フェイト「あっ！　ありがとうございます！」

小野田の配慮にフェイトはかしこまって礼を言う。と、こころで、

一護「俺達はそろそろ行くぜ、小野田さん」

一護がそう言いながら席を立った。

小野田「それじゃあ宜しく、あ……」

一護「まだ何かあんのかよ……」

一護がげんなりした様子でそう尋ねると、

小野田「言い忘れてたけど、今特命係には君の知り合いが配属されてるから仲良くやってちょうだい」

小野田はそう言ったのだった……………。

回想終了

フェイト「でも一体どんな人達なのかな？　その特命係の人達って……」

一護「さあな、しかも1人は俺の知り合いらしいし……まあ、実際に会ってみればわかるだろう？」

一護は軽くそう言った。すると、

フェイト「でもこっつて凄く私が勤めてた場所に雰囲気似てるなあ……」

一護「そっぴやフェイトは向こうの世界では法律関係専門の捜査をしてたんだよな？　それも結構エリートなの」

フエイト「わ、私は別にエリートなんかじゃなかったよ！　まだまだ執務官としては全然未熟だったし……。」

フエイトは慌てた様子でそう否定する。

一護「けど藤山重工の時のお前結構別人みたいだったぞ。質問もかなり鋭いところを突いてたしな」

フエイト「そ、そうかな……」

そんな感じで2人は話していると、

一護「お、ここだな」

受付で聞いた特命係のある場所に着いた。しかし……

フェイト「？ 組織犯罪対策5課？」

入り口のプレートにはそう書かれていた。

一護「おいおい、受付の人間違えたのかよ……」

一護は頭をかきながら困った様子でそう呟く。と、そこに、

「……？」「おい、お前らそこで何してる……？」

フェイト「ふえっ!？」

突然後ろから声を掛けられフェイトは思わずビクッとなった。そして2人が後ろを振り返ると、そこには背の低い白髪混じりの中年の男と同じくらいの年で大柄の男がいた。

???「そんなところに突っ立ってたら邪魔だろ。一体何の用だ？」

大柄な男が一護とフェイトの顔を見ながらそう尋ねる。

一護「あ、ああ、実は俺達特命係に用があるんだけど、何処にあるか知らないか？」

???「? 特命に?」

それを聞いた男2人は顔を見合せると、

「???」ならここであつてゐる。ついてこい」

小柄な男がそう言うと、男達は組対課の部屋の中に入つていった。一護とフェイト達もそれについていくと、部屋の奥にドアのないもう一つの部屋があつた。そしてその部屋の入り口のプレートには、

“ 警視庁特命係 ”

と、書かれていた。

???「失礼します」

小柄な男が挨拶をしてその部屋に入ると、

???「ん？　大木に小松じゃねえか？」

そこには髪の毛の薄い黒ぶちメガネの男が立ちながらコーヒーを飲んでいた。

???「課長……またコーヒー勝手に飲んでるんすか……」

小柄な男　　大木長十郎が目の前の男を見てやや呆れながらそう言う。

「???」仕方ないじゃない。ここのコーヒーが凄く美味いんだからで、どうしたんだよ？」

「???」この2人が特命に用があるらしいんで、応対して下さい」

メガネの男がそう尋ねると大柄な男　小松真琴が一護とフェイトを指しながらそう答えた。

一護「あんたが特命係……って訳じゃなさそうだな。課長って言われてるし。ひょっとしてあんた隣の組対5課の……」

「???」お、おお、組対5課の課長の角田だ」

一護にそう言うとき角田は一護の言わんとしていることに気付きそう答えた。ちなみに“組織犯罪対策部”とは主に暴力団や銃器、薬物に絡んだ事件を担当する部署である。

角田「特命に用があるって言ってたけど、生憎2人共丁度出払っちゃっててさ。しばらく帰って来ないと思うよ」

フェイト「？ どちらに行かれたんですか？」

角田の言葉を聞いたフェイトがそう尋ねる。

角田「ん？ いやさっき殺人事件が起きたって聞いて2人共現場に向かったやつたんだよ」

それを聞いた一護とフェイトは顔を見合わせると、

一護「その殺人現場ってどこだ？」

角田「ん？　確か白金台だったはずだけど……」

角田が首を傾げながらそう答える。すると、

一護「そうか。ありがとな、角田さん。行くぞ、フェイト」

フェイト「え！？　い、一護！？　え、えっと、ありがとござい
ました！」

一護は角田に礼を言って部屋を出ていき、フェイトも慌ててそれに

ついていった。と、ここで、

大木「課長、さっきあの2人が飛び出して行きましたけど、何の用だったんすか？」

大木と小松が部屋を出ていった一護とフェイトを見て角田に尋ねる。

角田「さあ？ にしてもあんな美女と野獣みたいなカップルが特命を訪れてくるとはねえ……」

角田はその質問にそう答えた。美女と野獣という例えはどうかと思うが……。

小松「そんなことより課長もいい加減コーヒー飲んでないで仕事してくださいよ！」

角田「わ、わかってるよ……」

小松にそう言われた角田は渋々特命係の部屋を出ていったのだった……。

白金台　ここは“シロガネーゼ”で有名な都内でも有数の高級住宅街である。ちなみに豆知識として、この地名の由来となっているのは白金、すなわち“プラチナ”ではなく、銀しろかねの方である。それゆえ読み方も“しろかねだい”ではなく“しろかねだい”と読むのが正しい。

そしてそんな高級住宅街のとある一件の家の中には大勢の警察官達があちこち移動して現場検証を行っていた。そしてそのリビング

には仰向けになっている1人の女性の死体があった。

???「被害者はこの家の住人で吉野祥子。32歳。ペンネームは“水元祥子”だそうです」

そして1人の警察官がその女性の身元について報告した。彼の名は芹沢慶二。警視庁刑事部捜査一課の刑事である。見た目はかなり頼りなさそうな男である。

???「水元祥子? どうかで聞いたことのある名前だな……」

そしてもう1人の男が被害者の名前を聞いてそう呟く。この男の名は伊丹憲一。警視庁刑事部捜査一課の刑事で芹沢の先輩でもある。見た目は芹沢とは正反対でかなりイカつく、一護よりも目付きが悪い……。

芹沢「ええ、人気女流作家ですよ……」

すると、

???「小説界は実に偉大な作家を失ってしまいました……」

2人の近くで鑑識作業をしていた男が虚しそうに呟く。彼の名は米沢守。警視庁刑事部所属の鑑識員で、ややふくよかな体型にメガネを掛けているのが特徴である。

伊丹「いきなり喋るなよ……」

米沢「人を幽霊みたいに扱わないで欲しいのですが……」

伊丹が米沢の突然の呟きにそう言つと、米沢は心外そんな表情で返した。と、その時、

「……うおお……」

「……君もいい加減死体には慣れてもらいたいものですねえ……」

芹沢「ん？ おわっ！？」

後ろから声が聞こえてきたため芹沢が後ろを振り向くと、そこには死体を見て吐き気を催している男とそれにやや呆れている男がいた。1人はメガネを掛けグレーのスーツを着こなしている50代半ばの男、もう1人は紫のワイシャツの上に黒のスーツを羽織っている40前後の男がいた。メガネを掛けた男は警視庁特命係係長の杉下右京。もう1人の黒のスーツの男はその部下の神戸尊たけるである。と、ここで、

伊丹「特命係の杉下警部と神戸警部補がどうしてもこちらにいらっしやるのでしょうか？」

2人に気付いた伊丹が睨み付けながら疎ましそうに言う。すると、

米沢「2人は私がお呼びしましたが、何か？」

伊丹「…何開き直ってんだよ……」

米沢がシャーシャーとした態度でそう言うと、伊丹はさらに不機嫌な様子になってそう言った。

杉下「それで米沢さん」

米沢「ああ、はい、遺体には左手首を鋭利な刃物で切られた跡がありました。他に外傷はありません」

神戸「ん？ それじゃあ自殺ですか？」

米沢「いえ、凶器と思われるこちらのキッチンナイフ、この家の物なんです。指紋が一切検出されませんでした。また床には血が大量に流れていたはずですが綺麗に拭き取られています。他殺と見て間違いないでしょう」

そんな中杉下は全く場の空気を見殺して米沢に遺体の状況を探ね、米沢も伊丹を完全無視して杉下達にそう説明した。と、そこへ、

芹沢「先輩！ 第一発見者の被害者のご主人を連れてきました！」

「???」ど、どうも。吉野宗谷です……」

芹沢が1人の男を連れてやってきた。その男 吉野宗谷は少々おどとした様子で挨拶した。

伊丹「早速ですがご主人、こちらの棚の中で何か無くなっている物はありませんか？」

伊丹がリビングにある大きな棚の中を見ながらそう尋ねた。すると宗谷はしばらく棚の中をじっと見て……

宗谷「あっ！ ここにあったはずの妻の原稿とトロフィーが無くなっています！」

伊丹「原稿とトロフィー？」

宗谷「え、ええ！ 妻の今までの作品の原稿と受賞したトロフィーがここにあったはずなんです！」

宗谷は驚いた様子でそう話す。

伊丹「他に何か無くなっているものは？」

宗谷「あ、い、いえ……」

芹沢「現金やカードは一切手付かずでした」

伊丹「ということは、物取りの犯行じゃなさそうだな……それじゃあ、今度はご主人が奥さんを発見するまでの行動についてお話願えますか？」

伊丹はそう判断すると、今度は警察手帳とペンを持ちながらそう尋ねた。

宗谷「えっと、昨日は夜の3時過ぎまで一人で残業をして、赤坂の“樽”というバーで仕事仲間の女性と飲んでいました」

伊丹「では、それを証明できる物はありませんか？」

宗谷「証明……あっ！ 確か店に入ってすぐ、妻の携帯からメールが届きました！」

芹沢「あっ！」

宗谷の言葉を聞いた芹沢が突然声をあげると、

芹沢「これ、ちょっといいですか？」

米沢「え、ええ。構いませんが」

米沢が手に持っていたものを拝借する。

芹沢「被害者の携帯電話です」

芹沢が伊丹にそう言うと、携帯を操作してメールの履歴を確認する。

芹沢「ああ、ありました。ええと、“先に寝てる。起こさなくていいから”。受信したのは3時10分ですね」

宗谷「……そう書いてあったので、そのまま飲み続けて……」

伊丹「そして明け方の5時に奥さんを発見したんですね？」

宗谷「ええ……」

伊丹「……わかりました。ご協力ありがとうございます」

伊丹は宗谷に対してそう礼を述べた。と、ここで、

伊丹「っ！ 特命係のお二人は捜査権が無いんですからお引き取り願いませんかね？」

伊丹がいつの間にか杉下と神戸が近くで盗み聞きをしていたことに気づき、睨み付けながらそう言う。

杉下「どうぞお構い無く。我々はそちらの邪魔になるようなことは致しませんので」

伊丹「いやですから！ ここにいる時点ですでに邪魔になってるんですよ！」

だが杉下は全く動じることなくそう言うと、伊丹はやや声を大きくしてそう文句を言った。と、その時、

???「ひっ！」

突如女の声が聞こえ伊丹や杉下達が顔を向けると、金色の長い髪が目を引くグレーのスーツを着た少女が遺体を見て少し怯えていた。

伊丹「？ 何だあの女？」

芹沢「女っていうより女の子ですよ、先輩。にしても可愛い子だな」。しかも外国人みたいすよ」

芹沢がその少女の姿を見てそう声を上げる。確かにこのむさい男の刑事ばかりの空間においてはかなり少女の容姿は目立つ。周りにいる刑事達の目も心なしか少女に向かっているのは気のせいではないだろう。まあ、杉下と神戸に関しては純粹に目の前の少女が殺人現場にいることに驚いているのだが……。

伊丹「バカ！ 何でここにあんな女がいるんだよ！？お前ちょっと聞いてこい！」

伊丹は芹沢の頭を叩きつつそう命令した。実は伊丹、顔に似合わず女性経験が限りなく無いに等しいため、目の前にいる少女のような美女に話し掛けるのは全くダメなのである。

芹沢「えっ！？ あ、は、はい、わかりました……」

それに対して芹沢は渋々承諾すると、かなり緊張したような様子で近づいていく。やはり彼女の容姿がそうさせるのである。ちなみに、芹沢には長い付き合いの彼女がいますよ……。

芹沢「ゴホンッ……あの、ちょっといいかな？」

「???」「ふえっ！？ あ、はい……」

咳払いをしつつ芹沢が声をかけると、少女は少し声を上げて驚く。

芹沢「君どうやってここに入ってきたの？　ここ事件現場だから一般の人は入れないはずなんだけど」

???「あ、あの、私は……」

芹沢がそう尋ねると少女は口ごもってかなり萎縮してしまった。と、そこへ、

???「お、いたいた。何してんだよ、フェイト」

フェイト「あっ！ 一護！」

オレンジの髪が一段と目立つ背の高い男がやってきてその少女
フェイトを呼ぶと、近くにいた芹沢に気付き、

「???」あんたひょっとして捜査一課の人か？」

芹沢「え、あ、そ、そうだけど……」

一護「悪いな。なんかこいつが迷惑かけちゃったみたいで」

その男 黒崎一護は苦笑いを浮かべつつ芹沢に謝った。すると、

伊丹「おい、ちょっといいか……」

伊丹が一護に近付いて話し掛ける。その顔はかなり不機嫌そうだ……。

一護「？ あんたも捜査一課の人か？ 悪いんだけど一つ聞きたいことが……」

伊丹「その前に……お前らどうやってここに入ってきた……ここは殺人現場だ！！ 何でそんなガキを連れてここにいやがる！！ おめえは誰だ！！」

一護「えっ！？ い、いや、俺は……」

さすがの一護もいきなり伊丹が怒鳴りつけてきたことにたじろぎ、

フェイトに到っては伊丹の形相と剣幕に怯えて一護の腕にすがりついている。と、その時、

神戸「やめてください、伊丹刑事」

伊丹「ああ！？ 特命係は引っ込んでろ！！ 俺はこういう勝手に現場に入ってくるような非常識な奴が大嫌いなんだよ！！」

神戸が伊丹の肩を掴んでやめさせようとするが、伊丹はそれに対して暴言を吐き一護を睨み付ける。ちなみに伊丹の階級は巡査部長、神戸の階級は警部補であるため、階級的には神戸の方が上なのだが……。

神戸「じゃあ言うておきますが、彼は警察庁の人間ですよ」

伊丹「……………は……………？」

芹沢「け、警察庁……？」

神戸の言葉を聞いた伊丹と芹沢は呆氣にとられたような表情になる。というか周りにいた米沢や他の警察官達も思わず作業を止めて神戸を見ている。そして、

神戸「彼は黒崎一護。警察庁の黒崎一心統括審議官の息子で、警察庁警備局の特別理事官です。ちなみに階級は警視正。あなた方の上司である中園参事官と同じ階級です」

神戸は伊丹と芹沢に一護の正体を説明した。

伊丹「……特別理事官……？」

芹沢「けけ、警視正！！！！？？？」

その瞬間、それを聞いた現場の警察官達は作業を放って一斉に一護に向かって敬礼した。まあ、あまりの事実には呆然としている伊丹と驚きはあっても冷静でいる杉下は敬礼をしていないが……。ちなみに警視正がどのくらい偉いのかを“リリカルなのは”の世界で表すと、多分strickers時の某フェイトの義兄並み、すなわち少将くらいだと思います……。と、ここで、

一護「か、神戸さん！？」

一護は周りの様子を無視して目の前の神戸に思わず驚きの声を上げた。

神戸「久しぶりだね、一護君。まさかこんなところで君と再会するなんて」

それに対して神戸は軽くそう返す。

一護「何であんたがここにいるんだよ!？」

神戸「ん？ いやあ、実は色々あって今警視庁の特命係っていう陸の孤島に左遷されっちゃってるんだよ、あはは…」

一護「っ!!」　じゃあ特命係にいる俺の知り合いつてあんたのことだったのか!？」

神戸が苦笑いしながらそう答えると、一護は驚きをあらわにした。

神戸「ていつか君こそ何でここに?」

一護「あ、いや、実は俺達特命係に用があつて来たんだけど……」

神戸「えっ!？」

神戸もまた一護の思わぬ言葉に驚きをあらわにした。と、そこへ、

杉下「お話し中のところすみませんが、ちょっとよろしいですか？」

杉下が一護の言葉を聞いて割って入る。

一護「？ あんたは？」

杉下「申し遅れました。警視庁特命係の杉下と言います。」

一護が尋ねると、杉下はそう丁寧に挨拶する。すると、

一護「っ！ ひょっとしてあんたが小野田さんの言ってた……」

杉下「！ おやおや、まさかあなた方がここに来たのは官房長の……」

一護の口から小野田の名前が出たことにさすがの杉下も驚く。

一護「あ、ああ、小野田さんからの依頼なんだ。あ、自己紹介がまだだったな。俺は黒崎一護。よろしくな、杉下さん。あ、それでこ

「つちが……」

フェイト「は、初めまして、フェイト・ハラオウンです。よろしくお願いします」

フェイトは畏まった様子で杉下と神戸に自己紹介をする。

一護「フェイトは俺の友人で、民間からの特別協力者ってことになってるんだ」

神戸「へー、この子が君の友達ねえ……あ、僕は警視庁特命係の神戸尊。一護君とは……まあ一応昔の上司と部下の関係だよ。よろしくね」

フェイト「あ、はい」

と、いじで、

伊丹「お話し中のところよろしいでしょうか？ 黒崎警視正殿！」

一護「ん？ あ、ああ…」

伊丹が皮肉っぽく一護にそう話し掛けると、一護はやや苦笑いで返事をする。

伊丹「警視正は特命係に用が有りのようですね。それならばどうぞその2人を連れてって構いませんよ。その2人はここに居てもらわなくても結構ですので……！」

すると、

一護「ああ、それなんだけどさ、俺達もこの事件の捜査に加わってもいいか？」

伊丹「はあっ!？」

一護「警察庁の方からあんた達の上司にも話を通っているはずだから問題ないと思うんだけどよ」

一護は捜査に加わってもいいか伊丹に尋ねる。まあ、上司に話がいっている以上反対する理由は伊丹には無いので、

伊丹「わかりました。どうぞ自由に」

不機嫌そうに言って伊丹はその場を離れていき、

芹沢「え、えっと、じゃ、じゃあ、俺もこれで……」

芹沢も引きつった笑みを浮かべつつ一護に畏まりながらそそくさと伊丹の後を追っていった。

一護「はあ……じゃあ、こっちは勝手に捜査しようぜ。杉下さん」

杉下「？ よろしいのですか？ あなた方はともかく我々には捜査権限が無いはずですが……」

一護「いや、あんた達と捜査をしないと意味がねえんだよ……って言うってもわかんないだろうから、小野田さんからの依頼の内容を言

っておかないとな……」

一護はここで杉下と神戸に依頼の内容を話した。

杉下「なるほど。官房長は君たちにその用なことを頼んだのですか。いくら元警察の人間だからとはいえ、学校生活を楽しんでいる高校生を巻き込むのは感心しませんねえ……」

神戸「それにしても官房長はどうしてそんな依頼を君たちに？」

一護「それがわかれば苦労しねえよ」

一護はややげんなりした様子でそう言葉を漏らす。

フェイト「ま、まあ、考えてもしょうがないよ、一護」

杉下「ええ、その通りです。今はとりあえず捜査をしましょう」

フェイトがそう言うと、杉下もそれに賛同し捜査を始める。

）
風呂場

杉下「被害者の夫、吉野宗谷氏は自らが立ち上げた出版社“白秋社”を一代で大きくした出版界の寵児だそうです」

神戸「なるほど、まさに時代の申し子つと奴ですか……」

と、ここで一護が傍においてあった血液反応を調べる特殊な懐中電灯の光を浴槽に当てた。

一護「血液反応があるな」

フェイト「それってつまり、犯人がここで返り血を洗ったってこと？」

一護「……さあな……」

） キッチン）

フエイト「調理道具は皆埃を被っちゃってるね。祥子さんは料理をしない人だったのかな？」

一護「まあ、小説家って小説を考えることに夢中になって、あんま家事とかしないってよく聞くしな」

フエイトと一護が被害者の人成りについて話していると、杉下はキツチンのゴミ箱に気付き中を見ると、そこにはある物が入っていた。

フエイト「？ チーズの容器とワイン？」

杉下は中に入っていたチーズの容器とワインを取り出してみる。

神戸「シャトー・マルシェット、1998年ものか……」

一護「相変わらずそういうのには詳しいな、神戸さんは……」

神戸「まあそれでも昔からよくバーに通ってたしね」

一護の言葉を神戸は軽く返す。一方杉下はチーズの容器を開けてみると、

フエイト「？ 未開封ですね……」

杉下「……ええ……」

）
書斎）

一護「仕事部屋は一切手付かずか……」

一護が中を見渡してそう呟くと、

神戸「おっ！」

神戸が書斎に置いてある何かを手にとった。

神戸「“スウィートドリーム”か…」

フェイト「神戸さんって香水にも詳しいんですね。ちょっと女の人みたい…」

フェイトが意外そうに呟くと、

一護「まあ神戸さん育ちいいからな。田園調布出身だし」

フェイト「えっ!？」

神戸「あはは……それ誉めてるのかな一護君……」

一護の口から出た神戸の素性にフェイトは驚き、神戸は一護の言い方にやや苦笑いを浮かべつつそう言った。と、ここで、

杉下「こちらは小説を書く際に使う資料ファイルのようですねえ。きちんと月日ごとに整頓されています」

杉下が棚にきちんとしまわれていた資料ファイルに気付き、それをじっくり観察する。そして一護もまたその様子をじっと見ていた。と、ここで、

フェイト「一護、これ何て読むのかな？」

フェイトが一冊の本の表紙に書いてある“墮栗花”という言葉の読み方を尋ねると、

杉下「それは“ついり”と読みます」

杉下がその質問に答えた。

一護「この本読んだことあんのか？」

杉下「いえ、読んだことはありませんが、確か…オリオン文学賞を獲った被害者の代表作のはずです」

神戸「ははは、本当に何でも良くご存知で」

一護の質問に杉下はそう説明すると、神戸はその知識量に下を巻いたのだった……。

現場を見て回った杉下、神戸、一護、そしてフェイトは警視庁に戻るとすぐ刑事部の鑑識科へと向かった。

杉下「米沢さん」

米沢「あっ！ 杉下警部……と、あなたは黒崎警視正！？」

一護「別に一々階級付きで呼ばなくたっていいですよ。改めて、黒崎一護だ。よろしく頼むぜ」

一護は畏まる米沢に軽くそう言いながら挨拶した。

米沢「それとそちらの方は……」

フェイト「あ、えっと、フェイト・ハラOWNといいます。よろしく願います」

米沢「ああ、これはご丁寧にも。私は鑑識の米沢といいます。どうぞよろしく」

フェイトの丁寧な挨拶に米沢もそう言って返した。と、ここで、

杉下「やはりファンでしたか」

杉下が米沢のデスクに置いてある本“墮栗花”があることに気付き
そう言った。

米沢「ああ、これ……。ファンなどという生易しい言葉では表現で
きません。」

杉下「なるほど。これは失敬」

神戸「あ、だから事件発生を聞いて真っ先に僕たちに知らせてくれ
たんですね。」

神戸が米沢の言葉を聞いてそう言った。

米沢「ええ、そうです。あ、こちらが検死の結果と水元祥子の遺留
品です」

杉下「失礼」

米沢は杉下に検死報告書を渡し、遺留品の置いてある机に4人を案内した。

一護「死因は手首を切られたことによる失血死か」

米沢「死亡推定時刻は午前2時から4時の間です」

米沢がそう説明すると、

フェイト「確か旦那さんの宗谷さんの携帯には3時10分頃に祥子

さんの携帯からメールが送られてたんですよ?」

神戸「そう、だから犯行はその後の3時10分から4時の間ってことになるだろうね」

フェイトがそう尋ねると神戸はそれに頷き、そう推測した。

米沢「室内からは不審な指紋は見つかっていませんが、玄関のドアノブから夫とも被害者とも一致しない指紋が検出されています」

と、こうで、

杉下「これは被害者の手帳ですね?」

米沢「ええ」

杉下は手帳を開き、中に書かれている物を見る。すると、

杉下「岡崎君……」

フェイト「え？」

突然そう名前を呟いた。一護達もその手帳の中身を見ると、

神戸「岡崎君からの資料到着……岡崎君と白秋社で打ち合わせ……
岡崎君と打ち合わせ……」

一護「頻繁に会ってるな、この“岡崎”って人と……」

杉下「ええ」

手帳の中で頻繁に登場していた岡崎という人物に会うために、4人は吉野宗谷が社長をしている出版会社“白秋社”を訪れた。すると、

芹沢「ああっ！」

伊丹「何故杉下警部と黒崎警視正達がこちらにいらっしゃってるの

でしょうか？」

そこにはちょうど応接室から出てきた伊丹と芹沢がいた。

杉下「どうぞお気になさらないで下さい。我々はあなた方とは別の方から調べていると思いますので」

伊丹「ちっ！ まあ、警視正とそっちのお嬢さんには警察庁の方から正式な許可が出ていましたが、特命係にはそのような権限がないことをお忘れなく！ 行くぞ！」

芹沢「あ、えと、失礼します……」

そう言って伊丹と芹沢は去っていった。

神戸「くく、あの伊丹刑事が“お嬢さん”なんて言葉を使うとは…」

そして伊丹のフェイトに対する似合わない発言に神戸は何とか笑いを堪える。

一護「ま、まあとりあえず行こうぜ。ちょうど話の聞けそうな2人がいるしな」

4人は伊丹達と入れ替わるようにして応接室に入る。そこには社長秘書と副社長がいた。

杉下「失礼します。警視庁特命係の杉下と申します」

神戸「同じく神戸です」

一護「警察庁警備局の黒崎です」

フェイト「フェイト・ハラOWNといいます」

そしてそれぞれ名を名乗る。

杉下「すみませんが、岡崎さんという方をご存知ありませんか？」

副社長「え、ええ、岡崎はうちの社員の1人です」

神戸「その人に少しお話を聞きたいんですが…」

副社長「ああ、申し訳ありません。只今岡崎は韓国に出張中ですので、帰国するのは4日後なんです」

神戸の頼みに副社長は申し訳なさそうにそう説明した。すると、

一護「出張ってというのは商談か何かか？」

副社長「あ、いえ、水元先生の新しい作品の資料集めです。それが彼の主な仕事ですから」

フェイト「じゃあ、岡崎さんは亡くなった水元祥子さんの……」

副社長「アシスタントです」

フェイトの言葉に副社長は即答した。

）
特命係の部屋）

副社長から岡崎についてある程度聞いた杉下と一護、フェイトは部屋の中で話をしていた。

杉下「そうですか。1週間前に発覚した藤山重工の助成金横領事件、あれを解決したのはあなた方だったんですね？」

フェイト「あ、いえ、正確に言うとそれを見抜いていたのは一護だけだったんです」

杉下の言葉をフェイトが訂正する。

杉下「なるほど。 官房長がわざわざあなたを呼んだことも頷けます」

一護「褒めても何も出ないっすよ、杉下さん。 それにあれはあくまで俺の勘だったしな」

杉下「勘でも事件の真相を見抜ければ十分な才能だと思いますがね」

一護が謙遜すると、杉下は思わずそう口にした。と、そこへ、

神戸「只今戻りました」

捜査一課の動きを見に行っていた神戸が戻ってきた。

杉下「それでどうでした？」

神戸「一課はどうやら“川芝直也”という男を今回の事件の重要参
考人として手配しようとしているみたいです。例のドアノブの指
紋と川芝の指紋が一致したんだそうです」

杉下「そうですか……」

神戸の報告を聞いた杉下は短くそう答えると、どこか釈然としない顔をした。

神戸「あれ？ ひょっとして何か別のことを考えてたりします？」

そしてそれに気付いた神戸は杉下にそう尋ねる。

杉下「水元祥子の書斎に置いてあった資料ファイル、覚えていますか？」

フェイト「あ、そういえば綺麗に整頓されてたんですよ？」

フェイトは思い出した様子で杉下に確認する。

杉下「ええ。月日ごとにきちんと整頓されてました。ですが……」

一護「今年の分の資料ファイルが1つも無かった……だろ？」

一護は杉下の言わんとしていることを先に言った。

杉下「おや？ 気付いていましたか」

一護「副社長の人から聞いた話じゃ、今日もアシスタントの人間を資料集めに出張させてるんだろ？ あの棚には去年の分までは1月から12月まで綺麗に揃ってたのに今年の分が1つもないなんておかしいと思ったんだよ」

フェイト「う、うん。確かに……」

一護の推理を聞いたフェイトは舌を巻く。

神戸「それは多分川芝が持っていたんじゃないですか？ 彼は水元祥子の熱狂的なファンで、話によるとネットに殺害予告まで載せていたそうですし……」

杉下「ではもし川芝が犯人だとすれば疑問が1つ。何故川芝は台所のキッチンに置いてあったナイフを使ったのでしょうか？」

神戸「え？ あ……」

杉下の指摘の意図に神戸は気付き声を漏らした。

杉下「殺害予告をしていたのなら普通、凶器を持ち込むでしょう？
わざわざ家のキッチンナイフを使う必要はありません」

フェイト「それってつまり、犯人は川芝って人じゃなくて別の誰か
ってことですか？」

杉下「僕はそう考えています。ですがこれはあくまで僕の考えです。
真実は一課の皆さんが考えている通りなのかもしれません」

杉下は自分の考えを絶対とはせず、そう付け加えた。一護はそんな
杉下を鋭い目でじっと見ている。と、ここで、

角田「暇か？」

角田が突然そう言っで中に入ってきた。まあ、特命係にとっては日常のことである。

角田「ん？ あの時のお二人さんじゃないの。この2人とは無事会えたのか」

フェイト「あ、はい。おかげさまで何とか……」

角田が一護とフェイトの姿に気付き声を掛けると、フェイトが礼を言った。すると、

角田「で、あんたら今度は一体何したの？」

杉下・神戸「はい（え）？」

角田は特命の2人にいきなりそう尋ねてきた。これには杉下も声を上げる。

角田「とぼけないでよ。こんな目の保養になりそうなカップルが何の用もなしに特命に来るわけないだろ。本当に何しでかしたわけ？」

フェイト「ふえ／＼／＼／＼！？」

角田の“カップル”という単語にフェイトは顔を真っ赤にした。

神戸「そっちのフェイトちゃんはともかく、こっちの一護君は僕の元上司で警察庁の人間です」

角田「け、警察庁……？」

杉下「ちなみに階級は警視正だそうですよ」

角田「け、警視正！！??？」

神戸と杉下の言葉を聞いた角田は思わず大きな声を出してしまい、その声を聞いた隣の組対5課の人々は特命係の部屋に視線を向ける。

一護「ま、まあ、よろしく頼むぜ、角田さん」

角田「ははは、はい！　どうぞよろしくお願いします！」

一護「いや、普通にいいですよ。俺の方が遥かに年下なんすから…」

ガチガチに畏まる角田に一護は苦笑いを浮かべつつそう返した。そして一護と角田が話している間に、

神戸「ねえ、フェイトちゃん。1つ聞いてもいい？」

神戸が小声でフェイトに話しかける。

フェイト「あ、はい。なんですか？」

神戸「ひょっとしてフェイトちゃん、一護君のこと好きなの？」

フェイト「ふえっ／＼／＼／＼／＼！？」

神戸のストレートな質問にフェイトは何とか声をあげるのを我慢するが、顔の赤さは先ほどよりもはるかに上である。

フェイト「な、何でいきなりそんな……／＼／／」

神戸「あ、やっぱりそうなんだ。君結構わかりやすいね」

フェイト「あう……／＼／／／」

神戸に自分の一護に対する好意を完全に見抜かれたフェイトは思わず顔を俯かせる。

神戸「別にそこまで恥ずかしがらなくてもいいよ。確かに一護君は見た目不良だけど結構イケメンだし、見かけによらず割と優しいしね。一護君を一度バーに連れていったことがあるんだけど、その女の子達からかなり人気だったし」

フェイト「あ、そ、そうなんですか……」

フェイトは神戸の言葉に苦笑いを浮かべる。未成年をバーに連れていくのは警察としてどうなんだ……。

神戸「まあでも、見た目は結構大人で頭もきれるのは確かだけど、

やっぱり彼はまだ高校生だ。正直あまり警察に、まして警察庁なんかには彼がいるべきではないと思うことがあるんだよ。君もそう思ってるんじゃないかい？」

神戸は先ほどとは一転して真面目にフェイトにそう尋ねた。

フェイト「…はい……………一護にはできれば……………穏やかな普通の生活をしてほしいなって……………そう思います……………」

そう言うフェイトの表情は寂しさを帯びていた。今日1日フェイトは一護と一緒にいて、さらに一護との距離を感じていたのだ。そして神戸はそんなフェイトを見て、

神戸「君は本当に一護君のことを想ってるんだね」

そう口にした。それに対してフェイトは、

フェイト「はい……一護は私にとって……本当に大切な人なんです」

そう言いながら一護をじっと見つめる。すると、

一護「？ どうしたんだ？ フェイト」

フェイト「え！？ あ、ううん！ 何でもないよ！」

一護がフェイトの視線に気付き尋ねると、フェイトは手を振ってそれを何とか誤魔化した。そんな中、

神戸「……まあ、一護君は昔もつと重い物を背負っていたけどね……いや、それは今も……かな……」

神戸はふとそう呟いた。すると、

杉下「何か言いましたか？」

神戸「うおおっ！？ す、杉下さんですか……気にしないで下さい。
ただの独り言ですから……」

杉下が尋ねてきて、神戸は驚きつつもそうはぐらかす。

杉下「……そうですか……」

杉下はそう返したが、一護に対して鋭い視線を向けるのであった……。

その日の夜、一護とフェイトのいない学園都市の暗い路地裏を1人の少年が歩いていた。その少年は白髪で赤い瞳をギラツカセながら、もう使われていない廃れたバーの空き家に入る。

ガチャッ

するとそこには、

土御門「遅かったな、一方通行」

結標「全くいい気なものね、自由学園の高等部2年首席様は……」

海原「まあ、そう言わないであげてください。結標さん」

土御門、結標、海原の姿があった。いつもは馬鹿そうにしている土御門に至っては真逆でかなりの真剣さを感じさせている。

一方通行「ちつ、うるせエ……あのガキを静かにさせるのに手間取っちゃったんだよ……」

白髪の少年　一方通行はバツが悪そうに言った。

一方通行「で、今回は一体何の用ダ？　土御門……」

結標「まあ、私達を集めたってことはまた面倒なことなんでしょうけど……」

一方通行が尋ねると、結標はわかりきった様子でそう口にする。

土御門「ああ、上から……というか親船からのな。実は学園都市外で能力者を雇って色々やってる奴がいるらしい。俺達の仕事はその能力者と雇ってる奴を見つけて秘密裏に警察に引き渡すことだ。もちろん決定的な証拠付きでな……」

海原「色々やってると言いますと、やはり汚れ仕事……ですか……」

土御門の言葉を聞いた海原がそう尋ねる。

一方通行「汚れ仕事ねえ……俺達も昔は散々やったダロウが……」

海原「……それもそうですね……」

結標「それで？ どうするつもりよ？」

結標がリーダー的存在である土御門に尋ねる。

土御門「とにかく今は情報収集が最優先だ。そいつらの素性が分かなければ何も始まらないから……それじゃあ久しぶりの仕事開始だぜい……」

E
N
D

俺達
“グループ”のな……」

FILE2 初対面と再会、そして捜査（後書き）

どうも黒狼です！！

という訳で一護達と特命係の2人が対面して捜査が開始されました。お気付きの方もいると思いますが、これはSeason9の第1話“顔のない男”を元に書いています。

神戸と一護は知り合いであり、神戸は一護の過去をある程度知っているという結構重要な役割を果たしています。実はまだ一護の正体は完璧に明かされてはいません。

また一護の頭のキレは杉下並みになっています。そのため一護が杉下に興味を持っているように、杉下もまた黒崎一護という少年に対して興味を持っているという点も着目点でしょう。

そして最後に“グループ”が活動を始めるという展開にしました。彼らが今後どのようにこの事件に関わっていくのかも見所でしょう。あ、もちろんフェイトの一護に対する思いなども注目して下さい！

今回は以前の後書きでも言ったように、相棒に関するキャラ紹介を投稿してそれから続きを書きたいと思います!!

ではまた!!

キャラ紹介（相棒）

まだ未登場の方もいますのでご注意ください！（前書き

相棒のキャラ紹介です！

殆ど原作とキャラは一緒ですが、年齢に関しては自分の勝手な判断で決めてます。また各キャラの一護やフェイトに対する印象や関係なども書いてます。

あと警察官の階級についてよく分からない方もいると思いますので、下に記載します。参考にしてみてください。

1075

警察庁長官

警視総監

警視監

警視長

警視正

警視

警部

警部補

巡査部長

巡査長

巡査

警察庁長官は実際階級の枠外ですが、警察官としての地位は最高です。またたみに聞く副総監の階級は警視監です。

キャラ紹介（相棒）

まだ未登場の方もいますのでご注意ください！！

杉下右京

年齢 54

キャスト 水谷豊

警視庁特命係の係長で、階級は警部。観察力、洞察力、記憶力がずば抜けて優れている上に推理力や分析力も高いため、過去に幾つもの事件を解決へと導いている。だが警察組織の利益よりも警察官としての信念と真実を明らかにすることを優先するため、しばしば

上層部から圧力をかけられることがある。

性格は極めて冷静で理性的。また強靱な精神力も備えているため、余程のことでないとは動じない。基本誰に対しても丁寧語で話し、「はい？」や「細かいことがつい気になってしまふ。僕の悪い癖」というのが口癖。

非常に博学で様々な分野の専門的知識も有している。また運動神経も抜群で、剣道や護身術もかなりの腕前らしい。

趣味はチェスやクラシック鑑賞。特にチェスに関しての強さは半端ではなく、それは国家的大事件を解決するのに多いに役立ったらしい。また手先も器用でピアノや電卓打ち、りんごの皮剥きなどはお手の物である。

実は東京大学法学部を卒業後に上級キャリア試験をパスして警察庁に入庁するというキャリアルートを進んでいたが、とある事件で警視庁特命係に左遷されるという過去を持つ。

小野田から直々に依頼を受け自分と同じようなところに着目する一護に対して興味を示している。

たける
神戸尊

年齢 40

キャスト 及川光博

警視庁特命係の係員で、階級は警部補。杉下に劣らぬ記憶力を持ち合わせており、頭の回転も速い。杉下を“天才”と表すなら、神戸はまさに“秀才”と言える人物。

性格はクールかつかなりの気障で、ノンキャリアであることの裏返しにキャリアのような雰囲気や常態に漂わせている自信家の一面もある。また他人からの嫌味をのりくらしと受け流すが、自分の意見があればしっかり主張する。

警備関係の部署に長年いたためか死体に関しては全くダメで毎回吐き気を催し、その度に杉下に呆れられたり捜査一課の刑事達にかかわれたりもする。

田園調布出身という育ちの良さからか物を見る目は高い。またブランドや香水などの女性物に詳しくったり女性の心情を見抜くことにも長けていたりする。実際フェイトの一護に対する好意に一目で気付いていた。

中央大学法学部を卒業後、警視庁に入庁。その後警察庁に推薦組

として入庁し“警察庁警備局警備企画課課長補佐”の警視であったが、表向き“2階級降格で左遷”という形で特命係への潜入調査を上から命ぜられた。だがこれには裏があつたらしく、今は自分の意志で特命係に残っている。一護とは“上司と部下の関係”と本人は言っているが、実際のところは先輩として色々と面倒を見ていたらしく一護の素性や過去も多少知っているようである。

米沢守

年齢 35

キャスト 六角精児

警視庁刑事部所属の鑑識員で、階級は巡査部長。メガネを掛けていてやや小太りなのが特徴である。

鑑識としての技術は非常に優秀だが、捜査一課の掴んだ情報を杉下に教えたり、杉下の頼みを請け負ったりと特命係には積極的に協力している。見かけによらずミイハーな性格かつ落語やギター、ゲーム、鉄道の追っかけなどをするなど非常に多趣味で、特に落語に関してはかなりの筋金入りである。

一護やフェイトとは好意的に接している。

伊丹憲一

年齢
44

キャスト 川原和久

警視庁捜査一課7係所属の刑事で、階級は巡査部長。通称“トリオ・ザ・捜一”のリーダー格の人物。

毎回勝手に捜査をする特命係を疎ましく思っており、警察庁からの依頼で動いているとはいえ、特命係に協力している一護のこともあまり快く思っていない。一護以上に目付きや口調も悪く見た目はかなり強面だが、筋の通らない事を嫌う正義感の強い一面もある。だが基本組織の枠を超えた行動はしない冷静さを持っている。

実は美女にめっばう弱いためフェイトに対しては彼に似合わず“お嬢さん”と呼ぶなど、かなり微妙な感じで接している。トリオ・ザ・捜一の中で唯一妻もしくは彼女がいない。

芹沢慶二 せりざわ

年齢 31

キャスト 山中崇史 たかし

警視庁捜査一課7係の刑事で、階級は巡査。“トリオ・ザ・捜一”の中では一番の若手。

特命係に関しては勝手な捜査にうんざりすることはあるものの殆ど反感は抱いておらず、特命の2人に対しても律儀に会釈をする。だがその場次第では伊丹同様嫌味を口にしたりすることもある。

かなり口が軽く特命係に対して情報を漏らしてしまうこともしばしばで、刑事とは思えない言動も多々見られる。

一護に対しては階級もあつて常に畏まっている。また反感などは皆無であるため、伊丹の一護に対する去り際の言動を謝罪することが多い。またフェイトと話す際は彼女の容姿もあつてかなり緊張している。

ちなみに長年連れ添っている彼女がいるらしい。

三浦信輔

年齢 58

キャスト 大谷亮介

警視庁捜査一課7係の刑事で、階級は巡査部長。“トリオ・ザ・捜一”の中で一番は一番の年長者であり、都内の警察署から警視庁

刑事部に配属された“叩き上げ”の刑事でもある。

現場にはあまり顔を出さず、取り調べなどを担当することが多い。特命係を疎ましく思う一方で、その能力と優秀さはある程度認めており、伊丹よりは敬意を払って接している。

性格は比較的穏健だが、怒れば伊丹よりも激しく暴れて手が付けられなくなるらしい。

一護やフェイトに対しては特命係に協力している点においては快く思っていないが、その一方で自分に子供がいれば同じもしくはそれ以下の年齢である2人が警察庁の依頼で捜査をしていることを複雑に思っているようである。

妻帯者であり、定年退職するまでは死にたくないと思っているため、たまに危ない橋を渡ろうとする伊丹を諫めようとすることもあるらしい。

角田六郎

年齢

52

キャスト 山西惇^{あつし}

警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策5課の課長で、階級は警視。黒ぶち眼鏡が最大の特徴で、“暇か？”が口癖。

何かと特命係の部屋にやってきてはコーヒーを飲みながら雑談をしに来るため、特命係の部屋の棚にはパンダのマイカップが置かれている。また特命係のコーヒーを気に入っているのも来る理由の一つだが、インスタントと挽きたてを区別できないらしい。

個人的に特命係の面倒を見ているが直属の上司というわけではない。特命係の捜査能力を高く評価しており、捜査情報を流したり、自分のところの事件の手伝いをさせたり、逆に特命係の捜査に部下である“大木長十郎”や“小松真琴”を同行させるなど関係は良好である。また何気ない言動で杉下に事件解決のヒントを与えることもしばしば。性格は温厚かつ飄々としているが捜査に関してはかなり厳しいらしく、よく捜査一課と手柄の取り合いを繰り返している。

一護やフェイトには好意的な態度で接している。

大河内春樹

年齢 49

キャスト 神保悟志

警視庁警務部の首席監察官で、階級は警視。警察庁のキャリアで警視庁に出向中の身である。

かなり几帳面な性格で、携帯しているラムネ菓子をよく口にして噛み砕いていることから“ピルイーター”と呼ばれている。

特命係の能力を高く評価しており、上層部の中では珍しく特命係の理解者でもある。そのため特命係の捜査には意外と積極的に協力している。

神戸とは警察庁時代からの旧知の仲であるらしく、よくバーに飲みに行ったり剣道の練習に付き合わせるなど何かと面倒を見ている。また一護のことも警察庁にいた際には何かと気に掛けていたらしく、神戸同様一護の素性も多少知っているようである。

内村完爾 かんじ

年齢 68

キャスト 片桐竜次

警視庁刑事部長で、階級は警視長。特命係の存在を最も嫌っている人物であり、事件に首を突っ込んでくる特命係を毎度の如く激しく叱責する。一方でその捜査能力は認めているようで、極稀だが特命係の要求をのむこともあるらしい。

見た目はかなり悪人面であり、性格も手柄は奪ってでも自分のものにし、失態は全て下の者に押しつけるなど人として器が小さく、かなり自己中心的なようである。

自分よりもかなり年下にも関わらず自分よりも階級が上である一心のことを妬んでいるようで、一護に対しても伊丹以上に疎ましく思っている模様。だが一護の人なりや能力についてはそれなりに認めており、特命係ほど嫌っている訳ではない。一護からも“案外あの人も見た目ほど悪い人じゃない気がする”と評されている。また一護の素性も多少知っている模様。

中園照生^{てるお}

年齢 61

キャスト 小野了

警視庁刑事部参事官で捜査一課長兼管理官も務めている。階級は警視正。内村の腰巾着的存在で、内村程では無いものの特命係の動きを疎ましく思っている。だが特命係に対して若干の情報を与えたりするなど極たまに協力することもある。

重要なポストにいるにも関わらず指揮官適性は皆無で、指揮を取る際は常に焦っているらしい。

一心や一護とは面識が無いため自分と同等の階級である一護を快く思っていない様子。フェイトに対してはただの協力者程度に思っているようである。

きみあき
小野田公顕

年齢 65

キャスト 岸部一徳

警察庁長官官房官房長で階級は警視監。一心の直属の上司であり、一護に依頼をした人物。

特命係を作った張本人であり、杉下とはその頃からの付き合い。基本的には特命係を支援するような立場だが、警察内部の不祥事や国家が絡んだ事件では基本国の権威を優先するため対立することが多い。

ただ警察や政府組織の腐敗を憂う気持ちはあり、権威を利用して罪を隠蔽しようとする権力者には容赦なく制裁を加えることもあったらしい。

相手が年下や若手警察官であつたとしても基本敬語口調で呼び捨てすることはないが、杉下に対しては呼び捨てにする。疑問の際によく“くかしら？”を使う。

付き合いの長い杉下や一心、一護にも全く本心を悟らせないようで、周りから喰えない男であると評されている。また杉下や一護ほどではないが東法学部卒業だけあつて頭も結構キレ、誰もが見落としそうな点に着目する洞察力も持ち合わせている。

一護とは彼が幼い頃から面識があるらしく気軽に話す。一護の素性も父親である一心並みによく知っているらしい。

宮部たまき

年齢

47

キャスト 益戸育江

小料理屋“花の里”の女将で、杉下の元妻。常に和服姿で誰にでも隔てなく接する物腰の柔らかい女性。杉下にとっては家族以上の存在であると同時に最大の理解者でもある。

基本的に事件には関わらないが、彼女の何気ない一言は角田同様に事件解決のヒントになったりする。

一護やフェイトに対しては“2人のような子供を持ったご両親は幸せ者ですね”と言うほど気に入っている様子である。またフェイトの一護に対する好意にも気付いている。

キャラ紹介（相棒）

まだ未登場の方もいますのでご注意ください！！（後書き

どうも黒狼です！

という訳で今回は相棒のキャラ紹介でした！

注目すべきは一護とフェイトに対する印象でしょう。一護は階級もあつてか“トリオ・ザ・捜一”の伊丹や三浦、刑事部長の内村や参事官の中園からは快く思われていませんが、フェイトに対しては誰も悪い印象を持っていません。まあ、あの容姿と性格で悪印象を持つ人間はまずいないと思います。

そして小野田は一護の過去と何気に関わってそうな雰囲気のある人物ですので意外と結構重要な人物だったりするのかもしれませんが。

次回から再び続きます！ オリジナル展開まで書けるだろうか……。とりあえず頑張ります！

ではまた！

File3 捜査と夜の遭遇 (前書き)

投稿がかなり遅くなってしまいました。すみません！

今回はシリアス4割、ほのぼの&ギャグ6割といった感じです！

では、どうぞー！！

File3 捜査と夜の遭遇

翌日、一護と杉下達は再び白秋社を訪れ社長秘書の女性と会った。

社長秘書「昨日は自己紹介が出来ず申し訳ありません。社長秘書の安藤といいます」

杉下「実は吉野社長とお会いたいのですが……」

社長秘書「あ、社長なら今……」

と、その時、応接室の外で吉野宗谷が初老の男性に慰められながら

歩いているのが見えた。すると神戸は初老の男性の姿を見て、

神戸「あの方って、確か大分建設取締役社長の水元卓造氏ですよね？」

そう社長秘書に尋ねた。と、ここで、

フェイト「一護、あの人って有名人なの？」

フェイトが小声で一護にそう尋ねる。

一護「ああ、大分建設っていえば日本の建設業界の中ではトップ3に入るほどの大企業だ。特にあの水元卓造って爺さんは経営者としてもかなり一流の人間で財界にも顔が利くらしいからな」

それに対して一護はそう答える。すると、杉下はあることに気付く。

杉下「ひょっとして亡くなった水元祥子さんは水元卓造氏の……」

社長秘書「ご令嬢です……」

杉下「つまり、水元祥子さんは大分建設の創業者一族の方だった……」

杉下の言葉に社長秘書は黙って頷く。すると、

一護「話は変わるけどよ、水元祥子さんが岡崎さんに頼んでた新しい小説の題材って具体的にどんな物なんだ？」

社長秘書「えっと……確か環境問題についてだったと思いますが……」

一護の質問に社長秘書は少し考えながらそう答えた。と、ここで、

ガチャッ

社長秘書「あ、社長！」

吉野宗谷が応接室に入ってきた。

宗谷「あなた方は確か警察の…」

杉下「警視庁特命系の杉下です」

神戸「同じく神戸です」

一護「警察庁警備局の黒崎です」

フェイト「えと、フェイト・ハラオウンです」

杉下と一護達は自己紹介をする。

宗谷「昨日もこちらに来ていましたよね。ご挨拶できずに大変申し訳ありませんでした。それで今日も祥子について…ですか？」

杉下「ええ。水元祥子さんが環境問題をテーマにした新しい小説を考えていたとか……」

杉下は宗谷に確認するような口調で言った。

宗谷「ああ、はい。私も妻に出来るだけ協力していました。この前も“豊日商事に会いたい人がいる”と言ってきたので、豊日商事にいる私の大学の同期生に頼んでその人と会えるように取り計らってもらいましたし……」

神戸「ん？ 豊日商事の社員を……ですか？」

フェイト「あの、水元祥子さんが会いたいと言っていた人の名前はわかりますか？」

フェイトがそう尋ねると、

宗谷「確か……笠井とか言ってたかな……」

宗谷はやや自信なさげにそう答える。すると、

一護「その話をあなたの奥さんから聞いたのっていつのことだ？」

宗谷「えっと……ちょうど1ヶ月前くらいだったと思います……」

一護の質問に宗谷はそう返した。

宗谷からの話を受けて、4人は早速笠井という人物から話を聞くために豊日商事へ来たのだが、応対に来たのは山根という男だった。そして……

フェイト「笠井さんが……」

神戸「亡くなった!？」

その事実を告げられたのだった。

山根「ええ……2週間前に夜釣りに出掛けて……」

山根は何とも言い難そうな表情になる。と、ここで、杉下が事前に渡されていた山根の名刺を見る。

杉下「運輸部航空輸送企画課課長……ということは、笠井さんは山根課長の……」

山根「ええ、直属の部下でした」

すると、

一護「小説家の水元祥子さんが殺された事件を知ってるか？」

山根「え、ええ。新聞で拝見しました」

神戸「実はその水元祥子さんが1ヶ月前くらいに笠井さんと会っていたようなんですけど、そのことはご存知でしたか？」

山根「い、いえ、そのようなことは初めて聞きました……あ、お役に立てず申し訳ありません」

山根は杉下達にそう謝る。

杉下「笠井さんの御家族にお会いしたいのですが、御自宅の場所などを教えてくださいても宜しいでしょうか？」

山根「あ、確か奥様はお子さんと一緒に実家に戻られたと聞いてお

りますが」

一護「？ 実家に？」

山根「ええ……」

山根は短くそう頷いた。

ここは都内にある一軒の家。だがその敷地は一般人から見れば有り得ないほど広く、中にある庭園は一本一本の木まで丁寧に手入れされている……。まあ、ナギや咲夜、伊澄の家と比べると程遠いが……。

神戸「自宅のマンションは引き払われたんですね……」

???「ええ……あそこは夫との思い出が多すぎて……」

神戸がそう言うと、相手の女性は沈痛な面持ちになった。彼女は笠井芳子。亡くなった笠井の妻である。そして芳子の父親でこの家の持ち主は……

杉下「大変恐縮なのですが、奥様は伏見享一了氏の……」

芳子「……昔は伏見享一了の娘って言われるのが嫌で仕方がなかったんですけど……」

伏見享一了 高度経済成長期に防衛大臣や財務大臣、与党の幹事長などの重役を務め“最後の大物政治家”と呼ばれた政界の重鎮である。ここはその伏見享一了の自宅なのだ。

芳子「でも、政界を引退した今では息子の良い遊び相手なんです」

庭園では芳子の息子と伏見享一了がサッカーボールで遊んでいる。そんな様子を見て、

フェイト「ふふ、本当ですね。政治をした人には見えないなあ……」

フェイトはそんな光景を微笑ましく見ていた。と、ここで、

芳子「それで夫のことについて何か……？」

芳子が用件を尋ねてきた。

一護「小説家の水元祥子について知ってるか？」

芳子「ええ、確か亡くなったって新聞に載ってましたよね」

芳子は確認するように言う。

神戸「その水元祥子さんがご主人と会っていたそうなんですが……」

芳子「はい……確か小説の題材についてとか……」

杉下「そのことについてご主人から何かお聞きになっではいらっしやいませんか？」

芳子「えと、主人から一度聞いただけなんですけど……」

そして一護達は芳子から話を聞き始めた。それを伏見享一了がじつと見ているとも知らずに……。

山根「申し訳ありません！」

山根は一護達に謝罪していた。その理由は……

神戸「航空燃料に関するこの会社の不祥事……何故隠していたんですか？」

山根「も、申し訳ありません。いや、別に隠していた訳では……」

一護「隠してただろうが、明らかに……」

一護の鋭い目付きに山根は思わず顔を背ける。

山根「……か、関係省庁にはすでに報告しておりまして、近々謝罪会見を行うんです。それで社内には箝口令が敷かれていまして……本当に申し訳ありません！」

フェイト「え、えと、まあとりあえず座ってください……」

状況を見てフェイトは山根に一旦座るよう促した。そして全員が席に着くと、

杉下「環境汚染に関する不祥事のようにですが、具体的にはどのようなものなんですか？」

山根「じ、実は……輸入した航空燃料から基準値よりも多い硫黄や不純物を含んでいることが内部調査で明らかになりました……しかもそれが空港周辺の土壌や河川にも影響を与えていたらしく……あ、本当に申し訳ありません！」

山根はまたしても謝罪の言葉を口にした。

一護「つまり、水元祥子はその不祥事に気付いていたってことか……」

山根「はあ……　　など、そういった情報を掴んでいる環境団体はかなりありますので……」

フェイト「じゃあ、笠井さんもそのことについて水元祥子さんに？」

山根「……おそらく今私がしたような話を水元祥子さんにもお伝えしていたと思います……」

と、ううで、

杉下「では、もし水元祥子さんが小説でこの内容を公表した場合、こちらの会社としてはどの程度の影響を受けるのでしょうか？」

杉下がそう尋ねると、

山根「はは、どの程度と言われましても……まあ、いずれ明らかに
なることですから……」

山根はそう答え、一護はその時の山根の表情に何か引つ掛かりを感じ
るのだった……。

4人が豊日商事を出ると、辺りはすでに暗くなり始めていた。

杉下「おやおや、もうこのような時間になってしまいましたか。とりあえず今日のところはここまでにしましよう」

一護「ああ、そうだな。じゃあ……」

と、二つで、

神戸「あっ！ 2人共この後どこか御飯を食べに行く予定とか決まってる？」

フエイト「え？ い、いえ、特にはまだ……」

神戸が思い出したように尋ねると、フエイトはそう答えた。

神戸「なら一緒に食べない？ 一護君達の学校生活の話とかも聞いてみたいしね。もちろん僕の奢りで」

一護「いや、一緒に飯を食べるのは勿論いいけど、奢らなくていいって昔から言ってるじゃねえか！ 自分の飯代くらいは俺達払えるっつーの！」

神戸「まあまあ、ここは年上で元部下の僕が払わないと」

一護「いや、だから俺からしたらあんたは立派な先輩だったんですけど……」

神戸の言葉に一護は申し訳なさと納得してなさの混じった表情で呟く。すると、

杉下「なるほど。久しぶりの再会なんでしたね。ではどうぞゆっくり食事をしながら語り合って下さい。では僕は先においとましますから」

神戸「あれ？ どうして先においとまするんですか？」

先に帰ろうとする杉下を神戸が引き止める。

杉下「勿論君達の話のお邪魔にならないようにするためですよ」

神戸「あれ？ 僕が行こうとしているのは杉下さん所縁ゆかりのお店なん
ですけど……」

そう言つと杉下がやや顔を陰しくした。

杉下「……君、まさか2人をあの店に連れていくつもりですか？
あそこは黒崎君達には合わないと思うのですが」

神戸「ま、まあ……。でもあそこが一番落ち着きますし、何よりあ
の人にも一護君達を紹介しておきたいですし」

杉下「何故紹介するんですか？ 全く必要性が無いと思いますが」

神戸「今回の捜査に関しては一護君達のお蔭で一課の人達から厄介払いされずに済んでるんですよ？ それくらいしてあげてもいいんじゃないですか？」

杉下の質問を神戸はのらりくらりと返していく。そしてしばらく沈黙が続き……

杉下「……まあ、そうですね。お二人もそれでよろしいでしょうか？」

杉下が珍しく言葉で神戸に押し負け一護達に尋ねる。

一護「あ、ああ。けどいいのかよ？」

フェイト「私達にそこまで気を遣わなくても……」

一護とフェイトが申し訳なさそうに言つと、

杉下「いえ、今回は珍しく神戸君の言葉にも一理有りますからね」

神戸「珍しくは余計です……」

杉下がそう返し、それに対して神戸は不機嫌そうに言ったのだった……。

”。ここは都内の下町にひっそりとたたずむ一軒の小料理屋“花の里”。

ガラガラッ

???「あら、右京さん、神戸さん、いらっしやい」

店の中に入ると、そこにはこの女将と思われる物腰の柔らかそうな和服の女性がいた。

神戸「あはは、また来ちゃいました」

杉下「すみませんねえ、ほぼ毎日寄らせてもらって……」

???「ふふ、何を言ってるんですか？　ここはお店なんですから

毎日寄ってもらった方がありがたいですよ……あら？ そちらの2人は右京さん達の知り合いですか？」

ここで女性が杉下達の後ろにいる一護とフェイトに気付く。

杉下「ああ、こちらの2人は今担当している事件の僕達の協力者で、神戸君の仕事上の知り合いだそうです」

一護「ど、どうも、黒崎一護です……」

フェイト「は、初めまして。フェイト・ハラオウンです……」

一護とフェイトは女性に対して自己紹介をした。すると、

「???」あら、右京さん達のお知り合いにこんなに若い人達がいるなんて思わなかったわ」

一護とフェイトを見た女性は何故か嬉しそうに言った。

「???」あ、ごめんなさい、まだ自己紹介してなかったですね。この女将の宮部たまきです。右京さん達がお世話になってます」

神戸「ちなみにこの人、杉下さんの元奥さんだよ」

一護「なっ!?!」

フェイト「す、杉下さんの!?!」

一護とフェイトは神戸の言葉に驚きを顔にする。まあ、当然の反応だとは思うが……。

杉下「神戸君、それは言う必要のないことだと思いますよ」

たまき「まあいいじゃないですか、右京さん。とりあえず皆さん座ってください。右京さん達はいつも通りでいいかしら？」

神戸「あ、はい」

たまき「それと……一護君とフェイトちゃんできったかしら？
2人は何かリクエストはある？」

フェイト「あ、い、いえ…」

一護「おまかせで頼みます」

一護とフェイトは若干恐縮しながら言う。すると、

ガラガラッ

たまき「あら、米沢さん。いらっしやい」

米沢が店に入ってきた。

米沢「おお、これはお二人もいらっしやってましたか」

杉下「ええ」

神戸「今日はこの2人にこのお店を紹介しようと思って」

そう言って神戸は一護とフェイトを指す。

米沢「く、黒崎警視正!？」

一護「いや、向こうでならともかく今の俺はただの高校生なんすから、普通に呼んで下さいって……」

一護は苦笑いしながら言う。

フェイト「こんばんは、米沢さん」

たまき「米沢さんもいつも通りでいいかしら？」

米沢「え、あ、はい、お願いします」

米沢はそう言つと、とりあえず席に着いた。

神戸「今日は早かったですね」

米沢「ええ。作業の方は一区切りつきましたので。ですが、一課の皆様方は例の川芝直也を躍起になって搜索しているようです」

杉下「そうですか」

米沢の話に杉下は淡々と返す。と、ここで、

神戸「それにしても、今回は当てが外れましたね、杉下さん」

杉下「はい？」

神戸が突然そうやってきた。

神戸「豊日商事の環境汚染に関する不祥事はすでに解決済みでしたから」

杉下「殺害の要因にはなりえないと？」

神戸「ええ。杉下さんや一護君が気にしていた水元祥子の資料ファイルも、ひょっとしたら元々なかったのかもしれないし…」

神戸は杉下にそう述べた。そして一護はそれを聞いてどこか釈然としない表情になった。

フェイト「？ どうしたの一護？」

一護「ん？ あ、いや、何でもねえよ」

と、こうで、

たまき「はい、簡単なものですけどどうぞ、お二人とも」

たまきは先付けを一護とフェイトに出す。

フェイト「……あ、これおいしい……」

たまき「ふふ、ありがとう」

そしてフェイトが一口食べてそう言つと、たまきは嬉しそうに礼を言う。

たまき「水元祥子さんですか……あの人の小説って独特ですよ〜」

米沢「おや？ ひょっとしてたまきさんも水元祥子の作品をお読みに？」

米沢がたまきの言葉を聞いてそう尋ねる。

たまき「ええ、何冊かは……“セントマーティンの夏”とか“墮栗花”とか」

米沢「墮栗花ですか……あの小説のラストはいつ読んでも涙を禁じえません……」

フェイト「？　どんな話なんですか？　その墮栗花って」

フェイトが思わず尋ねる。

たまき「確か……ヒロインは自殺するんですよね？」

米沢「ええ、自殺は水元祥子の作品における重要なテーマですから……私も警察無線で第一報を聞いた時には、真っ先に自殺を連想してしまったほどです……」

一護「……自殺……」

米沢の話聞いた一護はそう呟くと、何かを考え始める。すると、

たまき「あら、こんなところでも事件のことについて考え事ですか？　まるで右京さんみたいね」

杉下「おや、それはどういう意味ですか？」

たまき「ふふ、さあ、どういう意味でしょうかね。あ、一護君もどうですか？　それとも日本酒はあまり飲まないかしら？」

たまきはそう言って一護にお酒を勧めようとする。

一護「え？　あ、いや、俺未成年だから酒は飲めないんですけど……」

米沢「え……？　し、失礼ですが、黒崎警視正は今おいくつで？」

米沢が恐る恐るそう尋ねる。

一護「……１７です……」

その言葉には米沢はもちろん、滅多に取り乱さないたまきも驚きを顕にしている。

たまき「あ、ご、ごめんなさい、まさか一護君がまだそんな年だったなんて……」

神戸「あははは！　気にしないでいいと思いますよ、たまきさん！　初対面の人からはいつもそういうリアクションされてますから」

一護「いや、あんたもいい加減笑うなよ！」

神戸が笑いながらたまきにそう言うと、一護は声を上げた。

たまき「でも17歳ってことは一護君とフェイトちゃんはまだ高校生ですよ？なのに警察のお仕事をしてるなんて……」

フェイト「あ、いえ、私達は別に仕事じゃなくて小野田さんからの頼みでやってますから……」

神戸「一護君のお父さんは小野田官房長の直属の部下だしね……」

神戸はフェイトの言葉にそう捕捉を加える。

米沢「しかしお二人共学校の方は大丈夫なんですか？」

一護「ああ、ちゃんと許可は取ってあるから問題無いっすよ。学園都市の学校は生徒の事情に関しては結構アバウトなところもあるしな……」

たまき「あら、2人は学園都市から来たんですか？」

たまきがそう尋ねる。

フェイト「え、あ、はい、そうですね……」

たまき「実はここにもたまたま学園都市の人が来るんですよ」

杉下「おや、そのような方が来られているとは初めて聞きましたよ？」

たまきのカミングアウトに杉下がそう言った。

たまき「滅多に顔を出さない人ですから、右京さん達が知らないのも無理ないですよ。それにここに来る時は大概酔っ払ってますしね」

米沢「それは何ともかんともですな……」

たまき話を聞いた米沢は複雑な表情を浮かべる。そんな中、一護がふと何かを考え、

「護「なあ、その人ってなんか特徴ねえか？」

たまきにそう尋ねる。

たまき「その人の特徴ですか？ それはやっぱりパーマの掛かっている銀色の髪でしょうね。あの髪を見たら絶対忘れないわ……」

フェイト「え？ パーマの掛かっている銀色の髪って……」

フェイトはある人物を思い浮かべる……というかその男しか出てこないであろう……。

「護「何でここまで来てあの人が出てくるんだよ……」

一護も同じ人物を思い浮かべ呆れる。

たまき「あら？ ひょっとしてその人は2人のお知り合い？」

フェイト「あ、はい……」

一護「知り合いつていうか向こうじゃ毎日会ってるといつか……」

と、その時、

ガラガラッ

「???」ここが金時がたまに来る店か、アハハハッ!!」

「???」うるせー、一々大声で笑うんじゃないよ……ヒック!……」

「???」でひゃひゃひゃっ!! やっぱり酒はいいわねー!」

見るからに酔っ払っている連中が入ってきた。1人は茶色のボサボサ髪にサングラスを掛けたどう考えてもバカそうな男、1人は銀髪天然パーマに死んだ魚のような目をした男、そしてもう1人は緑色のショートカットが特徴の女だった……ていうかもう誰だかわかってますよね……。

一護「ぎ、銀さんと坂本さん!？」

フェイト「それにあなたは確かヒナギクのお姉さん!？」

そう、坂田銀時と坂本辰馬、そして桂雪路である。

銀時「ああ？　はは、何だよ、黒崎とハラウンじゃねえか、ヒツク！」

坂本「こんなところで会うとはなんとも奇遇じゃの………おお！
そこの綺麗なお姉ちゃん！　わしと遊ばんね？　アハハハハ！」

フェイト「ふえっ！？」

坂本がまたしてもフェイトのことを認識していないのかナンパしてくるが……

ゴンッ!!

坂本「ゴフッ！」

一護「あんたはいつになったらナンパやめんだ、バカ社長!!」

一護の拳骨をもろに受けて撃沈する……。

フェイト「ご、ごめんなさい。騒がしくなっちゃって……」

たまき「い、いいのよ、フェイトちゃん……でも本当に知り合いたいね……」

たまきは目の前で繰り広げられているコントのような状況を見て苦
笑いを浮かべる。

一護「知り合いつていうかうちの学校の教師2人とその親友のバカ
っすよ……」

米沢「いやはや……何とも面白い先生方ですな、ははは……」

米沢は引きつった表情で思わずそう呟く。一方で、

神戸「あ、あなたはひょっとして快援隊の坂本辰馬社長では？」

坂本「お？ わしのこと知っとるぜよ？ アハハハハ！！」

神戸「……………」日本最大手の貿易会社のトップは頭が空っぽだ”って週刊紙の記事は正しかったんだ……………」

神戸は目の前にいる坂本のバカっぷりに啞然としていた……………」マジカオスだな、おい……………」。

一護「……」つか何であんたらがここにいんだよ！？ 今日平日だろうが……！」

雪路「なぐによ、2人だっでどうしてこんなところにいるのよ？ あ、女将さん！ お酒頂戴……！」

一護「俺とフェイトは今ちよつとした理由でいんだよ……………」つかあんたはさり気なく酒飲もうとしてんじゃねえ……！」

飲んだくれになっている雪路に一護は声を上げる。

銀時「なんだ？　ちよつとした理由って。まさかてめえらそういう関係にまで発展してんじゃねえだろうな？　あ？」

一護「あんたは何言ってるんだよアホ天パ！……はあ、フェイト、お前から何か言ってる……ってどうしたんだ？」

一護はフェイトからも銀時達に何か言つよう促そつとしたが……

フェイト「……………」

フェイトの顔はゆでダコ通り越して真っ赤になって俯いていた。

一護「？　おい、どうした？　フェイト」

フェイト「ふえ／／／／／／！？　な、ななな何でもないよ、いい一護／／／／／／！！！」

一護「……スゲー噛んでるぞ……」

どう考えても大丈夫ではないフェイトの様子に一護は首を傾げっぱなしである。そして、

たまき「神戸さん、ひょっとしてフェイトちゃんは一護君のことを……」

神戸「はい、お察しの通りですよ」

たまき「あら、やっぱりですか」

米沢「なるほど、青春という奴ですな」

たまきがフェイトの様子に気付き小声で聞くと神戸はそれを肯定し、米沢は何故か感慨深そうに呟く。

神戸「でもたまきさんもさういふことには鋭いんですね？」

たまき「まあ、私の昔のお相手の方がさういふことに疎かったですから、自然と身についてしまいました」

たまきは小声でそう言いながら杉下の方を見る。

杉下「？　　どうかありませんか？」

たまき「いいえ、何でも」

視線に気付いた杉下がたまきにそう尋ねるが、たまきは何とも言い
難い笑みで返した。

一護「つーかあんたらしい加減帰れよ。明日も平日で授業あるだろ
うが……」

銀時「ああ？　　帰れる訳ねえだろ。あいつらに見つかったら否応

なしに学園に戻らされるからな……ヒック!……」

フェイト「? あいつら?」

銀時の“あいつら”という言葉にフェイトは疑問を抱く。と、その時、

ガラガラッ!!

???「あっ!」

???「やっと見つけた!」

またしても突然扉が開き、誰かが入ってきた。そして中にいる銀時達を見て声を上げる。その正体は……

銀時「げっ!？」

雪路「ヒナ!？ 綾崎君!？」

三千院家の執事である綾崎ハヤテと雪路の妹にして才色兼備の1年生生徒会会長桂ヒナギクだった。

一護「ハヤテ!？ ヒナギク!？」

ハヤテ「い、一護さん!？」

ヒナギク「それにフェイトさんも！？ どうしてこんなところに！？」

フェイト「そ、それはこっちも聞きたいよ……」

一護とフェイト、ハヤテ、ヒナギクは互いに驚き合った。まあ、こんな小料理屋で先輩もしくは後輩と会うなど誰も想像できないであろう……。

銀時「な、何でてめえらこんなところまで追っかけて来てんだよ！？」

ヒナギク「当然です！ 宿直をサボって学園都市の外まで行くなんて何考えてるんですか！？ 大体お姉ちゃんも何で一緒に居るのよ！？」

雪路「そんなもんこの天然パーマがお酒を飲みに行くなって言ったからに決まってるでしょー!!」

ハヤテ「それ理由になってないですよ、桂先生……」

ハヤテは雪路の発言に呆れる。と、ここで、

ヒナギク「す、すみません！ お姉ちゃん達にご迷惑をおかけしたみたいで！」

ヒナギクはたまきや杉下、神戸、米沢に向かって謝罪する。

たまき「ふふ、大丈夫ですよ」

神戸「そうそう、一護君達が色々フォローしてたからね」

それに対してたまきと神戸はそう返す。

ハヤテ「一護さんとフェイトさんもすみませんでした」

フェイト「いや、ハヤテが謝ることじゃないと思うよ……」

一護「ああ、明らかにこのバカ3人の勝手な行動に責任があんだろ……」

フェイトは苦笑いでハヤテにそう言い、一護は呆れながら銀時達に

蔑みの視線を浴びせる。

銀時「しゃあねえだろー！！ あの大カス力拳銃をぶっ放す学年主任と当直なんかしてみろ！！ 俺の命がいくつあっても足りねえよ！！ なあ、あんたもそう思うだろー！？ 思うよなー！？」

米沢「え！？ あ、いや、私に同意を求められましても…ま、まあ無闇やたらに発砲するような人の傍には確かに居たくはないと思います…」

突然同意を求められた米沢は苦笑いを浮かべつつそう返す。

銀時「だよなー！ そんな人間の周りになんか誰も居たくねえよなー！！ つー訳で俺はここで精神力を休養するから……って、あれ？」

その時、銀時は見た。顔は笑っているが右手には木刀“正宗”を持っている阿修羅^{ヒナギク}を……。それにはもちろん雪路や坂本、一護、フェイト、ハヤテ、神戸、米沢も引きつった笑みを浮かべる。

ヒナギク「帰りましょうか？ 先生方……」

銀時・坂本・雪路

「……はい……」

銀時達の顔は二日酔いよりもさらに真っ青である。

ハヤテ「え、えと、お騒がせしてすみませんでした……」

たまき「あら、大丈夫よ。ねえ、右京さん？」

杉下「ええ」

先程のような状況を目の当たりにしたにもかかわらず、杉下とたまきは全く動揺している様子が見られない。さすがは警視庁一の変人とそれを支えている元妻である……。

フェイト「あ、私達も一緒に行くよ、ハヤテ、ヒナギク」

ヒナギク「え？　で、でも2人はこちらの皆さんと一緒になんじゃ……」

一護「いや、さすがに酔っ払い3人を2人で学園都市まで送るのも大変だろ？　俺たちも手伝っぜ」

ヒナギクが申し訳なさそうに言うと一護はそう返した。

一護「悪い、神戸さん。せっかく誘ってもらったのに……」

神戸「あ、ああ、気にしないでいいよ。先生達を送ってあげな」

フェイト「たまきさんもお料理凄く美味しかったです。できればいつか料理を教えてもらえませんか？」

たまき「あら、大歓迎よ。いつでも来てちょうだい」

たまきはフェイトの言葉に対して嬉しそうに返す。

一護「杉下さんと米沢さんも悪いな。先に失礼するぜ」

米沢「ああ、これはどうも」

杉下「おやすみなさい」

一護がそう挨拶すると杉下と米沢も返した。そして一護とフェイト、ハヤテ、ヒナギクは酔っ払い3人を連れて店を出ていった……。

神戸「はあ……まさかあの人達が一護君の知り合いとは……」

米沢「なかなか個性的といいますが、何といいますか……」

たまき「あら、でも面白い人達じゃないですか。後輩の二人も凄くいい子達みたいですし。右京さんもそう思いますよね？」

たまきはゆったりとした動作で酒を飲んでいる杉下にそう尋ねる。

杉下「おや？ 何故それを僕に聞くんでしょうか？」

たまき「ふふ、だって右京さん、凄く楽しそうでしたよ」

たまきは笑みを浮かべつつそう言うと、杉下もやや笑みを浮かべる。

杉下「そうですか……僕にはそのつもりは無かったのですが……」

たまき「気に入ったんじゃないんですか？　―護君とフェイトちゃんのこと…」

杉下「……なるほど…そうかもしれませんねえ……」

杉下は感慨深そうにそう呟く。

たまき「でもあの2人、どこか不思議な感じがしたんですよね…」

米沢「ん？　不思議な感じとは？」

たまき「うーん、何というか普通の高校生のような感じがしないというか…」

米沢「まあ、17歳で警視正の階級にいるなどあり得ないことですからねえ……」

たまき「あ、いえ、それもそうなんですけど、何ていえばいいのかしら……何か凄い力を感じる気がするんですよえ」

たまきは首を傾げながらそう言った。すると、

杉下「神戸君、どうしましたか？」

神戸「え？ あ、いえ、ちょっとした考え事ですからお気になさらずに」

杉下がそう尋ね、神戸はそれをはぐらかす。

杉下「それ、昨日も言いましたよ」

神戸「あれ？　そうでしたっけ？　まあ、そんな細かいことは気にしないで下さいよ杉下さん。悪い癖ですよ？」

神戸は本心を悟らせないような笑みを浮かべつつそう言つと、

杉下「……そうですね……」

杉下は意味深な笑みでそう返した。だが杉下の目は鋭く神戸を見ていたのだった……。

一方、一護とフェイト、ハヤテ、ヒナギクは酔っ払い3人に肩を貸しながら歩いていた。

銀時「うぶ……き、気持ち悪い……」

一護「はあ……さっきまでのテンションの高さはどこ行ったんだよ……」

使い物にならなそうな銀時の様子を見て一護は思わず溜め息を吐く。

坂本「酒は飲んでも飲まれるな言うちよるが、男は皆酒の前にはかなわんぜよ、アハハハハ、うぷ……」

ハヤテ「わかってるなら飲まないで下さい……」

雪路「男だけじゃないわよ！ 女だって酒を飲んじゃえば皆本性を曝け出すものよ！ でひゃひゃひゃ！」

ヒナギク「お姉ちゃんはいつも本性曝け出してるでしょ。少しは本性を隠して欲しいくらいよ……」

雪路と坂本のダメダメな発言にハヤテとヒナギクも呆れる。と、ここで、

フェイト「あはは、と、とりあえずタクシーを拾って3人を帰した方がいんじゃないかな？ さすがに徒歩で学園都市まで行くのは大変だし……」

フェイトが苦笑いをしつつもそう提案するが、

ヒナギク「あ、それなら大丈夫ですよ、フェイトさん。もうすぐお迎えの人達が来ますから」

「護」？ 迎え？」

すると、

陸奥「わしらのことぜよ」

月詠「まったく何をしとるんじゃ、ぬしは……」

フェイト「月詠先生！ それに陸奥さんも！」

前方には3 - 担任の月詠と快援隊の副社長の陸奥がいた。

月詠「すまなかつたな、桂、綾崎」

ハヤテ「あ、いえ、ちょうど暇でしたから大丈夫です」

ヒナギク「それにお姉ちゃんが迷惑を掛けているんですから私が行くのは当然ですよ」

ハヤテとヒナギクは軽くそう返した。

陸奥「じゃあこのバカはわしが預かるきに。世話かけたぜよ」

坂本「む、陸奥！？ 何で左手に拳銃を持ってるぜよ！？ わしをどうする気ぜよーーーー！！！！？？」

坂本の叫びが虚しく響き渡るが、陸奥は完全無視で坂本の襟首を掴んで引き摺りながら去っていった。

月詠「さて……銀時、雪路、ぬしらはどこへ行こうとするとるんじや？」

銀時・雪路「ギクッ

月詠はこっそりその場から離れようとしている銀時と雪路にそう言う
と、2人は“ギリリッ”という効果音が似合いそうな動きで後ろ
を振り返った。

月詠「まさかわつちから逃げられると思っているのではないだろう
な？」

そこにはクナイを数本手に持っている月詠の姿があった。と、ここ
で、

ヒナギク「月詠先生、申し訳ないんですけどお姉ちゃんも一緒に連
れていってもらってもいいですか？」

月詠「？ 構わんが、ぬしらはどうするんじゃ？」

ヒナギク「私達はちよつと黒崎先輩とフェイトさんにちよつと用があるのぞ」

月詠がそう尋ねるとヒナギクはそう答えた。

月詠「そうか、ならわつちらは先に帰らせてもらおう。おい、行くぞ」

納得した月詠は先程の脅しで魂の抜け殻と化した銀時と雪路を陸奥同様引き摺って行った……。

フェイト「えっと、それで用っていうのは何かな？ ハヤテ、ヒナギク」

フェイトがそう尋ねた。すると、

ハヤテ「また何かに巻き込まれてるんですね、一護さん」

一護「っ！ 気付いてたのか……」

ヒナギク「気付くに決まってますよ。黒崎先輩が学校を休む時は厄介事に首を突っ込んでいる時だっていうのはよくナギから聞いていましたから」

一護がやや驚くとヒナギクはそう言った。

ヒナギク「でもフェイトさんまで一緒だとは思ってなかったですけどね」

フェイト「あ、それはその……」

フェイトは歯切れが悪そうにしている。まあ、一護についていきなかったからなんて言えるはずもないのだから当然といえば当然である。と、ここで、

一護「で、結局お前らはそれを聞いて一体どうする気なんだよ?」

一護がもつともなことを尋ねると、

ハヤテ「実はお嬢様達から一護さんを手伝ってこいという風に頼まれまして……」

ヒナギク「私達も御一緒にしますよ、黒崎先輩」

ハヤテとヒナギクはそう答えた。

一護「はあ！？ いや、手伝って何言ってたんだよ！？ 俺達がいやってるのは……」

ハヤテ「警察庁からの依頼で何かの事件の捜査をしてるんですよ？」

ヒナギク「なら大丈夫ですよ。私結構警察の人との関わりがありますから、その人に頼めばお手伝いくらいはさせてもらえると思いますし」

ハヤテとヒナギクはさらっとそんなことを言っただけだ。知り合いに警察の人がいたって普通は無理ですよ、普通は……。

フエイト「で、でもいいの？ 執事のお仕事もあるんじゃない？」

ハヤテ「あ、いえ、実はお嬢様の機嫌を損ねるようなことをしてしまっただけで――護さんの用事が終わるまでは帰ってくるなど言われてしまったんです……」

ヒナギク「はあ……本当にハヤテ君はどうしてこんなのかしら……」

ハヤテが苦笑いを浮かべつつそう言うと、ヒナギクは溜め息を吐きながら思わず呟いた。

ハヤテ「あはは……でもまあ、お嬢様達が皆さん揃ってご心配なさっていますので、僕達もお手伝い致しますよ、一護さん、フェイトさん」

ヒナギク「今更帰れとか言わないで下さいね」

ヒナギクとハヤテは笑みを浮かべつつそう言う。

一護「はあ……ったく、わかったよ。これから頼むぜ、ハヤテ、ヒナギク」

ハヤテ・ヒナギク

「はい（ええ）！」

一護は溜め息を吐きながらも笑みを浮かべてそう言うと、ハヤテとヒナギクは元気よく頷いた。そして、

フェイト（ふふ、一護嬉しそうだな……）

フェイトは一護の表情を見てそう思い、顔を綻ばせるのだった……。
…。

E
N
D

File3 捜査と夜の遭遇（後書き）

どうも黒狼です！

今回はほのぼのを重視しました。まあ、バカ3人が登場した上にハヤテとヒナギクも来て一護達に協力を申し出た辺りはかなり奇妙な展開に思いかもしれませんが……。

そして今回投稿が遅かった割りに内容がグダグダですみません！！かなりストーリーが行き当たりばったりになってしまってるせいで、拍車がかかっちゃってますね……。

何とか引き続き頑張ろうと思います！

ではまた！！

File 4 応援、そして解決？（前書き）

やっぱり投稿のスピードが格段に落ちてしまってますね……。

しかもほとんど相棒のネタそのまんまですみません……！

ではどうぞ……！

File 4 応援、そして解決？

翌日

神戸「えっ！？ 昨日花の里に来たあの後輩の二人が協力に!？」

一護「ああ、そうなんすよ」

特命係の部屋にて一護とフェイトが神戸と杉下にハヤテとヒナギクが捜査に加わることを説明していた。

フェイト「でもいくら警察の人の知り合いがいたってそれは無理なんじゃ……」

一護「ああ、俺も昨日まではそう思ってたんだけどな……ヒナギクの知り合いに1人それを可能に出来そうな人がいたのを思い出したんだよ……」

一護はやや苦笑いでそう言った。

一護「でも悪いな、杉下さん、神戸さん。何かさらに人が増えちまつて……」

杉下「いえ、人手が増えることに越したことはありませんし、それにあの2人もなかなか優秀そうな人物に見えましたよ？」

一護が申し訳なさそうに言うと、杉下はそう返した。確かにハヤテとヒナギクのスペックは最早異常ともいえるほど高い。それを昨日一目見ただけで見抜くとはさすが杉下右京と言うべきであろう……。

と、いじで、

角田「よっ!」

角田がやってきた。

フェイト「あ、角田さん、おはようございます」

角田「お、おお、おはよう。ってそうじゃなくて、一課が引っ張ってきたぞ!」

するとフェイトが丁寧に挨拶し、角田も面食らいつつ返すと、そう言ってきた。

神戸「ん？ 引っ張ってきたって？」

角田「川芝だよ！ 川芝直也！ マンガ喫茶に潜伏してたところを一課の連中が押さえたらしい」

一護「っ！ 本当か！？」

角田の言葉に一護はそう尋ねた。

角田「ああ、今伊丹達に取り調べしてる」

取調室

部屋の真ん中にある机には2つの椅子が向かい合うように存在している。一方にはどこにでもいそうなメガネを掛けた男が手をいじりつつ顔を俯かせている。この男の名前は川芝直也。一課が重要参考人として挙げていた容疑者である。もう一方には初老でメガネを掛けている少々がたいの良い刑事が座っている。彼の名は三浦信輔。警視庁捜査一課の刑事で、伊丹達と同僚である。そして横には厳しい目付きで男を見る伊丹と芹沢の姿があった。と、ここで、

川芝「な、何で僕が水元祥子さんを殺さなくちゃいけないんですか？」

川芝がそう口を開く。

伊丹「じゃあなんで逃げた？」

川芝「……こ、怖かった……」

伊丹「何が？」

伊丹はまるで脅すような口調で川芝を問いただす。すると、

川芝「掲示板に殺害予告を書いたことで自分が疑われるんじゃないかと思って……でも殺してない!!」

川芝は弱々しくそう話したかと思うと、いきなり声を上げて抗議した。

三浦「じゃあ指紋についてはどう説明するんだ？ 水元祥子の家の

玄関のドアノブから、あんたの指紋が出たんだぞ……！」

ドンッ……！

川芝「……それは……」

それに対して三浦は机を思い切り叩いてドアノブの指紋について問
いただすと、川芝は言葉をつまらせる。すると、

ガチャッ……！

伊丹「っ！ 何のようですか！ 特命係の杉下警部殿と神戸警部補
殿、それに警察庁の黒崎警視正殿とそのお連れのお嬢さん……！」

一護と杉下達が取調室の中に入ってきたため、伊丹が鬱陶しそうに言ってきた。

杉下「少しお時間よろしいでしょうか？」

伊丹「ダメに決まってるでしょ！」

一護「少しくらいならいいだろ？」

伊丹「いくら警視正の頼みでも、これは我々捜査一課の取り調べです！！」

杉下と一護はそう頼むが伊丹は頑として首を縦に振ろうとしない。そしてその間に、

三浦「おい、誰なんだ？ この目付きの悪い男と警部補の隣にいる女は？」

芹沢「ほら、昨日話したじゃないですか。例の特命係に協力してる警察庁の理事官とその協力者の女の子ですよ」

三浦「っ！ この2人がか！？」

芹沢「ちなみに聞いた話によると、2人共まだ17歳で現役の高校生らしいですよ」

三浦「おいおい、警察庁も何考えてんだよ……」

三浦は初めて会う一護とフェイトについて芹沢からヒソヒソと聞いていた。

神戸「今日は一段と邪見に扱われてるなあ、僕たち」

フェイト「ど、どうしよう…」

一方、神戸は目の前で繰り広げられる一護と杉下、伊丹の話し合いを見て苦笑いを浮かべ、フェイトはどうすべきか迷っている。と、その時、

ガチャッ

「あ、ここにいたんですね」

……
またしても取調室のドアが開き、2人の人物が入ってきた。それは

一護「っ！ ヒナギク！ ハヤテ！」

ヒナギクとハヤテだった。ちなみにヒナギクはタイトな黒のスーツを着ており、ハヤテも執事服ではなくグレーのスーツを身に纏っている。すると、

芹沢「ちょ、ちょっと！ 今取り調べ中だから勝手に入ってきてちゃ困るよ！」

芹沢がいきなり入ってきた面識のないヒナギクとハヤテを見てそう注意する。だがここで1人、意外な人物が意外な反応を見せる。その人物とは……

伊丹「お、お前は……」

伊丹だった。伊丹が啞然として見ている相手は……

ヒナギク「あれ？ 確か伊丹さん……でしたよね？」

なんとヒナギクである。

ヒナギク「先日はどうもありがとうございました。でも伊丹さん、捜査一課の人だったんですね？」

伊丹「あ、ああ……」

ヒナギクの言葉に伊丹は半分訳が分からないと言った状態で頷く。
そんな様子に本人達とハヤテ、そして杉下以外の皆が啞然としている。
すると、

ヒナギク「突然ですみませんが、少しの間取り調べを黒崎先輩達に
譲ってもらってもいいですか？」

芹沢・三浦「……………は……………」

ヒナギクの申し出に芹沢と三浦の面々は呆氣に取られた。そして、

芹沢「いや、何言ってるの！？ そんなことできる訳ないでしょ！」

ヒナギク「あら、でもあなたの方の上司の人からちゃんと許可は取ってありますから大丈夫ですよ」

三浦「は？ 上司？」

ヒナギク「はい、内村刑事部長さんから」

それを聞いた芹沢と三浦は驚き過ぎて何も言えなかった。はつきり言っ
て槍でも降ってくるのではないかというほど普通ではあり得ない出来事なのである。と、ここで、

伊丹「三浦さん、譲ってやってくれ」

三浦「お、おい、伊丹!？」

伊丹の口から出た言葉に三浦は驚きを顔にする。だが伊丹の完全に諦めた様子を見て、

三浦「どうぞ……」

三浦は席を立った。

ヒナギク「空きましたよ、黒崎先輩」

一護「お、おお、悪いな、ヒナギク。じゃあ杉下さん」

杉下「ええ」

そして杉下は空いた席に座って未だに俯いている川芝と向き合った。

杉下「あなたは水元祥子さんの家に行きました。ですが、ドアには鍵が掛かっていて開かなかったのではないですか？」

川芝「え……」

杉下の質問に川芝は顔を上げる。

杉下「あなたの指紋が家の中には一切無いにもかかわらず、ドアノブにだけ残っているのは不自然だと思いませんか……」

すると、

川芝「そうだよ……確かに家には行つたけど、ドアには鍵が掛かつて……それで庭の方から回つてみるとカーテンが閉まつて……その後すぐに物音がして……それで速攻で逃げたんだよ……!」

伊丹「そんな言い訳、通用するわけねえだろうが……!」

ハヤテ「ちょ、ちょっと!事情聴取で手を上げてどうするんですか! 落ち着いて下さいよ!」

川芝が声を荒げると、伊丹が襟を掴み上げてそう言った。そしてそんな伊丹の様子にハヤテは慌てて仲裁する……高校生に事情聴取に関して注意される刑事というのはどうかと思うが……。と、ここ

で、

一護「なあ、あんたが家に行ったのって正確には何時ごろだったんだ？」

一護が川芝にそう尋ねると、

川芝「…確か…2時ちようどくらいだったはずだけど……」

川芝はそう答えた。すると、

杉下「ありがとございました。では、行きましようか」「

一護「ああ、そうだな。ヒナギクとハヤテも一緒に来てくれ。行くぞ、フェイト」

杉下は席を立ち、一護はハヤテとヒナギクにそう声を掛ける。

ヒナギク「はい。行くわよ！ ハヤテ君」

ハヤテ「あ、は、はい！」

神戸「え、ちょ、杉下さん！？」

フェイト「ま、待ってよ一護！」

そしてヒナギクとハヤテ、神戸、フェイトも一護達の後に続いて取り調べ室を出て行った。

三浦「何だっ たんだよ、一体……」

芹沢「さあ……ていうか先輩、あのピンク色の髪の女の子、一体誰なんすか？ 聞いてないっすよ、あんな可愛い子が先輩の知り合いにいるなんて……」

芹沢が訝しげに伊丹に尋ねる。再度言っておくと、伊丹は女性とはまるで縁がない。しかもヒナギクの容姿は間違いなくトップクラスである。そんな人間と伊丹が接点を持つなどということは天文的確率と言っても過言ではないのだ。そしてそれに対して伊丹は、

伊丹「……言いたくねえ……」

そう呟くのだった……。

特命係の部屋

ヒナギク「昨日は自己紹介もしないで帰ってしまつてすみません。
私は桂ヒナギクっています」

ハヤテ「僕は綾崎ハヤテ。ヒナギクさんと同じく黒崎先輩やフェイトさん達の後輩です。よろしく願います、杉下さん、神戸さん」

杉下「ええ、どうぞよろしく」

川芝から話を聞いて部屋に戻ると、まずヒナギクとハヤテは杉下と神戸に自己紹介をした。と、ここで、

フェイト「ねえ、どうしてヒナギクが伊丹さんのことを知ってるの？」

フェイトが誰もが一番気になっていることを尋ねた。

ヒナギク「あ、実は先日剣道部の交流試合があっただんですけど、そのお相手が警視庁の人達だったんです」

フェイト「え、ええ！？」

フエイトはヒナギクの言葉に驚きを顕にした。まあ学校の部活の交流試合で警察官を相手にするなんてまずあり得ないだろう……。そしてそれを聞いた瞬間一護はあることを想像した。

一護「おい、ヒナギク……お前まさか……」

ハヤテ「ええ、一護さんの想像通りヒナギクさんはその方々を1人で全員倒してしまいました。相手の皆さんは警視庁の中でもかなり剣道の腕前が高い人ばかりだったんですが……」

それを聞いた瞬間、一護は引きつった笑みを浮かべるしかなかった。すると、

神戸「聞いたことがある……警視庁内で選抜された剣道の有段者相手にたった1人の女子高生が圧勝したって話……じゃあ、その女子高生って君のこと!？」

ヒナギク「あ、圧勝ではなかったと思うんですけど……」

ヒナギクは苦笑いを浮かべつつそう言った。治安を守る警察官となれば当然武道に関する技術を持っている者も多い。まして警視庁ならより優れた技術を持った人材が集まっている。実際警視庁内には剣道場や柔道場なども完備されているほどだ。そんな警視庁の中から選ばれた強者達を1人で倒したとなれば、圧勝じゃなくとも十分有り得ないことである。

フエイト「それじゃあ伊丹さんは……」

ヒナギク「ええ、対戦相手の1人でした。多分あの方が一番強かったと思います」

ハヤテ「いや、でもヒナギクさん全く危なげなく勝ってたじゃないですか……」

ヒナギクがそう言うと、ハヤテはやや呆れ気味に呟いた。

杉下「なるほど。伊丹刑事達をあなたの対戦相手として選抜したのが、内村刑事部長だったんですね？」

ヒナギク「はい。それで試合を始める前に1つ約束をしてもらったんですよ」

杉下がそう推測するとヒナギクは頷き、そう付け加えた。

フエイト「？ 約束？」

ヒナギク「私が全員倒したら、今度捜査に加えてほしいって言ったんです」

ハヤテ「まあ、内村さんも万に一つも警視庁の方々が負けるとは思っていなかったようであっさりとそれを飲んだんですけど……」

それを聞いて一護とフェイト、神戸は乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

一護「それでお前らがここにいて訳か……」

ハヤテ「ええ、まあ……」

ヒナギク「さて、それじゃあ自己紹介も済んだことですし、事件の話をした方がいいんじゃないですか？」

ここでヒナギクが本題に入るよう促した。

フエイト「え？　でも2人共事件の詳しい内容とかはまだ……」

ハヤテ「あ、いえ、取調室に行く前に捜査資料には全て目を通して
ますから」

ヒナギク「大丈夫ですよ」

繰り返しますが、ハヤテとヒナギクのスペックは尋常ではありません。
ん。少し資料を見ただけで大体の内容を網羅しています。流石は三
千院家のスーパー執事と才色兼備の1年生徒会長……。と、ここ
で、

一護「なあ、杉下さん」

杉下「何でしょう？」

一護「あなたはさっきの川芝の供述、どう思う？」

一護は杉下にそう尋ねる。

杉下「川芝直哉の供述が本当かどうかはわかりませんが、もしその供述が本当だとすれば僕にはかなり違った見え方ができるんですよ」

それに対して杉下は興味深そうにそう答えた。すると、

神戸「2人共、1ついいですか？」

神戸が話に入ってきた。

杉下「何か？」

神戸「ちょっと確認したいことがあるんですけど、白秋社に行きませんか？」

そして神戸がそう提案すると、

杉下「それなら黒崎君とハラウンさんを連れて行って下さい」

神戸「え？」

杉下はそう言い、神戸はキョトンとする。

杉下「この人数で押し掛けるのもどうかと思いますよ。僕はそちらの2人を連れて川芝直也の所持品を調べに行きますので、君は黒崎君達と一緒に白秋社に行ってください」

神戸「ああ、なるほど。これだけの人数がいるなら分担しようって訳ですか……」

杉下「それが普通だと思いますよ」

神戸が杉下の言いたいことを掴むと、杉下はそう呟く。こうして大所帯となった特命係は3：3に別れることとなった……。

白秋社

神戸と一護、フェイトは応接室である人物を待っていた。その人物とは……

ガチャッ

「……?」
「お待たせてすみません」

吉野の社長秘書である安藤だった。

安藤「それで今日は一体何でしょうか？」

すると、神戸はゆつくりと安藤に近付きいきなり匂いを嗅ぎ始めた。皆さんは真似しないように、変態だと思われるても文句言えませんよこんな行動……。まあ、それはさておき、

神戸「良い匂いですねこの香水……確か“スウィートドリーム”でしたっけ？　これ確かかなり高級で珍しいものですよね？」

神戸の白々しさ満点の言葉に安藤は動揺を見せ始める。

神戸「でもこの匂い、前にも嗅いだことがあるんですよ、どこだったかな？……あ、水元祥子さんの書斎……だったかな？」

神戸がさらに突っ込んで言うと、安藤は思わず神戸に背を向けた。
と、ここで、

フェイト「も、もしかしてあなたは吉野社長の……」

一護「愛人……って訳か……」

フェイトと一護が神戸の言わんとしてることに気付きそう言つと、
安藤は顔を俯かせた。

神戸「この会社は大分建設から多額の融資を受けてるんじゃないですか？」

安藤「……………水元祥子先生の縁でかなりの額を……………」

神戸の質問に安藤は神妙な面持ちでそう答えた。すると、

一護「1つ聞いてもいいか？」

安藤「……何でしょうか……」

一護「あんと吉野社長との関係を水元祥子さんは気付いてたのか？」

一護は最後にそう尋ねたのだった……。

鑑識室

現在この場は奇妙な盛り上がりを見せていた。それは……

杉下「いやはや、まさかこのようにところに話の合う人物がいるとは思いませんでしたよ」

ハヤテ「あはは、僕もまさか杉下さんが紅茶好きとは思ってもみませんでしたよ」

ハヤテと杉下の紅茶の話である……。

ハヤテ「杉下さんは何が一番好きなんですか？」

杉下「そうですね。僕としてはアールグレイが一番の好みでしょうか」

ハヤテ「ああ、僕もです！他のと比べて渋みが少なくて飲みやすいですから良く重宝するんですよ」

杉下「おやおや、気が合いますね」

そしてどんどん話が加速していく。そもそも何故こうなったかという、杉下がふと紅茶の茶葉を切らしていたことを思い出し口にすると、それにハヤテが食い付きいつの間にかこうなってしまっていたのだ……。そしてそんな状況に、

ヒナギク「はあ……まさかこの2人がこんなに気が合うなんて思わなかったわ……」

ヒナギクはややげんなりした様子で呟いた。と、ここで、

米沢「あれ!？」

米沢が鑑識室へとやってきて、杉下の他にヒナギクとハヤテがいることに気付いた。

ヒナギク「あ！　あなたは昨日の!」

米沢「あなたは確か昨日花の里に来た黒崎警視正の後輩の方！　何故このようなところに!？」

そしてお互いに驚いた。すると、

杉下「このお二人も我々の捜査に協力してくれることになったんですよ」

ヒナギク「昨日はお姉ちゃんがお騒がせしてすみません。桂ヒナギクといいます」

ハヤテ「僕は綾崎ハヤテです。よろしくお願いします」

米沢「おお、これはご親切にどうも。鑑識の米沢です」

杉下の仲介で互いに自己紹介をした。

杉下「それで米沢さん、こちらは川芝直也の所持品でしょうか？」

杉下は机の上にたくさん並べられている袋に入った物を指して尋ねる。

米沢「ええ、先ほど回ってきました」

杉下「拝見しても？」

米沢「どうぞ」

米沢から許可をもらうと杉下は1つ1つ見ていく。と、ここで、

ヒナギク「そういえば、捜査資料には被害者の水元祥子さんの写真と受賞したトロフィーが無くなってたんですよ？」

米沢「ええ、捜査一課は川芝直也が持ち去ったと考えていましたが……」

ハヤテ「？ それらしいものはありませんよ？」

ハヤテは机の上に置かれている所持品を見渡してそう言った。

ヒナギク「あの人の家の中にも無かったんですか？」

米沢「ええ、家宅搜索をしましたがありませんでした。ですから一課の皆さんは逮捕される前に川芝が隠したと考えているようです」

米沢はそう説明した。と、ここで、

杉下「そういえば米沢さん、水元祥子の携帯の発信記録のデータはまだ……」

米沢「はい、ですがもうそろそろ本部から届くと思います」

米沢がそう言った時、

ヴィーーーッ

鑑識室のプリンターが反応して、一枚の紙が出てきた。

米沢「杉下警部、今ちようど到着しました。水元祥子の携帯の発信データです」

杉下「失礼」

杉下はそう断りを入れてその紙を手取る。

ハヤテ「確か3時10分に夫の吉野宗谷さんにメールを送ってるんですよ？」

杉下「ええ」

米沢「その時の記録がこちらです」

そう言つて米沢が指し示すと、

ヒナギク「えっ!？」

ヒナギクがそれを見て驚いた。そこには発信した正確な時間、相手先の番号、そして発信基地が事細かに記載されている。問題はその発信基地だった……。

ヒナギク「赤坂基地局!？」

ハヤテ「え？ でも確か水元祥子さんの家は白金台ですから……」

米沢「当然発信基地も白金基地局でしょうな」

すると、

ヴィーツ、ヴィーツ

マナーモード状態の杉下の携帯電話が鳴り始めた。

杉下「失礼」

杉下はそう言つと落ち着いた動作で電話を取る。

ピッ！

杉下「もしもし」

一護『杉下さんか？ 神戸さんのおかげで面白いことがわかったぜ。聞くか？』

杉下「ええ、ぜひとも」

杉下は一護達からの情報を聞いた。そして……

杉下「なるほど……そういうことでしたか……」

微かに笑みを浮かべつつそう言うのだった……。

水元祥子宅

ここにいるのは杉下、神戸、一護、フェイト、ハヤテ、ヒナギク、そして水元祥子の夫の吉野宗谷だった。

神戸「もう一度確認しますけど……あなたは午前3時10分に赤坂にあるバー“樽”で水元祥子さんからメールを受け取った……間違いないですね？」

宗谷「え、ええ、そうですが…」

神戸がそう尋ねると、宗谷は相変わらずオドオドしながら頷く。

杉下「ということは、水元祥子さんは当然自宅からこのメールを送ったということになりますよね？」

宗谷「え、ええ……」

さらに杉下も確認するように尋ねると、宗谷は意味が分からないといった表情ながらも頷く。

ヒナギク「でも水元祥子さんの携帯からあなたの携帯に送られたメールの発信基地は赤坂基地局でした」

宗谷「え？」

ハヤテ「ちなみにここから送られた場合は白金基地局を経由しますよ」

宗谷「は？」

ヒナギク「これがどういふことかわかりますよね？ 吉野さん」

宗谷「い、いえ……」

宗谷は慌てて首を振った。すると、

一護「あんたさ、奥さんの携帯を持っていってそこであらかじめ打っておいたメールを自分の携帯を送ったんじゃないのか？」

宗谷「な、何を……！？」

フェイト「あなたの行っていたバーは赤坂基地局から200メートルの距離のところにありました。それにあの日にバーにいたお客の1人も、あなたが隠れて携帯を操作しているところを目撃してます」

宗谷は一護の言葉を否定しようとするが、執務官モードになったフェイトが事実を突き付けた。

神戸「あ、それとあなたの秘書の女性はあなたとの関係を認めましたよ？」

さらに追い打ちをかけるように神戸が不倫関係の事実を突き付けると、宗谷の動揺はピークに達し、

宗谷「だ、だが私は祥子を殺してない!!」

慌ててそう言った。すると、

杉下「ええ、その通りです」

フェイト・ヒナギク・ハヤテ「えっ!!??」

杉下はそれをあっさり認めた。それに神戸と一護は全く驚いていないが、フェイトやヒナギク、ハヤテは驚きをあらわにした。

フェイト「い、一護、どういうことなの!？」

先ほどのまでのキリツとしていた執務官の雰囲気は一気にすっとんでテンパリ始めた。

一護「この人が帰った時には水元祥子は死んでたんだよ。自殺してな」

ヒナギク「じ、自殺!？」

ハヤテ「でも一護さん! それなら吉野社長はどうしてこんなアリ

「バイ工作みたいなことを！？」

ハヤテがもつともな質問をした。自殺であれば誰も罪になど問われない。こんな真似をする必要がないのだ。すると、

神戸「問題は吉野社長が水元祥子さんを発見した時に、この小説とチーズ、そしてワインが置かれていたことだったんだよ」

神戸はそう言って水元祥子の部屋に置かれていた彼女の代表作“**墮栗花**”を見せた。

フェイト「チーズとワインって、あのゴミ箱に捨てられていた？」

杉下「ええ、あれは本来この小説と一緒に水元祥子さんの書斎の上に置いてあったんです。そしてこれらはあるメッセージを含んでい

ます」

ハヤテ「メッセージ…ですか？」

杉下の言葉にハヤテは首を傾げる。

杉下「この本のあるページに栞が挟んでありました。そのページはちょうどヒロインが夫の浮気を理由に自殺をする場面です。そして主人公の女性は、夫の自分への裏切りの意味を込めてお互いの好きだったチーズとワインを机の上に置いています」

ヒナギク「っ！　じゃあ水元祥子さんは吉野社長の不倫を知って、自分の小説に準なぞらえて自殺したってことですか！？」

一護「ああ、しかも有名作家がそんな自殺の仕方をすれば当然マス

「コミだつて注目するだろ？　この人はそれである人間に不倫関係が
バレるのを恐れたんだよ」

一護がそう言うのと、フェイトは1人の人物に思い当たった。

フェイト「水元祥子さんのお父さん……」

一護「ああ、白秋社は水元祥子とこの人が夫婦だからって理由であ
の大分建設の会長さんから多額の融資を受けてる。けどこれで不倫
がバレたら当然融資は打ち切られて、会社は倒産ってことになるの
は目に見えてるからな。だからこの人は嫌でも水元祥子の自殺を隠
したかったんだよ」

一護がそう説明すると、

杉下「本当のことを話してもらえますね？」

杉下が宗谷に対してそう諭した。そして、

宗谷「……………あれは……………2週間くらい前のことでした……………」

宗谷はそつ口を開き始めた……………。

2週間前

宗谷「ただいま」

宗谷はいつも通り帰宅し、

宗谷「祥子？」

妻である水元祥子、もとい吉野祥子の名前を呼びながら彼女がいるであろう書斎へと向かう。そして書斎に入ると、そこには机に座って何かを考えている祥子の彼女がいた。それを見た宗谷は彼女に近付き、

宗谷「祥子」

祥子「っ！」

宗谷「ただいま」

そう声を掛けた。突然呼び掛けられた祥子はひどく動揺した様子で振り返り、

祥子「ちよつと！ 書斎には勝手に入ってこないでっいつも言ってるでしょ！！」

そう声を上げて怒った。

宗谷「あ、ご、ごめん…」

祥子「今は1人にしてちょうだい…」

宗谷「あ、ああ……」

祥子の剣幕に押されて宗谷はそそくさとその場から立ち去ろうとする。と、その時、

祥子「待って！」

突然祥子が宗谷を引き止め、

祥子「ねえ！　もし何かあったら、あなた私を守ってくれるわよね！？」

すがりつくようにそう言ってきた。

宗谷「あ、ああ、もちろん……」

祥子「そう……ならいいわ……さっきはいきなり怒鳴ってごめんなさい……」

宗谷「あ、ああ……」

宗谷は無意識に頷くと、祥子は途端にさっきまでのなりを潜めて謝ってきた。そして宗谷はそんな祥子の奇妙な態度に対して言い様のない疑問を抱くのだった……。

回想終了

宗谷「その時の祥子の様子は明らかに変でした……まるで……何かに怯えているかのようで……。そして祥子が死んでいるのを見つけた後、机の上においてあったその小説とチーズとワインがあるのを見た時……もう無我夢中でした……」

神戸「熱狂的ファンによる殺人という風に見せれば警察の目はそこらに向くであろうと予測して、原稿やトロフィーを処分あるいはどこかに隠したんですね？」

神戸がそう尋ねると、宗谷は黙って首を縦に一回振った。と、そこへ、

伊丹「毎度毎度犯人逮捕御苦労様ですね？ 特命係の杉下警部」

嫌みを言いながら伊丹が芹沢を連れてやってきた。

杉下「いえ、今回は黒崎君達もいらっしやいましたので、寧ろ彼らのおかげですよ？」

杉下がそう返すと、一護達に一礼する芹沢とは対照的に伊丹は相変わらずの目付きで一瞥した。そして、

伊丹「しかしまあ…他殺じゃなくて自殺なんてな」

芹沢「これ、逮捕できるんですかね……」

伊丹は不機嫌そうに、芹沢は訝しげに呟いた。すると、

一護「死因の隠蔽は立派な犯罪だろうが」

フェイト「それに自分の都合で本当のことを隠そうとして、そのせいで別の人に疑いがかけられてしまったのなら……それは償うべきだよ……」

一護とフェイトは厳しくそう言うと、伊丹と芹沢は宗谷を連れていこうとした。と、ここで、

杉下「最後に1つだけよろしいでしょうか？」

宗谷「……何でしょうか……」

杉下が宗谷を呼び止め、

杉下「あなたが水元祥子さんを発見した本当の時刻は何時ごろでしょうか？」

そう尋ねた。

宗谷「……2時20分頃だったと思います……」

伊丹「……さ、行くぞ」

芹沢「失礼します」

それに対して宗谷はそう答えて今度こそ伊丹達に連れていかれた。

ハヤテ「これで解決ですね」

ヒナギク「ええ、そうね」

ハヤテとヒナギクがホッとした様子でそう話していると、

フェイト「？　一護？　どうしたの？」

フェイトが一護の表情がどこか釈然としない様子であることに気付いた。すると、

一護「なあ、杉下さん……」

杉下「……君も気付きましたか……」

杉下も一護と同様に納得していない様子だった。

神戸「どうしたんですか？2人共？」

杉下「……覚えていますか？ 川芝直也の供述を……」

神戸「え？」

杉下に逆に問い返され、神戸はやや困惑する。すると、

ヒナギク「！　　そういえばあの人は2時ちょうどにここに来て物音を聞いたって……！」

フェイト「え？　　あつ！　　で、でもそれって……」

ヒナギクが川芝の言葉を思い出してそう言つと、フェイトがふと疑問に思った。それは……

一護「ああ……　　吉野社長が水元祥子を見つけたのが2時20分だ。その時吉野社長はまだここに帰ってきてねえ……。となると……」

その物音は一体なんだったんだ？」

そう……吉野宗谷がまだ帰っていないとしたら、物音の正体は一体なんだったのか……。それを聞いた神戸は、

神戸「まさか……他に誰かがここに侵入したってことですか？ そんなまさか……」

信じられないと言った様子でそう言った。だが、

杉下「考えても見てください。もし吉野宗谷が机の上にある小説をそのままにして通報していたら、この件は完全に自殺として片付けられ、それ以降の捜査は絶対に行われなかったはずです！」

杉下が珍しくやや感情を表に出してそう反論した。

一護「何か俺たちは見逃してるのかもしれない……」

一護はそう呟くと、杉下はある部屋へと向かった。それは……

杉下「この部屋は鑑識の方も入っていませんよね？」

神戸「え、ええ、まあ、そうですね……」

水元祥子の書斎の隣にある部屋だった。ここには水元祥子の私物は置かれていなかったため、事件に関係なしということで調べられていなかったのだ。

ハヤテ「どうやら物置みたいですけど……」

フェイト「ここに何かあるんですか？」

ハヤテとフェイトは思わず首を傾げる。だが杉下は気にすることなく部屋の中を隈無く探す。すると、

杉下「！ 神戸くん！ ちょっとこの棚をどかしてくれませんか？」

神戸「え？ あ、はい」

杉下にそう言われ、神戸は机の上にある棚を手前にずらした。すると杉下は棚の後ろの隙間に落ちていた物を拾った。それは……

ヒナギク「？ メモ用紙みたいね……」

そう、半分に折られた一枚の緑色のメモ用紙だった。杉下はそれをすぐに広げてみると、

一護「『水元祥子様、ご依頼の我が社の空港周辺の土壤汚染に関するデータおよび文書をお送りします、笠井宏樹』って、こいつは！？」

杉下「データを渡していたのは笠井さんの方でしたか……」

今までの予想とは正反対の事実には杉下と一護、そして神戸とフェイトは驚きをあらわにした。と、ここで、

ハヤテ「あゝ、土壤汚染って言うのは一体何のお話でしょうか？」

ヒナギク「捜査資料にはなかったですよね？」

ハヤテとヒナギクがそう尋ねてきた。

神戸「まあ、これは僕達の勝手な捜査でわかったことだからねえ…
…捜査資料に載ってなくて当然だよね……」

フェイト「えっと、実は……」

ここで神戸はそう呟き、フェイトが豊日商事の不祥事に関することをハヤテとヒナギクに説明し始めた。そしてその間に、

「護」なあ、杉下さん……ひょっとするとこの事件は……」

杉下「ええ……どうやら単なる自殺とその隠蔽だけでは済みそうにないですねえ……」

「護と杉下は互いにそう話すのだった……」。

END

File 4 応援、そして解決？（後書き）

どうも黒狼です！

今回である意味一区切りついた感じですが、まだまだ先は長いと思います……。そもそもこの話は実はドラマだと二部構成だったんですよ……。スペシャルじゃない中ではこの話が一番深く面白かったと自分では思ってた話にしたのですが、想像以上に長引きますね、これは……。いつ当麻やなのは、リクオ、はやてを出せるのだろうか……。

まあ、今さら後悔しても何の意味もないので引き続き頑張って投稿します！

あともちろん丸々原作通りにするつもりはないですよ！ オリジナルな展開には間違いなくしますので、“原作通りじゃねえか”と不満を抱いてる方はもう少々お待ちください……。

ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987x/>

自由学園～少年少女の青春録～

2011年12月19日17時56分発行